（岡山製本）

大正三年八月七日印刷
大正三年八月十日發行

有朋堂文庫
繪本太閤記下
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

○洛東耳塚由來

今年慶長三年の秋、朝鮮にて斬取る所の耳鼻を鹽に浸し、日本に送りけるに、夥しき事人目を驚かせり。何さま此耳鼻の首にて渡りなば、いとも仰山なる事なめりと、見る者舌をふるはしける。則ち太閤の御下知として、洛東大佛殿の前に大なる穴を掘せ、耳鼻を其中に埋み、後世に殘して其勇名を異邦迄に輝し給ふ、是をなづけて耳塚といふ。此後朝鮮人來朝の時、かの耳塚を見て涙を流し、此塚に耳鼻を葬りし者はみな我國の忠臣、死を以て國恩を報ぜし人なりというて、塚の下にて香を燒き、祭文を讀上て懇に弔ひけるとぞ、世の人皆知れる所なり。

繪本太閤記　終

朝鮮人耳塚を祭る圖
正

○御茶壺　銘柴の戸　袋白地古金襴

○瑠璃之鉢

○双六盤　鐵刀木　惣蒔繪

○御料紙箱

○唐木御杖

○七寶之鉢

○得手箱　菊桐御紋高蒔繪　又朱塗沈金彫　各金物金銀

○御座鋪挑灯　高蒔繪金銀の金物

○長柄銚子御銅提　金

○御服　緋之袴　室裙之浴

右の外太閤公の御手道具を併せ、政所殿より當寺へ寄附し給ふ、其品々夥しきが故は爰に略す就中牧溪が三幅對は、世に名高き高臺寺ぎれにて表裝をなす。其外古畫故筆掛物屛風張附襖等枚擧するにいとまあらず、繁きを以て悉く爰に略しぬ。

御膳具一式
海松貝
高蒔繪
二三之御膳
瑠璃之
御茶碗
御茶臺
一黒塗高蒔絵
御手拭掛
御角盥

御提重
黒塗高蒔絵
御菓子重
黒塗十二重

蜀江錦
御守袋
廣東
菊桐御紋
金赤銅
外袋
天鵞絨
外箱
黒塗
御紋金

沈香之香爐 唐金

香盆 堆黒

檳榔子之御團

御机 面敷 鼈甲張

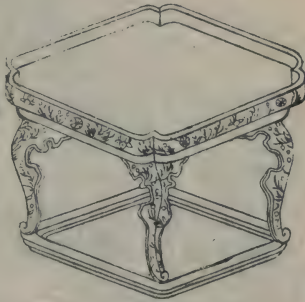
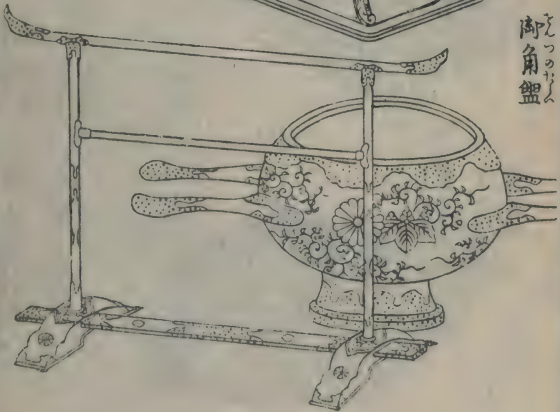
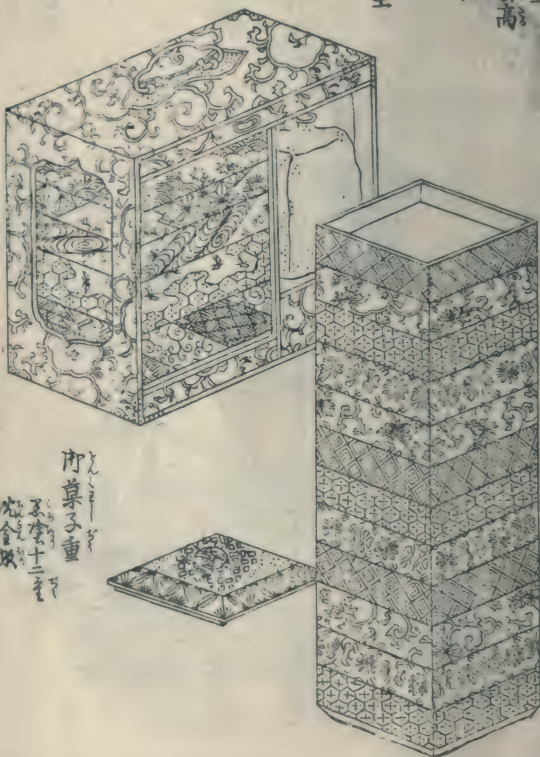
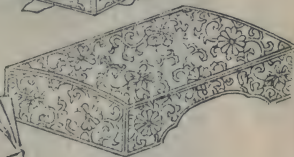
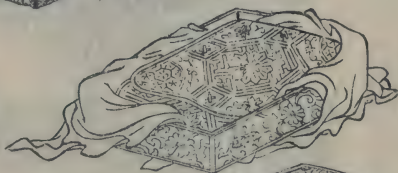
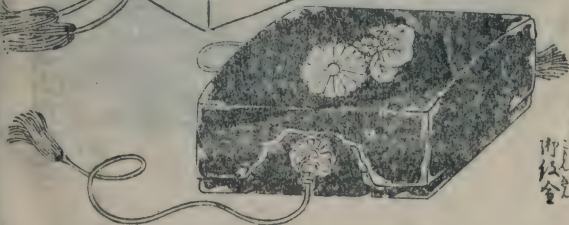
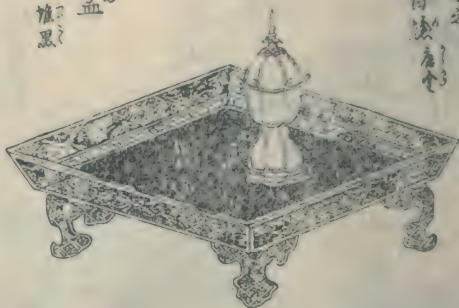
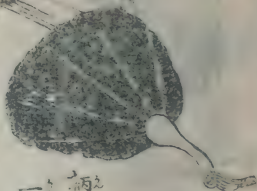
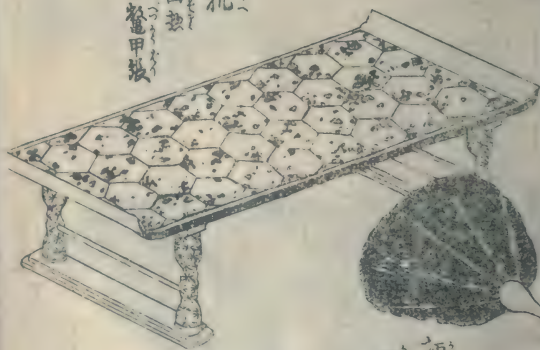
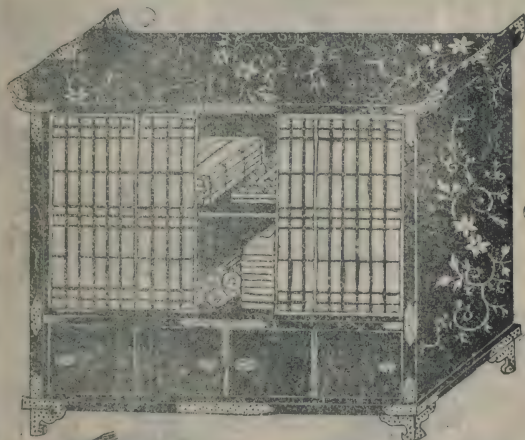
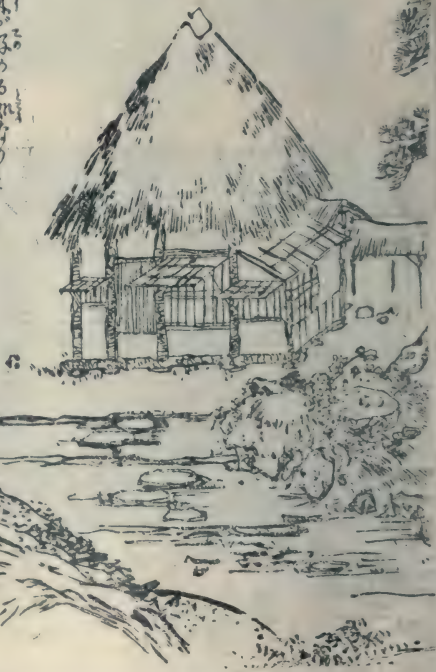
柄ハ 一向

政所殿御寄附高臺寺什物御手道具之圖寫
御書棚 横四尺 竪三尺余
唐草の蒔繪
生絹張

傘の亭
天井の梁からかさを開きたるがごとし故に名とせり
或云一説此二亭ともに千利休が好める所なりと云伝へり按るに利休は天正十九年に物故せり高臺寺の建立ありしは慶長十二年にあたれり利休没して既に久し何者の好みなるべし可考

高臺寺名物
時雨之亭

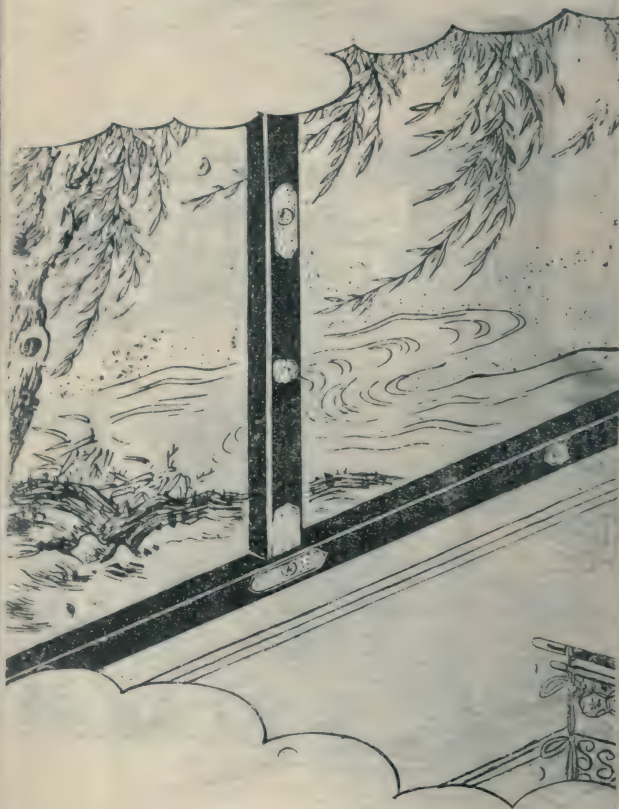
高臺寺御魂舎の図

祖堂
佛殿

高臺院殿前從一位湖月大禪定尼公之像

しを、政所常に召れてさま〴〵の戯場を舞せ給ひ、終に彼等の者の願によりて四條の河原に假屋をかまへ、舞狂言をなして諸人をあつめけるぞ、今の世の歌舞伎淨瑠璃等の始めなり。是皆政所の人の議論にあづからじとの御計策にて、かの牝雞晨の惡名をまぬがれたまふぞ有がたき才女なりき。慶長十一年御髮をおろさせ給ひ、洛東の地に御菩提所を建立し給ひ、御一門の位牌を安置し、鷲峯山高臺寺と號し、美々たる莊嚴の大地今猶現然たり。寛永二年、御齡八十餘歳にして薨し給ふは、めでたかりける終焉なり。

於國歌舞妓の圖

風吹柳
乃圖

太閤御夫婦

かくへだてなく睦まじくおはしましければ、淀君をはじめとしいくばくの愛妾、一時の艶色をもて寵を得たるも、いかでか政所に思しかへさせ給ふべき、されば政所の御威勢自然強く、諸國の大名我も〳〵とまゐりつかうまつりて、終には帳内の女將軍と仰がれ給ふ。然るに此程太閤異例見えさせ給ふに附き、淀の御方いよ〳〵御嫉み強く、時としては怪しき御ふるまひもおはすのよしほのかに聞せ給ひ、牝雞之晨惟家之索なりといへる書經の語も思召合させられ、我と淀の君と斯く威權を爭はんには、天下の諸侯其虚に乘じ、逆意を發し仇を結び、終には大亂と成りて太閤の功業も空しく、再び生民塗炭に苦みなん、今より後は何事に附ても柳の風に打なびくごとく、人と物をば爭はじと御心に誓ひ給ひ、狩野法眼元信が畫し風吹柳の繪の、聚樂の城二の丸に張つけ有しを召寄て、御居間の障子に押せ給ひ、世の善惡につきても是非につきても、一言の御詞を出し給はず、常に法華經の提婆品を書寫し給ひ、女人成佛怨讎退轉の御法の外更に他事有りとも見えさせ給はず。いともゆるやかに世を過し給ふぞ、淀の君のおどろおどろしき御行跡に引かへて、尊くも見えさせ給ふ。其後慶長四年、三本木の邸に移り住せ給ひ、いよ〳〵御心を世外に遊ばしめ給ひ、其頃四國より小野於通といへる風流の女京に登り住たりしを召し寄せられ、いにしへ今の事など文に作らせ、又出雲の國より於國といふ女舞上り來り

○北廳行狀

太閤秀吉公の御本妻北政所と申奉るは、信長公の足輕頭藤井又右衛門が養女にて、實は平相國淸盛の孫、三位中將惟盛の息、平秀衡が次男杉原伯耆守光平十四代の胤、長房入道道松といふ者の女なり。秀吉公いまだ卑賤におはしける時、前田利家御媒人申し、竹簀子の上にて御祝言有りし事政所常に物語り給ひ、侍女近士を絶倒せしめ給ふ。此政所才氣明敏婦德高くましまし、初め太閤天下の政事を攝し給ふにも、政所の御執唀に任せ給ふ事甚だ多し、是に依て天下國郡の興廢を論じ給ふに附て、御夫婦ともに英才活氣にましますが故に、御詞などもかろがろしく、下賤の者の女夫いさかひに似たる事多し。或時の御言論に、猿樂の者多く參りたりしを、太閤物にかゝはらざる大將なれば、汝等我が政所と言葉いさかひせしを題して發句せよと仰せけるに、太鼓打の役者、つかうまつるべしと打かたぶきて、

　女夫いさかひたいこのばちのあたりましよ

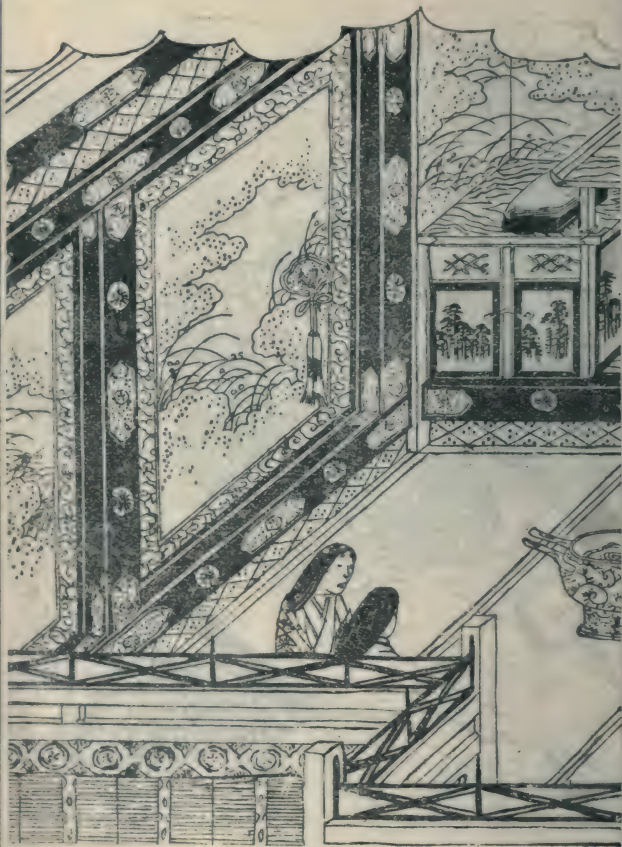
笛吹の役者、とりあへず脇つけたり、

　どちらが理やら非やらヒウヤラ

塞で日の光を蔽ひ、數十丈の大蛇顯れ出で、爪を鳴し角をふり立て、雲中に翩翻せり。日瞬いよいよ丹誠をこらし、符を以て大蛇を近く招き、彼淀君の生肉を與へて是を喰しめ、又蛇の肉一寸を切取て符水の中にをさめ、遯覆の法を行ひて大蛇を去しめ、道を急ぎて伏見の城に歸り、淀君に謁し、蛇肉を以て内股の疵口に納め、今は御願成就せりとて退きけるが、暫時の間に肉全く癒合て、露計の痕もみえず。是より淀君の御容日毎にうるはしく、顔の膩のつやゝかなる事は櫻花の露を含めるごとく、視る者心を蕩かし志を失ふ。淀君も亦淫心頻りに生じて制しがたく、大野が一黨、渡邊が從類を始めとし、帳内に仕ふる少年、内寵を蒙る者甚だ多し、是淀君の生得にはあらで、妖蛇のしからしむる所なり。夫のみならず嫉妬の心いよ〳〵深くならせ給ひ、人を恨み物を妬むの餘りには、顔色變じて朱のごとく、心熱頭上に突出て焰と成り、後には口耳の脇まで廣がり、息あへぎ、緋の舌長くのび、恐ろしき事云ん方なし。御側の侍女等避け隱れて視る者なし。半時計にして夢の覺たるごとく妬心しづまり、御容嬋艷と常に異り給ふ事なし、されば近く仕ふる侍女近士は勿論、家老用人の輩迄、聞傳へて不思議の事に私言合ける。

の願ひたりとも成就せずといふ事なし。あはれ拙僧が日ごろ修行せし法力を以て、御願を滿し奉らん」淀君大に歡び給ひ、「抑我願といつぱ、來世成佛の望にあらず、現世に福を祈るに非ず。只我身の姿色衰へず、嬋娟くして幾年をも經ば我望既に足り」日瞬笑うて、「此御願成就せしめん事難きにあらず。我行ふ氣姑の法と申すあり、是は寄人を立て壽量品神力品を唱へ、數座の行を爲て祈候へば、寄人うつゝなく口ばしりて滿願を告げ候へども、是には野狐の附添候へば、動もすれば其願の變ずる事も間あり。爰に金龍の法と申す尊き祈の候、此法を行ふ時はいかなる願といふとも滿願せずといふ事なし。是を修するに富士山に登り、山氣龍氣を相呼んで修行なし候事にて、中々以て金閨の深きに育はれ給ひ、殊には人の唱へ尊き御身の、いかでか百里の山川を渉り、富士の山谷に野行あらせられんや。あはれ御生身の肉一寸を切て拙僧に賜らば、其肉身に經文を讀み入れ、共に行法を積て御願を充し奉らん」と申ければ、淀君大きに歡び給ひ、元來心氣勇壯の女性なれば、短刀を拔て內股の肉一寸計切取て賜ひける。日瞬携へて東海道に馳下り、先伊豆、駿河の山々より入て、甲斐に身延七面山、霧深く峯にむすぶを深淵の水に寫して地を縮め、富士の山谷を踏遍して、終に三つ股川の河岸に立て行法を修する事三七日、忽ち川上鳴動して、逆浪高く發りて岸を崩し、急雨篠を亂すがごとく、黑雲四方を

淀君艶郎を
図

淀君鏡面に對して姿色の憔悴を歎く図

しもうるはしき花の顔ばせも、肉落て色青み、はやくも肌に皺を生ひたり。忽ち大きに驚き給ひ、こは口惜き事にて有るかな、もしや太閤におくれ參せても、あはれ天下の諸侯を味方に引入れ、吾威權をして他の人に讓るまじと思ふは、只我容色のうるはしきを以て人を釣の外に出ず、然るにはやく色衰へ、容憔悴たらんに、いかでか人と親まれんや、譬命に限り有るとも、彿の變らで積る年ならば、物思ふ事のあらじかしと、引かづいて臥給ひしが、爰に大明國より來船せし僧に日瞬といへる者あり。原は韃靼人なるが大明に入て行法を積み、日本に渡つて甲州の身延山に至り、日蓮上人の遺法をしたひ、專念修行怠りなく、頗る法力ありて人の病苦難瘡等を祈禱せるに、忽ち其驗有て平癒せざるもの一人もなし。淀君は信長公の御姪女にして元來日蓮宗を尊敬ましませば、此日瞬が異驗有る事を聞召し、かねてより伏見の里に召し上し、瑞龍院といへる一寺を賜ひ、常に帳内に立入て、御歸依尤深かりしに、俄に日瞬を招き密に仰有けるは、「汝日來人の難病を祈り、苦みを救ふ事甚だ多く、一人も其驗の有ざる者なし。誠に當世の廣徳、我深く是を尊ぶ。今我身に一つの大願有り、祈て驗有べくば、いかなる荒行苦行といふとも我自ら是を修せん」日瞬謹んで承り、「人は萬物の靈にして、心を凝し無量の境に至る時は、何事

大名諸大夫彼所へ走り此所に集り、取定めたる事もなく騷動せる事大方ならず。其いはれを委く尋るに、是も宮中の女將軍北廳・淀君兩方に互角して、もしも太閤諱べからざるの御事あらば、兎して角してなんど心の刄硎給へば、諸國の大名小名、或は政所へ荷擔し、淀君の味方に與し、いかなる亂や起るらんと、さてこそ騷ぎ罵りける。別て淀君は妬心深くましく〱て、日頃政所の御方へは加藤、福島、淺野、黑田をはじめ堅固の大名數多さんじ、當時威勢強き金吾中納言、大和中納言及び木下若狹亮勝俊長嘯子と號す宮內少輔利房、右衞門太夫延勝、木下左京亮、同內記、同外記等をはじめとし、御連枝多くおはしまして、動すれば其勢の及びがたきを妬しく口惜く思ひ暮し給ひしに、剰へ若君の御貌太閤に似給はぬとて、政所方の人々兎角に私言あへるなど深く恨み思し召し、あはれ一人にても方人と賴む人の多かれかしと、大名小名陪臣に至る迄、艶言を以て之を懷け、眸を凝して人を釣り給ふに、又爰に甘心し、命をすてて參り仕る者少なからず。然るに今年五六月に至りて、太閤御心地常ならず見えさせ給へば、淀君深く心を苦め給ひ、つら〱思惟し給ふに、今我太閤の寵愛を蒙り、威勢人の下にあらずといへども、若や不豫の御事有りて太閤に後れ參らせなば、若君は御幼稚と申し、何事も政所の思召のまゝに成り行て、我は有るともなきが如くにや有んと、思ひ煩はせ給ふ事數日なり。或曙鏡に向

下の名高き醫師を悉く召し上し、諸社諸山に命せて御祈殘る方なく行はせ給へ共、さしたる御驗も見えさせ給はず。又御勞の募るとも見えず、一向御心重氣に籠らせおはしましければ、上下の人々國々の諸侯、只浮雲に乘がごとく、安き心はなかりける。太閤ある日石田治部少輔を召され仰せ附られけるは、「我此頃心神朦朧として事を聞に倦り。汝今より肥前の名護屋に下向し、我に代りて朝鮮の軍令をつかさどり、我病の癒るの間大小事となく我に聽しむることなかれ」と宣ふにぞ、三成大きに驚き、頭を搯て申けるは、「御諚承りては候へども、小臣いかでか斯る大事の御役に當るべきや。就中諸大將を指揮するなんど臣が才の及ぶべき儀に候はず。恐れながら他人に仰せ附られ下されかし。其上御側を離れ他國へ赴き候はんも、何ぼう心ぐるしく候」と恐れ入て言上す。太閤御枕を上させ給ひ、「汝しひて否む事なく速かに筑紫に行べし、是れ我病を養ふ一助なり。且汝を以て九州の探題たらしめんと思へば、旁はやく下向すべし」と仰せけるに、三成辭し奉るべきやうもなく、有難き旨恩を謝し、直に名護屋に赴きける。されば九國の軍民大きに懼れ、日頃の三成とは見る目を違へて敬ひ恐る。是三成が勢を得るの始めなり。されば太閤御異例にあらせられ、三成御代官として筑紫に赴き、萬の事きのふに變りたる事どもなれば、京、伏見、大阪の間においてさまぐ〵の浮說おこり、何となく物騷しく、

繪本太閤記　七篇卷之十二

○淀君行狀

今年慶長三年の春の頃より、太閤再び肥前の名護屋へ御出陣有るべきかねての思召しなりしが、何くれと公事どもの繁くあらせられ、春もはしたなく暮て、夏のはじめになりしほどに、皐月の始めつかたより太閤何となく御心爽ならず、良もすれば引籠りて御座けるに、北の政所淀君をはじめ參らせ、御側近う仕る近臣侍嬪等驚きさわぎ、こは異例おはしますよとて、典藥頭召し出され、御ありさまを窺ひ奉り、只かりそめの御いたつきなりとて、主劑の御藥など調し奉れば、人々是に暫く心ゆりて、兎角いたはり奉れば、或はまめやかに立出給ひ、常の闊達に少しのけじめなく朝鮮の軍事日本の公事なども聞せ給ひ、例の狂れ言宣ひて、はれらかなる御有様に、うれしと人々歡び給ふほどに、又の日は引かへて御心重く見えさせ給ひ、鬱々と籠り居給ふに、こはいかにやと驚きまどふ。かくて五月も暮れ六月に成りぬれど、只々常の御氣色にはならせ給はで、此ごろは供御なども減じさせ給へば、在伏見の大小名面色を違へ、天

繪本太閤記 七篇第十二之卷 目錄

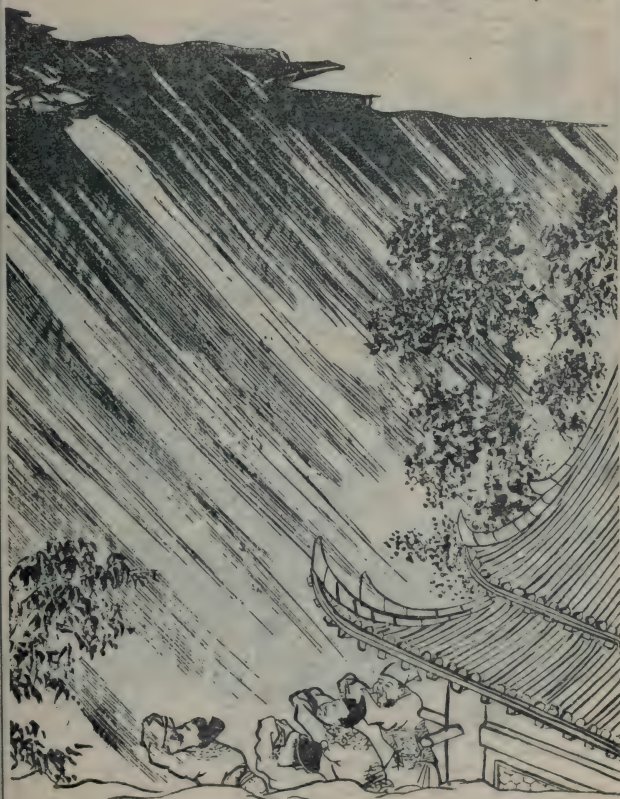
淀君行狀(よどぎみぎやうじやう)
北政所行狀(きたのまんどころぎやうじやう)
洛東耳塚之由來(らくとうみゝづかのゆらい)

く「關帝大聖もし國家の危難を救ふべき神靈あらば、今日只今風雨雷電して其感應を示し給へ。もし應驗なくんば爰に拜する輩國恩を報じて自殺すべし」と、一同同音に念じけるは、毛髮も動く計なり。此日天氣淸明にして空に一點の雲もなし、況んや五月中旬、草も靡かぬ炎天に、忽ち西北より一陣の怪風吹發り黑雲四方に散滿し、雷電鳴はためく事夥し。爰において衆人躍り上つて悅び勇み、かく著明き靈應を見る上は、何の患か是有らんと、愁苦の色を引かへて、陣所々々へ歸りける。是より朝鮮の人民皆關帝に祈誓を懸け、安東地名、星州同上等に廟堂を建て、靈像を置て渇仰する事おこたりなしと聞えける。

るなり」といへり。此時陳寅名心中に歎息して思ふやうは、關雲長は卑賤にして劉皇叔名と兄弟の義を結び、萬馬の中を横行して終に王業を創め給へり、我輩苟くも勅命を蒙り倭寇を退けんと欲すれども、力足らずして今すでに國危し、あはれ關雲長ごとき英雄の出來らば國家の愁を安んずべきに、口惜き事なるかなと、其一夜寢もやらず歎息して明しけるが、所詮今の世の人力を以て日本の剛勢を追討ん事覺束なし、關帝もし邪を除け難をはらふの神靈あらば、我が丹心を鑑みて倭寇を退かしめ、國家萬民の憂を救ひ給へと、忽ち一大願を發し、數兩の金銀を出して造作の費を助け、犧牲を備へ香を燒き、丹誠をこらして祈りける。是を見て大明朝鮮の將卒、何さま神力に非ずんば國敵を退治する事能ふまじと、我も〳〵と金銀米粟を呈し來り、終に巍々たる大廟を建立せり。其安置する神像は土を以て之を塗り、面赤くして重棗のごとく、鳳眼にして髯長く、身に綠衣を著たり、左右に關平周倉の兩像大劍を持して侍立す、儼然として生るが如し。大明神宗皇帝陳寅名が奏するに此廟の成れるを聞き、自ら駕をめぐらして廟前に拜し、倭寇退散の祭を行ひたまふ。是より後此廟前を過る將卒、或は民庶或は男女に至る迄悉く拜し、神助を求めて賊を却けんと祈る。時に五月十三日、關帝の生日なりとて、朝鮮王李昖爰に詣で、大きに祭を行ひ、大明の軍將等も皆集り拜し、等しく祈念して曰

關帝靈現之圖

嶺より關帝堂の圖

崇礼門外に関帝の廟を営む図

閤みづから日本國中の勢を擧て大明を討んとす、いかでか是を恐れざらんや。文祿慶長の役を世人稱して朝鮮征伐とよべり、此號大きに違へり、秀吉公は世を蔽ふの英雄、何ぞ朝鮮如きの一貧國を征し得て何の用にか備へ給はん、前篇に記す如く道を朝鮮に借て大明を征するのみ、朝鮮征伐の號を唱ふるははるかに後世の事にて、太閤の諸侯に賜ひし奉書には、大明御陣と書せ給ひて、朝鮮御陣とは記し給はず、是を以ても太閤のこゝろざしは明國に有し事をしるべし。大明の人民はいふもさらなり、朝廷の群臣國々の諸侯をはじめ、武に携はる陪臣歩卒に至る迄、倭賊軍を起して爰に來ると罵りて、或は山林に身を隱し、遠く西北の夷狄に迯走る者十にして五六分に及べり、誰か一人も身を捨て防ぎ戰はんと云者有んや。たまたま李如松人名、邢玠人名がごときも、勅命の止べからざるによつて軍を發し、朝鮮に至るといへども、日本勢を恐るゝ事虎狼のごとく、一度も全き勝利を得ず、いたづらに軍兵を損ずるより何の益をか仕出したるや。日本勢竹を破るの勢にて直に大明を押討んに、大石を以て鷄卵を壓すより猶易かるべし。されば大明朝鮮の危き事旦夕に迫り、上王侯より下庶人に至るまで、終晝薄氷を踏がごとく、終夜深淵をのぞむかごとし。爰に明の將軍麻貴人名が部下の將に陳寅人名といふ者あり。過し正月蔚山地名の城を攻し時、明軍利を失ひて退きしに、此陳寅人名鐵炮に右の足を打拔れ、陣中に歸りて疵を治すれども癒ず、二月に至つていよ〳〵痛み堪がたく、車に乘て明の都へ歸りけるが、道に崇禮門外の山の麓に寓りけるが、此所の人民寄集り一座の廟堂を創立し、造作漸半を過たり。陳寅人名土民に、「何の廟なりや」と問ば、答て曰く、「是關帝の神廟を建

敵の斬捨たる林の中ともいはず、さらぬ野山古りたる林の中ともいはず、飢死する者幾億萬といふ數を知らず。其中にもたる死骸又は飢ゑて死たる屍どもの横はり臥たるさまの、目もあてられずあさまし。其中にもことに哀れなりけるは、二三歲のをさな子の匍匐して、飢死したる母の乳房を含みて啼たるなど、誰か是を憐まざらん、何者か之を歎かざらんや。朝鮮の相丞柳成龍人名あまりの詮方なさに、松の葉樹の皮を粉になして米の粉を少しまじへ、湯にかきまぜて飢ゑたる民に與へぬれど、其物はかぎりありて飢人はかぎりなし、終に救ひ得べき事にもあらず。かくて日本人今一年も退かずんば、朝鮮の國において人馬鳥獸あらゆる生類皆悉く盡るならんと、歎きかなしまざる者もなし。是朝鮮のみしかるにあらず、大明も亦ともに陷らんとす。此ゆゑをいかにといふに、萬曆帝荒淫にして政事を荒み、北虜亂をなして國の窮する事既に久し。しかるに日本過し應仁の亂より、永祿、元龜、天正の時に至るまで、兵亂に主を失ひ、父を殺され、身の置所なき武士等五十騎七十騎兵船に取乘り、閩浙大明地名の間に徘徊し、襲ひて財寶を掠め取る者甚だ多し。明人是が爲に兵を備へ刀を砺ぎ、防ぎ支ふると雖も、日本人勇にして敢て敵する事能はず、和寇と唱へて明人の恐れ懼る最上なり。故に明國の人盜を爲すにも、自ら和寇と稱し郡縣を脅かす者又少なからず。かく計日本を恐怖して有りける所へ、豈五十騎七十騎の勢ならんや。太

ける。爰において大將義弘、「長追なせそ」と軍をまとめ、かろ〴〵と城中へ引入ける。此日討取る明人の首三萬餘級、悉く耳鼻を刎て大なる樽に詰させ、日本へ送りて太閤の上覽に入たりける。是より後大明朝鮮の人民義弘が軍威に恐れ、あな恐ろしの石曼子（明の音志摩圖をしまんずと云ふ）が勇猛やと、舌をふるはし畏たりけり。

日本勢斬取る所の首を太閤の上覽に入れんとするに、其數夥しきにより、是已前よりも諸大將皆其耳鼻を刎り、首に代て日本へ送りける。されば海上の運送もなし安く、其手輕き手段を太閤にも稱譽し給ひける。

○關帝靈現

扨も此時朝鮮國のありさまこそ、哀れともいはん方こそなかりける、大明五十餘萬の軍兵所々に屯して敵を討ども、終に追退くるの功もなく、いたづらに年月を累ね、粮米を費す事いくばくといふかぎりなし。日本の軍兵は慶尙（八道の内）、清忠（同上）の兩道數百里が間に城を構へ、嶮岨の要害によりて、威を邦内にふるふ事前後七年、火を放ち人を殺す事草芥のごとくなれば、朝鮮八道にして其七八分は蕭然たる荒野と變じ、一人も農業をつとむる者なく、百姓は山林に迯ま

よつて寄手の陣中大きに亂れ、上を下へと騷動す。城中より是を見て「すはや切て出て高名せよ」と呼はり、島津又七郎忠恒一千餘人の逞兵を引率し、城門を開きどつと喚いて縱横無盡に突立れば、大軍却て邪魔と成り、明の寄手誰か一人戰はんとする者なく、我先にと迯出せは、島津勢は勝に乘り、斬捨て薙捨て、或は馬足に踏倒し、起しも立ず斬捲れば、恰も七裂八裁に切崩され、爰に討るる明軍三千餘人、たま〳〵生殘る者とても、疵を蒙らざる者一人もなし。時に大將茅國器人名、一萬餘の軍兵を驅立て、「城兵は討て出たり備なきを攻て此城を奪へや」と、喚き叫んで攻寄けるに、城中には大將島津兵庫頭義弘、五千餘騎にて守りぬれば、いかでか是を落し得ん、大きに呼んできそひ討ば、明兵も死をかへり見ず、勇を勵し戰へども、終に叶はず二千餘人討殺され、此一軍も敗北す。惣大將董一元人名、茅國器人名が敗するを見て、口惜き事かなとて、諸將を勵まし新手を以て攻懸る。義弘城門を開き、自ら眞先に馬をすゝめ、無二無三に突破り、明將徐世卿人名を生捕にしたりけるが、「面倒なり斬てすてよ」と云程こそあれ、士卒大勢立寄て寸段々々に切殺したり。董一元人名是を見て大きに恐れ、馬をかへして迯行にぞ、又惣崩に成りて右往左往になびき行くを、爰に追詰め彼所に追寄せ、只草芥を苅るが如く撫切にしけるほどに、討るる者幾千萬といふ數を知らず。實に不雙の高名かなと、聞く者稱歎したり

八合も戰ひしが、盧得功（人名）叶はじと思ひ、馬を返し迯行くを、追樣にうしろよりぐさと突くに、肩先を前へ貫き、鎗の穂先一尺ばかり突出たり。何かは以てたまるべき、馬より下に落たりけるを、從卒立寄り首を取てさし上たり。大將既に討れければ、此手の一軍粉のごとく亂れ、四方へばつと迯散つたり。兵部少輔頭をかへして城上を見れば、はや明軍入り代りしと見えて、緋の旗おびたゞしくひるがへれり。兵部かねてより此城にて大軍を支へ戰はんは心元なく思ひ、城兵殘らず引率し、切て出たる事なれば、ふたゝび城を見もやらず、軍勢を集めしづ〳〵と、新寨（地名）城へ引入たり。

○島津義弘鏖二明軍一

去程に明の大軍は、東陽（地名）に貯へたる日本勢の兵粮を燒盡し、破竹の勢にて新寨（地名）の城に押寄せ、茅國器（人名）、葉邦榮（人名）、彭信古（人名）なんどいへる大將士卒を勵まし、晝夜を分たず攻たりける。城中も爰を先途と防ぎ戰ふといへども、大軍氣を得て攻るほどに、死人を乘り越え既に城際に乘詰め、木槓といへる城を燒く攻具を以て城門を破んとせしが、如何したりけん、此攻具碎け飛で、其火薬に悉く火うつり、黑烟味方の兵士に吹掛り、死傷せる者甚だ多し。是に

計略を以て此義弘を欺かんとするは、將に是虎の髭を撫るに似たり。我何ぞ汝等ごとき鼠の輩に欺かれんや。譬眞實に和睦を乞とも、我又決して是を免すまじ。今暫く髯首を汝等に預置といへども、重て合戰をいどまん時は悉く奪取べし。はやく歸つて此言を傳へ、首を洗うて我軍兵の至るを待べし」と大に罵り、贈り物の金銀を踏返して怒られければ、明の使うるひをののき、頭を抱へ鼠のごとくに迯かへれり。董一元(人名)是を聞て、「其儀ならば先泗川(地名)の城を攻落し、勢に乘じて新塞(地名)へ押し向へや」とて、四萬餘りの大軍を引率し、泗川(地名)の城を八面より取かこみ、えい〳〵聲して攻たりけり。此城を守る大將は、島津家に聞えたる伊勢兵部少輔貞昌、三百餘騎にて固めたるが、少しも騷がず、鳴をしづめて敵を矢ごろ近く引寄せ、鐵炮の筒先を揃へさん〴〵に打立れば、先にすゝみし寄手の大軍、彌が上に打かさなり、死する者五百餘人、備しらけて進み得ず。兵部少輔時分はよしと城兵を集め、三百餘騎城門をさつと開き、轡をならべ面もふらず眞一文字に突入て、雲霞のごとき大軍を、兩段に突破り、三段に斬亂し、あたる者を幸にまくり立て〳〵、勇を振うて血戰すれば、明の大軍討るゝ者數を知らず、四途路になつて漂うたり。董一元(人名)が先手の大將盧得功(人名)といふ強勇の若者、偃月刀を打振つて兵部少輔に討てかゝる。「兵部物々しや」と呼はつて、血に染たる大刀の鎗を引すごき、上段下段七

義弘
明の
使を
罵りて
勇威を
示す図

て引き行にぞ、終に城門をも附入にせられ、今は叶はじと落行ほどに、茅國器人名が軍兵いさみ進み、所々の櫓に火をかけたれば、さしも堅固に構へたる望津地名城、一時の烟となりにける。此時明將董一元人名もかねて茅國器人名と相圖を定め置たれば、不意に發つて島津が勢を籠め置たる永春地名の城を攻落し、近きほとりの民家に火を放つて燒立て、いよ／＼勢ひに乘じ昆陽地名の城を十重廿重に取り圍み、揉立て／＼攻たりける。島津勢爰を破れじと、必死に成て戰ふ程に、敵を討つ事多しと雖も、目に餘る明の大軍、斬るをも突くをもかへりみず、手負死人を乘越え撥ね越え、只平攻に攻たりけり。島津勢勇なりといへども、其勢に敵すべからず、終に城を棄て泗川地名の城につぼみけり。

○泗川城合戰

去ほどに島津義弘は、新寨地名の城に在て望津・永春・昆陽已上地名等の合戰を聞て、兵を出して救はんとするに、はや悉く落城して、落武者追々に馳來れば、無念かぎりなけれども、今は爲べき手術もなく、怒をおさへて有りける所に、明の大將董一元人名使を新寨地名の城に遣し、多くの金銀絹布を贈り物して和睦せん事を求む。義弘其使を召寄せ大きに罵つて曰く、「汝等僞の

諸葛鏞といふ者是を見て、「我此隱語をよく知れり。令公は唐の郭子儀が事、埋子父は二十四孝の一人郭巨なり。則ち是姓は郭氏の人ならん。或あるの口とは國の字なり、手なきの按とは安の字なり、思ふに是郭國安なるべし」といふ。茅國器手を打て大きに喜び、「誠に郭國安今日本の陣中に在よしを聞り、此隱語を以て我輩に召すは、導いて新寨の城を攻破せん爲なるべし」とて、急ぎ朝鮮の商人三人を召して委く計を敎へ、書翰を持せて日本の陣へ遣しける。彼商人等さま〴〵智略を運らし、終に郭國安が望津の城に在る事を聞出し、しのび入て茅國器が書を與へ、城を攻べき計策を問ふに、郭國安密に申けるは、「今月廿日の夜、望津に貯へある兵粮庫に火を罹て燒立べし。夫を相圖に大軍を以て攻入給ふべし」と約束して、かの商人をかへしけるに、茅國器是を聞て大きに欽び、旣に其日に成しかば、三萬餘人の逞兵を引率し、望津に向て河を渡さんとす。日本勢是を見て、城戶を開きて討て出で、渡させじと揉だりける。此時城中に在ける郭國安、火を放つて庫々を燒立るに、島津勢大いにうろたへ、「すはや城內に叛逆人ありて火をかけたるぞ。兵を引上げ火を救へ」といふ程こそあれ、忽ち隊も亂れて我先にと引退くを、茅國器團扇を取て味方を招き、「一人も餘さず討取れや」とて、大波の打寄る如く噇とをめいと切立れば、日本勢討るる者數を知らず。さん〴〵に成

す事難かるべし。此所へは大明中路の大將李如梅人名、董一元人名軍兵を率し向ひけれども、かゝる堅固の要害なれば、敢て攻寄らんとする便を失ひ、屯をとゞめて守り居けるが、却つて城兵の爲に夜討朝掛やせられんと陣々を固め、防禦きびしく守りける。

○董一元茅國器破ニ島津勢一

此時明將董一元人名晉州人名に屯して、さまゞゝに謀略をめぐらし、新寨地名の城を攻落さんと晝夜心をくるしめけるに、茅國器人名が幕下の兵士營の外を夜廻りせしが、一人の女を捕へて茅國器人名が陣營に引來る。茅國器人名近く招きて是を見るに朝鮮の人ならず、却て是明國の女なり。怪んで何なる者ぞと尋れど、此女敢て一言も答へず。懐より一通の書を取出して國器人名が前にさし置たり。取上て是を見るに、其書の趣に曰く、「此女賊兵のために虜と成り、既に日本へ渡されんとす。吾甚だ是をあはれみ、貲を多く出して女が身を贖ひ出し、故郷に歸らしめんとす。大明の軍勢悉く憐みを垂れて、或は犯し辱しめ、或は殺害する事勿れ。かく云ものゝ姓を知らんと欲せば、令公の後、埋兒の父、名は則ち或あるの口、手無きの按」とぞ記したり。茅國器人名敢て其姓名を悟る事能はず、普く陣中に示して判斷すれども、皆心を解く者なし。時に

繪本太閤記　七篇卷之十一

〇大明陸路大軍議レ攻ニ蔚山新寨一

此時大明左方の大將麻貴人名、十餘萬の軍兵を率し、溫井地名に屯して蔚山地名を攻んと議したりけれど、彼鬼將軍淸正が勇に恐れ、城近くは押來らず、遠巻してためらひける。淸正も味方の小勢を以て明の大軍に當らん事危しとて、城を守て敢て動ず。兩軍たがひに相對し、空しく日數を送りける。爰に島津又七郎忠恒といふ勇將あり、兵庫頭義弘が子なり。一萬餘騎の逞卒を以て新寨地名に城を構へ、近邊の要害を悉く斬取り、其勢慶尙・忠淸・全羅已上皆八道の名の三道を動かし、望神・永春・昆陽已上地名なんどいへる切所に城を築きて兵士をこもらせ、金海・固城已上地名の堅城を左右に建て、東陽地名には粮米を夥敷積貯へ、萬の手配り連續し、誠に當りがたき勢なり。しかのみならず此新寨の地形たるや、三面は蒼海にして漫々たる潮濤岸を洗ひ、一方は陸に續けども、嶮難の要害に枝城多く聳て、進退すべき道もなし、父義弘泗川地名にありて陜州・宜寧・咸陽・高靈已上地名等の村里を掠め、軍威盛んに犄角をなせば、天魔鬼神といふとも攻動か

繪本太閤記　七篇第十一之卷　目錄

大明陸路大軍議攻蔚山新寨
董一元茅國器破島津勢
泗川城合戰
島津義弘鏖明軍
關帝靈現

の兵船凜然と備へて、次第〳〵に押出す其さまの何とやらん怪しければ、日本の諸將大きに疑ひ、味方の軍兵既に戰ひ勞れ、新手の勢と鋒先を交へんは危かるべし、其上敵に構へたる計策も覺束なければ、軍を收めて後日に勝負を決すべしと、一同に勝鬨を揚てしづ〳〵と引退く、李舜臣が船十四五艘追かけて矢を射けれど、遠くして皆海に落たり。されば兩軍物わかれして各本陣へ引取ける。此時李舜臣なかりせば、陳璘は討るべかりしを、奇兵の術に辛き命を助りける。

りも繁し。あはや日本船射すくめられしかと見る所に、嚾と一聲鬨の聲を擧るや否や、鐵炮の筒を揃へつるべ立て打けるほどに、元より其術に妙を得たれば、空丸のひとつもあらばこそ、見るが内に明船の水主、楫取り、射手の兵士、將棊だふしをする如く、百人計ばら〳〵と打倒さる。明兵是に辟易し、櫓を引入れ弓をもひかず、あきれてためらひ居たりける。時分はよきぞ進めよと、日本の兵船こと〴〵く競ひかゝり、大筒小筒の鐵炮にてねらひ打に打すくめ、近寄る船には熊手をかけて踊り入り、玉散る計の大刀をさしかざし、當る者を撫切に斬倒せば、陳璘(人名)が兵船さん〴〵に打なされ、東西に漂ひ、南北に放流し、船軍の亂れたる習ひにて大將の下知も聞ず、元より返し合せて戰はんとする者もなく、思ひ〳〵に迯たりけり。大將陳璘(人名)大きに怒り「きたなき者共が有様かな、軍はかくこそするものなれ」と、方天戟を打振て船の艫先に躍り出で、近づき來る日本人を目たゝく内に八九人海中へ薙倒し、勇を震うて戰ひしに、鐵丸一つ飛び來つて陳璘(人名)が右の腕を打ぬきたり。陳璘(人名)無雙の勇士なりといへども、痛手なれば働く事能はず、船底に臥して息をつぎたり。大將かくのごとくなれば、明の兵船惣崩れに崩れ立ち、四方へばつと迯たりけるを、逃さじと追行く所に、濟州(地名)の岸に當つて狼烟しきりに立のぼり、鬨の聲おびたゞしく聞えけるに、日本勢驚きて是を見れば、かの李舜臣(人名)が二手

も、李舜臣がごとき人物はあらじと稱譽しける。此時八月十日、日本の兵船數百艘、海上に鯨波を發し押寄ると罵りければ、明將陳璘大きに笑ひ、「日本の奴めら、我軍の爰に來れるを知らずして押寄しや。いで手竝の程を見すべし」とて、五百餘艘の軍船をとゝのへ乘出さんとしたりけるを、李舜臣おしとゞめ、「將軍日本人を輕んじ給ふ事なかれ。彼國數年軍になれて駈引ともに自在を得たり。よく計策を定め其後にすゝみ給へ」陳璘又大きに打笑ひ、「朝鮮人は柔弱なりと傳へ聞しが、足下の言を以て其實なるを知りたり。我は日本人を見る事小兒のごとし。何ぞ謀計を構へ而して後戰をなさんや」と、飽まで大言して自ら眞先に船を出せば、五百餘艘の兵船、我劣じと馳たりける。李舜臣歎息し、「愚なる哉陳璘、見よや目前に敗軍し、北る路さへ辨ふまじ。いざや奇兵をなして敗軍を救ふべし」と、二百餘艘の兵船を二手に分け、一手は瀬戸口に備へて進み戰ふの勢を示し、一手は山の麓に添ひて備の中半を蘆葭の中に隱し、手術有げにひかへたり。去程に陳璘は五百餘艘の船を沖中へ漕出し、東の方をきつと見れば、日本船三百餘艘、暴濤を押切り一文字に馳來る。眞先に進みし兵船は藤堂佐渡守、脇坂中務大輔、蔦と輪違の旗潮風に吹きなびかせ、後れじ劣らじと漕寄せたり。陳璘下知して兵船を箕手形に押つゝみ、藤堂脇坂が船を八方より差詰め引詰め射させけるは、車軸を流す雨よ

○藤堂脇坂等水ニ戰陳璘ー

同年八月、大明四路の軍勢各兵馬をすゝめて、日本勢と勝負を試みんとす。一手は麻貴人名を大將として其兵十萬餘人、蔚山地名の方へ向ひ、一手は李如梅人名董一元人名を大將とし、是も十萬餘人泗川地名に向ふ。一手は則ち劉綎人名が兵八萬餘人、順天地名の方に勢を張り、又一手は陳璘を大將となし水軍六萬餘人、數百艘の兵船に取乘り、釜山浦地名の方へ押廻す。去程に日本船手の大將九鬼大隅守、藤堂佐渡守、脇坂中務大輔、鍋島信濃守、同平左衞門尉等をはじめとし、佃、河村、藪なんど其勢二萬餘人、大明水路の兵船を遮らんと唐島地名に船よそほひし、敵寄なば烈く戰をなし、過し濟州地名の敗北を雪がん者と、手ぐすね引て待居たり。時に大明船手の將軍陳璘人名は、李舜臣人名が屯せし濟州地名に到りぬれば、李舜臣人名陣門を遠く出て是を迎へ、謹んで營中に請じ、山海の珍味をつらねさまぐ\に饗應せり。此陳璘人名といふもの素性暴厲にして人に傲り、禮義を辨へざる男なれば、朝鮮國に入りても專ら明國の威勢に募り、道々の大官守令を辱しめ、更に憚るところなし。李舜臣人名疾くより其ふるまひを知りければ、禮敬を以て正しく交り、渠が自ら恥て不尊の行を止しめんとす。されば陳璘人名も朝鮮の軍民多しといへど

へる者あり、此頃少しの誤有しを、劉綎怒て痛く鞭打ち、陣中に搦め置しに、いかゞして遁れ出けん、只一人順天城に馳來り、行長に謁して劉綎が謀計を審に物語り、出城の儀をとゞめけるに、行長さればこそと大きに驚き、宥經山を厚く賞し、使を以て劉綎が陣へ云はせけるは、「行長城を出て面會すべき所に、今朝より卒に疝癪の病を發し、歩行は元より馬車にて往來もなりがたし。希くは將軍勞を辭せず遠く我城外へ來り給はんには、早々城を出て面謁すべし」と申ければ、劉綎が兼ての手配り相違して、いかゞはせんと議しけるに、諸將皆申けるは、「是は行長味方の手術を推量し、將軍を城外へおびきよせ、兵を伏て生捕にせん計策にて候べし。行長參らざるに於ては此會を止め給へ。將軍小勢にて彼所に赴き候はんは甚だ危かるべし」と申すにより、劉綎も實にもと思ひ、兎角返答して其日の面會は止たりける。然るに搦め置たる宥經山、何處へ走しやらん見えずと申すに、「扨は此匹夫が敵中へはかりごとを漏しけるよ」と、牙を嚙で怒りけれど、更になすべき手術もなく、其儘に打捨けるを、軍奉行陳效劉綎が計策の密ならずして泄れやすきを責て、大將軍邢玠が陣へ斯くと告たりければ、劉綎は慙愧にたへず、深く罪を謝したりける。

を動す事、吾明帝のふかく悼む所なり。日本元來千里の海上を經て、數萬の軍勢爰に到る。人情又誰か故郷を慕ざらんや。希くは行長、劉綎一度面會し、吾が國の疎意あらざる旨を語り、共に和睦を計んこそ兩國ながら長久の計なるべし。今劉綎軍卒を本陣に殘し、只一人出て將軍を俟ん、將軍も又單騎にして見え給はば、幸甚是に過じ」と申しける。行長其僞りならん事を恐れ、再三事を糺しければ、吳宗道辯舌の士にて、誠しやかに欺きければ、行長元來和好の望深きにより、城を出て對面すべしとて時日を定め、且某の土地にて出合べしとこまやかに約諾し、吳宗道は城を出て己が陣所へ歸りける。

○劉綎豫伏ㇾ兵爲ㇾ捕二行長一

明の將軍劉綎は、小西行長を欺き得たりと大きに欽び、屈竟の勇士二百餘人を帷幕の中樹木の蔭に埋伏せしめ、行長城を出て對面せん時、等しく出て生捕べき相圖を定め、順天の城中へ使を立て行長の來會を催しける。行長も敵の計策にやと疑ひながら、行ざるも臆したるに似たり、譬へ謀計有るとても何程の事や有らんと、木戶作右衞門、小西主殿介等を始め、一人當千の勇夫五十餘人をいざなひ、既に城を出んとしける所に、劉綎が部下の卒に宥經山といふ

明将劉綎呉宗道をして小西行長を説しむる図

ず。秀秋、秀元、秀家等暫く歸國し、秋九月に至つて再び渡海すべし」と宣へば、使者謹んで退き、順風を得て朝鮮に至り、しか〲の命を傳へけるに、行長赤面して籠城の用意とり〲なり。此時既に五月二十八日とぞ聞えける。其六月、毛利秀元、浮田秀家、金吾秀秋等太閤の御召にしたがひ日本に歸り、伏見に到りて謁見を乞に、太閤先人を以て合戰のありさまより、諸將兵卒の剛臆、諸士の忠心を詳かに聽糺し給ひ、其後對面を許し、毛利秀元が軍勞を稱譽有りて御太刀を賜り、秀家、秀秋等が蔚山（地名）の援兵遲滯せしを責給ふに、兩將恐れ入て、罪を謝す。且加藤清正、嘉明兩將の軍忠拔群なりとて、感狀を賜ふ。此時朝鮮には大明の軍兵、今日は順天（地名）へ押來る、明日は泗川（地名）を圍むよと罵るのみにて、いつしか夏も暮れ、秋のはじめに成けれど、大軍王城に屯して敢て動かず。やう〱七月中旬、劉綎（人名）數十萬の兵を引て水源（地名）まで押出し、順天（地名）城を攻んと議したりけるが、兎にも角にも日本勢武勇にして、力攻めにせば軍兵を損ずるのみにて、はか〲しき勝利もあらじ、謀計をめぐらし敵將を欺かんにはしかじとて、部下の隊將吳宗道（人名）を使とし、順天（地名）城に到らしめ申させけるは、「大明、日本元來深き怨有るにあらず、計ずもかゝる鬪爭出來て、兩國の人民兵革にくるしみ、死亡せる者いくばくぞや。是を憐み先に和好の事を談じ、既に事調ふべきを、沈惟敬（人名）等是を誤り、再び兵馬

城すべき要地にあらず。先年平壤地名の要害よき城にさへ、軍兵多く討せて退きたり。一先此城を開き、釜山浦地名に至りて其勢を併せて敵を防がんに、危き事有る可らず」といふ。時に加藤左馬介嘉明、此城に在けるが進み出て申けるは、「是は貴殿の御言とも覺えぬものかな。抑日本の諸將銘々城を構へ隍を深くなし、兵糧武具を携へて籠城せるは、何れも敵の大軍を引受け防戰をなさんとの爲に候はずや。然るを敵の大軍押寄ればとて、其旗さへも見ず城を開けて退かん事は、武夫の恥る所に候はずや。諸將は兎もあれ、此嘉明一人は此儘に籠城し、駈るも引も敵の旗色を見たらん後こそ定むべし」とて、退くべき氣色なし。是によつて衆將議論紛々として分れ、更に一決せざりしに、此評議早く蔚山地名の城に聞え、加藤清正、毛利秀元等、則ち安國寺惠瓊を使として順天地名城に遣し申させけるは、「城を開き釜山浦地名に籠んとの事は、先太閤へ言上を遂げ、御下知を受て其後に計りたまへ」と申しければ、行長嘉明其議に同じ、使者を以て太閤に申す。太閤是を聞て大に怒り給ひ、「是等の事は言語道斷、比興の沙汰なり。大明の軍兵來らば來れ、何ぞ畏れて逃避る事をなさんや。首尾相救ひ、力を盡し固く守らば、幾百萬の大軍といふとも、防ぐに何の難き事あらん。嘉明が申條こそ其所を得たり」とて、小西を責め嘉明に感狀を賜ひぬ。且命じ給ふは、「我はるかに是を慮るに、明兵急に順天地名へ押寄る事有る可ら

御酒宴の興いよ〳〵に增して、「日出たやな松の下千世も幾千代八千代」などうたふ小歌の聲と倶に、夜もいたく更ぬれば、御供の人々還御を催し奉るに、頓て伏見に歸らせ給ふ。翌日若君よりの御使三寶院に參りて、銀二百枚、小袖十重、北廳より烏目百貫匁、精絲二十疋參らせられ、其外御局の方々よりも御贈物夥敷賜りぬ。太閤よりは日野三ケ村、勸修寺村、笠取村、小野村千六百石を寄附し給ふとぞ承はる。

○太閤怒㆓行長㆒賞㆓嘉明㆒

同年夏四月、日本の諸將計議して、蔚山（地名）及び順天・泗川・釜山浦・新寨・金海・固城（已上地名）の城々を修理すべしとて、石垣を高く築き、隍を深く掘らせ、兵粮玉藥武具馬具に至る迄、それぞれに貯へ置き、明兵押來らばきびしく防ぎ戰はんと、其用意既に調ひぬ。頃日大明の四路の兵、各慶尙道（八道の内）に發向せる中に、此度は先小西攝津守行長が籠りたる順天（地名）を攻落し、其後勢に乘じて八方の城に向はんとて、はや明兵數十萬、順天（地名）近く押來ると呼はつて、小西が城中ひしめきける。是によつて行長城中の諸將を集め相議しけるは、「此順天（地名）城の要害を蔚山（地名）にくらぶれば、嶮岨の切所なく、大河の固めなく、爾も城地低くして、大軍を引受け籠

緋の絲にて網をつくり、鈴を多く附てかけたりしに、春風の吹に任せて鈴の音の淸く鳴るに、群鳥の驚きて飛渡るにぞ、かの兼載が護花鈴の句に、

鳥はなしあらしにつげよ花の鈴

となん作りたるもおぼし出させ給うて、御氣色いとうるはし。或は谷水をうけためて池をなし、ちひさき舟を浮めたるに、人形あまたあやつりて、えもいはず漕めぐらすなど、幼君を御慰めのためとて、何れも美麗を盡していとなみたり。其外長束大藏太夫、石田治部少輔、大谷刑部少輔、御牧勘兵衛などが茶亭、悉く趣を異にし、さま〴〵に興を添へ奉れば、北廳淀君其外の女房達、斜ならず歓び給ふ。爰に岩の挾間草茂き中に、朽ちたる木をたよりにしつらひし庵あり。柴の垣竹の編戸の物さびたるぞ却て目覺る心地して、太閤是に入せ給ふ。是なん新莊入道東玉が茶亭にて、二八計の女四五人、皆茜染の衣著て、燒餅を折櫃に盛りてさゝげ奉る。太閤殊更に興に入せ給ひ、心よくきこしめし、「酒やある」と仰けるに、「かたの如く用意仕る」とて、棚にかざりたる瓢箪取出し、「是なん我庵の酒樽にて候」とて、土器にかたぶけすゝめ奉れば、太閤いよ〳〵興じ給ひ、數刻酒宴を催し給ふ。向うの峯より綱を引き、種々の珍らしき肴、名ある酒など、藁畚に入れて鞍馬の山の畚落しに擬たるなど、殊更に珍らしとて、

又右衛門介といふ女房は、をのこめきたる聯句を賦す。

聞說醍醐花世界　見來此處雪乾坤

時に勅使として廣橋中納言兼勝卿入御ならせ給ひ、花見の興を賀し給へば、攝家清花其外諸侯大夫及び御供にあらぬ京大坂奈良堺の町人まで、けふの御喜びとてさま〳〵の珍菓珍肴、或は折或は作物、其數を盡し、名酒には加賀の菊酒、麻地酒、其外奈良の僧坊酒、博多の煉酒、江川酒など、思ひ〳〵の捧物は山よりも尙うづ高し。殊更此日風しづかに雨降らず、天晴やかに塵を飛さず、春の空うらゝかに花の匂かうばしく、梢に來なく鳥の聲、谷に響く泉の音までも、千代萬代の歌を唱ふるにやといとめでたき御遊なりき。德善院玄以法印が茶屋は山の峯にありて、心附なき浴室を構へ、美しき女房の湯ひくありさまに、太閤いたうめでさせ給ひ、則ち衣を脫て浴び給ふに、はやくも御膳をすゝめ奉る。爰を出させ給ひて小川土佐守が茶房に入らせ給へば、此所には京師の傀儡人多く參りて、いろ〳〵の狂戲をなして若君北廳をはじめ女房達を慰め參らする。それのみならず傍に數寄屋あり、古代の茶器を錺り、古畫を壁に貼て風流を添る。山の半には淸らかに家を造り、店には賣物に擬して扇、はりこ、ひいな、疊紙人形など棚に置たるはいと興ありて、思ひ〳〵に取てもてあそびけるに、かなたの櫻の梢には

二番は三條の君、三番は松の丸君、四番は太閤御若君を具して輿に召され給ふ。五番は淀の君、六番は加賀の君、各御輿添の小名等守衛し奉り、既にして醍醐の三寶院に到給ふ。御供の人々はかへし給うて、暮る程に御迎へ申すべしとの御事なり。則ち爰の院にて北廳及び淀君已下の女房達、みな麗しき重の衣思ひ〳〵に著錺り、爰を晴と出立ち給ふぞ、さらぬだに世に類なきあてなる女郎の、よそほひ出させ給ふ有様なん、中々世の中の人にはあらじかしと、まばゆき迄に見えて、所々の花を見めぐり給ふに、其路の左右には皆緑の竹もて埒を結ひ、色々の織物錦の幕を張らせ給ひしは、上品王宮極樂世界も是には過じと覺えける。太閤は若君の御手を取せ給ひ、數多の女房たちもろともに、ゆるやかに歩行みて流ある邊を逍遙し給ふに、苔むしたる石橋の左に板庇したる亭あり。是は増田右衛門將長盛が構へし茶店にて、其妻緋の衣に萌黄の腰裳ゆるくむすび、若君の御手をとりて入れまゐらせ、盃取出てしばらく宴を催し、興を殘して立出給ひ、彼方の山此方の峯を見廻り給ふに、霞たなびき春の景色いはん方なく、咲も殘らず散初めもせぬ花の色は、實に枝をならさぬ御代のためしかなとて、若君政所をはじめ參らせ、めでさせ給ふ事かぎりなし。御供の中に高洲と云る女房歌よみて獻る、

天が下殘らぬ花の盛には山より山や風にほふらん

一院内院外、掃除念を入れ申附べき事。
一振舞等其外潤澤に有るべき事。
一百姓已下往還の旅人等、迷惑せざるやうに有るべき事。
一大津宰相、福島左衛門大夫、增田右衛門尉、
右三人醍醐惣構近邊の奉行として、猥ケ間敷事を可レ爲二停止一。
一山中山城守、中村式部大輔、右兩人惣構の内に爲二奉行一、御用人の外一切出入可二停止一

德善院玄以法印
石田治部少輔
長束大藏大輔

慶長三年正月

右のごとく仰渡されければ、銘々其役々を承り、多くの人夫寄つどひ、晝夜のわかちもしらず營みけるに、更にいとまも無りけり。此砌京、大阪、伏見に在番せる諸大名、皆太閤の興を添へ奉らんと、めい〳〵醍醐の山に番匠を引具し、或は山の凸或は凹たる隈、又は麓の流の傍、思ひ〳〵に風流の茶屋を構へ趣を盡し、榮有らん事を願ふ。時に三月十四日、かねて定め置れし花見の日なれば、辰の剋より伏見の城を出させ給ふ。御輿の次第は、一番に北の政所、

繪本太閤記　七篇卷之十

○醍醐之花見

今年の春もいと端なく暮過て、三月中旬にもなりけるに、桃李言いはねども自ら道をなすとは、たひらかに治りし時代ならん。山々の木々の花は心もなく咲出れど、朝鮮國は去る年より七年の間兵亂に苦められ、國王より庶民に至る迄、一日の安き心もなく、目に見る所は旌旗鎗刀、耳に聽ものは鬨の聲金鼓の響き、いつか靜なる春をむかへてしづ心なき花を詠んと、歎き悲まぬものもなし。夫には引代へて太閤秀吉公、醍醐の花御遊覽の御催しとて、正月の末つかたより醍醐の山の花の亭經營し、寺院の破壞を修理せしめ給ふ。其式目の覺に曰く、

一三寶院小破の所修理を加ふべし、大破なるは新に立べし、疊以下改むべき事。

一院外五十町四方、三町に一ヶ所づつの番所を置き、弓鐵炮の者堅く守るべき事。

一伏見より醍醐に至つて、道の左右に埒を結ふべき事。

一寺々宿札を打て、破壞の所あらば修理すべき事。

繪本太閤記 七篇第十之卷 目錄

醍醐之花見
太閤怒行長賞嘉明
劉綎豫伏兵僞捕行長
藤堂脇坂等水戰陳璘

見えざる中より、鎗ぶすまを作つて突立れば、明兵いかでか是に當るべき、さん〴〵に成て迯たりける。是によつて日本の諸大將、己々が持城を堅く守り、相互に急を救ひ、面々逆意をさしはさむ事なかれと、改めて盟書を認め、各居城へ歸られける。此時日本勢の構へたる城二十一ケ所、其中において蔚山（地名）は北口にありて、尤日本勢第一とする要所なり。釜山浦（地名）は東に有り、順天（地名）は西に有り、泗川（地名）は其中央に有り。金吾秀秋、小西行長、島津義弘等是を守り、各是要害の城地にして、四方の城々へ下知を加ふる所なり。

家に與へけるに、廣家則ち我馬印と成したりけり。（淸正の馬印は白き馬簾なりしを、廣家は朱に染めて赤き馬簾に直されたり。）去程に明の大將軍邢玠、此時朝鮮の王城に屯して在けるに、蔚山の寄手後援の兵に恐れ、戰はずして王城に引取けるを大きに怒り、是全く楊鎬が臆病により、かゝる汚名を異國迄に傳ふる事、其罪一人に歸せりとて、明帝に奏して楊鎬が官を剝ぎ、萬世德を以て是に代しめ、再び軍勢を手配りし、日本人を追討せしむ。先李如梅を以て中道の惣大將と定め、麻貴、劉綎を左右の將と爲し、陳璘を水軍の大將となし、四路に分つて軍兵を押出す。然るに中路の大將李如梅は、島山を圍み居たりしが、楊鎬等指揮によつて心ならずも王城迄引取しが、大將軍邢玠以ての外怒り罵しり、其臆病を責る事甚しければ、李如梅口惜き事に思ひ、同志の大將をかたらひ、其勢六萬餘人、再び蔚山に押寄せ、先度の恥を雪んと、城の四面を鐵桶のごとく取圍み、無二無三に攻たりけるは、先いさましく見えたりけり。淸正是を見て大きに笑ひ、「明軍先の敗軍を恥て再び押寄しとこそ覺ゆれ。敵の備の立ざる中に、若者ども討つて出て追散せよ」と下知せられしほどに、いとゞさへ勇み誇りし日本勢、加藤淸兵衛、庄林隼人、齋藤、井上、飯田、森本を先として一人當千の勇士等、五千餘人の兵卒をしたがへ、城戸を開いて喚いて馳出で、五百挺の鐵炮を一同にどつと打かけたれば、黒烟地上に充ち、咫尺のほども

射させ、辛うじて百里一里六丁餘りも引きけるに、今は倭兵の追ふ者もなく、敗軍を集めて都城へこそは退きける。此時明軍の道路に捨たる馬武具鎧甲戈薙刀の類、路頭に充て足を入るべき空地もなし。日本人卒に得附たる心地して、馬に課せ車に積み、城中に取入りたり。

○清正吉川廣家與二馬印一

加藤主計頭清正、明の大軍を悉く追はらひ、今は蔚山地名の傍二三百里一里六丁が程は敵の蔭だに見えざれば、諸陣へ人を馳せ、後詰にむかひし諸大將を城中に請じ入れ、萬死を出て一生を得たりと恭しく謝せられければ、諸將も又籠城の困勞を慰め、互に賀の酒宴を初めける。此時清正吉川廣家の側に居寄り、「今日貴殿の勇壯を見て、殆ど感激に堪たり。實に行末頼もしく覺え候。若き大將の武勇を勵んには、馬武具の花やかに目立たるぞよく候へ。貴殿の馬印餘り小く、蜻蛉などの止りしやうにて遠目に見えがたきぞ。あたら勇將の榮なきに似て候。色よき印にかへ候へ」と申されければ、廣家答へて、「さん候、我も日來見苦しと思ひ居り候へども、我家の印にて候へば、ゆゑなくて仕替候はんも嗚呼がましと、其儘に止て候。あはれ清正の武勇に肖るため、貴殿の馬簾を我に賜らばや」と乞れけるに、清正大によろこび、手づから取出し廣

蔚山籠城祥瑞の図

長曾我部元親手勢を引て遮りとゞめ、前後より切たつれば、討るゝ者其數を知らず。さん〳〵に成て落行程に、薄氷したる川の上を、我先に走りては踏抜て水底に沈み、道もなき山を攀上つては深谷へ身を轉し、喚き叫ぶありさまは、刀山劍樹八寒大苦の地獄のさまも、かくやと思ふ計なり。加藤主計頭清正は、蔚山（地名）の城上より此戰を見居たりしが、指ざして申されけるは、「あの中國勢の中に二つ引輛の馬印さしたる武者こそ、あはれ功の者かな。誰やらん名を聞や」と、人を走て問せけるに、吉川藏人廣家と申す。清正、「あな頼もしき若物かな」と、稱讃して有ける所に、東南の方より一叢の黒雲たなびき來り、見るが内に城の上に蔽ひたり。兵士等怪み能々見れば、黒雲にあらで、數萬の鵜の羽を竝べて飛運りしが、島山（地名）の方の河中に入て行方なく失せたりける。清正諸軍をかへり見て、「我朝鮮に在る事既に七年、未だ此國に鵜の鳥の有る事を見ず。是は日本天照大神、八幡大神の御加護とこそ覺ゆるぞ。いざ城門を開き、引行く明軍を追討し、神國の手竝を異國人に知らせや」と、自身眞先に馬を駈出しければ、誰かしばしもためらふべき、城兵すべて一萬人、城戸を開いて追たりける。後巻に向ひし日本の諸將、我劣らじと手勢を引具し、清正と諸共に迯るを追て斬る程に、斬取る首五千餘級、討捨たる者は其數を知るべからず。明將吳惟忠（人名）、茅國器（人名）はかへし合せ〳〵、射手を備へてさん〳〵に

西、黒田、長曾我部、蜂須賀、島津、鍋島等の惣勢、八方より突入り、巳の字十文字に切捲れば、陣脚動きし明の大軍、散々に討なされ、右往左往に迯行程に、呉惟忠人名、茅國器人名命を捨てて防ぎ戰ひ、射手の兵士六百餘人、小高き丘に引上て、雨の如くに射させければ、さしもに勇みし日本勢、少ししらみて見合す所に、山上に備へし漢南地名人、明軍の退き去と聞て、「今は叶ふまじ」と云ふ程こそあれ、十萬に餘る大軍の備を亂し、どうと崩れて迯げたりける。毛利の勢は漢南地名人が陣せし山の麓に屯せしが、「すは此敵をも斬倒せよ」と、彼二つ引輛の馬印をさしたる大將一番に討てかゝり、前に近寄る漢南地名人を十人計切伏けるに、漢南地名人の陣中より、手覺ある武者と見えて、眼丸く、口方に飽まで髭生ひたる男の、黒き馬に跨り、兩の手に劒を震ひ、電光のごとく飛來るを、かの二つ引輛の馬印さしたる大將、鎗をしごきて向ひ戰ひ、一突にせんと突出す鎗の穂先に、兩刀を結んで切はらひ、つと馳寄て眞向より切んとす。此方の大將大きに怒り、鎗をからりと捨てしと見えしが、玉散る計の大太刀拔手も見せず、漢南地名人が右手の腕を討落し、餘る切さき鞍の前輪に切附たり。何かは以てたまるべき、馬よりどうと落たるを、郎等馳寄り首を取たり。毛利秀元是を見て、「あれ討すな、續けよ」と呼はる程に、一手の惣勢潮の如く、餘さじと切まくれば、漢南地名人敢て先へ進むものなく、南をさして引行くを、

の寄手より一聲の西洋炮を放つ、其音山川を震動し。冷まじき事言計なし。城兵今は明兵の巻寄るならんと、片唾を呑で待つ所に、其後寂として人馬の音を聞ず。是によつて城中彌疑ひ、さま〲に評議しけるが、「是は明兵我國の援兵に驚き、圍を解て引退くものならん。斥候を出して伺へよ」といふ所に、俄に鬨の聲大に發り、火の光は見えねども、敵兵城近く寄しと見えて、鐵炮の音透間なく響渡れば、城中又防兵の手配し、今や寄すると待けれども、兎角して寄來らず、或は西洋炮、或は鐵炮、或は鬨を發し、夜もすがら城兵をなやましける。是は明將吳惟忠（人名）、茅國器（人名）等が計策にて、城兵の追來るを恐れ、僞つて押寄する體にあやなし、西洋炮鐵炮の響に紛れ、次第〱に引取せんと巧みける。此時毛利宰相秀元は、蔚山（地名）より北の方なる高き山に取登り、明兵をはるかに見下し、陣を取てためらひしが、寄手の陣中以ての外に騷ぎ亂れ、裏崩して引取る體に見ければ、「すはや突崩して高名にせよや」といふ程こそあれ、惣勢凡て一萬餘人、どつと喚いて眞一文字に落しかけたり。其中に蜻蛉の如くなる二つ引輌の馬印さしたる若大將、眞先がけに馬を明軍の中へ馳入れ、あたるものを幸に前後に突伏せ、右往左往に薙倒し、忽ち一道の血路を開き、猛威を震うて戰ふ有樣、鬼神の如く見えたりけり。吳惟忠（人名）茅國器（人名）の兩將、味方の勢を引せんと、士卒に下知し喚き叫んで揉合ほどに、後巻に向ひたる小

事頻なりければ、諸方の軍將申合せ、蔚山後詰の爲として順天よりは小西攝津守行長、八千餘人を引率し、船路を經て押向へば、毛利秀元、金吾中納言秀秋、黒田長政等、其勢三萬餘人、長曾我部元親、蜂須賀家政等、四國の軍兵二萬五千餘人、その外島津、鍋島、久留米等、九國の勢四萬餘、蔚山の邊山々里々に陣をつらね、家々の旗風にひるがへり、雲霞のごとく卷き寄せけるは、則ち正月朔日なり。大明の諸大將是を見て、顏色を失ひ舌をふるはし、大將楊鎬、解生が輩相議して、援兵の多勢後を取切り、城兵と揉合せて戰ひなば、頗る味方の難儀なるべし、其上寒氣烈しく、士卒皆勞れたり、今宵夜に紛れ惣軍圍を解て、一度王城に軍兵を纒め、重て計策を定め押寄すべしとて、早落支度に及びける。此時蔚山の城中には、日本の後詰の勢追々に近附けると聞えしほどに、上下の將卒勇み悦び、あはれ後卷の旗を見ば切て出で、明兵を斬崩し、此頃の欝を散ぜんものと、喜ぶ事かぎりなし。時に其夜二更の頃、明の寄手押寄すると見えて、數萬の篝火空に輝き、鬨の聲も近く聞ゆるほどに、城中の兵士等「すはや明兵の夜討するぞ、矢頃に引寄せ打殺せ」とて、鐵炮の組手隍際にひしと並び、筒先を揃へ待かけたり。されども寄手又敢て押來らず、却て騷動もしづまりし體なるに、城中疑ひ、いかなる敵の手術にやと、彌防禦の備へを固め、息を詰てためらひしに、子の刻過る頃大手前

どつと打かけたり。淸正が士卒忽ち胴中を打貫かれ、又は半身を粉に碎かれ、死する者三十餘人、淸正下知して、「少しも動く事有る可らす。其儘に折敷けや」とて、鳴を靜めてためらひしに、山上の漢南名國勢、城中に靜りて音もせぬは、筒先下りて的らざるにやと、少し上に向て再び放つに、三の丸の芝原へ打込たり。淸正猶も下知して、「汝等少しも動かず息を詰よ、我も命は惜きぞ」と、堅く制して音もせず。漢南名國人猶筒先や下きとて、又上の方へ向けて放つ程に、此度は空を打通りて更に城には中らざりけるが、淸正此時大音に下知して、「今こそ騷で引取れや」とて、小踊して本丸へ入られければ、兵士等一同に噇と喚いて皆我先に引入たり。漢南人城中の騷動せる有樣を見て、是ぞよき圖に當りたりと、三たび四たび打出しけるに、鐵丸空中を飛ぶのみにて、一人も兵卒損ずる事なし。淸正が智術たくみなりとて、城中こぞつて稱歎せり。

○明兵解レ圍退二王城一

其年もいつしか暮果てて、日本の慶長三年、大明の萬曆廿六年正月朔日には成りにける。去年十二月中旬より釜山浦名の傍に籠城したる日本の諸大將へ、蔚山名地より急を告げ、援兵を乞ふ

盡き城を守る事能はじと思され候はば、惣軍一同に突て出で、一方を打破り、釜山浦（地名）に諸將と會し、再び戰ふとも何の仔細や候はん。明日の出陣こそいともむくつけき計に候はずや」と、理を盡して申されければ、淸正理に伏し大に感じ、「貴殿いまだ若年なりといへども、寔に末たのもしき勇士なるかな。我謹んで足下の諫めに隨ふべしとて、明る朝再び楊鎬（人名）が營に人を遣して言けるは、「淸正は是日本の神孫なり、何ぞ汝等ごとき狗に降參すべきや。僞つて爾を生捕にせん計策なりしが、汝が體を見るに、又謀計を構へて我軍を攻討ん志ありと見えたり。故に今日の出會は扨止たり、重ねて馬上の對面には、我必ず爾が髭首を取べきなり」と言せければ、楊鎬（人名）が昨日の歡びいたづらに成りて、大きに怒り憤り、「其義ならば惣軍押寄せ、飢渇せし日本人を踏潰せ」とて、躍り上つて下知しけれど、時嚴冬の節にして、軍卒手足凍て鬪ふ事心に任せず、「暫く暖氣の時を待て、一時に勝負を決し給へ」と、諸將同事に諫めければ、楊鎬（人名）もすべきやうなく、再び陣を守りける。此時しも漢南（國名）の蠻兵十餘萬、大明勢を助けんとて、蔚山（地名）より北の高山の頂に陣を取り、城中を目の下に見おろし控へたりしが、或夜淸正兵卒三百餘人引具し城中を見めぐりしに、二の丸と三の丸との間廣き平場に出で陣屋の指揮などして有けるを、山上の漢南（國名）人遠目に見附しにや、其間六七町も隔たる山の上より西洋炮を

後れを取ずといへども、城中食盡て萬卒悉く死せんとす。我是を憐む事尤深し、故に清正明の幕下に降んと欲す。願はくは將軍愛憐をたれて城中の軍民を殺す事なくんば、明日清正城を出て降參すべし」と告たりけり。楊鎬是を聞て歡ぶ事限りなし。則ち答て申けるは、「大明軍を蔚山に向へる事は、唯清正一人に依ての事なり。清正若降參に僞りなくば、何ぞ軍卒を害し、益なき罪を作らんや。明日城の西面廣野において我自ら降を受べし」とて使をかへし、諸將をかへり見て手を拍て大きに笑ひ、「清正士卒を助けんとて自縛して我陣に來る。我先清正を面縛け、忽ち亂れ起つて城中の軍民を鏖にし、古今ふしぎの大功を立べし」とて、喜ぶ事大方ならず。清正も亦大きに歡び、楊鎬を欺き得たり、明日城外にて對面せば、引抓んで刺殺さんと、夜の明るを待居たり。清正元來此事を祕して城中の兵士に語らずといへども、忽ち告る者有て、淺野幸長是を聞き大きに驚き、急ぎ清正の前に來て申けるは、「公明日城を出て明將楊鎬を刺て死せんとすと聞り。抑是何の心ぞや。太閤朝鮮大明を討給ひ、其功を全くすべきは足下と行長有るを以てなり。然るを輕々しく城を出て敵を計らんとし給へども、渠も亦いかなる手術を構へ、何やうの謀計をたくむやらんも知るべからず。公若恥辱を蒙り給はば、是則ち太閤の御恥辱、太閤の恥は日本の辱なり。豈に足下の身を輕きものとおぼし候歟。今兵粮

ば、一時に成功を立べし」と云ふ。楊鎬人名欽んで是に同じ、即時に諸將と申合せ、攻口を引退き、陣營をつらねて、遠卷して水の手を斷切り、食攻にこそしたりけり。

○淺野左京太夫至言說二淸正一

此時蔚山地名の城中には米粟既に盡き、いかゞはせんと議したりけるに、寄手又水の手を斷て渇する事堪がたく、密に堀の水を汲で咽をうるほすといへども、堀の中には數日經たる死骸の多く沈みて、水は血の色に變じ、惡臭忍ぶ可らざれ共、せめては是なくばいかゞせん、しかのみならず粮も盡果て、馬を割き牛を殺し、爭ひて是を喰ひ、夜は城門を忍び出で、明軍の死倒れたる腰を探り、纔に燒米牛の炙など拾ひては、千金の珠を得し心地して、暫く飢をしのぐといへども、いつしか舊の飢渇に苦しみ、中々堪忍ぶべき事にはあらず。大將淸正此有樣を見て思慮せられけるは、諸方の味方いまだ後卷の勢を出さず、かくて日を經る程ならば、士卒は元より我々も餓死すべし、武士の戰場に屍を肆すは常の事なり、何ぞ城中に坐して飢死ぬべき、敵の大將を欺き寄せ、刺ちがへて死せんこそ快かるべしとて、家の子鵤平次、古橋平介を密に招き、大明の軍將楊鎬人名が陣へ遣して云せけるは、「淸正此城に楯籠り、數度の合戰一度も

加藤清正蔚山の城に入図

べし、城中に在る加藤氏は淸正が臣下なるとや。夫をさへ攻兼たりしに、嘸や此淸正が手並の程推量られて恐ろし」とて、誰か止め支へんとする者なく、息をつめて見居たるに、淸正は四方をにらまへ、しづ〳〵と城に入けるは、誠に猛く見えたりけり。城中の諸士勇み悦び、淸正入城のうへは百萬の明兵も恐るるに足らずと、勇氣日頃に百倍せり。されども城中兵粮次第に乏しく、是をいかにせんと集りて議したりけれど、施すべき計策もなく、空しく日を暮しける。

扨も明人は淸正入城の後、口々に申す樣は、「眼前敵の大將小勢にて城に入るを、おめ〳〵と打ながめ、城中に力を添しは何事ぞや。淸正だに討殺しなば、城は攻ずとも落なんに、口惜き事かな」と罵り合ふほどに、「いざや力を盡して一攻寄せて試みよ」とて、四面より同時に押寄せ、塀に附て上らんとするさまは、蟻の集りうごめくに似たり。此時城中よりすき間なく大木巨石を投かけ、矢を放ち鐵炮を飛し、寄手計策をまうけ攻のぼれば、城中又楯を替て是を防ぎ、凡二十餘日が內、寄手一度も利を得たる事なく、時として死亡の者なきはあらず、さしもの大軍攻あぐみ、力勢れて見えにけり。爰に明將楊鎬人名が部下の將に鄭景岡人名といふ者あり。楊鎬人名に告て申けるは、「此城力を以て攻んには味方の兵士を損ずるのみにて、全き功は有べからず。城中二萬に餘る百姓あり、兵粮の貯へ極めて多からじ。味方の諸軍遠く圍み、兵粮の盡るを待

繪本太閤記　七篇卷之九

○加藤清正入㆓蔚山城㆒

加藤主計頭清正は、此時西生浦（地名）に城を築き、又機張（地名）に到つて陣營を連ね、爰に暫く滯留して有けるに、明の大軍蔚山（地名）を取かこみ、淺野幸長、太田飛彈守、宍戸備前守等籠城して防ぎ戰ふよし、追々告來りければ、清正郎等を集め申されけるは、「我日本を出るとき、淺野彈正我を招きて、愚息幸長若年にして血氣のみに早れり、能下知して不忠の働きせざらんやう賴むよし、くれ〴〵とあつらへぬ。其言今猶耳に殘れり。蔚山（地名）落城し淺野幸長討死せば、我再び日本に歸りて彈正に面を對しがたし。早く蔚山（地名）の城に入りて生死を共にすべし」とて、其勢纔に五百餘人、十餘艘の船に取乘り、蔚山（地名）の麓へ漕行たり。其日清正が出立には、赤革縅の胴丸の甲を著し、兜鍪冑に銀を以て蛇の目の紋を打たるを猪首に著なし、青貝柄の長刀小脇にかい込み、船の舳に南無妙法連華經の大旗を立て、其下に仁王立に成て兵卒を下知せられけるは、威風あたりを拂ひ、鬼神の如くに見えにけり。明の軍兵此旗を見て、「すはや鬼將軍とは是なる

繪本太閤記 七篇第九之卷 目錄

加藤清正入蔚山城
淺野左京太夫至言說清正
明兵解圍退王城
清正吉川廣家與馬印

押合ひ突合ひ迯行を、井上大九郎三百餘人の逞兵を引具し、城門を開き逆落しに突立れば、何かは以て堪るべき、人なだれをなして崩れ行く、大九郎長追は無用なりとて、手早く城中へ引入たり。此戰に明兵討るる者八百餘人、寔に不思議の高名なり。し、日本人の手並こそ恐ろしけれとて、

先下りに打立れば、元來手埀の射手なれば、空丸の一つもあらばこそ、彌が上に打倒され、終に一足も登る事能ず、軍をまとめて引退き、再び本陣に會して合戰の評議を成す。時に軍將麻貴（人名）進み出て、「大明の兵爰に來て後一度もはか〴〵しき勝利を取らず。此故に寄手大軍とはいへども退屈して勇氣たゆみたり。我今大軍を率て島山（地名）の城を乘落し、士卒の勇を勵まし、直に其勢を拔せず蔚山（地名）へ討てかゝらば、恐らくは功を立べし」諸將みな是に同じ、麻貴（人名）を大將とし茅國器（人名）を副將と爲し、其勢都て四萬餘人、島山（地名）に押寄せ、かづきつれて攻上る。城將井上大九郎少しも驚ず、鳴をしづめて寄手の大軍を思ふ圖へ引寄せ、かけならべたる鐵炮の筒を揃へ、雨のごとく打かくれば、明兵矢庭に二百人計算を亂して擊倒さる。麻貴（人名）是を見て大きに怒り、「拙き味方の有樣かな、持楯を被き矢先を防ぎ、無二無三に押登れ」とて金鼓を打て勵す程に、先手に進し明兵、足を立直し楯を衝立て、えい〳〵聲を出して攀登るに、元來嶮岨の要害なれば、道狹く屈曲して容易く城際に到り難く、喚きつれて半腹に上る時、城中より大木大石を轉ばし落す事霰の降るに異ならず。明兵再び是に打れ、倒れ死する者數百人、上を下へと騷ぐ所へ、城中より鐵炮の手埀に命じ、ならひ打に打落す程こそあれ、武具の色爽かに見ゆる武者と見れば、遠近の嫌ひなく、ばらり〳〵と打けるにぞ、あなおびたゞ

○島山合戰

爰に蔚山の北三町計に島山と云所あり、此地巖石嶮岨ち、登る道羊腸にして屈竟の要害なり。此山上に砦を構へ、加藤清正の家臣井上大九郎、毛利秀元の士卒を併せ、蔚山と同時に籠りて掎角の扶をなす。此島山の麓に大河流れめぐり、蔚山との間を隔つ。明の軍將李芳春解生二人、三千餘騎の軍卒を從へ、此大河に船を浮め、蔚山島山の中に在る民家を悉く燒立て、その烟に紛れて蔚山を攻落さんと方々に火をさしけるを、島山の砦より是を眞下に見おろし、井上大九郎鐵炮の者二百餘人に命じ、大筒を竝べ下げ打にばら〳〵と放ちければ、大明の船ども的に成りて、船を打潰す事七八艘、死傷の者たちまち六百餘人、大將李芳春解生も既に溺死すべきを、士卒漸く船に助け乘せ、辛うじて本陣に迯げ歸りぬ。此時麻貴茅國器の兩大將は、五千餘人の逞兵を率し、李芳春解生等が船の覆りしを夢にも知らず、兼て申合せし計策なれば、民家の燃上るを相圖として、蔚山の搦手よりひし〳〵と攻寄せ、柵を引除け逆茂木を倒し、我先にと登り來る。此手を守る大將宍戸備前守軍事に馴たる勇士なれば、明兵の民家を燒ぞと見るより、是も鐵炮の武者五百餘人を塀際にひしとならべ、筒

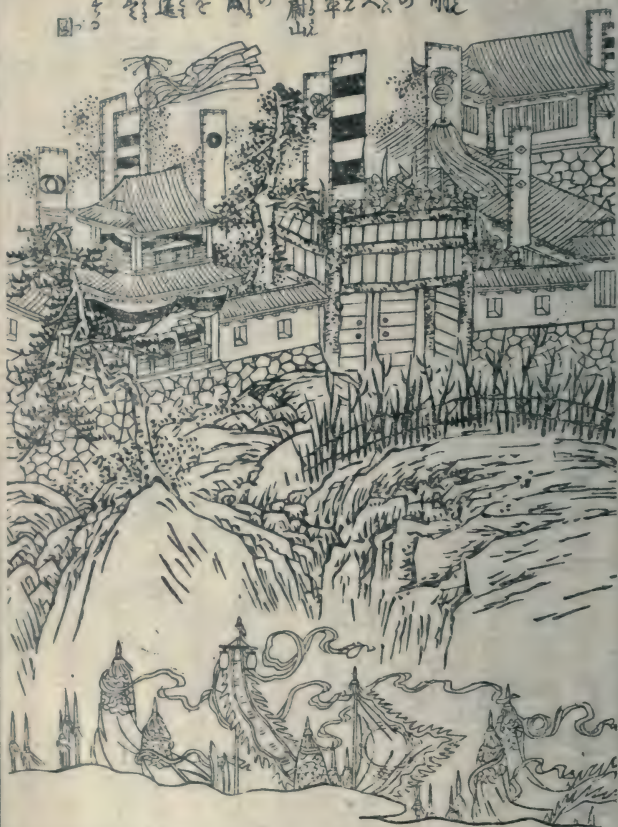
時十二月の嚴寒を犯し、蔚山（地）の纔なる、小城を十重二十重に遠巻し、水も漏じと圍みけり。是は清正が他に有る事を知らず、日本隨一の勇將鬼將軍が籠りし城なれば、手痛き合戰に及べしと、扨こそかく大軍を一手になし、蔚山（名）に向ひけり。李如梅、楊登山、擺賽（已上人名）等の大將、其中より三萬計の逞卒を率て、城際近く押寄せ、鬨の聲天地を動し、鐵炮火箭を放ちかけ、喚き叫んで攻上る。城中の兵士兼て覺悟の事なれども、此大軍に肝を冷し、「あなおびたゞしの軍兵や」と、色を失ふ者少なからず。加藤清兵衛勇智備へし者なれば、淺野幸長に向ひ申しけるは、「今敵新に寄來つて圍みの備合ざる内に、某一軍を率て撃て出で、手並の程を敵味方に見せ候はん。是一つには、明兵に我兵の寡きを侮られじ、二つには、身方の小勢勇氣を勵れ恐るゝ心を轉じ、城の守り固かるべし」幸長尤と是に同じ、我も共に討て出で一當あてて慰まんと兩人僅に六百餘人の鐵騎を備へ、大手の城門をさつと開き、一聲鬨を上るや否や、面もふらず明兵の正中へどつと一同に突入たり。其烈しき事憤雷の落下るが如く、明兵敢て目をとゞめて見る者なく、一支もさゝへずして麓の方へ崩れ行くを、追詰々々突立るに、討るゝ者數を知らず、明の惣軍是を見て八方より圍み討んとす。加藤、淺野かろ〴〵と引上げ、城に入て城戸を固め、鳥銃を放つ事雨の如し。明兵も亦急に攻る事能はず、四方を圍んで守り居たり。

○加藤清兵衛勇智碎明兵之軍威

偖も明の大軍蔚山地名に押寄るよし聞えければ、加藤清兵衛城中に下知して防禦の手配堅固に構へ、自ら淺野幸長と共に大手の持口を固め、宍戸備前守は搦手、左右の門は毛利秀元の兵を以て守らせ、太田飛彈守は城中の遊軍に備へ、弱き方を助けしむ。かくの如く手分こと〴〵く備りしに、只缺る所の物は兵粮なり。其上清正常に仁惠深く、朝鮮の人民をも敢て猥りに殺す事なく、百姓等皆懷き隨ひ、我朝鮮の苛き政事に苦まんより、鬼將軍の幕下に民たらんは却て身を安んずるに便よしとて、聞つたへ〳〵、諸方の百姓多く此蔚州名に集りて、耕をいとなみ交易を事として、此時城下の人民二萬餘人に及べり。然るに大明の軍兵攻寄ると聞き、百姓ども大きに驚き、取物も取敢ず、皆城中へ逃入たり。抑大明大軍を起して爰に到るは、日本の寇を退け、朝鮮を安んぜんが爲なり、然るを朝鮮の民として、却て大明の寄るを恐れ、國の寇なる清正を慕ひ、城中に逃籠りて死を共にせんと覺悟しけるは、實に清正の仁德にあらずして何ならんや。かくのごとく用なき百姓二萬餘人城中に入ける程に、彌粮米乏しく成り、日本人の患只此一事にかゝれり。去程に明の大將軍邢玠人名は王城に屯し、諸の大將等十餘萬の大軍、

刃の鎗を馬上に打振り、明兵の追來る中へ突入て、近寄る者を鎗の柄にて叩き伏せ、或は中天に貫き上げ、勇に任せて惡戰す。明の部將に安順仁名人、栗得商名人と云ふ者是を見て、戈を廻して左右より討かゝる。龜田事ともせず、鎗をひねつて向ふと見えしが、一突に栗得商名人を馬より下に突落し、勢に乘じて殺到すれば、安順仁名人ふるひ恐れ、馬を打て迯走る。此時はや蔚山地名の城に程近く、戰ひながら引けるを、城中より加藤清兵衛はるかに見て、「あれ人々見給へ、日本旗のひらめき漂ふは軍するとこそ覺ゆれ。旗の印は淺野太田が紋とみゆるぞ、討て出て助くべし」とて、小代下總、佐々平左衞門、齋藤立本等五百餘人、逞兵を引率し、城戸を開いて揉にもんで馳たりける。淺野太田が輩は、此時はや軍兵悉く勞れ、今は諸とも討死と思ひ定めて戰ふ所に、蔚山地名の援兵五百餘人喚いてかゝり、群る明兵を三五段に打破つて、勇を震うて戰へば、明兵大軍とはいへども數剋の戰に力勞れ、蔚山地名の新手に軍卒多く討れ、今は是までぞと軍をまとめ引たりける。淺野太田の兩將大きに歡び、打つれて蔚山地名の城に入りたり。此時宍戸備前守は明軍に隔てられ、淺野等と共に蔚山地名に入る事能はず、遙に間道を經て、漸くに是も城に籠りける。

ら旗を押立て、備を進めて馳出せば、宍戸、太田も淺野を討せては悪かりなんと、同じく備を繰り出し、梁山地の方へ押行きける。此時明兵も亦日本勢に當らんとて、此道へ押來り、兩軍途中にて行合たり。淺野幸長是を見て暫しもこらへず、どつと喚いて突立れば、明兵日本勢の小勢なるを侮り、八方より取廻し、一人も餘さじと隊を亂して斬てかゝるを、幸長思ひ設けし事なれば、自ら鎗を引しごき、近寄る明兵七八人またゝく内に突倒す。是に氣を得て一手の兵卒、勇をふるうて戰ふにぞ、明人案に相違して、旗色四途路に見えけるを、宍戸、太田の兩勢、「時分はよし」といふまゝに、鯨波一聲喚くと見えしが、群る明兵の中へ面もふらず切て入り、前後に突き左右に支へ、千變萬化して戰ふにぞ、淺野が軍兵是に力を得、もみ合せく、五七度計り戰ひけるが、敵を討つ事數を知らず。味方は討死少しと雖も、小勢といひ薄手深手の傷く者多ければ、「今は是迄なり、引取べし」と申合せ、且戰ひ且退く。明兵元來大軍なれば、討死手負も更にいとはず、新手を入替へ、附したうてぞ戰ひける。淺野幸長は爰ぞ一世の大事なりと、引かへしては大軍を追まくり、退きては取てかへし、生死を知らず戰ひけるが、此時數ヶ所の薄手をおひ、朱に成て立れけるを、家臣龜田大隅守、幸長が馬の前に來り、「よしなき平場の戰に御命を落し給はんは口惜うこそ候へ。某後殿仕らん、引せ給へ」といひ捨て、大

明の大軍蔚山の城を遠望する図

王城に壇を築き、邢玠名壇上に登り、香を焚て天地を祭り、諸大將と共に血をすゝつて盟約をなし、直に軍を進めて慶州名さして發向せり。此時日本の諸將は、大明の大軍蔚山名を攻ん爲め、慶尙道八道の内より押來ると聞えければ、淺野左京大夫幸長、毛利の家臣宍戸備前守、太田飛彈守三人、手勢を率て蔚山名の城に入りて戰を助んとて、彥陽名まで出けるが、先敵の有様を伺はんとて、物馴たる斥候六人を行先の路に出して見せしめけるに、はや大明の大將吳惟忠名、高策名數萬の軍兵を引率し、梁山名の南に出張し、蔚山名と釜山浦名の通路を取切んとしけるに、彼幸長等が斥候を見咎め、「日本の忍の者よ、逼すまじ」といふ程こそあれ、明の兵卒蟻のごとく集りて、六人の斥候を悉く打殺しぬ。淺野幸長大きにいかり、「我今斥候の兵多く殺され、知らず顏して蔚山名の城に入らば、後の嘲りをいかにせん。先打向うて此敵にあたり、花々しき一戰をなすべし」と、手勢を下知し打立んとす。宍戸太田是を止め、「貴殿の詞まことに武士の本意なりといへども、明兵元來大軍なるべし。我々小勢を以て討かゝらんは、卵を以て大石に投るが如し。いかでかよく當り得んや。只すみやかに蔚山名に入りて城を全く守るべし」と諫めけれど、幸長今年二十二歲、血氣盛んに勇を好める壯士なれば、頭をふつて更に兩人が諫を聞かず、「假令屍を戰場に曝すとも、敵を見ずして逃たりと云れんも口惜し」とて、自

浦地名迄退きしが、日本勢の討死四千餘人、疵を蒙り火に焚れたる手負は其數を知るべからず。李舜臣人名兵を用ふる事孫呉が術を得たりとて、其軍威大に震ひければ、日本人猥りに戰を仕出し、再び敗を取りては惡かりなんと、堅く水陣を護りて、空しく日かずを過しける。

○明大將邢玠押二寄蔚山一

此時加藤主計頭淸正は、蔚山地名に在陣せしが、士卒に命じて此所に城を作らしめ、家臣加藤淸兵衛を城守と爲し、其身は西生浦地名に至りて又爰に城を造作し、長く止るの用意を成せり。然るに其年十一月、明の大將軍邢玠人名、は數十萬の軍兵を引率し、名にしおふ明國朝鮮の界なる鴨綠江大河の名を打渡り、同月廿九日、朝鮮の王城に著たりける。李昖王名闕外に出て是を迎へ、殿中に請じさま〴〵と饗應す。時に邢玠人名下知を傳へて和寇を討の大將を手分し、不日に軍勢を慶尚道八道の内へ押出さんとす。先惣勢を三隊と爲し、左は李如梅人名を大將として盧得功・董正誼・茅國器・陳演・陳大綱已上人名等是に屬す。右は李芳春、解生已上人名を大將とし、牛伯英、方時、新鄭、戡盧繼、陳愚聞已上人名等是に屬す。中央は邢玠人名みづから大將として、高策、祖承訓・頗貴・李寧・李化・進忠・吳惟忠已上人名等是に屬す。其外朝鮮の軍卒を併て其勢都合十四萬餘人、

へなく海底に打入つたり。さしもの脇坂進む事能はず、船をとゞめて猶豫けるに、かの生ひ繁りたる葭の中より、日本の兵船舳先を碎かれ艫を破られ、惣軍血まみれに成りて命から〴〵迯出るを、朝鮮の軍兵迯すまじと鬨を作り、斬立突立する程に、死傷の者數を知らず。あはや日本の諸勢一人も生歸る者はあらじと見る所に、一手の日本船十艘計り、釜山浦（地名）の方より眞一文字に馳來り、勝ほこりたる朝鮮勢の正中へ面もふらず漕入りて、右に突き左に衝き、難なく日本の兵船を殘りなく退かしめ、追來る朝鮮船を只一手に食ひとゞめ、命をかぎりに戰ひし其ありさま、鬼神なんどの日本勢を助るにやと、兩軍互に驚きけり。是は肥前名護屋の領主波多野三河守と云ふ者なり。先度朝鮮征伐の砌臆病のふるまひ有しとて、大友義統等と共に太閤の御不興蒙り、領地なども召し放されて黒田長政が手に屬し居たりしが、あはれ今度の朝鮮渡海には、討死して家の面目を雪んものと、兼て覺悟して有りけるに、今日日本勢李舜臣（人名）が軍略に透し出され、大軍悉く討るべかりしに、命を捨て血戰し、終に味方の兵船を救ひ出し、猶も退く心なく、敵に當りて戰ひしが、譜代の家臣七十餘人と諸共に、其身も爰に討死しけるは、勇々しかりける働なり。太閤此事を聞せ給ひ、波多野が子孫を召出され、新地千石を賜りて、父が高名を顯はし給ふ。されば日本の諸大將、波多野が救に漸と必死を遁れ、釜山

らざる日本勢、進むともなく追ふとも知らず、かの葭原に大半誘き入られたり。脇坂中務大夫は後陣に控へしが、遙に敵の有様土地の屈曲を臨み見て、「是なん敵軍に謀計を構へし所なるべし、備亂さず引取れや」と、斥候の小船に命じて先手々々へ下知しければ、元來船軍に馴れざる日本勢、此方が引けば彼方が進み、兎角の内に日本船、殘り少なく皆蘆葭の内へ入たりける。時に相圖と思しくて鳥銃の響七つ八つ鳴ぞと見えしが、四方八面生ひ繁りたる葭に火燃出て、折節西南の風烈しく、炎海上に焔々とたなびき、所々に鯨波おびたゞしく震ひ聞ゆる程に、日本人、「こは髯韓人めが計略に落しぞや。引よ退け」と下知すれ共、船の通ふべき路廣からず、況や網の目のごとく縱横に曲々て東西をさへ辨へず。こはいかにと驚くほどに、四方より炎いよ〳〵盛んに燃上り、黑烟水上に充て咫尺の中も見えわかず。其中より案内知つたる朝鮮人、「一人も生て返すな」と呼はつて、日本船に飛込み、片端より薙まはるに、日來の勇氣も出ばこそ。鈍き劍に斬倒され、死する者數を知らず。脇坂中務大夫是を見て、「さればこそ敵の謀計に落けるぞ。蘆の中へ突入て、味方の船を助けよ」と、兵船三十餘艘こぎならべ進む所に、朝鮮の大將李舜臣名右手の葭原より多くの兵船に大筒の火炮悉くかけ並べ、脇坂が船隊を目當にし、一同にどつと打放せば、其音は百雷千電の轟くごとく、日本の兵船二十艘、あ

き事有る可らず。早々軍勢を纏め引取べし」と申ける。浮田毛利を始め諸將集り評議有りしに、何樣一先此所を退き、李舜臣名が船軍をも打崩し、後の患なき計策をなし、再び深く進み入らんに何の難き事是有らんと、爰に相議一決して、一將々々軍を纏め、要害の地へ退きける。先清正は蔚山名に屯を構へ、行長は順天名に陣し、其外の諸將尙州・梁山・大丘・蜜陽・金海・東萊・泗州・已上地名のあひだ數百里に連綿と陣を布き、城を構へ砦を築き、久しく止る用意をなす。去程に朝鮮の水軍大將軍李舜臣名は、諸方の集り勢一萬計を引率し、艦をめぐらして日本船の往來を遮り、頗る軍威をふるひける。日本の諸將、李舜臣名かくて有ん程に海路の通行心にまかせず、いでや打向つて切崩さんと、脇坂中務大夫、相良宮内少輔、毛利壹岐守、秋月三郎、中川修理大夫なんど、其勢都て二萬餘人、大船四百餘艘に取乘り、碧波亭慶尚道の海邊に有る亭の名なりの下にて李舜臣名が船手の勢に出合ひ、兩軍互に鬨を作り、追つかへしつ戰ひける。李舜臣名は朝鮮にならびなき智勇の大將なれば、士卒皆軍令を守り、進退する事只手足を動すに異ならず。大將の指揮によつて或は取廻し、或は開き或は引て、思ふ所におびき入れ、且戰ひ且退き、濟州名の磯際近く日本勢を引入たり。此所は蘘葭彌が上に繁り、其中に屈曲たる船路幾筋も有りて、西に向はんとすれば南へ出で、北を志せば東に漂ひ、實に冥々暗々たる惡所なるを、案内知

繪本太閤記　七篇卷之八

○李舜臣大破日本勢

明の萬曆二十五年、秋もはや九月の中旬に成りける時、日本勢朝鮮の王城近く押來るとて、軍民四方に迯惑ふ。是によつて大王李昖も亦王城を開き、西の方へ難を避べきやなんど、取々に議しける所に、明の將軍麻貴（人名）、副將軍李如梅（人名）等、數萬の逞兵を引率し京城に著陣し、關門の外に屯を構へ、日本勢寄來らば、嚴しく戰ひ追退けんと、晝夜怠りなく守衛しければ、京城の人民是に少しく力を得て、暫く騷動も鎭りける。日本勢も明軍多く王城に屯せると聞て、流石に急には押來らず、空しく其月も暮れ、十月のはじめになりし程に、釜山浦（地名）に滯城せし金吾中納言秀秋の使者來り告けるは、「朝鮮水軍の大將李舜臣（人名）、今古島（地名）にて軍船を備へ、日本より運送する兵糧を奪ひ、剰へ海上の往來を遮り止め、事既に難儀に及べり。諸將深く重地に入りて、時節寒氣に迫り、兵糧に事を缺ば、頗る味方敗軍の端なるべし。山谷未だ雪なき內に釜山浦（地名）の近邊迄軍をかへし、來春暖氣の時を待て再び計議を定め、王城に亂入するとも遲

絵本太閤記 七篇第八之巻 目録

李舜臣大破二日本勢一
明大將邢玠押二寄蔚山一
加藤清兵衛勇智碎二明兵之軍威一
島山合戰

殊に日も西に傾きぬれば、今日の合戰に敵の切所へ附慕ふは兵家の忌なり。を以て大軍を討に悉く法あり。兩人の勇士殿して、全義館地名迄引きたりける。軍をまとめて引取るべし」とて、討取る首六百二十餘級、生捕三十餘人、まことに勇々敷高名なり。

黒田長政川を渡して明兵を破る圖

手と引組み、兩馬が間に落たりしが、野村が力や勝りけん、首を取て差上けたり。此時明の大將李益喬人名多勢を率て馳來り、勇み進みし黒田が勢をもりかへし、新手を以て戰ふにぞ、黒田の勇臣後藤又兵衞、鐵炮の者三百人を下知して、群り來る明兵の中へ一時につるべかけて打放し、煙の下より森太兵衞、吉田壹岐、竹森淸左衞門、菅六之助、原彌左衞門、黒田三左衞門、栗山備後守等を首とし、黒田家に一人當千と聞えたる勇士ども、どつと喚いて駈立れば、明兵大軍なりといへども、日本の鋭き鎗先に當りがたく、籏の手も四途路に成り、又引色に成りけるを、日本勢彌勇み、或は切て兩段となし、或はおさへて首を取り、分取高名さま〴〵の中に、森太兵衞友信は、赤皮の具足に身をかため、三尺六寸の大刃の鎗青貝柄鉈を電光のごとく打振つて、雲霞のごとき敵中へ突入り、突伏せ薙倒し、宙に打上げ横樣に突崩し、金剛力士の荒たるごとく、傍若無人に戰へば、明兵も一世の勇をはげまし、解生人名李益喬人名楊登山人名牛伯英人名銘々軍卒を驅立て〳〵、入亂れて戰ひしは、おびたゞしくも云ん方こそなかりけり。かかる所へ後軍の大將毛利秀元、一萬計の同勢を率て押來り、黒田と入替て突まくれば、明軍今は叶ふまじとさん〴〵に成て引取しが、討るる者麻を亂せるごとく、辛うじて山間の切所へ引入ける。毛利、黒田の兩勢、備を崩して追行くを、栗山備後守、後藤又兵衞大きに制し、「小勢

長政の軍勢押來り、大將此體を見て、「栗山を討すな、後藤に續け。かゝれ〳〵」と呼つて、中白の大旗秋風に吹なびかせ、一文字に切てかゝれば、楊登山名人牛伯英名人叶ふまじと思ひ、蛛の子をちらす如く、本陣さして引取りける。其道に大河ありて一筋の橋をかけたり、楊登山名人牛伯英名人此橋を打渡り、解生名人が勢をさしまねき、力を合せて彼橋を切落し、川の向ひに鏃を揃へ、日本勢を待かけたり。黒田の一軍川岸に駈寄見れば、大川漲り流れて底の深淺を知らず、左右なく渡らん便を失ひ、打詠めイみけるに、長政が家臣船曳杢左衛門が一子守菊、生年十六歳、こざかしくも進み出て、「何なる大河なりとも渡すに渡らざる事や有る。殊更橋桁の見え候上は、何の仔細か候べき。續き給へ方々」とて、眞一文字に川へさつと打入りたり。是を見ていかでか暫しもためらふべき。我劣じと打入り駈入り、向うの岸に馳上れば、明兵はじめの程こそ矢をも放ちたれ、此勢に辟易し、四途路に成て引行を、長政の小姓に野村市右衛門十七歳、久野治右衛門十九歳、銘々三十騎計を引具し、眞先に進み突立れば、明軍の中より聲花に鎧たる武者一人、取て返して戰ふにぞ、能き敵逃すまじと久野治右衛門鎗を上けて馳向ひしが、何とかしけん馬よりどうと落たりけり。明兵戈をあげて刺んとす、野村市右衛門かの敵に飛かゝつて無

是を聞て、然ば馳向つて戰ふべしとて、軍勢を押出しけるに、此道路は渺々たる廣野にて、藪もなく森も見えず、只一筋の道なるが、地低くして切通しのごとく、向うなる行あたりに大山あり、其麓の道矩の手のごとく曲り、大なる横穴あり。其穴の内に明兵多く籠しと見えて、黑田が先手後藤、栗山が手の者何心なく通る所を、雨のごとく矢を射出し、日本勢重り倒れて死するもの五十餘人、是を見てはやり雄の若者、かけちらさんと進めども、矩の手なる向う、何ばかりの大軍か埋伏しぬらんと心疑ひ、一人も進み得ず。爰に井口與市といへる者の從者に山崎喜兵衞と云ふ剛の者あり、進み出て、「某參りて洞の中の勢を斥候して參るべし。暫く待せ給へや」といひ捨て走り行き、山の矩の手を廻ると見しが、拔より早く敵三人斬殺し、首二つ提げて味方を招く。是を見て諸軍いさみ立ち、一度にどつと切てかゝれば、明兵大きに肝を冷し、我先に奔走す。栗山、後藤遁すまじと備を亂して追打つ所に、解生（人名）が部下の將楊登山（人名）、牛伯英（人名）の兩人、後藤、栗山が勢を追取卷き、餘すまじと攻擊たり。栗山、後藤是を見て、一聲鬨を作るや否や、「突崩せ」といふ程こそあれ、矢一筋も射させばこそ、無二無三に突かゝれば、明兵は小勢なりと侮りしに、散々に斬まくられ、討るる者數を知らず。されども敵は大軍、味方は小勢、長追して大かへしに逢ば思ひの外の不覺を取べし、後陣の至るを待合して、一當

我もくと馳集り、既に一萬餘人の軍勢を得、古今島名といへる小島に營をつらね、漸く軍威を震ひける。

○黑田長政全義館戰ニ解生ニ

慶長二年九月朔日、惣軍南原地名に屯して王城に入べき計策を議したりけるに、惣大將毛利宰相秀元諸將に向ひ申されけるは、「朝鮮王去ぬる文祿の敗績に手懲し、王城近邊には砦を構へ、大明朝鮮の軍卒を籠らせ、都を護る事きびしき由を聞り。我自ら打廻りして其結構を伺ひ探らん」とて、黑田甲斐守長政を先陣に打せ、王城の此方百五十里六丁一里全義館地名まで出られける。黑田が先手は後藤又兵衛基次、栗山備後守利安二人、手勢を率て進しが、朝鮮人と見れば百姓男女のきらひなく、耳鼻を切て日本の軍威をしめす。されば朝鮮の軍民振ひ怖れ、皆王城へ迯行けり。是に依て朝鮮の都大きに騷ぎ亂れ、「今は早日本勢の寄せ來るぞ、何地へか迯行ん」と泣叫ぶ聲巷に充ち、上を下へと動亂せり。大明の將軍解生人名兼て王城を守る爲とて軍勢を調へ在陣してありければ、此事を聞き、捨置きなば日本勢忽ち都に亂入すべし、馳向つて戰はんにはしかじとて、軍勢を引率し、稷山地名、水源地名の切所に陣を取て敵の來るを待居たり。黑田長政

昖を責て申けるは、「日本より朝鮮へ兵を入るゝ事は、則ち大明の恥辱なり。此故に明帝臣等に命じ給ひ、數十萬の軍兵を以て援はせ給ふ。明軍是が爲に心力を盡し、霜露を犯し、命を塵芥のごとく輕んじ、日本勢を退けんと欲す。然るに李昖王名を始め此國の臣下、更に出て戰はんと云ふ者なく、只大明の將卒に戰を任せ、引籠りて安閑たるは、抑是何の謂ぞやと。君恥かしめらるゝ時は臣死すと云はずや。南原地名、全州地名の敗北は皆是李昖王名が誤りなり」李昖王名是を聞て恐れ驚き、急に朝鮮八道の軍兵を催促し、猶群臣を集めて和兵を退くべき謀略を議す。時に金命元人名、李恒福人名の兩臣進み出て申けるは、「此度の敗軍においては、只日本勢の剛勇のみにあらず。元均人名が人を嫉み計略を誤りしより事起れり。大王再び李舜臣人名を召して水軍大將軍と爲し、日本往來の船路を支へしめ給ひなば、兵粮運送等に苦しみ、おのづから退き去べし」と奏しけるに、李昖王名是を尤と同じ、李舜臣人名を再び三道水軍統制使官名となし、慶尙道八道の内へ遣しける。李舜臣人名命を領し、軍卒只一人を召具し、全羅道八道の内より慶尙道八道の内に出て、珍島島名のほとりにて元均人名が失ひし殘兵を集め、破れたる兵船を拾ひ取て是を修造し、軍勢纔に三百餘人、兵船十餘艘に取乘り、東の方閑山島島名を志してぞ下りけり。此時海上に船を漂はせ、又は山林に忍び隱れし朝鮮の軍卒、李舜臣人名が再び水軍の大將軍と成り東海に出と聞て、

しに、南原（地名）の楊元（人名）より援兵を乞ふ事頻りなれば、兼ての約束を違へじと、軍兵をとゝのへ南原（地名）へ向はんとしける所に、日本勢島津兵庫頭義弘、加藤左馬介嘉明等、其勢一萬五千餘騎、全州（地名）の城に押寄せ、鬨を作て攻立ける。陳愚衷（人名）大きに驚き、門戸を固め鐵炮を飛せ、晝夜防禦に苦しみける。かゝる所に南原（地名）既に落城して、李福男（人名）も討死せしと聞えしかば、城中に在ける軍民大きに騒ぎ驚き、資財雜具を取隱し、妻子を携へ逃出るを、大將陳愚衷（人名）さまざまに制し留れども、士民等更に耳にも聞入ず、上を下へと騒動せり。陳愚衷（人名）あまりの詮方なさに、偽つて大に怒り「汝等我下知を用ひず、心のまゝに去んとせば、悉く切殺すべし」とて、劍を引ぬき、逃行く百姓を一人捕へて斬殺しぬ。これを見て城中の士民一統に憤を發し「所詮助るべき命ならずば、爰を去て日本人の手に死せや」と、城中に鬨を作り、兵糧を貯へたる庫々に火をかけて燒立て、門を開いて逃散たり。是を見て島津、加藤の兩勢「すはや城中に返忠の者ありて、城に火をかけ城戸を開くぞ。進めや進め」と呼はつて、一文字に乘込めば、陳愚衷（人名）今はかなはじと周章ふためき、取物も取敢ず、都の方へ落行ける。これに依て全州（地名）の城も同日に陷り、島津、加藤の兩大將城に入て四門を固め、しばらく人馬を休めける。明の大將軍邢玠（人名）南原（地名）、全州（地名）の城落しと聞き、楊元（人名）、陳愚衷（人名）が罪を明帝へ奏し、亦朝鮮王李

こそあれ、屍は横りて丘のごとく、血はながれて江水に似たり。此時四方の門々よりは鍋島、黒田、淺野、峰須賀、藤堂、生駒、長曾我部、小西、加藤をはじめとし、我後れじと切入ほどに、明將楊元今は遁れ難しとや思ひけん、衣を脱で裸に成り、破れたる散笠を頭にいたゞき、賤しき下郎の形に似せて、辛うじて城戸を遁れ出で、海州さして落行ける。金孝義、李榮芳劉之鶴三人も、雜兵に紛れ東門より迯出しが、榮芳は長曾我部元親が手に討殺され、之鶴は長政の家來森與兵衞が生捕にぞしたりけり。金孝義一人は恐れをのゝき、水深き田の中へ身を沈め、浮草を集めて面の上を蔽ひ、辛き命を助りける。其外明將、朝鮮の武官李福男・任鉉・金敬老・李春元・鄭期遠なんどいへる大將、城中に在て討死し、討取る首三千餘級、生捕一千二百人、則ち人を釜山浦の中納言秀秋へ遣し、南原合戰勝利の趣つぶさに太閤へ言上に及びければ、太閤大きに感じたまひ、各褒賞の馬、太刀、感狀等を下し賜ひ、取譯小西行長が働拔群なりと、深く褒詞にあづかりけり。

○全州落城

此時に全州の城には陳愚衷二萬餘の軍民を集め、糧米武具の用意をなし、油斷なく守衞せ

は、城中の兵をおびき出さん元來の計策なり。彌持口を堅く守り、かまへて防禦怠りなく、固く籠城すべきなり」と、嚴しく下知を傳へけるは、たのもしくこそ見えにけり。

○南原落城

此時小西行長は、南原地名の城を遠巻し、五萬餘人の兵卒を方々に分ち遣し、數十里が間の稻禾共を苅取せ、其外柴薪の類まで多く取集め、日の暮るを待居たり。然るに南原地名の城中には、此程晝夜の分ちもなく、氣を張り力を盡し防ぎ戰ひしに、きのふより日本勢遠く退き、安閑たる有様なれば、大將楊元人名が下知も打忘れ、或は冑を枕にしてうまく寢入り、或は酒打飲て醉亂れ、防禦の備も打捨置きぬ。其夜の亥の刻、小西行長士卒に下知し、彼苅集めたる稻柴を手毎に荷はせ、城際近く押寄ると否や、我も〳〵と隍の内へ投おろすに、只見る中に十餘丈の隍を埋め、猶彌高く積る程に、今は城門と等しく、日本の諸大將軍士に下知して彼の稻の上に打上り、數千の松明一同に火を點じ、五百餘の鐵炮を城中へどつと打入れ、はや塀を越て切て入るにぞ、城中の將卒動顚する事大方ならず、誰か一人防ぎ戰はんといふ者なく、我先に門を開き迯出るを、日本の剛兵ども太刀を眞向にかざし、老少男女のきらひなく、あたる儘に切殺す程

を知らず。大明朝鮮の將卒震ひ恐れて塀際に寄る者なし、是此要害の陷りし所以なりとぞ。
去程に日本の惣軍城の四面を鐵桶の如く取圍み、新手を入替へ、息をも繼せず攻討つ事三日三夜、城中爰を最期と防ぎ戰へども、氣屈し力勞れ、殊に兼て賴み思ひつる雲峯地名、全州地名より援の兵も出來らず、士卒皆地に倒れて立つ事能はず。大將楊元人名、李福男人名元來遼東地名に在て北狄の虜を防ぎ、合戰に馴たる勇將なれば、城中を馬にて乘りめぐり、「只今防禦を怠りなば此城陷るのみならず、朝鮮悉く荒野となるぞ。今兩三日こらへなば、諸方の援兵集り來りて日本勢を追退け、全き大功を立べき間、氣をはげまして防げや」と呼りて、僕從の者に命じ食物を與へ酒を飲しめ、力を添て下知するにぞ、城中再び勢を直し、必死に成て防ぎける。小西行長城中の形勢を見て、浮田秀家に向ひ、「此城思ひの外に能こたへたり。力攻に爲すとも急に落べき體にあらず。計略を以て攻ずんば急に勝利は有る可らず」秀家尤と是に同じ、其計策を問ふに、小西秀家が耳に口を寄せ爾々と計を物語り、偖惣軍へ令を傳へ、楯を負ひ竹束を荷ひ、圍を解て二里六丁一里計引退き、遠卷して陣を取たり。城中の兵士是を見て、「さては日本勢數日の合戰に攻あぐみ、引退くと覺えたり。いざ此時に乘じて追討にせばや」と、いさむ者多しといへども、大將楊元人名大きに制して、「日本勢能戰になれ、駈引の圖を外さず。圍を解て退く

端の岸に小き的を立て、鐵にて作りたる火器の三尺計なるに藥を以て鉛の彈丸を込み、飛す事百にして百ながら的れり。島主時堯といふ者、此火器二箇を買得て其技を試るに、あたらずといへども又遠からず。此頃紀州根來の法師杉之坊といひし者、是を聞てはる〳〵彼島に來りて此火器を乞ひ、時堯と共に鍛冶に命じて多く作らせけれども、兎角蠻國の制には劣りて心にまかせず。其後金兵衛清定といふ鍛冶の工自ら蠻人に法を傳へて此器を作るに、始めて其精きに至り、蠻國の制に變る事なし。根來の杉之坊是を北條家に傳へ、武田家に渡り、終に天下の武器と成れり。然るに文祿四年、太閤大明朝鮮と和睦の節、宗義智を以て朝鮮王李昖に此鳥銃を賜ふ。朝鮮爰に始めて此器を作り、其技を學ぶ事を得たり。大明も亦其頃日本より傳へし事、彼國の書にものせたり。されば後度の朝鮮陣に至つては、兩國互に鐵炮ありて、此南原の城中よりも專ら鐵炮を打出して、防禦第一の具とは爲せり。然れども傳へ得ていまだ年を經ざれば、此術に手練の者といへども、日本の未熟の兵に劣れり。故に朝鮮人の放ち出す彈丸は的る事稀にして、日本勢より打出す鐵炮は一丸にして兩人を倒す。此城攻にも明人城外の民家を自焚せし土塀石垣の殘しを小楯に取り、鐵炮の射手を勝つて其陰より城中の者を選み打に打斃すに、空丸は更になく、死する城兵數

りと、人民亂れ走る程に、雲峯地名を守りたる權標人名、李元翼人名は、戰はざる先に聞怖して、城を棄て落行ける。日本勢元來沈惟敬人名が内通にて、明人の手配悉く知りたりければ、諸將相議して全州地名の陳愚衷人名を押へんとて、鬮を取て大將を定めけるに、島津義弘、加藤嘉明兩人に定り、一萬五千人の軍兵を率し、全州地名へ發向せり。さらば南原地名を攻潰せとて、浮田秀家、毛利秀元、加藤、小西其外の將士凡十萬人、八月廿三日、南原地名の城下に押寄せ、鯨波を作る事三度、山に響き谷に答へ、大地も震ふ計なり。早大筒小筒の鳥銃を打かけ、攻上らんとひしめく程に、城中もかねて覺悟はしたりけり、おとらず矢を射出し鐵炮を放ち、爰を先途と防ぎければ、此城元來要害堅固の嶮岨なれば、左右なく攻落すべうも見えず、只矢軍に日を暮しぬ。

先年太閤兵を朝鮮に入れ給ひし時迄は、彼國にも大明にも鐵炮といふものなし。吾日本には龜山院文永の頃、蒙古我國を伐し時、鐵炮の名はじめて見えたれども、今の鐵炮とは其制かはれりと見ゆ。中華にも宋の代に旋風・單梢・虎蹲などいへる火炮はあれど、今の鐵炮にはあらず。後奈良院天文十二年八月、大隅國種ケ島といふ地へ、西洋歐邏巴州の波爾杜瓦爾といふ國の船來り、日本に交易せん事を請ふ。其船に在りし蠻人どもの、戯に磯

崆峒山外生猶喜　巡遠城中死亦榮

淸正城中に入つて郭氏女趙宗道名人がいさぎよき死を哀み、屍を土中に埋み、標の樹を植ゑて、土民に命じて祭らしめ、軍を率てすゝまれける。

○日本勢攻南原城

日本海陸二手の大軍、數日を經て八月下旬、慶尙道八道の内忠淸道八道の内の境なる昂州名地にて等しく出合ひ、兩勢合して十餘萬人、一手に成て南原名地さして押行きける。去程に南原名地城を守る大將は、明の楊元名人李福男名人兩人なりしが、此地朝鮮國中第一の要害なれば、等閑にては叶ふまじとて、壘を高くし隍を深くなし、塀際に大小の鐵炮數百挺を押並べ、城門の外には柵逆茂木間なく引き、誠に堅固の籠城なり。しかのみならず外に援の勢なくては、戰ひの始終強からずとて、雲峯名地には權標名人、李元翼名人の兩將を置き、全州名地には陳愚衷名人に數萬騎の兵を領ぜしめて是を守らせ、南原名地の急あらば等しく來り救ふべき手筈を定め、日本勢寄來らば一戰に追崩さんと、片唾を吞で待かけたり。然るに閑山島名地の戰に、元均名人行長が爲に擒と成り、黃石山名地の城陷り、淸正が手に郭䞭名人父子討死し、日本勢海陸より進み、忠淸道八道の内に亂入せ

趙家遺妾と從に節に死する圖

人名聟の柳文虎人名と一同に大手の城門を開き、竹葦のごとく推並びたる日本勢の正中へ、面もふらず切て入り、七顚八倒して討廻れば、勇み進みし日本勢、此鋒先に切碎かれ、四方へばつとぞ退たりける。清正が勇臣木村又藏、井上大九郎、齋藤立本、莊林隼人等是を見て大きに怒り、惡き髯韃人めらがふるまひかな、日本の手並を見よと鎗を絞て向ふと見えしが、井上大九郎只一鎗に郭越人名を馬より下に突伏たり。城の矢倉には郭越人名が女則ち柳文虎人名が妻の郭氏人名父と夫と兄弟が生死をきはむる戰なれば、目もはなさず見居たるに、父の郭越人名が最期の有樣、目もくれて倒れて伏しけるが、夫の文虎人名は木村又藏と二三合打合ひしが、叶はずして迯行くを、又藏追懸け鎧の上帯摑んで宙に提げ、生捕にして退きける。郭氏女名これを見て、今は浮世に望なしと、櫓の上より數十丈の岸下に身を投じ、微塵に碎けて死したりける。其間に郭祥人名は齋藤に突留られ、郭厚人名は辛うじて迯失せけるに、惣軍城中へ亂れ入り、あたるを幸に切倒し、血は滿城に溢れける。郭越人名が部下の將趙宗道人名は、此時まで搦手より込入りし日本勢と火を散らして戰ひしに、前門既に破れ、大將悉く討死せりと見てければ、今は誰が爲にか罪を作らんと獨り言して、我妻子を引とらへ、心下を一刀にさし貫き、自も首を刎て死したりける。辭世の句あり、曰く、

繪本太閤記　七篇卷之七

○清正黃石山城斬二郭䟱一

爰に黃石山地名の城に楯籠りし朝鮮の大將、其名を郭䟱人名といへりける、義勇逞き者にて、部下の隊將趙宗道人名と倶に此山城に要害を構へ、日本勢押來らば、命かぎりに防ぎ戰んと、手ぐすね引て待かけたり。日本の先鋒加藤主計頭清正、手勢を率て黃石山地名下に押寄せ、只一揉に攻崩せやと、城の三方を稻麻のごとく取圍み、雨より繁く鳥銃を飛し、霰のごとく火箭を放ち、喚き叫んで攻たりける。城中にも兼て覺悟はしたりけり、少しも騷がず防ぎ戰ひけるに、城中の樹木矢倉の軒に火箭を射附られ、閣と一同に燃上れば、城中に在ける白士霖人名といふ者、兼ては武勇の譽高き者なりしが、日本勢の烈しきにや臆しけん、忽ち搦手の門を開き、都をさして落行けり。清正兼てかゝる事の有るべきを計り、三方を圍みて搦手を開き、遑兵を伏て伺はせけるに、案に違はず白士霖人名が落行たるに引違うて城中へ亂れ入り、火を放て切て廻れば、城兵鼎の湧ごとく、上を下へと騷動せり。大將郭䟱人名今は是迄なりと思ひ、其子郭祥人名、郭厚、

繪本太閤記　七篇第七之卷　目錄

清正黃石山城斬郭越
日本勢攻南原城
南原落城
全州落城
黑田長政全義館戰解生

軍兵一同に發向す。去ほどに加藤清正が至る道すぢの要害公山、金鳥、龍紀、富山（已上地名）等に城を築き、李元翼（人名）權慄（人名）が輩兵を分つて守らせけるに、日本勢到ると聞て其旗色を見る者なく、風に臨んて落失せ、支へ遮る者一人もなし。爰に郭再佑（人名）と云ふ朝鮮人、國家の難に死すべしと志を極め、火王山（地名）の城に楯籠り、柵を詰ひ逆茂木を引き、敵の寄するを待かけたり。清正一手の勢を率て城際に押寄せ、其形勢を仰ぎ見るに、切岸は屛風をたてたるごとく要害堅固なれば、清正味方をかへり見て「此城一息には陷るまじ、是程の小城一つに二日三日日を費さんは味方の大損なるべし。打捨て置て進むべし」とて、後軍へも其旨を傳へ、軍兵を引率し打立れける。

元均日本乃擒となる図

彼所さぐり巡るに、元來此所は小西行長、加藤嘉明兩人の兵士守り固めたる所なれば、兼てより落人を搦んと海邊に埋伏して伺ひければ、何かしばしも猶豫すべき、相圖の鳥銃一つ響かす程こそあれ、八方より松明ふり立叢々と集り來り、一人も逝さず悉く搦め捕たり。さしも水軍の軍帥とて威權有し元均人名も、雜兵の手に生捕れし、恥を日本にさらしけるは、拙なかりける次第なり。爰に閑山島地名に殘り止りし衰楔人名といふ者、日本勢の襲ひ來ると見てければ、士卒に下知し、火を放て陣營を燒立て、軍器兵粮を少し計船に積乘せ、日本勢の至らぬ先に悉く落行ければ、小西、浮田をはじめ日本の諸大將、無人界に入る如く閑山島地名を乘取り、軍威を遠近に輝しぬ。夫のみならず海上の往來自由を得たれば、海陸ともに進みて、南原地名を攻潰すべしとて、其手配りを定めけるは、一手は浮田秀家を惣大將とし、小西行長是が先鋒たり、島津、蜂須賀、長曾我部、生駒、加藤左馬介等を始めとし、其餘の軍兵五萬餘人是に隨ひ、海路より押向ふ。又一手は毛利秀元を惣大將とし、先鋒は加藤淸正、隨ふ軍將には鍋島、立花、黑田、淺野をはじめとし、中納言秀秋、其身は釜山浦地名の城番たれば、家臣山口玄蕃允、伊東雅樂介、南部無右衛門に一萬餘人を差添へ此手に隨ふ。是も其勢五萬餘人、慶州地名より密陽地名大丘地名を經て全義館地名に到らんとす。時に日本の慶長二年、大明の萬曆二十五年秋七月廿八日、兩路の

浪に漂ふ船も多し。とかくする間に早日本船間ぢかく押寄ると等しく、僅なる朝鮮の船どもを四方より押つゝみ、大小の鐵炮を雨のごとく打懸けく、炮煙の下より近々と漕寄せ、熊手にかけて敵船を引寄せ、飛入てはさんぐに切倒し或は摑んで海中に投入れ、喚き叫んで戰ふ程に、忽ち朝鮮人四百餘人斬殺され、哀むべし李億旗人名も海中に落入り、底の藻屑と成たりけり。元均人名此戰を見て色を失ひ、こは叶ふまじといふ程に、我先にと櫓を立かへ、閑山島地名へと引行けるを、日本勢こゝろぐに、「あれ遁すな、討取れ」とて、先を爭ひ追たりしは、免れ難くぞ見えにけり。

○日本勢自二海陸一向二南原一

日ははや西山に落て、時しも七月廿六日、する墨よりも猶くらき海の上を、元均人名さんぐに成りて漕行けるに、折節向う風強く吹て、船とも此所彼所へ亂れ漂ひ、只一つ所には聚らず。後はるかに日本勢の鬨の聲波の音につれて響きぬるぞ、臆病神にさそはれし朝鮮人、行先をもわきまへず、己がさまぐ漕行にぞ、元均人名が船只一艘閑山島地名へ行著ず、加德島地名にぞ漕寄たり。元均人名を始め船中の士卒共飢渴に苦しみ、岸に著くと等しく踊下り、先水を求めんと此所

れば、究竟の事よと欣び、要時羅（人名）といへる朝鮮の雜兵に金銀を多く與へ、金應瑞（人名）、權慄（人名）などの軍將に云せけるは、「此頃日本の兵十五萬計釜山浦（地名）へ漕附け、人數を倍して攻入べき計略のよし、慥に聞及びて候。朝鮮元來船軍に熟練せり、海上の要害に待受け、新に渡海せる日本勢を一當あてて打破らば、敵の英氣を碎くべし」と申けるに、權慄（人名）聞て大きに悅び、船手の大將元均（人名）に命じ、「日本船を押へ打崩すべし」と下知しけるに、元均（人名）元來戰を好ずといへ共、止むべき事にあらねば、部下の大將李億旗（人名）と倶に船手の勢三千餘人、五百餘艘の船に取乘り、釜山浦（地名）さして一文字に漕ぎ出しぬ。かゝる所に日本の軍將小西行長、浮田秀家をはじめとし、島津、加藤、蜂須賀、長曾我部が輩其勢五萬計り、數百艘の兵船をおしならべ、慶尙（八道の内）を右手に見て雲峯（地名）の方を志し、櫓足をそろへて漕たりけり。元均（人名）はるかに此體を見て心驚き、日本勢かばかり大軍にて有んとは知らざりけり、味方の小勢を以ていかでか是を支へ止ん、一度爰を退きて大勢を催し來り、勝負を一擧に定んと、船をかへして引退かんとす。李億旗（人名）是を見て大に怒り、「たとへ敵勢大軍なりとも、矢の一筋も射懸けずして迯かへる法やある。恥を思はん者共は我に續て押來れ」と大音に呼り敵船めがけえい〳〵聲して漕たりけり。此下知に勵され、續て押行く船もあり、元均（人名）が有樣をためらひて、進退ともに定らず、

瑞、李元翼有り、閑山島の傍船軍を領して權標、元均有り。是等は皆かの要害の地南原を援の手當なり。日本の諸將兵を分ちて是を押へ置き、南原を攻る者ならば、一時に大功を立て、朝鮮の人民をして手足の置所なからしむべし」と云せければ、行長大きに欽び、兼て南原を攻落さんと思ふ折なれば、卽ち諸將を集めて合戰の用意をなし、頓て大なる功を立て太閤の御感に預らんと、勇みすゝむ事大方ならず。

今年明の萬曆二十五年なり、沈惟敬獄中に在る事三年、同二十七年秋九月、罪極りて誅せらる。

此時朝鮮船手の惣大將元均は閑山島にありて、常に軍事を治めず、日夜酒色を專とし、更に憚る所なし。島中に一つの堂あり、堂の名を運籌と稱ず。是は前の水軍將軍李舜臣が營み造る所にして、諸將と共に此堂内に會し兵事を談論し、計策を商議したる所なり。然るに今の將軍元均は、此堂内に美女を置き、人の入來らん事を恐れて幾重ともなき籬を制へ、彼美女と共に晝夜酒に亂れ、遊樂のみに暮しければ、軍事の急有るといへども速に告る事能はず、一軍悉く恨みあなどり、「あな云甲斐なの將軍かな、日本勢一たび押來らば、戰はずして走ん事の笑止さよ」とて、爪はじきして譏りけり。小西行長かゝる元均がふるまひもほのかに聞てけ

時、沈惟敬は衣服財寶を馬に取課せ、釜山浦さして出來るに、端なくも出合たり。楊元先聲をかけ、「いかに沈惟敬何所へ走るや。抑大明日本和睦の事は今日いかゞ相成しや」惟敬楊元を見て忽ち面色土のごとく變じ、聲をふるはして答て曰く、「此事すべて不調ず、よつて我再び釜山浦に至り、和將清正、行長等に說んとす」楊元笑つて、「事既に爰に至り、何ぞ改め說ことをせんや。且明帝詔有り、都に歸りて勅命を承はれ」とて、軍兵を以て八方を取かこみ、終に都へ送り、邢玠より返忠の次第悉く奏聞しければ、沈惟敬が罪究り、石星と同じく牢獄に繫れける。

○小西行長破元均

沈惟敬楊元が爲に捕へられ、獄に下りし事を深く恨み、婁安國といふ家來に私に申含め、小西行長に告しめけるは、「南原の城は楊元及び李福男が守る所にして、城中の兵士甚だ少し。諸手の軍兵等しく攻なば、南原の城は陷るべし、南原の地形たる、東に雲峯、鳥嶺の嶮岨あり、南に三浪江の深き流あり、其道金海竹島に通じ、朝鮮第一の要害なり。右の方閑山島に邢玠が軍兵三萬餘人是を守る。全州に陳愚衷有り、雲峯に金應

見たりしより、獲て糺明せんと思ひけれど、渠若日本に走去て大明の虚實を洩しなんには、勇しき味方の難儀ならんとて、先沈惟敬（人名）に懇なる書を送りて、渠が心を安んぜんとす。されど共沈惟敬（人名）邪智深き者なれば、日來我とむつまじからざる邢玠（人名）なるに、今却て親しき文書を我に送るは、必ず深き計こそあんなれとて、釜山浦（地名）に走り、日本へ降參せんと謀りけれども、其道路は大明朝鮮の軍兵多く陣しける程に、兎やせん角やせんと惑ひ居けるに、邢玠（人名）又惟敬（人名）が色を推察し、楊元・吳惟忠・麻貴・元均（以上人名）等に示し合せ、沈惟敬（人名）が遁れ去べき道筋を防ぎ守らしむ。沈惟敬（人名）此時猶二百餘人の兵卒あれば、夜に紛れて遁もやせんと、腹心の兵士二百餘人をえらび、惟敬（人名）が手に隨へる兵卒とむりやりに取替けるに、沈惟敬（人名）心中に大きに恨み、此憤をはらさんものと、我郎等妻安國（人名）張龍（人名）を釜山浦（地名）に遣し、小西行長に降參せんと乞ける程に、行長則是を許し、柳川豐前守に五百人の兵士を添へ、沈惟敬（人名）が來る道に出て是を迎へしむ。然るを邢玠（人名）が兼て手配りしたる斥候の者早くも見咎め、軍兵を出し、遮り支へて進ましめず。其間に惟敬（人名）が郎等張龍（人名）間道より來つて、「邢玠（人名）が毒手を遁れ給へ」と申ければ、惟敬（人名）取物も取敢ず、既に打立んとしけるを、兼て邢玠（人名）より取替たる兵士等此よしを楊元（人名）に告ければ、楊元（人名）取逃しては叶ふまじとて、馬を飛せて宜寧（地名）より街道に出る

は、石星（人）と罪を同じうすべし」と責給ふ。然るに日本太閤秀吉公よりも奉書到りて、約に違ふの旨を怒り給へば、沈惟敬（人名）殆ど其身の罪究り、進退するに道を失ひ、恐れ驚き居たりしが、餘りの詮方なさに加藤清正へ書を送りて申けるは、「大明の大將軍刑玠（人名）といふ者七十餘萬の兵を引て朝鮮を救んとす、日本の小勢いかでか是に敵し得んや、速に兵をまとめ日本へ歸り候はん事尤たるべし、」吾日本の爲に此事を告す」と書て、松雲と云る朝鮮の僧に持せ、西生浦（地名）の陣へ遣しける。清正是を見て大に怒り、則ち答る書に曰く、「明兵大軍にて爰に來る、是我願ふ所なり。朝鮮の軍兵懦弱にして日本の兵に當る事能ず、我常に是を憐む。しかるに今大明の兵と戰ふに於ては、急に攻撃ち、旗を大明の都に進め、日本大軍の行く所悉く燒竭し、日頃の鬱塞をはらさん事喜何事か是にしかんや、唯恨らくは明兵來る事の晩き事を」と書て返しける。沈惟敬（人名）をはじめ明の將卒是を見て駭き騷ぎ、彌手足を空になし安き心もなかりけり。沈惟敬（人名）今は身の上の大事なりと心を苦しめ、再び松雲（僧名）を以て清正の臣渡邊金太夫が許へ遣し、「何卒和談の儀を執持てたび候へ」と、くれ〴〵賴みやりけれど、金太夫も亦清正と同じ返事にて、沈惟敬（人名）が術計盡果て、頭を掻てぞ居たりける。然るに明の大將軍邢玠（人名）かね〴〵沈惟敬（人名）が表裏あるふるまひを深く惡み、其行狀に心を附て伺ひけるに、今更計究り前後は途を失ふと

かり、官を剝れて平卒とは成れりけり。此時日本の戰將加藤清正、小西行長等、大明の援兵至ると聞て、柳川豐前守調信を日本へ遣はし、太閤にしか〴〵の由を申させければ、太閤色を起して宣ふやう、「朝鮮我言を蔑にし、明兵を借て防ぎ支んとするは、先に全羅(八道の内)忠清(同上)の二道を取ざるによつてなり。清正、行長速に全羅(八道の内)に軍を進め、兵粮を集め、城どもを攻屠り、長く驅て大に進み、力を竭して烈しく戰ひ、手負討死數多なりとも是を顧る事なく、屍を異國の土と成さん志有らば、明國百萬の援兵有り共何の恐るゝ事あらんや。且浮田秀家も同じく宜寧(地名)、晉州(地名)へ亂れ入り、毛利秀元は密陽(地名)、大丘(地名)より進み、さしはさみ擊て等しく全羅道(八道の内)に會合し、明兵を追て深く鴨綠江(川名)に到るべし。清正行長をはじめとし、諸大將の妻子皆日本にあり。蓬き戰をなし大友が怯弱に傚はゞ、我其妻子を斬べしと申せや」と御下知あり。且沈惟敬(人名)に書を遣して約する所の朝鮮四道を日本へ授くべしと責給ふ。柳川調信悉く命を領じ、引かへして朝鮮國へ赴きけり。

○沈惟敬下ㇾ獄

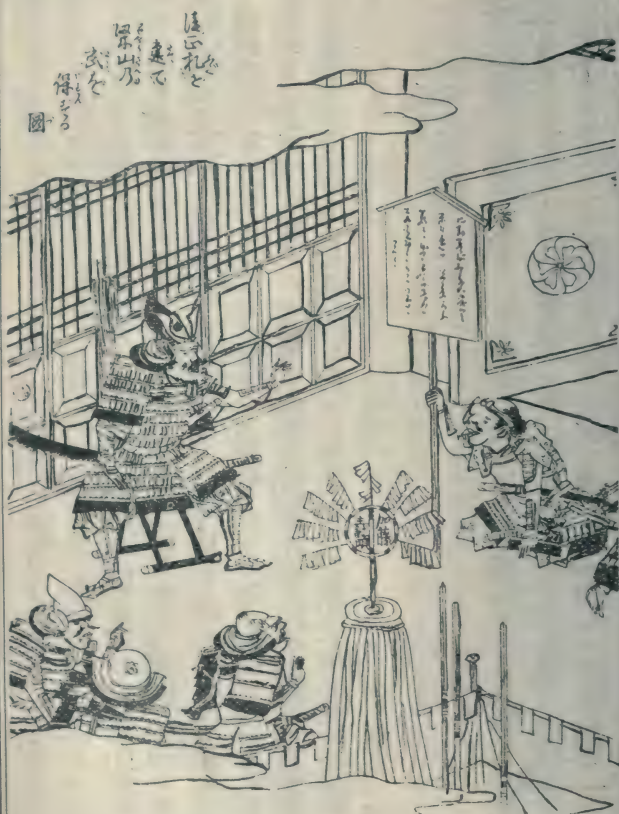
此時沈惟敬(人名)、は明帝より勅して、「早く日本の兵に說て本國へ歸らしむべし。事遲々するに於て

僞り、己一人富を得んと謀るより事起れり」石星名是を聞き大きに恐れ、「全く是臣一人が罪に非ず。沈惟敬名がなすわざなり」帝頓て惟敬名を召て罪を責給ふに、沈惟敬名元來嗚呼の者なりければ、敢て驚かずして奏答しけるは、「日本再び兵を入るゝは朝鮮王李昖が禮を失ふを怒るが故なり、敢て大明の命をそむくにあらず。臣再び日本の陣營に至り、說て兵を退けしめん」時に徐成楚名と云ふ臣下難じて曰く、「日本軍を起す事數十萬、海を渡る事數千里、何ぞ纔に禮を失ふの一事のみならんや」帝詔して曰く、「沈惟敬名罪ありといへども、再び和兵に說て退かしめば、其功を以て罪をゆるさん。石星名が罪はのがるゝ所なし」とて頓て獄に下し給ふ。同四月、明帝邢玠名を以て大將軍となし、楊鎬名を副將軍とし、劉綎名麻貴名を南北の將軍と定め、朝鮮を救はしめ給ふ。且改め令して朝鮮王李昖を新將軍と稱じ、權應珠名に令じて鳥嶺名の敵を防せ、金應瑞名に釜山浦名の敵を禦せ、元均名を以て船軍の大將となし、竹島名加德名の敵を押へしめんと、軍勢を分つて其手々へ向はしめ給ふ。元より水軍將軍は李舜臣名元均名の兩人中賜り、先年日本勢と唐島名の戰にも、李舜臣名が功名甚だ高く、元均名は和軍の爲にもろき敗軍に及び、舜臣名が力を借て漸くに死をまぬがれしに、邪智深き者なりければ、暗に李舜臣名を讒言し、此度の合戰には獨り水軍將軍と時めき、功有る李舜臣名は元均名が舌頭にか

の官人騷動する事大方ならず。是によつて都の人民近國の百姓、今や日本勢犯し來るならんと、老たるを扶け、いとけなきを抱き、散々に落行しぞ、誠に太閤の威名朝鮮大明にふるひ轟き、恐れずといふ者なし。去程に日本より渡海せる軍將黑田長政をはじめとし、凡十三萬餘人の軍勢、三月中旬、悉く朝鮮に入り、登萊・機張・西生浦・豆毛浦・竹島・梁山・蔚山・加德已上地名等に城を構へ、熊川・金海・昌原・咸安・晉州・固城・泗川・昆陽・以上國名の間悉く日本勢橫行の地と成て、朝鮮大明の軍民敢て往來する事能はず。其勢天を突き、朝鮮を蹈み崩さん事何仔細か是有らんと、勇氣增りて見えにける。されども朝鮮國打續きたる兵亂に、米粟甚だ困窮し、日本より運送の兵粮を得て、其後に兵を進んと商議定り、各要害々々を堅固に守り、心ならずも日をかさねける。

○大明之援兵救ニ朝鮮一

去ほどに大明の朝廷には群臣を集め、日々和寇を退くるの計議間なしといへども、頃年北虜亂を起し、兵戈止む時なかりければ、諸國の兵士募に應じて來り集る者も少く、只周章せる計なり。時に大臣等奏しけるは、「日本怒を發し再び朝鮮を犯す事、石星名が朝廷を私し日本人を

清正札を建て梁山の武を保する図

日本國加藤主計頭清正、受二太閤殿下之命一、今再航二于朝鮮一、朝鮮人民必不レ疑二此牌文一、莫二恐怖而退逃一、故先遣二我臣金太夫一以告焉。

朝鮮の人民是を見て、鬼將軍は仁義あり、迯避るに及じとて、安堵せる者甚だ多し。不日にして小西行長朝鮮に著到し、釜山浦（地名）の外より進み、豆毛浦（地名）に至り、釜山浦（地名）の古城を修造して、筑前中納言秀秋を城主となし、近邊の要害に多く砦を築き、久しく止る用意をなす。朝鮮王李昖は日本勢再び釜山浦（地名）に至り、追々軍勢著岸せし由を聞て大きに苦しみ、先年の敗軍に懲て早王子后妃を具して海州（地名）へ落行べしと支度をなせば、大小の臣下悉くあわてふためき、遠き山里へ隱るゝもあり、妻子を引具し遠國の知音をもとめて落行くも多く、或は家財を運び、或は眷族を召連れ、我身の營みのみに走りめぐり、國家の爲に身を捨んとする者は鮮し。國王大臣すら斯くのごとし、況や賤き民百姓は、東西に走り南北にさまよひて迯まどふは、哀れなりし有樣なり。されば國王李昖大明へ飛馬を飛して告けるは、「日本の軍勢百萬騎、人數を分つ事十三列、直に大明を切崩さんと、秀吉も渡海せるよし聞え候ふ。急ぎ追討の大將を賜はらずんば、朝鮮は元より大明國の御大事に候べし」と、日々夜々に訴ふる事雪の飛が如し。是によつて明の朝廷も又大きに周章し、諸國へ勅使を馳て軍勢を催促し、武具兵粮を集め、上下

繪本太閤記　七篇卷之六

○日本之軍兵渡二海朝鮮一

慶長二年正月、もろ〳〵の軍大將皆領國に歸りて軍勢を驅集め、朝鮮渡海の催最中なり。二月中旬より下旬の終りまでに渡海すべきよし、太閤伏見にて仰渡されけれど、獨り小西攝津守御怒りを蒙り、御前のさま不首尾なれば、あはれ人に勝れたる功名を顯はし、御憤りを解んものと覺悟を極め、正月の内に渡海せんと用意を急ぐ事尤甚し。加藤清正は小西行長と同國なれば、小西が用意を聞て、此度も又小西めに先をせられては口惜かるべしとて、俄に軍勢を揃へ二百餘艘の兵船に取乘り、正月中旬、順風に帆を卷て、第一番に朝鮮國へ到著せしは、諸大將の目を驚かしぬ。去年歸朝の時竹島地名の古城に軍兵を止め置きたりしが、是を一手に合せ、機張地名に至て陣を布き、梁山地名の城に押寄せ只一息に追落し、夫より西生浦地名に攻寄けるに、城を守る兵卒恐れをのゝき、さん〴〵に成て迯失せければ、清正城に入つて兵士を勞ひ、且札を諸方に立て朝鮮の人民を安んず。其言葉に曰く、

繪本太閤記 七篇第六之卷 目錄

日本之軍兵渡海朝鮮
大明之援兵救朝鮮
沈惟敬下獄
小西行長破元均
日本勢自海陸向南原

渡されければ、諸將謹んで命を領し、己が國々に退き軍勢を驅催し、不日に渡海すべしとて、其用意區々なり。

○再朝鮮渡海定人數

慶長二年正月、再び朝鮮を攻討べしとて、軍勢の手分を命じ給ふ。先陣は前の如く加藤主計頭、小西攝津守兩人、鬮を取て日替りに勤むべし、二陣は黑田甲斐守、毛利壹岐守、高橋九郎、秋月三郎、相良宮内大夫、伊藤民部大夫等なり。三陣は鍋島加賀守、同信濃守、四陣は島津薩摩侍從。五陣は長曾我部宮内少輔、池田伊豫守、藤堂佐渡守、中川修理大夫、加藤左馬介、菅平左衞門、六陣は蜂須賀阿波守、生駒讃岐守、脇坂中務少輔、七陣は備前中納言浮田秀家、安藝宰相毛利秀元是を勤むべし。朝鮮釜山浦（地名）の城は筑前中納言小早川秀秋これを守り、安骨浦（地名）の城は立花左近將監是を守り、加德（地名）の城は久留米侍從秀包、西生浦（地名）の城は淺野左京大夫幸長是を守るべし。別に毛利豐後守、竹中源介、垣見和泉守、毛利民部大輔、早川主馬頭、熊谷内藏允を以て軍奉行とす。諸大將の剛臆是非、見聞に任せ最屓偏頗なく、實を以て注進すべしとなり。「船軍は藤堂高虎、加藤嘉明、脇坂安治是を奉行とし、四國の軍兵を加勢すべし。勿論諸大將誓約して不和なるべからず。大明若大軍にて援兵をなさば早く注進すべし。我必ず渡海して朝鮮を踏潰し、直に大明へ馬をすゝめ、一時に攻敗らん事掌をめぐらすべからず」と仰

○蠻船漂二著土佐國一

此みぎり日本土佐國桂濱浦戸の濱へエゲレス國の船漂流して寄り來れり、土人其船の黑くぬりたるを見て黑船と呼り。國主長曾我部元親、小船に兵卒を乘せ、漕出して彼黑船を見せしむるに、船の長さ三十六間、横の廣さ二十二間、惡風に檣は折れ揖も碎け、舳前より潮こみ入り、水に渇して死する者三百人計、わづかに生殘る者崑崙兒、眞如郎等を交へて五十餘人、其積む所のものは烏捌鯨五百端、綿布二十六萬端、金襴緞子五萬端、白絲六萬斤、印子の金子五百箇、麝香十六箱、生たる麝香十餘頭、尾長き猿十五疋、鸚鵡二翼、其外和國に見なれざる珍寶ども數知れず積入たり。元親人をはせて此旨太閤へ言上しければ、增田右衞門尉長盛を土佐へ遣はされ、船中こと〴〵く點檢し、小船五十艘に移し乘せ大阪に至り、目錄を添て太閤へ奉る。太閤即ち是を分て禁中及び攝家、清花、諸大名に賜り、元親には別に銀五千枚を下されける。扨船工に命じて彼黑艦の修理せさせ、米千石、豚百頭、鷄二千羽、酒百樽、饂飩粉五百石蠻人に賜り、本國に歸らしめ給ふ。

ば國家の幸甚し。然れども日本人元來武勇に勝れ、命を輕んずる事塵芥のごとし。容易に軍して、初度の戰に利を失ふ時は、誠に勇々しき大事なり。深く計りて事を誤り給ふな」といひて明國へかへりにけり。李元翼名此詞を聞て俄に臆病神の附たりけん、兎角に評定し、終に軍兵を出すにも及ばず、いたづらに日をかさねける。去程に明の兩使は都をさして急ぎけるに、萬曆二十五年二月中旬、闕中に至る。沈惟敬名かねて心に思ひけるは、我今度日本に渡海し、和睦の事仕損じたりと云はんには　帝の逆鱗を蒙るのみならず、諸人の笑ひ草とならんと思ひ、朝に出て僞つて奏しけるは、「日本國王秀吉、明朝天恩の辱き由を喜び、冠をいたゞき朝服を著、西に向ひて拜謝し、則ち贈り物の品々是に候」とて、道にてこしらへたる猩々緋の毡天鵞絨及び黃金の器物等三十餘種箱に調め、大文字に、日本國王豐臣秀吉所ニ餽遺ニ之什物と書附て、誠しやかに捧げ奉りける。明の朝臣あざみ笑ひ、「猩々緋天鵞絨は南蠻國の土產なり、日本王の贈り物に似合しからず」と、目引袖引笑ひける。帝疑はしくや思ひけん、「秀吉の奉書なきはいかに」と仰けるに、沈惟敬名取敢ず、「寔に臣が誤りにて、朝鮮の釜山浦名にて遺失て殘し置き候ひき」とて、頓て再び都を出て釜山浦名に至ると稱し、私に日本秀吉が謀書謀判を似せ、報書と號して都に歸り萬曆帝にさゝげ奉る。實に稀代の僞りかなと、知る人皆惡みあへりぬ。

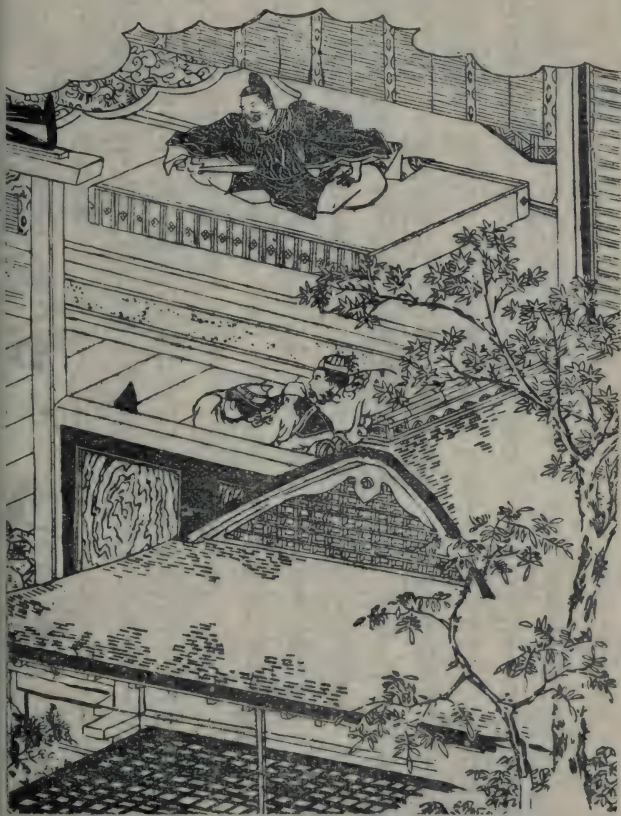
も豐前にかへり、軍勢催促いと騷がしかりければ、楊方亨人名が鼈色を失ひ、片時も早く國に歸りて商議すべしとひしめく所へ、寺澤志摩守御使として、太閤の御書を明の兩使に賜ふ。沈惟敬人名大に欽び、是必ず明國への報書ならんと見る所に、それにはあらで朝鮮王を責る三ケ條の罪科を記し給ふ。其文の趣は、前年朝鮮國より使の官人來朝せしに、大明の事を隱して申さざりし事一つ、沈惟敬人名等强に歎き請ふ故を以て、朝鮮二人の王子后妃以下悉く免し遣りたり、然るに速に來つて恩を謝せず、大明の使を待て黃愼人名、朴弘長人名ごときの下賤を以て使する事其罪二つ、日本大明和睦の議に附き、朝鮮國王萬事表裏反覆を以て兩國を惑し、明使の渡海遲々に及べり、此等の事免許すべからず、依て再び大軍をさしむけ鏖に成んと記されたり。兩國の使强恐れ、急に纜を解き朝鮮に歸り、此書を以て大王李昖に示しぬれば、李昖王名大に驚き、委細に其事を大明へ訴へ、援兵を賜ひて和寇を退け給へやと、是を請ふ事櫛の齒を引如し。朝鮮の武臣李元翼人名といふ者、日本再び大軍を牽て押來るよし聞ければ、是を防ぎ支んとて軍勢を駈集る所に、明使楊方亨人名、沈惟敬人名本國へ歸るとて、李元翼人名に陝川地名といふ所に出合たり。李元翼人名が曰く、「我今軍兵を引率し、釜山浦地名の城に陣をなし、日本人寄來らば、足をもためさせず追拂はんに難き事有るまじ」といふ。沈惟敬人名微笑して、「かくのごとくなら

らせ給ふ事もやと、切に思ひ煩ふ程に、人の參りて申すを聞けば、此ごろははや君自ら朝鮮に渡海し、深く大明へ御陣をすゝめ給ふなど、心ならぬ事のみ聞き侍るにつきても、いつか此戰の平ぎて御陣を都に返し給ふべきと、朝夕に袂をしぼるより外餘の事は候はず。されば三成が渡海の時、いかにもして兩國の和を取むすび、一つには君の御心を安んじ奉り、二つには妾が今の物思ひを救へよと、呉々賴み候へばこそ、よしなき和睦を取結び、君の御怒りを起し奉るは、小西、石田が罪にあらず、皆妾があさはかなる女心より成したる事に候らへば、行長、三成に御憤りを宥められ、妾に死を賜ひて、萬が一つの心やりに爲し給へかし」と、袂を御顏におしあて給ひ、浮ばかりに泣かこち給へば、太閤は何とも仰出さるゝ御事もなく、座を立て入らせ給ひ、頓て前田利家卿を召して、「三奉行小西等が罪輕きにあらずといへども、再び異國を討んに、味方の一將を殺さんも本意に有ざれば、一統死を免すべき間、重て御陣を朝鮮へ向られんとき、功を立て此罪をつぐなふべし」と聞えさせ給へば、利家卿有難く拜謝して退き給ひぬ。重て御下知として、「大明朝鮮の使は早々和泉の堺へ追下せ」と仰ければ、楊方亨人名、沈惟敬人名等恐れをのゝき、散々に成て堺の津に至り、船に取乘り肥前の國まで下り、順風を待て日を重ねし內に、早軍兵ども朝鮮渡海の用意さま〴〵にて、加藤淸正は本國肥後に下り、黑田長政

事の起りしやらん、今もや斬殺さるゝ事ならんと、面色土のごとく更に生たる心地なし。前田宰相利家卿御前近くすゝみ出て、「御憤りはさる事に候へども、異國の使の見る前にて、本朝の臣下を誅し給はん事いかゞに候へば、三奉行の衆中行長を以て某に御預け仰附られ候はゞ、其所存も承り、申開きの儀もこれあらば、某言上致すべし。就中明の兩使も先御いとま賜り、明日事を糺明し給はんには、何事もよろしきに叶ふべきや」と、謹んで言上有けるに、太閤御氣色を和らげ給ひ、「汝が詞に隨ひ、今日は皆々退き出づべし」とて、御座を立せ給へば、明の兩使をはじめとし、小西、石田、増田、大谷、虎の腮を免れ、鰐の涎をなめし心地にて、皆々退出したりける。

○明使所レ追ニ立伏見一

此時淀君は大阪の城におはしけるが、太閤御憤り深く、小西石田等が罪を得たりと聞召しける程に、急船に召して伏見に參り給ひ、御前に出てさまぐ〳〵に宥め參らせ、「小西、石田のみが誤りにも候はず。大明御陣のはじめより、君泰山に等しき御身を、かろぐ〳〵しく遠き國に出陣し給ひ、明暮軍の御指揮に心を苦しめ給ひぬらんと、妾が身の保きに附ても、若や御齢をも縮

太閤「いかにも汝よろしく計ふべき」旨仰出さるゝに、三成急ぎ相國寺へ表立たる御使を以て、彼永哲を召したりける。然る所へ南禪寺の靈三和尙不ㇾ圖も登城せらる「幸の折なり、靈三に讀せよ」と仰渡されける程に、早明使をはじめ大小名こと〴〵く登城ありて、靈三命を受て璽書を讀ぬ。天なるかな、三成が心謀いたづらに成りて、兩國の和親爰に破れ、再び朝鮮の役起りけるは、誠に是非なき次第なり。去ほどに靈三和尙、爰ぞ我學才をかゞやかさんと、璽書を取上げ封を披き、大音に讀上ける其文中に、豐臣秀吉を封じて日本の國王とすと云ふ詞あり。太閤聞召し、忽ち大眼闊と見開き、兩使をはたと白眼み、「あな憎や、大明我を封じ日本王と成んとは何事ぞや。我武略を以てみづから日本の主たり、何ぞ大明の力をからんや。先に小西行長我に告て、秀吉を以て大明の國王たらしめんといへり。是によつて大明朝鮮を許して軍をかへしたり。行長元來大明に志を通じて我を欺くと覺えたり。早く行長を引出し、明の兩使と共に首をはねよ。我みづから軍勢を引て大明朝鮮を一踏にふみつぶさん」と、躍り上りて怒り給ふ。行長大に恐れ、「是全く某一人が所存にて言上致すにあらず。三奉行の面々、臣に命じて爲しむる所なり」太閤いよ〳〵怒りたまひ、石田、増田、大谷を呼で罵り責給ふ事半時ばかり、一座皆低頭平身、敢て御顏ばせを見る者なく、明の兩使はつや〳〵日本の言語に通ぜざれば、何

の諸侯華かに出立ち配膳の式終り、盃を兩使に賜ひ、猿樂の御遊等にて其日は終り、次の日花畠の山莊にして大明の璽書を讀しむべしとて、竹谿禪師を召れける。是より先石田治部少輔三成、明使堺の津に著岸せし砌り、此竹谿禪師を密に招き、聲を潛めて申しけるは、「今度大明より太閤へ送り奉る璽書には、極て驕りたる詞有らんに、文の儘を讀上たらんには、太閤忽ち憤怒を發し給ひ、天下再び大亂の端と成べし。兎にも角にも天下平安ならんこそ、上一人より下庶民に至るまで、是にましたる幸や有らん。今洛中洛外において禪師に勝れる博識有るべからざれば、必ず明帝の璽書を貴僧に讀しめ給ふべし。其時かやう〳〵の文の意に讀變て上聞に達しなば、天下泰平、太閤御長壽の基、全く貴僧の力を賴み參らする」と、餘儀なく申談じける程に、竹谿禪師委細領承し、「天下の爲、太閤の御爲とならんには、何やうにも讀で事を調ふべし」とて、其席にて讀べき案文を作り、萬の手つがひを定め、扨其期を相待けるに、石田が計りしに違はず、竹谿禪師を召れければ、三成暗によろこび居しに、誰かはからん、此時竹谿禪師卒に老病發し、煩悶せる事しきりなり。召に應じて登城する事叶ひがたしと申す。治部少輔大きに驚き、急使を以て相國寺の永哲禪師に委細の事ども申含め、其身は太閤の御前に出て、「竹谿禪師病惱の由、相國寺の永哲こそ當時の碩學にて候へば、召され候はんや」と言上すれば、

を奏する事たえず、都鄙の貴賤集り見るもの山のごとし。廿九日伏見に著し、旅館を賜ひ、柳川豐前守を以て饗應の役となし、且朝鮮の官使兩人を責て仰けるは、「此度和親の儀においては、朝鮮國を憐むが故なり。況や兩人の王子擒を赦して國に歸らしむるのうへは、王李昖自ら來朝して恩を謝すべきの所、爾等如き陪臣の者を以て使せしむる條奇怪の至りなり」と怒り給へば、朝鮮の兩使恐れをのゝき云所を知らず。小西行長登城をなし、さま〲執成申上るといへども御憤り解給はず、九月二日、明使計を伏見の城に召れ、御對面を免し給ふ。明の正使楊方亨（人名）副使沈惟敬（人名）明帝の金印を捧げ階下に立ば、殿上なる錦の幕を開き太閤威儀を繕ひ給ひ、近士二人に太刀腰刀を持せ搖ぎ出で給へば、上下に並居る大名小名、頭を地に附け平伏す。楊方亨（人名）沈惟敬（人名）思はず匍匐して震ひ慴れ、足竦み口噤み、色を失ふ有樣は、虎に逢し鼠に似たり。小西行長進み出て、「大明の使者恐るゝ事を止て禮を行ふべし」と申すに心づきて漸に拜し終り、沈惟敬（人名）則ち金印勅書及び封王の冠裝束を捧げ奉り、諸大名へ冠服五十餘具を獻呈せり。拜禮の儀式相濟み、其日は明使に暇を賜ふ。次の日上壇の中央に雲繝緣の厚疊を設け、太閤緋の袍唐冠を著し、傍を拂うて坐し給ふ。中壇の右には明國の兩使、左には五大老、次に五奉行を始め諸國の大小名袖を連ね坐しければ、廊下庭上には諸大夫以下の諸士透間なく並び坐し、少年

理とこそ見え侍る。

○太閤怒二大明璽書一

其翌日はきのふに變り空の氣色も打和らぎ、崩たる屋どもを取のくるとて、京伏見の間はいとも騒がしかりけれど、太閤は帝の龍體御伺ひの爲とて、參內を遂られける。御供には加藤清正、夕の御奉公に日比の誠忠を感じ合させられ、早く御憤りは解させ給ひ、具して都に上り給ふ。大佛の前に至り給ふ時、佛殿を見給ふに、さしもの大殿粉のごとく崩れ、佛體も有やなしや悉く碎け果てけるを御覽じ、馬上ながら大音にて罵り給ふは、「佛像を安置する事は國家太平の爲なり。然るに其身さへ保つ事能はず裂摧けたるは、世の爲に何の益か是有らん。詮なき大佛に矢風負せて、諸佛の見懲しにせん」と宣ひて、弓を取りて矢を矧げ、能引て佛像に射かけ給へば、御供につかうまつる人々、「あな冷じの大將軍かな」と、舌を卷て恐れける。かゝる大變の有ければ、年號改元有て慶長と號し給ふ。其八月明の楊方亨名を正使とし、沈惟敬名を副使となし、朝鮮國よりは黃愼名朴弘長名の兩人を相添へ、泉の堺に著船すれば、小西行長をはじめ日本の諸軍勢のこらず歸國に及び、警固なして伏見に至る。明使は馬上に蓋をさしかけさせ、道々樂

ぬ太閤も、卒に諸社諸院に仰て御祈さま〲なり。此時加藤主計頭清正は、石田が辯佞に支へられ、少しく御不肖を蒙り、暫く御前を遠ざけられ、閉居して有りけるが、かゝる大變、上の御身心元なく、三百餘人の逞卒を引具し御城内にかけ入りしが、太閤は女の小袿を召れ、北の政所、松の丸殿、幸藏主などもろともに、本丸の大庭に敷物布せ坐し給へば、小姓茶坊主幔幕を串に附て張んとすれども、大地震うて倒れ轉び、此時大名小名いまだ一人も登城する者なし。清正かくと見るより三百餘人の武士に命じ、御座の四面を守護せしむるに、皆手に鐵棒を持小具足に身を堅めたり。是は太閤の若や壓に打れ給はんには、引起さんとの手當なり。扨御前に頭を地に附け、「清正御不興を顧ず推參仕りて候。聖體恙なきを見奉り、小臣がよろこび何か是に勝り候はん、加藤清正御隨身仕る上は、恐ながら御安堵下さるべし」と、謹んで言上すれば、太閤は何とも仰はなくて、只うなづきて御座ける。松の丸殿、幸藏主などは、清正と常にむつまじからざれども、此時にあたつて清正の面を見給ひしは、眞に地藏菩薩の地獄界に出現し給ひし御歡びにて、「早々の登城嬉しく思召るゝ」由、吳々侍士をもて申し給ひ、「猶上の御機嫌も殊なうめでさせ給ふ御氣色に候へば、頓て御怒りも解させ、めでたき御召し出されは有るべきなり」と、御菓子など賜り、有難き上意に清正は只涙を流し、とかうの御答も得爲ざりけるは、

の官使第一の人とは見えたりけり。沈惟敬人名私にこれを嫉み、大明日本和睦の事に就ては、皆悉く我方寸より出ずといふ事なし、かの李宗誠人名ごとき黄口の小兒が指揮を蒙るこそ口惜けれと、日來恨み居たりしが、一つの謀計を案じ出し、宗對馬守が味内の一卒に申含め、李宗誠人名に言せけるは、日本國主太閤秀吉公、元來大明朝鮮と和睦の心なしといへども、此度僞つて卿等を日本に透し入れ人質となし、長く苦みを受しめん謀計なりと、誠しやかに云せければ、李宗誠人名大に驚き、或は恐れあるひは泣き、いかゞはせんと心を苦めしが、堪がたくや思ひけん、天子より賜りたる勅書及び使節のしるし、其外荷物萬を打捨置き、夜にまぎれて遁れ出で、明國の都をさして走りけるは、拙なかりけるふるまひなり。かくのごとき騷動により、急に渡海せん事も成りがたく、いつしか其年の春も暮れ、夏の終になりにけり。此時太閤は伏見の城におはして、日本漸く靜に治りけるが、秋七月三日午の時ばかりに、天卒にかき曇り、飃一頻り吹來りて、毛を降す事おびたゞし。諸人是をさへ奇怪の事に思ひしに、七月十二日の夜、山城、大和、近江、丹波、河内、攝津の國々おびたゞしく地震し、太閤の御座ます伏見の御城も塀矢倉悉く崩れければ、增て洛中洛外の社頭寺院、市店民屋、或は倒れ或は傾き、壓れて死する男女數を知らず。其外山岳は崩れて泥水涌出で、大石を轉しては巨樹を碎き、さしも物に動じ給は

繪本太閤記　七篇卷之五

○明李宗誠密走二釜山浦一

日本文祿四年は大明の萬曆二十三年に當れり、此年大明より和平の爲とて日本へ來る正使李宗誠人名、副使楊方亨人名に沈惟敬人名をさし添へ、朝鮮の三浪江人名に去年より留り、日本勢の國に歸るやと伺ひけれども、日本の將卒過し平壤地名の敗軍に懲て、又もや明人の僞り有ん事を恐れ、釜山浦地名の要害所々に砦を構へ、防禦の備へ堅固にして、退くべき色も見えざれば、大明朝鮮の官人等さまぐ評定して、所詮日本人の疑ひを解にはしかじとて、李宗誠人等三人の使を釜山浦地名に至らしめ、和平の議を急ぐといへども、此時小西攝津守行長も、太閤に謁せんとて日本へ歸り、何事の論議にも及ばず。此年も空しく暮て、翌れば文祿五年の春、行長再び釜山浦地名に來り、大明の兩使及び沈惟敬人等も不日又日本へ渡海すべしと、其用意とりぐなり。明の李宗誠人名といふ者、年若しといへども貴族の子なれば、帝よりも正使の命を蒙り、其威勢尤強し、其うへ富裕の諸侯なれば、馬車より附從ふ童僕に至る迄華美を盡し、誠に此度日本渡海

繪本太閤記　七篇第五之卷　目録

明李宗誠密走二釜山浦一
太閤怒二大明璽書一
明使所レ追二立伏見一
蠻船漂二著土佐國一
再朝鮮渡海定二人數一

深きいはれは有りけるなり。秀次公生得殘忍におはしけれども、惡逆の募し源は淀君と三成がはかりごとなり。淀君は天下に並びなき嫉妬深き御方にて、人の上の御事にても、うるはしき女房の人の寵愛をかうぶると聞召しては、我身の上の事に思ひなして、憤り恨み給ふ事常の御氣質なり。秀次公天下にもとめて選み出し給ふ美女達三十餘人、こと〴〵く御寵愛深く、男女の君達多く出來させたまふなど、皆淀君の忌み妬み給ふ所にして、是を殺して猶飽足らず、骨を刻み肉を醢にする漢の呂后、唐の則天なんど、淀君と其生得相似たり、かゝる妬心を以て深く久しく讒言を入れ給へば、太閤も初の程こそ實とも思し給はねども、三傳市虎人皆信といへるがごとく、いつしか左も有るべしなんど思ひ附せ給ふは、霤の石に穴するに等しく、終に畜生塚の因縁とはなれり。淀君の怜悧なり又妬心の深きは、此太閤記全部の中、拾遺等の中に往々しるしたれば閲して知るべし。

落し、大なる穴を掘て、其中へ手足を取て投入れ〳〵したる有様は、阿放羅刹の罪人を呵責せるも是には中々勝るまじと、肝を消し腸を斷ばかりなり。此斬れ給ひし女房の中に、一の臺の局と申せし御方は、前の大納言殿の御女、十五歳にて何某の宰相殿へ嫁し給ひけるが、ちかきころ宰相殿身まかり給ひしを、容の勝れて美しきに關白殿下强に召させ給ひ、御寵愛深かりけり。此御局と宰相殿の御中に御むすめ一人おはしけるが、歳いまだ十三に成り給へども、母君にも勝りてあてやかにおはしければ、秀次公夫をも召されて、母と女と共に寵愛し給ひけるを、太閤聞し召して、「有まじきふるまひ哉、親子の人を召具したるは、只畜生に異ならず」とて御憤り深く、此度も先此二方を第一番に害し參らせけり。是によつて女房達の死骸を埋みたる塚をさして、世の人畜生塚とも惡逆塚とも呼り。

或人の曰く、秀次公は大惡不道の人にて、而も又謀叛の思しめし立なきにあらず、死を賜ふ事理りなり、此女房達稚き姫君の、何事を犯し給ひてかく情なく誅し給ふや、譬命を失はるとも、死骸は日頃たのみ給ふ僧法師をも召出され葬りを発し、跡をも弔はせ給ふか、又は親類由緣の者にも賜ふべきを、かばかり淺ましくも下賤の者の手にかけ、死恥までさらし給ふは、太閤の御誤りにや、と申しけるは、理と聞え侍れども、此事においても

れたる女としいへば、大名小名陪臣下賤のきらひなく、召集めて寵愛し給ふ程に、世にもたぐひなき美人三十餘人ぞ御思ひ人はおはしましけり。是等の御腹に若君三人、姫君二人ぞおはしけるに、皆引出して斬奉るべき御下知によりて、文祿四年八月二日、三條河原に二十間四方の柵をゆひ、武具したる武者三百人計、太刀薙刀を拔持ち、しのゝめの頃より河原に陣をはりて時刻を待つ。かのあてなる女房達三十餘人、若君姫君もろともに、あやしの車にかきのせ參らせ、一條、二條の大路を引めぐり、三條の川原へ引渡す痛はしさ、見る者袂をしぼりけり。檢使には石田治部少輔三成、增田右衛門尉長盛を先として、橋より西の方に敷革布せ並居たり。「先若君達を害し奉れ」と下知しけるに、「承り候ふ」とて若殿原雜色等走り寄り、玉の如きをさなき御方を車よりいだきおろし、父の御首を見せ參らすれば、こは何事ぞやと泣まどひ給ふを、太刀取の武士心弱くては叶ふまじと思ひ、眼を閉て心下を一刀づつに害し奉れば、其母君達は人目をも恥をも忘れはて、あなむざんやとて空しき御死骸をいだきあげ、伏まろび給ふありさまは、目もあてられぬ風情なり。かゝるあはれを見給ふ上は、しばしも人に後れじと、三十餘人の女房達、皆最期を急れけるこそ痛はしけれ。扨目祿に合せて、次第〳〵に害し奉る。女房達の名、辭世の和歌など、悉くあれども、おほきが故に爰に略す。午刻より申の終り迄、草の葉などを薙ごとく、引出しては御首をふつ〳〵と打

らん」といふに、大膳大きにけしきを損じ、「一人にても我に從ひ切腹したる者あらば、來世までの勘當たるべし。只身を全く、我菩提を弔ふが此上の忠義なるぞ」と云ける程に、郎等の内に、「御最期の御供仕らんにこそ勘當も蒙り候へ。さらば御先へ參り候はん」と云も敢ず、もろ肌ぬぎ、腹かき切て死たりける。殘る者ども寔に是は理かなとて、我も〳〵と腹切らんとす。大膳驚き、寺中の僧徒も立出て、あなた此方を押とゞめ、扨大膳聲をはげまし、「不覺なる者のありさまかな。此大膳も出家して、主君秀次公の御跡を弔ひ奉るべけれども、御免なければ力なし。然るを汝等主の心にたがひ腹切んなんどとは、物に狂ふ行なり」と、涙をながしてわびければ、此上はとて皆髮を剃り、此坊の弟子と成り、御菩提を弔ひ奉んと申程に、大膳斜ならず歡び、頓て客殿に出て、いさぎよく切腹して死したりける。其外白井備後守は鞍馬の奥にて生害し、阿波杢之介は粟田口にて切腹をとげ、日比野下野守、山口少雲、一柳右近等方々にて自害し、暫時の内に關白一家滅亡しけるは、あはれとも云ん方こそなかりけり。

○畜生塚由來

秀次公はかくれなき色好みにておはしければ、東國筑紫のはてまでも尋ね給ひて、美目容勝

くい來つて、はやくも此樣に成行き給ふぞ、後の世の事も思ひやられて悲しけれと、そゞろに淚を催しける。偖も木村常陸介は、山崎の寶寺に知れる僧の有ければ、それに身を隱して時變を伺ひ居しに、山崎の宿の者此よしを聞て、斯る人々を隱し置たらんには、後日いかなる御咎や有なんとて、急ぎ伏見へ訴へければ、是も七月十五日、松田勝右衛門を檢使として山崎へつかはされ、切腹仰附られしに、常陸介謹んでかしこまり、松田勝右衛門にむかひて、「關白聚樂を出させ給ふ時、某諫めて申ぬるは、君伏見へ赴き給ふ共、よも太閤に御對面は叶ふべからず、半途より遠國へ放流せられ給ふか、左なくば御腹めされ候ひなん。今太閤の使者を斬捨て、伏見へ押寄せ、はなぐ〵しき一合戰候へかし、と再三申奉りしに、我太閤に敵對する心なしとて、某が詞を用ひ給はず。然れば關白に於て御野心は露ましまさゞる事あきらけし、此旨を後にて太閤へ言上なし給はらば、其恩黃泉の下にても敢て忘るべからず」とて、終に腹かき切て死したりける。松田勝右衛門殊の序にしかぐ〵の由太閤へ申上げけるに、太閤木村が志を憐み、其妻子に百石の捨扶持をたまはり、都誓願寺のほとりに住しめ給ひしとぞ聞えし。又熊谷大膳は嵯峨の二尊院に隱れたりしを、是も七月十五日、檢使を以て死をたまふ。大膳畏り、最期の用意をなしける程に、此所まで附隨ふ臣下十餘人有しに、皆「殉死して最期の御供に參

関白秀次生害の図

もに頭を下げ、「こは有難く勿體なき次第にてこそ候へ。我々御介錯も仕り、御跡よりとこそ存候へ共、さらば御先へ參り、三津瀨川の道開仕るべし」と、三人一同にもろ肌ぬぎ、短刀を腹に突立て、思ふ儘に引まはせば、入道殿御覽じ、「いしくも仕たり」とて、悉く手にかけて討ち給ふ。扨快げに打笑給ひ、「淡路隆西堂跡より來れ」とのたまひ、諸肌を脱せ給へば、兩人御前に謹んで、「頓て追附き御供に參り候。心よく御最期遊され候へ」とて、四方やうの供饗に、一尺三寸有ける正宗の短刀の中卷したるを載せてさゝげ參らすれば、右手に取て左の脇腹に突立給ふを、淡路守後へまはり、終に御首を討ち奉る。惜むべし三十一を一期として、嵐にもろき露のごとく、消給ふこそあはれなれ。續て隆西堂も腹十文字に切て打伏ば、淡路守秀次公の御首を檢使の人々に相渡し、いざや御供におくれたりとて、短刀を取て太腹に二刀さし、又取直して首に推あて、左右の手をかけて前へふつと押落し、首を抱きて死たりしは、勇々しかりける生害なり。同十七日、秀次公の御首其外從者の首どもを伏見へ持參し、太閤の實檢に備へけるに、「謀叛人の首なり、後代の見せしめに都へのほせ、三條の橋に肆すべし」との御諚によつて、淺ましくも御首を三條河原に梟たりけり。是を見る京中の貴賤男女、あはれ人の身の定めなき、此頃まで諸國の大小名にかしづかれ給ひ、何事も御心の儘にふるまひ給ひしが、久しき惡逆のむ

三人の上使に向ひ、「當山七百餘年が以來、此山へ登り給ふ人の命を害し給ふ其例を聞ず。此儀一旦言上に及び、御命計は助け給はらずんば、此山の名を下すにて候」と、老若一同に訴へけるを、福島左衛門正則進み出て、「衆徒の申條尤に候。去ながら我々命を蒙り登山しながら、入道殿の御最期をも見とゞけず時日をうつさば、太閤の御勘氣を蒙り、切腹仰附らるべし。とても活まじき命にて候へば、先我々が首を斬て其後いかやうにも言上申され候へ」とて、居長高に成り、討果すべき有樣を見て、さすが僧徒の事なれば、推て一言も云ふ者なく、力及ばず退きけり。

○秀次公以下生害

兎角の事にまぎれ、其夜も漸に明て、十五日の巳の刻といふに、御切腹と定りける。是まで附隨ひ參りたる家臣には、山本主殿、山田三十郎、不破伴作、篠部淡路守、隆西堂五人、冥途迄御供つかうまつらんと、銘々切腹の用意をなす。入道殿兩眼に涙を浮め給ひ、「多くの者の中に、汝等五人を黄泉の下まで具し行も、寔に前世の宿緣なるべし。小姓ども三人は我自ら介錯いたし得さすべし。心しづかに用意せよ」と仰ければ、山本主殿、山田三十郎、不破伴作三人と

福原右馬介、池田伊豫守等を大將とし、其勢五千餘人、高野山へ到著し、木食上人の庵室に參りければ、關白頓て三人の使に對面ある。福島左衛門落緣に畏り、御有樣かはりたるを見奉り、涙を流しけるに、秀次入道、「いかに汝等此法師一人討んとて軍兵を引具し、事々敷ふるまひかな」と仰けるに、入道殿、若年の右馬介が推參申すよと心に怒り給ひ、三尺五寸金作りの御帶刀引拔と申すに、福原右馬介、「さん候、御腹めされ候はゞ、御介錯仕れとの御諚にて參りて候」給ひ、「入道もかねてより腹切ん時汝等に首討せんとて、此刀を持たるぞ。これ見よ」とて指附給ふ。もしも再び物申さば、手討にせられん御氣色なれば、福島をはじめ三人の者、刀の柄に手をかけ、事に及ばゞ討奉らんと身構して詰寄せしは、何なる天魔鬼神も近寄り難く見えにける。暫く有て入道殿仰せけるは、「儞等慥に承れ、我伏見を出し其夜腹切んと思ひつるが、上意を待ずして切腹せば、すはや秀次が身に誤りのあればこそ、自害をば急ぎつれと思し召されんには、罪なき者の多く殺されん事の便なくて、今まで存命有しなり。今は最期の用意すべし、汝等此事よろしく言上して、聚樂に在る家來共を申助けて、入道が教養に備へよ」とて、御座を立て御最期の用意に及ばせ給ふ。かゝる所に木食上人を始めとし、一山の老僧等出合ひ給ひ、

人驚き急ぎ請じ入奉り、「さても只今の御登山こそ思し召しよらざる御事かな」とて、關白も共に御袖を顏におしあて、紅涙にむせび給ひぬ。其翌日關白御髪おろし給ひて、法名を道意禪門と稱じ參らせ、御供の人々も皆髻を切て、偏に後世菩提をいのるの外、更に他事はなかりける。去程に木村常陸介は聚樂の御留主に止りしが、君の御事の心元なく、馬にまたがり五條の橋迄見えがくれに來りけるが、往さきの有樣を見ばやと、道をかへて竹田へ直に打出でけるが、宿はづれに鞍置たる馬多く引立て、武具したる兵ひしと並びて、はや大事發りぬと見えければ、常陸介歎じて、「あなあさましや、我君を道にて討奉ると覺るなり。汝等あの敵に一支へ支へよ。我其間に此所をかけ通り、石田めに出合ひ、首取て後腹切べし」と云すてゝかけ出るを、野中清六とて十九歳に成れる小童、馬の口にすがりて、「是は物に狂ひ給ふか、譬鬼神のごとく勇をはげまし給ふとも、行先に人數を伏て待て候へば、雜兵の手にかゝり犬死し給はんこそ口惜かるべし。是より山崎に打越え、夜に入りて再び計略を運らし、命をすてゝ戰ひ給はゞ、高名をも殘し給ふべし」と、おとなしく諫めける。皆一同に此儀尤に候とて、夫より東寺を西へ向日明神の前にあゆませ、山崎に著て伏見の樣子を聞くに、關白殿は高野へ登山し給ふと聞て、さてはいまだ御命に別儀なし、いかにもして御跡をしたひ、先途を見參らせんと思ふ間に、下人ども皆

德善院めにたばかられつる事の無念さよ、然にても弓矢取ん者の乘まじきは輿車なり。馬上にて有なば蹴ちらして通るべきものを。先藤の森まで輿を急げや」とて、さらぬ體にて過させ給ふに、伏見の方より增田右衛門尉長盛馳參じ、馬より飛下り御輿の前に畏り、「太閤以の外の御機嫌にて候へば、一先高野山へしのばせ給ひて、靜に御野心なき趣を仰せひらかれ候へかし」と申けるに、關白聞しめし、「吾も兼てよりかくこそと覺悟しつれば、今更驚くべきにあらず。只今腹切んは難きにあらず、無實の惡名をうけて死ん事、なんぼう口惜き次第かな」と、怒の涙にむせばせたまへば、長盛承り、「いかでか御腹めさるゝまでの儀に候はんや、一たんかやうに仰候も、日頃太閤の御氣質にてこそ候へ、頓て讒言せし輩も顯れ、元のごとくむつまじくならせ給はんに、心づよく忍びおはしませ」と、やうやう申すゝめて、警固の武士四方を取圍み、伏見の城を餘所に見て、大和路さして赴き給ふ御心のほど、推はかられて哀れなり。

其夜はいぶせき藥屋の內に御輿を入れ奉り、怪しの御膳さゝげ奉れど、御箸をさへ取り給はず、移りかはれる御身のさまを思ひつゞけ給ひ、いざよふ月を御枕にながめたまひて、

おもひきや雲井の秋の空ならで竹編むまどの月を見んとは

かくなん詠じ給ひて、翌る日の暮方高野山に到り給ひ、木食興山上人の方へ案內し給へば、上

是は石田、增田が輩か斯くのび〳〵の御沙汰に及び候はん、忽ち押寄せ御合戰に及び候べし。只何心なく、御參り候はんには、いよ〳〵御心も解させ給ふべし。今もし伏見へ押寄せ給ふ共、太閤重恩の士ども、百騎を以て千騎に當るべし。味方多勢なりとも國々の集り勢、何の用にか立候はん。只々御疑ひの重り給はぬ先に、御登城有て然るべし」と、理を盡して諫め奉れば、此儀尤と同じ給ひ、裝束をあらため御輿にめされ、何事も穩便なるにしくべからずとて、鎗長刀の道具をもさし置て、前後の御供三十餘人召し連られ、伏見をさして出で給ふ。

○秀次公登「高野山」

關白御輿を早め給ひ、五條の橋を打渡り、大佛殿の前をも過させ給ふに、何とやらん行くさきざき騷がしくひしめきて、遠近の人爰彼所にたちまよひければ、御供の人々申上ぐるは、「今は早伏見より討手の軍兵向ひたるとこそ覺え候へ。是より御輿をかへされ、聚樂にて御腹めされ候へかし」と議しける所に、あとより馳參りたる侍ども、「はや五條わたりの有樣を見て候へば、敵兵ことごとく入廻りて、還御などは思ひもよらず候」と申程に、關白聞し召し、「さては

で、「臣等元より存じ知りて候へども、御對面なき間はいつまでも御氣色も和らぎ給ふべからず。只々常のごとく御公達を御先に立られ、伏見へ御參り有て御心底を仰上られんに、いかでか仔細の候べき」と、くりかへして申奉れども、さすが御身に誤りやおはしけん、とかうの御いらへもなく、さしうつむきておはしける所に、又伏見より幸藏主といへる尼參りて、同じく言葉を盡し、御登城の儀を勸め奉れば、「さらば汝等は先へ參れ、やがて御出有るべき由」仰せ給ひ、「御輿を出せよ」などひしめき給へば、兩人、「さあらば御先へ參り候べし、構へて常の如く君達をも具し給ひて御參り候へ」とて、伏見をさして歸りける。二人の者の歸るをおそしと御次の間に控へたる木村常陸介、御前近く進み出で、「何とてか斯く云甲斐なき御所存にはならせ給ひしぞ。只今伏見へ登城候とも、御對面は思ひもよらず。道にて雜兵の手に御命を落し給ふ歟、左なくば遠國へ流され給ひ、御介錯申す者もなき御腹めされ候べし。迚も免れ給はぬ御命を、いつまで惜ませ給ふぞや。急ぎ伏見へ押寄せ、戰場に御名をとゞめ給へかし。左あらずば此聚樂城に楯籠り、御門を城中へ行幸なし奉り、一支支へ給はゞ、太閤も左右なう天子に弓引給ふ事は有る可らず」とゐだけ高に成て諫め奉る。時に阿波杢之介といふ者進み出て、「常陸介の申す所さる事には候へ共、太閤は世に御心はやき大將軍にましませば、君の御謀叛一定と思しめさば、いかで

繪本太閤記　七篇卷之四

○德善院幸藏主說ニ關白一

文祿四年七月八日、前田德善院は太閤の仰を承り、聚樂城に參り、秀次公の御前に出て、先涙をはら〳〵と流し、むせび入て候ひければ、關白怪しみ、「何事にや」と尋給へば、德善院やゝ涙をおさへて、「さん候、世の中は只よきをそねみ、あしきを歡ぶならひにて候へ。殿下の御身の上を讒言せんと計る者の候て、名なき文に御謀叛の思召立有る由をしたゝめ、種々言上申す者の候へば、はじめは御用ひもおはせざりしを、度々に成りて、さては御野心もましますか、何の遺恨のこれあるぞや、太閤には杖はしらとも賴み思し召す御方の、かゝる不思議こそ出來れとて、更に御涙せきあへさせ給はず」と申上ぐるに、秀次公大きに驚き給ひ、「こは思ひ寄らざる御疑ひ蒙るもの哉。我太閤の大恩をうけて、何の足らざる所ありてか野心を企つべき。たとへ逆心をさしはさむとも、誰か我に組すべきや。日本六十餘州の諸神は申すに及ばず、上は梵天帝釋、下は四大天王も照覽あれ。露ばかりの異心もなし」と、誓を立て陳じ給へば、德善院謹ん

繪本太閤記 七篇第四之卷 目錄

德善院幸藏主說關白
秀次公登高野山
秀次公以下生害
畜生塚由來

でか左計の大事を某に知らせ給ふべき。此上は心を附け御謀叛の有様を伺ひ、貴殿迄注進仕候べし」といへば、三成聞て、「然らば御邊は先普請場へ歸り、何氣なき體にて居給ふべし。後より上意を以て申入るべし」とて、田中は河内へ歸りけり。其後使者を以て田中を聚樂の新御殿の普請奉行と成し、關白の體を伺はせけるに、是ぞ定かなる事とてもなけれども、又不審なる事なきにもあらず、毎日見るほどの事を石田が方へ、きのふは兎ありて、今日は角ありてと知らせけるに、三成太閤の御前に出て、「關白の御謀叛はや疑ひなく顯れ候、兵部少輔方より昨日は斯く申越し、今日は又此儀を注進いたし候」など、尾に鰭を添て申上げけるに、太閤今は怒らせ給ひ、「其儀ならば急ぎ踏潰すべし。其用意せよ」と仰渡されけるを、三成諫め奉り、「當時伏見の人數を算るに、諸國の大小名大方本國に退き、御馬廻りの者ども彼是千騎には過ず候。軍は勢の多少には依べからず候へども、京都には兼て支度の事なれば、多勢にて用意有べし。さあらばゆゝしき御大事にや候はん、先前田德善院をつかはされ、欺きて招き寄せ給はんこそ、兵仗を動さず敵を亡す策にて候はん」と申しければ、一座の人々皆尤と同じければ、太閤頓て前田德善院を召され、委しく計略を申含め、聚樂城へ遣し給ふ。

「今度貴殿の御首は此三成が繼で候へ。此上は心の儘に長壽し給へ」といふ。田中是を聞き肝を潰し、且氣色を變て膝立直し、「こは不思議の事を聞物かな。當時日本の武士の内に、田中が事を讒言せん者は誰人ならん。御邊など今出頭して御前近く參るとて、武士の首を繼だるは、命をたすけたるはなんどと、詮なき事を言んより、罪あらば我首を討て上覽に入られよ」と、刀の柄に手をかけ、思ひ切たる有様なり。三成大に打笑ひ、「誰人か貴殿を讒し參らせんや。秀次公御謀叛思召立給ふ事微細にあらはれ、中村式部は病氣とて引籠れば、知らぬ事も有べし、田中兵部が注進せざるこそ曲事なれ。急ぎ呼寄せ腹切せよと仰附られ、御憤り深く見えさせ給ひしを、三成罷出で、御諚にて候へども、かゝる大事をいかでか田中に明して語り給ふべき。其上此兩人は度々諫言申上げぬれども御承引なきのみならず、御前をも今は遠ざけられ候由、つねづね承りおよび候。されども某まで内々申聞候事も多く候へども、かやうの御野心あらんとは努々存もよらず。今は思ひ合せ候事どもこれ有り候へば、此上田中と申合せ、いよ〳〵御ふるまひを伺ひ申べしとて、貴殿にかはりて申開き致せしにより、今日迄は事なく靜りて候。されば御身の首は某が繼たるにては候はずや」田中聞て再び驚き、「これは思ひもよらざる御大事を承り候ものかな。仰のごとく此頃は御前へも出る事なく、外樣同然に罷在候へば、いか

士急ぎ三成が前へさし出せば、文箱の上に石田治部殿と書て、誰とも名はなし。披き見る其文に曰く、

近き頃太閤様聚樂へ御成とて、御用意様々御座候中にも、北山にて鹿狩の爲とて、國々より弓鐵炮の者を選び、數萬人召上せられ候。是は全く田獵の御爲ならず、御謀叛とこそ見えて候。對面にて申度候へども、返忠の者と云れん事口惜く候、又申さで止候得ば、重恩の主君へ弓を引に似て候へば、此旨を存じ我名を隱し、如レ斯に候。已上。

と書きたりけり。三成是を見て心中密に歡び、急ぎ御前へ參り、此由言上に及びければ、太閤聞しめし、秀次何の遺恨にてかさる企をなしつるぞや。是は關白を恨める者の所爲なるべし」と仰ければ、三成謹んで、「寔に當時關白の御身において、何を不足にて御謀叛の思召立候べき。然りと雖計るべからざるは人心にて候へば、内々御糺し有らんに危き事は候まじ。田中兵部少輔は關白へ御附人に候へば、召上せて某透し尋ね申すべきや」と申すほどに、「汝が所存に任せ何事も隱密に取計ふべし」と仰渡さる。三成かしこまり、頓て宿所へ歸りしが、使を立て田中兵部を召寄せける。此頃田中兵部は津國河内の堤普請の奉行として、大和川の流を造作しけるに、俄の召に應じ伏見迄馳附しに、三成先己が宿所に招き、奥の亭に請じて私に申しけるは、

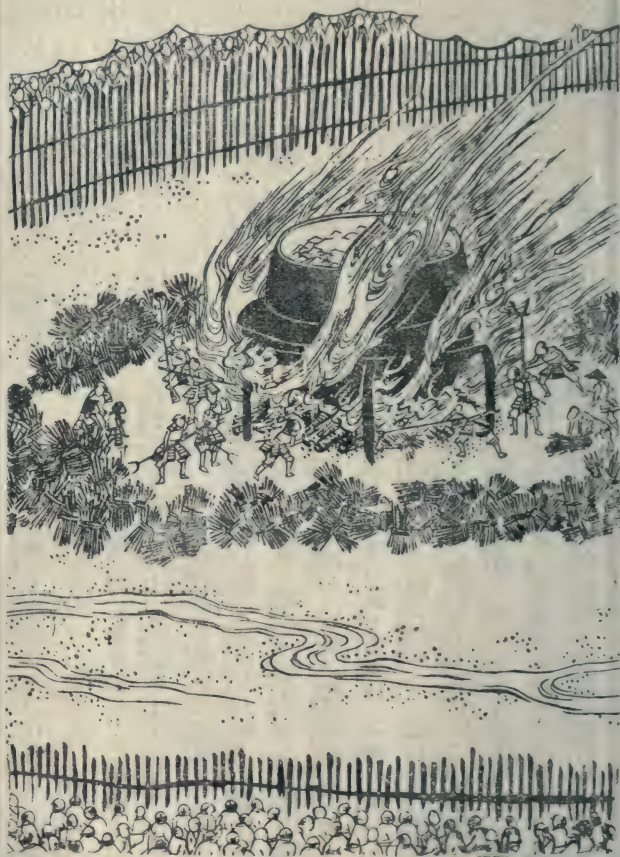
り道ゆく人を鳥銃にて討殺し、さま〴〵のあしき業のみ募らせ給へど、木村常陸介いかなる所存にや、更に其悪行を諫め奉らず、一向御謀叛を進め參らせしは、君も臣も時運の傾くしるしなりけり。此度石川五右衛門伏見の城中にて大事を誤り、獄に下りしと聞えしより、秀次公も木村も早身の上の大事なりと、内々合戰の手配り油斷なく用意ありしに、五右衛門秀次公の御事とては一言も口外せざれば、盗賊の罪に極り誅戮せられ、秀次公は事なくおはしけるを、常陸介猶もさま〴〵の謀計を巧み出し、太閤を聚樂の亭へ請じ參らせ、力者を伏て討奉らんと申す程に、秀次公はさしも大恩ある太閤へ、いかでかさる情なきふるまひをなさんやとて、御許容もあらざりしを、强て申進め奉り、文祿四年二月なりし、熊谷大膳を以て太閤へ申しけるは、「此秋の頃には八瀨、小原のわたりに狩くらを始め、御遊をなし奉るべし。若君御慰みのため聚樂の亭に成せ給はん事、御氣色伺ひ奉る」と申上たりけるに、太閤斜ならず御感ありて、「ともかくも關白の心にまかすべし」とて、大膳に太刀時服など下し賜り、御いとま賜ひければ、大膳拜して聚樂に歸り、しか〴〵と言上しければ、「さらば用意せよ」と俄に御待設の御殿など造營せられ、上を下へと返しける。爰に怪しき事の有しは、五月廿五日の夜、石田治部少輔が屋敷へ侍一人文箱をさし出し、「聚樂より參りて候、後刻御報を賜はるべし」と立かへれり。取次の

はれをまぬがれ、いかにもして五右衞門を救ひ出さんものと、見物の群集に紛れ猶豫ひしが、石川が通る時つと飛かゝり、警固の武士一人拔打に切倒し、五右衞門を引立去んとす「すは同類よのがすな」と、大勢取まきひしめく程に、今は是までと思ひて五右衞門に向ひ、「日頃の恩を報い候ぞ」と呼はりすて、涌が如き見物の中にまぎれ入て、行方知らず成りにけり。此者後加藤清正に仕へ、祿五百石を得て高名の武士となれり。扨も河原には巨釜三つ迄立て油を盛り、柴薪を積て焚けるほどに、焔天を焦し、煮る音雷のごとし、見る者肝を冷し魂をくらます。誠に焦熱地獄のありさまも、是には過じと恐しゝ。頓て五右衞門已下の盜賊を引來り、いましめの繩を其儘にて、熊手に引かけ彼釜の內へ投入れば、忽ち五體は朱のごとく變じ、七轉八倒して叫び死しけるを、稻麻竹葦のごとく寄集りし見物の男女老少、敢て目を定めて見る者なく、面を蔽ひ氣を失ふもの數を知らず。異國にては人を烹るの例多しといへども、本朝に於てはかゝる刑罪の有とも聞えず、自業自得とはいひながら、あさましき身の終なり。

○秀次公謀叛露顯

此時關白秀次公は、惡行いよ〳〵重過し給ひ、酒色に耽り佞人を愛し、夫のみならず櫓の上よ

巡見使と成りて水口、大垣を掠め、岩村にて上使を殺し、田丸にて大金を奪ひし事など、悉く上聞に達し、案外の剛盗世の見懲しにとて、三條河原に大釜を居ゑ、内に油を湛へ、二十餘人の屬手と共に烹殺すべしとの評定に一決し、文祿三年冬十月、洛中洛外を引渡されけるに、見物の老若男女雲のごとく集りて、あなあさまし、刑罪も多き中に、ためしも聞かぬ釜烹は、惡人ながら不便なりと、皆あはれを催しけり。京極通松原に森如軒といへる茶人あり、日來五右衞門に交りふかく、茶味を談じ會せる事度々なりしが、思はざりき、盜賊の魁首にて、釜烹の極刑に處せらるゝを、只今爰へ引來ると、往來の群集錐を立べき累地もなし。如軒夫婦は、あなむざんとて引かづき臥居けるに、五右衞門如軒が門前にて、警護の武士に向ひ、「暫く馬をとゞめ給はるべし。是なる家は都に名高き茶人のよし兼々聞及べり。終に知人ならねども、薄茶一つ所望したし」といふ。武士等其乞ふにまかせ、如軒を呼びてしかぐゝと申せば、「心得候」とて、頓て衣服をあらため、樂の茶碗に點てさし出せば、武士取て直に呑しむ。五右衞門大に喜び、「あら心よや、末期の茶なり」とて、北の方へ引れ行く。此後罪人を引る時の例と成りて、此家にて茶をあたへ呑しむとぞ。爰に五右衞門が屬手の中に田中兵介といへる功の者あり、此度の捕

三条河原刑場之図

長公叛臣の爲に弑せられ給へども、敢て啼く事なし。抑天下の民塗炭に苦める事久しければ、天より命じて絶倫の英傑を生じ、其國其民を保しむ。太閤のごときは天の命ぜる英雄にして、たとへ千鳥の香爐あらずとも、船頭與次兵衛、石川五右衛門ごとき浪民の爲にいかでか身を誤り給ふべき。是を天生〓烝民〓立〓君牧〓之といふ。

○三條河原烹〓五右衛門〓

去程に五奉行の面々商議ありて、下司に命て五右衛門を引出し、「太閤の寢殿へ忍び入り、殺害し奉らんと計る條、匹夫下郎のなす業ならず、叛逆の張本有るべし。明かに白状せよ」とさまざま拷問に及びけれど、「石川五右衛門といふ盗賊にて、普く諸侯の屋敷へ押入り、財寶を奪ひ取の外、何者にか頼れ候はん」とて、外に申す言葉もなし。されども太閤のおはします堅城へ忍び入る曲者、同類も數多有べしとて、日々に重き拷問にかけ給へども、少しもひるめる色なく、只大言を吐き司吏を罵り、傍若無人の有樣なり。しかるに河内國龍田越の山中にて、一人の賊徒をとらへ糺明せしに、其名は筑紫權六とて、石川五右衛門が手下の賊なるよし申すにより、頓て伏見へ引渡しけるが、此權六が白狀にて、惡徒の同類殘らず相知れ、諸方へ人を馳てとら

取刀して寢殿を見れば、大の男一人格子蹴破り椽側に立出たり。すはや曲者のがすまじと、仙石權兵衛追かけて、後よりむずと組だり、續て薄田かけ來り、利腕取て引倒せば、此物音に宿直の勇士、我も〳〵と馳參り、折重つて高手小手にいましめ、嚴敷禁獄せられける。此千鳥の香爐と申すは、駿河の太守今川義元が家に傳へし重器なりしが、今川家斷絶し、其子氏鄕歸降の時、信長公へ獻じ參らせしに、信長本能寺において光秀がために弑せられ給ひ、居城安土へは明智左馬介馳向ひ、金銀重器のこらず坂本の城へうつしけるが、秀吉公山崎に光秀を誅し、坂本に兵を進めて攻討給へば、左馬介今は防戰も詮なしとて、信長公御所持の重貴、目錄に添て秀吉公へ送りまゐらせ、切腹して終りける。衛の香爐も此中にありて、秀吉公の御手にふれられ、二なきものにめでさせ給ひ、名護屋御出陣の時も御座船に入て下向し給ひしが、船頭與次兵衛私に惡心を發し、太閤を失ひ奉らんと謀りし時も、此香爐聲を發して啼けれども、凶事を告る香爐とは、太閤更に心づき給はず、唯不思議の名器と思しけるに、御船既に覆らんとす、是によつて此香爐の凶をしめすものならんと、いよ〳〵御祕藏深く、晝夜御身邊を放ち給はざりしに、今宵再び靈異を顯し、危き殃難を免れ給ひしは、例稀なる寶器なり。これしかしながら太閤の威德に依れるものか、今川義元桶狹間の合戰に其身亡ぶれども、香爐曾て凶を告ず。信

によろこび、宵の間より伏見の城中に忍び入り、奥殿の廊下の端に身をかくし、太閤の形勢を伺ひけるに、寛活なるは例の事にて、折から登城の大小名、御側の近士小姓等とともに酒宴を催し給ひ、みづから高野詣の能を舞ひたまへば、御脇は前田德善院つかうまつる。猶興ある事どもかず〳〵終りて、亥の刻の鼓も響きわたれば、太閤も奥殿に入らせ給ひ、爰にても又松の丸殿其外の女中御前にまゐり、しめやかに酒宴し給ひ、今宵の泊番は仙石權兵衛、薄田隼人をはじめ屈竟の勇士十五六人、悉く御盃を下し賜り、子の刻過るころ漸く殿中靜りて太閤も寢殿に入らせ給ふ。五右衛門は宵よりのありさまを伺ひ見て、心の內慙愧にたへず、實にも天下の英雄とは此人の事なるべしと、我身の上をも引くらべて、兎角に思ひ居ける程に、はや丑滿の頃にや有けん、時分は今ぞと例の忍術を行ふに、とのゐの武士俄に眠をきざし、仙石、薄田がごとき勇士までも、壁により障子にもたれ、暫時前後を辨へず。五右衛門今は心安しと、抜足して寢殿を窺へば、太閤もよく寐給ひ、鼾の聲高く聞ゆ。仕すましたりと刀の柄に手をかけ、飛かゝらんとせし所に、御祕藏の千鳥の香爐卓に居ゑて御枕元に置せられしが、不思議なる哉此香爐、聲を發して鳴く事數聲、さしもの五右衛門、思ひがけなき事なれば、勇氣たるみてイみしに、太閤むくと起立給ひ、「宿直の者誰かある」と召さるゝに、はつと驚き仙石、薄田追

君誕生ましくてより、御父子の間疎々しく成らせ給ひ、姦人石田、增田が輩淀殿の妒心をさそうて、秀次公を失はんと策る事既に事急なり。爰において某謀叛をすゝめ奉るといへども、秀次公には父子の樣を重んじ給ひ、曾て某が言に隨ひ給はず、所詮人知れず太閤を討奉り、石田が輩を亡んには如じと心を定め、主人にも告ず習ひ得し忍術にて、大阪伏見の兩城に忍び入り、太閤をねらひ奉れ共、四海の棟梁、いかでか心易く討奉るべき。十重の圍み百重の固め、我々が忍術のおよぶべき所にあらず、手を空くして立歸れり。つらく足下の藝術を考ふるに、忍術においては我に勝る事百倍なり。太閤を討奉り、秀次公を天下の武將と定まるらさば、足下の望み事において何事か叶はざらん。我元來貴殿の魂を試みて、かゝる大事を口外せり。二言なく諾ひ給へ、領承なくばさしちがへて死すべし」と、面色かはつて詰寄せたり。五右衞門聞て大に笑ひ、「此事何よりも心易し、太閤とても鬼神にはあらず、我と等しき人間なり。我粉骨を盡し忍び入らんに、いかなる堅城要害なりとも物の用には立べからず。頓て吉左右申さんに、心ゆりて待給へ」と、事もなげなる有樣に、常陸介も歡びに堪へず、閑談數刻に及び、別れて館へ歸りける。此頃は朝鮮國と和睦のあつかひあらまし調ひ、太閤にも名護屋の御陣を前田宰相にまかせおきたまひ、伏見の城に歸り給へば、五右衞門も便よしと心

地の際に至り、漸〻に塀も越え、唐門の下に脱捨たる己が衣類大小を小脇にかゝへ、片手には笏を持ち、長き裾をうしろへ引ずり、跡をも見ずして歸りける、姿は大臣、所作は追剝、をかしかりけるありさまなり。

○仙石薄田生二捕石川一

扨も石川五右衛門は、禁門の中に忍入しが、本意を達せず、口惜き事かなとさまぐ〜工夫をこらしけるが、我無位無官なるが故に深く後宮に入る事能はず、此上は朝廷の官人と成て位階を申下し、扨本望を遂べきものをとて、木村常陸介に寄て此事を謀る。木村又心中に大望あれば、石川が望を許諾して別れたるが、事は大畧にくはしくしるす其後木村石川が宅にいたり、官位を望む所以を問に、五右衛門先に内裡へ忍び入し始終を委く物語り、「關白の御計ひにて三位の中納言を下し給はらば、此後關白の御用と候はん時は、命を捨て報い奉るべし」と云ふ。爰に於て常陸介、五右衛門が耳に口を寄せ、聲をひそめて申けるは、「足下の望み何よりも安し、今某が賴み參らする儀にしたがひ給はゞ、官女宮女は言に足らず、女御更衣といふとも心の儘に從ふべし。其故は當時關白秀次公國家の政事を攝し給ひ、太閤の御遺跡に定り給へ共、近き頃淀君の腹に若

ふとて、前後の供人灯燈をかゝげ來かゝり給ふを、五右衛門見て究竟の事なりと悦び、走り寄て輿脇の士二人を拔討に切放せば、皆一同に仰天し、乘物も其所に打捨て、蛛の子をちらすごとく、四方へばつと迯失たり。さも有らんと打笑ひ、乘物の戸を引明れば、中納言殿は生たる心地もましまさず、うつ臥になりて泣居給ふ。五右衛門やをら聲して申けるは、「さな恐れをのき給ひそ、我害心ありてかくするにはあらず。唯其冠裝束を剝取のみなり」と云まゝに、首筋取て引出し、黑き袍、緋き下がさね、淡むらさきの指貫、綾の下服、白練の肌著、笏冠もろともにくる〳〵と剝取り、裸なる中納言殿を乘物の內へ再び押入れ、暫く此所に冷氣こらへ候べし。頓て家中の者が迎ひに參り申さん」といひ捨て、其所を立去り、唐門の下にて彼裝束を著し、冠を頂き、手に笏を握り、我ながらみやびたる粧ひかなとほゝ笑つゝ、隱身の法をつかひ、日花門まで忍び入しに、禁中は三種の神寶を安置し、いともかしこし、天照太神よりとこしなへに神孫の傳はりまし〳〵て、末の世とは申せども、いかでか神威靈德の空しからんや。忽ち五右衛門五體すくみ、眼暗くなりて、咫尺の間も見えず。さしも大膽不敵の石川五右衛門、大に驚き肝を冷し、あな恐ろし赦させ給へ、再び爰に來るまじとて、身をかへして歸らんとすれども、足なえて心にまかせず、或は尻這して見、或は高ばひして退き、辛うじて築

らさまには見えず。心のこして己が家に歸りけるが、空灶の匂身にしみ、優にやさしき有樣のわすれがたく、その夜つら〳〵心に思ふは、我は金銀に充ち、美女に事を缺ずと常々思ひ居りしが、下賤に生れて高貴の有樣をしらざれば、あやしの下種女、賤しき金銀のみを見て足れりと思へるこそ、我ながらはかなかりけりと慚愧して、召かゝへたる妾三人ありしを一時に追出しぬ。扨も其後には外の色には目もとゞまらず、內裏女郎を妾になしてんとさま〴〵工夫しけるが、大內に住る典侍命婦の女房は更なり、天子の寵を蒙る皇后皇妃といへども、獨り住の寡婦におなじく、男子たる者の往來を禁じ、たま〳〵天子の御幸し給ふを旱魃に雨を得たるごとく、誠に一日の情に百年の身を忘るゝと聞り、我習ひ得し忍術隱身の法を以て、大內の對の屋に忍び入り、彼三輪の神のさゝめ事にならひ、夜々通ひ戲れんはいかばかりの歡樂ならんとて、其夜三更の比、大膽も上の御所の築地を伺ひ、しのび入らんとためらひしが、又こゝろに思ふは、此姿にて對の屋へ思ひがけなく入たらんに、官女ども常に見なれぬ大小羽織、驚きて叫びなば頗る興を失ふべし、渠等が目なれたる工家の姿に粧ひなば、恐れずして添臥もせめ、攝家清花の館に忍び入り、冠裝束を盜み取り、其うへにて思ひを遂んと、引き返して轉法輪殿の門前に佇み、築地を越んとしける所に、世尊寺中納言殿內の御物語に夜を更し、只今歸館し給

繪本太閤記　七篇卷之三

○五右衛門忍二入內裏一

文祿二年秋の頃より、石川五右衛門再び大佛の門前に立かへり、此度は亂行放蕩のふるまひを止め、只何となく暮しければ、立入る友どち已前とは品かはり、殿下の御內にも不破伴作、木村常陸介など折々入り來りて、武術兵談に時をうつしぬ。一日五右衛門吉田山を遊行せしに、紅葉せし樹の下に女車を立させ、むらさきの幕の間より五つがさねの小袿、くれなゐの袴もほのめき見ゆるにぞ、攝家か又は大臣家の姬君ならんと奧ゆかしく、たちやすらひてながめ居りしに、上﨟にはあらぬ末の女房と見えて、白綾の肌衣に平絹の袴裾短に附たるが、薄色の短冊をさゝげ、車副の童一人具して社司が家へ行たるは、姬君の御歌など賜ふものにやといよ〳〵なつかしく、其女房の跡に附行ほどに、何心なく見かへりたる顏のあてやかなるに、五右衛門は只まばゆきばかり心にしみ、末の女房すら斯く艶になまめきたり、上の女房姬達などは嘸なみやびたるよそほひならん、見まほしと思ひて、幕の傍をそれとはなしに往き來すれど、あか

繪本太閤記　七篇第三之卷　目録

五右衛門忍入内裏
仙石薄田生捕石川
三條河原烹五右衛門
秀次公謀叛露顯

實に盗人は國の鼠なり、豈取盡す期これ有んや」と言て刑につきたり。是を以て見れば、此塔上に住し盗賊は別人なりや、又は石川が世をくらますの言葉なりや、其實は知るべからず。

灰燼と成りし時だにも、燒殘りしめでたき寶塔なるを、盜賊の爲に燒失はん事も口惜き次第なりとて、塔のめぐりを打かこみ、さま〲評議なしける折から、五重目の椽側にかの盜賊顯れ出で、高欄に臂を持せ、遙に下を見下し、莞爾と打笑ひ、鐘をつく計の大音にて、「あな便なの蠱めらがふるまひかな。我は日本盜賊の天子たり。今日此を去とも、又明日は爰に來らん。或時は不二の山上に眠り、又時として松島、象潟の風景を見て酒宴の興をもよほし、金銀は天下皆我ものなり、美女は天下悉く我妾なり。只我手の內に入ざるものは豐太閤一人のみ。然るを況や汝等匹夫の身として、我を捕へんなどとは片腹痛き事ならずや。試みに我手並を見て、末代の語り草になせよ」とて、飛上つて垂木に手をかけ、はねかへると見えしが、忽ち屋根の上に二王立し、左の手に塔の鎖を取て引ちぎり、右の手に大太刀を拔てさしかざし、數十丈の塔の上より飛鳥のごとくとび下りしは、目ざましかりける行跡なり。數多の軍兵塔のめぐりを取卷て、此形勢に肝を冷し、是人間にてはよもあらじと、早逃出す者もあり、上を下へと騷ぐ所を、件の盜賊太刀をかいふり、目たゝく內に十四五人切倒し、北の方へ走りしが、深山に入て行方を知らず。是を世に石川五右衞門が籠し塔なりといひ傳ふれど、五右衞門が誅せらるゝ時、「我運つたなく刑罪にあうて死するといへども、猶根來の大塔に籠りし天下無雙の盜賊あり、

別ん」五右衛門答て「我若年の時より根來寺の大塔五重目に、住べき所を構へ置たり。我を見んと思ふ者は、巽角の柱を手を以て叩くべし。よく通じて上に聞ゆ」屬手の者共是を聞て大きに驚き、寔に魁首は凡人にあらずとて、互にいとまを告て、思ひ〳〵に立さりける。其明年文祿癸巳の年、紀州根來寺五重の寶塔に盗賊住て、近村近鄕を犯し騷すよし、紀州一國其沙汰のみいひはやらせければ、根來寺の傍は往來の旅人も絕て、白晝といへども物すごく、是ぞ稀代の珍事かなと、國守中納言秀俊卿より、物馴たる武士三四人を密に根來寺へ遣し、事の實否を見しめ給ふに、一人の男身の長六尺計なるが、彼大塔を去る事十餘間にして、桿棹の有る其柱にさら〳〵と登り、其所より大塔の五重の屋根にひら〳〵と飛越す形勢、何樣人間業には有ず、天狗などの住にこそと、舌を卷て言上せり。中納言殿安からぬ事に思召し、我知る國の內に斯るえせ者の住んに、知らず顏して有なんは權勢なきに似たり、塔の下より火を放ちても召取らでは叶ふまじと、直に三百人の兵を集め、根來寺の衆徒と申合せ、同時に彼塔の廻に押寄せ、一同に鯨波を作り、柴薪を積上て、一時に燒崩さんと計ける。然れども五重の屋根は中空に有て地を去る事遙なれば、彼盗賊は有りやなしや、若も他行して有なんには、いたづらに此塔を燒すてなんも勿體なし、去る年秀吉公此根來寺に軍勢を差向給ひ、合戰に及びしに、堂字悉く

又右衛門が属子等四方へ追散する図

條、委細言上におよびけれど、一應にて落著すべき事に非ざれば、婦女の類までを召出され、さま〴〵拷問にかけられければ、上使の到著は一統同事の申條なれども、藏本甚野右衛門が主人を弑逆せし事及び二萬兩の金子を送りし迄明白に言上しけるに、上使殺害の儀は盜賊の所爲に極りぬれど、變死を病死と僞り、剰へ大金を賄賂して家督を願ふの段、重々不屆の御沙汰に落て、岩村五萬石を召上られ、家中殘らず追放仰附られ、田丸の家永く斷絶に及びけるは、是非もなかりし次第なり。

○根來寺寶塔住₂盜賊₁

去程に大盜石川五右衛門は、岩村にて大金を掠め、山中に寄集り相議して申けるは、「水口、大垣、岩村にて最早餘程の得附たり。あこぎが浦にあらねども、度かさなれば京都及び名護屋迄討手の軍兵も來るべし。まづ金まうけも一兩年は相休み、此金子配分して、銘々榮花をたのしみ候へ。多人數にては人目もいぶせし、我は一人國々を遊周し、來年秋のはじめより、紀伊國根來寺にて會合すべし。いざ〳〵人の咎めぬうち、分散せよ」と下知しければ、筑紫權六問て曰く、「魁首紀州の根來寺には、何の宿坊に逗留し給ふや。我々が會せん便りに名をとゞめて相

しく頼み奉る」と、兩人互に頼み頼まれ、座を立て退きけるが、田丸の家中俄に金子の調達、用金は勿論、一家中の貯へ金をも集めぬれど、さすが大金の事なれば、今少し不足なりとて、領分の町人百姓へもそれ〴〵上納を申附け、辛うじてとゝのひければ、翌朝件の小三郎を招き、金子調達仕る間、御納手下されかし」と、彼二萬兩を差出せば、小三郎大きに喜び、「御心配の段、さぞ大七郎滿足せられ候べし。當家の繼目においては少しも心を用ひらるゝに及ぶまじ。上使の役目遲滯せんはあしかるべし」とて、彼黄金を持て石川が前に至り、何事か談し合しが、大七郎頓て權之作を召寄せ、「中務が病死相違なき段見屆相濟む上は、まかり歸りて此旨言上に及び、跡目相續の儀よろしく執計ふべし」と申すにぞ、田丸の家中一同に有難き旨御請申せば、「上使の役目相濟む上は、無益の滯留京都への恐あり」とて、早其夜供廻を申附け、寅刻に岩村を立て、飛がごとくに急ぎける。扨も田丸の家中は、首尾よく上使發足の上はとて、主人の葬禮をいとなみ、伊澤が二男を家督となし、追て上洛を遂べしとて、其評議とり〴〵なり。然るに數日を經て、上使福原大七郎は、岩村領にて上下のこらず斬殺されし趣京都へも相聞え、五奉行の面々大きに驚き、上使を殺害し上を恐れざる叛逆人、きびしく詮議有べしとて、田丸の家中女童に至る迄、悉く召し出され、糺明に及びければ、御上使御見分相濟み、家督相續仰附らるゝ

く、身をふるはし答けるは、「實に尊命のごとく、主人中務横死の事かく迄委しく御存知の上は、包み隱すとも詮なき事にて候。此度の御上使、仁心深き福原殿の乞請て下向下さるゝ段、いまだ當家を弓矢神の見捨給はぬ御計ひにやと、一家中は申すに及ばず、下々の百姓迄此上の悦びや候べき。哀れ御上使の御取計ひにて、當家恙なく相續の儀御宥し下さるゝやう、偏に乞願ひ奉る」と、紅涙にむせび賴みけるに、小三郞膝をすり寄せ、「先にも申す通り、武士の身の上は相互、急難を救ひ家名相續を希ふ事は、誰か違ひの候べき。爰に一つの物語あり。主人大七郞殿去々年の春、秀次公の御用金二萬兩を拜借致され、勝手の不如意なるを償はれ候ひしに、此節秀次公より右の金子俄に調達し差上べき旨、日限は當月三十日にせまりたり。此金不調達においては、主人大七郞は切腹いたし、家名相續も覺束なし。爰を以て某をはじめ一家中の者ども、晝夜心を痛むる事、貴殿の今の御心底と何れか勝劣の候べき。當家は福裕の大名、當時二萬兩の金子借用下さるゝにおいては、大七郞も命全く、田丸の家名も恙なく、跡目相續兩家の歡び何事か是に勝らん。實に兩全の計、よきに計ひ給はるべし」と、辯舌にまかせ誠しやかに物語れば、權之作も餘儀なき事に思ひ、「何は格別、當家の浮沈只此儀にかゝる上は、家中一統申談じ、是非々々二萬兩調達いたし、御用に相立申べし。當家の家督相續の儀、よろ

まゝに奪取り、京都の上使なりと僞り、岩村さして急ぎしは、例稀なる剛盗なり。人も殘るものなし。五右衞門是を見て大に悅び、自ら其馬にまたがり、鎗長刀沓籠に至る迄其

○田丸之家斷絕

石川五右衞門上使なりと僞り、岩村に到著すれば、田丸の家老用人半途に出て迎ひ奉り、恭しく城内へ案内し、客殿に請じて饗應善美を盡し、内々供廻の役人に申談じ、黃金をちらして賄賂し、首尾の全からん事をのみはかりけり。此時上使の近習の士に仕立たる陸奧小三郎とい ふ惡黨、田丸の家老中尾權之作といへる者を一室へ密に招き、聲をひそめて申けるは、「此度中務殿病死の儀、其實は家臣藏本甚野右衞門が弑逆の趣、主人大七郎仔細有りてよく知たり。然るに聚樂御殿においての御評定にも、何さま事有げなる家督の願なれば、見屆の檢使さし越さるべき旨に定りし時、主人福原大七郎笑止の儀に存ぜられ、武士の身は相互、中務横死の趣き白地に上聞に達しなば、田丸の家滅亡に及ぶべきを歎き、所存有て上使の役儀を乞請け、遙遙當城へ赴かれたり。今日に至りては田丸の家の危き事、風前の燈火より猶甚し。主人大七郎が一言にて、或は恙なく或は滅亡せん、いかゞ思ひ給ふや」と云ふに、權之作面色土のごと

餘人、其身は馬に打乘て、岩村をこゝろざし馳ける所に、石川五右衛門夫と見るより福原が馬前に頭を下げ、「田丸中務が家來進藤喜三郎と申す者にて候、御上使御迎のため是迄參上、御案内仕るべし」と謹んで陳けるに、「叮嚀の至り案内すべし」との仰に從ひ、馬前に先立ち脇道へ牽行ども、かゝる姦計の有らんとは神ならぬ身のいかでか知らん、終に五右衛門が案内にて、左右の岸高く、只一筋の山路にこそはかゝりける。兼て此所に石川が同類七十餘人埋伏して待けるに、時分はよしと福原が馬の前後を取かこみ、一言の問答にも及ばず、拔つれて討てかゝり、早五六人は斬伏せたり。大七郎大きに怒り、「當時關白殿下の御使たる某に狼藉を働くあぶれ者、山賊にてこそあらんずれ。召し捕へて大罪に行はん」と家來に下知し、自ら大刀をまはして切捨んとしける所を、五右衛門聲をかけ、「かゝる盜賊原に上使の自ら手をおろし給ふに及ばず、某に御まかせ候へ」と、大太刀眞向にさしかざし、討てかゝると見えしが、立寄て福原が首を忽ち宙に討落しぬ。是を見ていとゞさへあわてふためく中間下部、肝を冷し魂をちらし、道を求めて迯んとすれど、左右は屛風を立たるがごとき切岸にて登る事能はず、前後には賊黨の大勢白刃をふつて固めたれば、誠に網中の魚と等しく、皆一同に聲を上げ、「命ばかりは御たすけ候へ」と、土にひれふし泣けれども、元來無慙の賊等なれば、かたはしより切殺し、終に一

有けるが、病體も次第に重り、元來世繼の男子なければ、内室の親族伊澤兵庫介が次男を猶子に定めんと、一家中其評議とり〴〵なりしに、家臣藏本甚野右衛門といふ者叛逆を企て、中務の病羸たるを幸に、己が妾腹の子を以て主人の子なりと僞り、國家を押領せんと計りけるを、病中ながら中務少輔是をはかり知り、甚野右衛門を近く招き、物語する體にもてなし、短刀を拔て脇腹を一刀さしたれども、長病に手足も自由ならず、突貫く力もなくて、僅に薄疵をおほせてけり。甚野右衛門、扨は我叛逆をさとられたり、今は陳ずるとも益なしとや思ひけん、病勞れたる主人をはたと踏倒し、短刀を奪うて心下を突貫きたり。此物音に驚き、次の間に控へし若者七八人走り來り、此有樣を見て一同に拔合せ、甚野右衛門を寸段々々に切捨たり。されば家中の者相議して、中務が横死を隱し、俄に秀次公へ使者を以て家督相續の願書を差出し、引續て中務が病死の旨を訟へ奉る。是に依て聚樂にてもさま〴〵評議有けるに、中務が死去何やらん疑はしき事に思召れ、病死見改めの檢使として福原大七郎を岩村の城へ差越給ふ。時に石川五右衛門は尾州路にありて此事を伺ひ聞き、屈竟の事こそ出來れり。見よ〳〵大金を得て汝等にも配分させん」と、計略をよく〳〵示し合せ、其身は岩村よりの出迎と號し、上使の來るべき道筋に出て待合せたり。斯る謀計有りとは夢にも知らず、上使福原大七郎、上下の供廻三十

れたれば、巡見すべき謂なしといへども、出迎に來て望めるものならば是より直樣巡見すべし。此事名護屋表において御咎もあらば、汝が方より願ひ出し故、止む事なく檢見致せし旨言上すべし。直に案内仕るべし」と嚴に申渡せば、杢之進大におそれ、「全く御諚もこれなきに、此方より御見分を願ひ奉るには是なく、只上樣を重んじ奉り、旅行の御勞をも休め奉らん小臣が志に候へば、御巡見の儀は御免下されし、暫時御休息有て御發駕なし下さらば有難き」旨、平伏して言上すれば、五右衞門少し面を和らげ、「此度の巡見隱密の上意なれば、用なき出迎ひ迷惑に存ずれども、希ふに任せ旅亭に一宿を明し、巡見の事は明日の汰沙に及ぶべし」とて、小關村といふ所に其夜は泊りぬ。大垣の家中毛を吹て疵をもとめしと彌敗亡し、再び人を馳て水口のやうすを聞合すに、何事もたゞ賄賂のみにて相濟よし聞えければ、少し心を安んじ、多くの金銀を以て上下の役人に賄賂ければ、思ひの外に首尾よく相濟み、大垣を立て尾張路さして赴きける。

○五右衞門斬二上使一

爰に濃州岩村の城主田丸中務少輔は老病になやみ、名護屋御陣の御供をも免ぜられ、在國して

供廻り萬端ぬけめなくとゝのひければ、先長束大藏が領地江州水口の城に到り、かたのごとく謀計を行ひけるに、國守大藏は名護屋表に在陣し、國家老長束七郎右衛門、高繩右近等種々に相議しけれど、兎角太閤よりのかくし目附とあれば、首尾よく巡見相濟ずんば、主人の御爲あしかるべしと評議一定し、内々そこばくの黄金を以て彼菅沼主水と名乘し旗本をはじめ、上下の役人へこと〴〵く賄賂し、とかく御前體よろしく御執成頼み奉るよし叮嚀にもてなせば、萬事は件の前驅せし役人が計ひにて、事なく水口も立て、夫より美濃路へさして急ぎける。美濃の大垣の城主は伊藤長門守と申せしが、是も名護屋表へ發向して、家老信樂李之進國の政事を領り居けるが、兼て水口の家中とむつまじく交りければ、美濃路巡見においては究めて大垣に至りなんと、水口より密使を以てしか〴〵のよし知らせければ、信樂李之進太閤よりの巡見と聞て大に驚き、取物もとり敢ず途中迄出迎けるに、彼巡見使と見えて供廻美々敷人をはらうて進み來る。李之進はるか地上に平伏し、「夫へ見えさせたまふは太閤樣よりの御巡見使菅沼主水殿にて候や。大垣の城主伊藤長門守が家來、信樂李之進御出迎の爲參上」と謹んで申しけるに、五右衛門僞つて大きに怒り、「主人主水太閤より密々なる命を蒙り、御書付を以て國々を巡見するに、此方より案内もせざるに出迎とは何なる道理ぞや。大垣の領分は太閤よりの御書付にも

也。其中に洛東大佛の門前に獨住する石川五右衛門は、彼前野が金銀を若干奪取り、屬手の者と配分し、世の中の困窮せしには事かはり、麗しき婦女を數多召かゝへ、晝夜に人を集めて酒宴を催し、花に興じ月にうそぶき、青樓に登りては艶なる妓婦席上に所せくつらなりて酒宴を助け、營める產業もなくてかゝる遊宴に財寶を散しぬれば、今は人の眼中に疑なき事能はず、兎角の議論にも及びければ、一先都を去て人口を塞んとて、一つの計略を作り出し、屬手の惡黨を集めて申けるは、「當時諸方の國々軍役に苦しめられ、上には非義の政道を行ひ、下は私欲にして郡主國守を犯し掠む。此時に乘じ我々太閤の命なりと僞り、國々を巡見し、民を虐げ課役を增すの惡政を糺し、直に太閤に訴るよし披露せば、己が非道を蔽んとて、賄賂を以て取扱ふべし。其時機に望み變に應じ、辯口をふるうておびやかさば、必ず過分の財寶を得べし。二つには我々大勢長く京中に徘徊せば、久しからずして災を引出すべし。今宵の中に用意を調へ、思ひ〳〵に出立ち、大津の驛にて會合すべし。とく〳〵」と下知すれば、銘々魁首の命に從ひ、二人三人打連れて大津へこそは出立けり。五右衛門は召つかひの女原に悉くいとまを遣し、金銀を分ち與へ、其身も京を立て大津に至り、此所にて裝束を改め、松波友九郎といへる者年齢恰好此度の主人役と定め、太閤の御旗本菅沼主水と名乘り、五右衛門は前驅の役人にやつし、

賊の所爲なるかと、あきれて更に詞さへ出ず、默然として居たりけるが、但馬守大息つきて、「惡き盗賊原がふるまひかな、草をわかつても探し出し、寸段になして恨をはらすべし。さはいへど武夫の家に生れ、不肖なれども諸侯の數につらなる身の、夜盗の爲に透し出され、家來を討れ財寶を奪れしと人口にかゝりては、我家の滅亡なるべし。かまへて此事他人に洩すべからず」と申合せ、扨友右衛門が死骸をも密に取入れ、事なき體にて靜りけるが、内々人を分つて盗賊の手寄やあると吟味すれども、更に其便もなく、よく〳〵思ふに、大勢の徒黨といひ、兵具を帶せし盗賊、都近邊には住居すまじとて、東國西國南北の國々へ、多くの人を出して探らせけれ共、是ぞと思ひあたれる事とてもなく、徒に年を經りける。

○五右衛門僞巡見使

天正十九年、秀吉公關白職を御猶子秀次公へ讓り給ひ、翌文祿元年春三月、日本の軍勢を擧て大明朝鮮を誅戮し給ふ。事は太閤記六篇にくはしく見えたり是によつて國々の諸侯或は朝鮮へ渡海し、或は肥前の名護屋に在陣し、五畿七道悉く空虚と成り、日々月々の兵粮運送、諸事の費に都鄙一同に困窮し、酷吏は課役を增して百姓を虐げ、百姓は又未進をさめず、取々物騷がしき世の中

歡びや候べき」と、一統に祝し申すにぞ、但馬守大きに驚き、「こゝは心得ぬ今宵の首尾哉。某道中において曾て狼藉者の妨なし。伏見に到り石田治部少輔が屋敷に至り、秀吉公の御召によりて參上の旨申上しに、治部少輔甚だ不審し、殿下の足下を召寄給ふ事いまだ不聞、ことに某が家來に島六郎右衛門と云者なし、取次の者の聞あやまり歟、但し醉狂の者の所爲なるべし、何にもあれ殿下の御聞に達しなば、御召もなきに夜中の登城、御疑ひを蒙るの端なるべし、三成は知らざる體に有べき間、早々歸城然るべしと、案に相違の事共にて、只今罷歸る所に汝等が申條、旁以て不思議の次第、何者の仕業なるらん」と、沈吟して有ければ、家中の武士ども仰天し、何さま是は狐狸の爲す所か、若や天狗などのしわざならんと疑ふ者も多かりけり。先急ぎ京都の屋敷に歸り、靜に事を糺すべしと、一家中打連て、もみにもんで千本通りの屋敷へ立かへれば、夜はほの〴〵と明にけり。扨表門を叩き、「主人の歸りぞ」と呼はれ共、敢て一言の答る者なし。但馬守彌心をいらち、裏門へ廻り見るに、扉開けて番人見えず、こは珍事よと一同にかけ入り見れば、戸障子は踏碎き、器物調度も引亂し、侍どもは悉く高手小手にいましめられ、淺ましき有樣に、但馬守大きに怒り、「何物か込入てかくのごときの狼藉をなせしや、巨細を申せ」と罵るにぞ、面目もなき顏を上げ、有し事ども詳に言上すれば、扨は盜

繪本太閤記　七篇巻之二

○大盗隱而不レ顯

象は歯有て以て其身を焚る、財あればなりといへり。前野但馬守も家貧しく困窮の大名なりせば、かゝる謀計にもあたるまじきに、秀吉公の恩顧其身の倹約にて、巨萬の財寶を貯へしほどに、却て今身に殃を引出せり。寔に財多きは身を護るに害ありとは、斯る事を申すならん。扨も前野が家中の武士は、早打の注進に驚き、主人の安否心元なしと、息を切て藤の森の邊まで駈つけたれども、更に合戰の體もなく、夜もいたく更ぬれば、寂寥として人音もなし。怪しみながら行く道中に、跡押の中間兩人が死骸あり。扨は此所にて騒動有し物ならん、去にても主人の御身の上覺束なし、伏見迄馳付て事の樣子を尋ねんものと、又馬を走せて急ぐむかふより、前野但馬守同勢引具し、二つ引の相印せし高灯燈おし立させ、歸り來るを見るより、家中のめん〳〵馬より飛下り地にひれふし、「狼藉者數多道を遮り、兵具を以て戰に及び候よし、足輕共が注進に驚き、取物も取あへず、後詰のため馳參り候所、恙なき御顏色を拜し、此上の

繪本太閤記 七篇第二之卷 目錄

大盜隱而不顯
五右衛門僞巡見使
五右衛門斬上使
田丸之家斷絕
根來寺寶塔住盜賊

眼前奥方迄いかなる憂目にかゝり給ふやと、嘆きの餘りに、心ほそく思ひ給ふべし。無念さいはん方もなけれども、やみ〳〵用金の貯へたる所々をそこよ爰よとをしへければ、五右衞門悦び、屬手に下知して悉く取出させ、具足櫃の蓋を開けば、内に萌黄にほひの胴丸の鎧あり。五右衞門牽出し傍へ投捨て、其空櫃へ黄金を取入るに、都て是三萬餘金、今は十分の勝利なり、いざ凱陣を催すべしとて、手下の人數を改め、かのよろひ櫃を數十人にてかき荷はせ、裏門よりしづ〳〵と退きしは、身の毛もよだつ行跡なり。前野が一家中無念止むべからざれども、大勢といひ强敵なれば、誰か一人追行く者もあらざりしに、奥附の武士に木野川友右衞門といふ者、此時七十有餘の老人なれば、切て出て防ぐべき力もなく、おめ〳〵隱れ居たりしが、きつと思ひ出して、此强盗が歸るをしたひ、其住所を見とゞけなば、後日に詮議の一助ならんと見え隱れにしたひ行きしに、五右衞門は不雙の者にて有りければ、斯る事もや有らんと、只一人跡にさがり、町家の軒下に忍び居けるが、案に違はず、老人一人跡に付て來る有樣、郊際の出口にてやり過し、後より大袈裟に打放し、心しづかに引取ける。

せずば捨置くべし。遮る者は討はなせよ、心しづかに亂れ入り、力限りに手柄せよ」と、指揮の下より數多の賊黨、むら〳〵と亂れ込だり。此時前野の家中には、老人又小兒の類、主人の安否心元なく、風の音にも氣配りする折から、夜討とおぼしき大勢込入たれば、南無三寶、曲物ござんなれ、遁すまじと面々手鎗追取突きかゝるを、鬼をもひしぐ盜賊ばら、矢庭に三四人斬倒し、殘る者は踏付てくゝり上げ、大將五右衛門が前へ引すゑたり。是を見て云がひなき中間下部はふるひわなゝき、逃出んとあせれども、四方の門々には拔刀を取て固めたれば、一人も出る事かなはず、或は緣の下又は雜具部屋の内に隱れ、更に活たる心地もなし。五右衛門館の中央に具足櫃を据させ、其上に腰打かけ、眼を配つて四方を見れば、奧の方に女原三十人ばかり但馬守が夫人を守護し、銘々長刀小脇にかい込み、寄らば切んと身構へたり。五右衛門女どもには目もかけず、搦たる侍共を前に竝べ、一人の侍が首筋を鎗の石突にてしつかとおさへ、大音に申やうは「汝が主人と賴む但馬守も、藤の森にて搦め置たり。主人を助んと思ふ忠節の心あらば、但馬守が貯へたる用金の有所をこと〴〵く申べし。左なき時は但馬守が女房をはじめ、一家中の男女老少のこりなく撫斬にし、家財金銀一切のものを持歸り、藤の森にからめ置たる但馬守も討殺し、前野の家斷絶させん。主人の命と金銀と何れか重き、はや〳〵用金

邊迄いそがせ給ふに、腹巻に身を固めたる武者百騎ばかり、鎗ぶすまを作つて道をさへぎり、一言の論にも及ばず無二無三に突來る。夜中といひ不意の事なれば、近習の壯士拔合せ戰ふといへども、或は深手を蒙り、殿樣にも鎗を取てさゝへ給へども、敵は大勢ものゝぐはしたり、今はかうと相見え候。我々兩人跡供に候ひし故、馳歸りて注進仕る。はや〳〵御加勢有りて然るべし。殿樣の御安否心もとなく、直さま彼場所へ赴き候」と言ひもあへず、著たる羽織を門内へなげ入れ、一參に馳行たり。立關番武藤佐右衞門大きに驚き、「注進の者暫く相待て。事の次第をとくと聞べし」と呼はれども、早蔭もなく馳せ行きければ、投すてたる羽織を取上見るに、押の者の相じるしに相違もなし。扨は打捨置くべき事にあらず、「あら心もとなの主人の御身の上や」とて、一家中用人諸士足輕下部に至る迄、物の用に立べき者は一人も殘さず、我も〳〵と得物を引さげ、大門を打開き、眞一文字に伏見の街道へ馳行ける。石川五右衞門は肌に鎖帷子を著し、小手を指し、臑當を引しめ、筋金の兜頭巾を著、大太刀を横たへ、手鎗ひつさげ、おとらぬ荒者五十餘人を引具し、のさ〳〵と門内へ押入れば、殘りし番人此體に肝を潰し、「何者なるぞ狼藉なり」といひも終らざるに、筑紫權六、木曾川彌八拔討に切殺し、頓て大門を内より鎖たり。五右衞門下知して、「四方の出口門々を堅め、一人も出すべからず。男女に限らず手向ひ

敷は松原千本通にて有けるが、彼石川が族手筑紫權六革羽織に大小立派に出立ち、下部七八人召具し、彼前野が屋敷へ來り、「石田治部少輔が家來島六郎右衞門、急の使者なり」と案内しけるに、此時威勢肩を竝る者なき石田三成が使者なれば、萬不調法のふるまひなきやうにと、用人垣崎丈右衞門使者の間に請じ、謹んで口上を承るに、彼使者嚴に申けるは、「太閤御所俄の御用これ有る由、但馬守殿火急に伏見へ登上有るべき旨、主人三成承る所なり。秀吉公元來性急にあらせ給へば、遲滯なく只今登城有りて然るべし」と相のぶる。丈右衞門恐れかしこまり、頓て但馬守にしかぐくと申せば、但馬守大きに驚き、「何事の御用にや心元なし、何にもあれ馳參らずんば叶ふべからず」とて、使者をかへし、俄に供まはりの用意をなし、其身は馬上に道をはやめ、揉にもんで伏見をさして急ぎけるは、あわたゞしき有樣なり。亥の半刻ばかりに藤の森のあたりにて、跡押の中間草鞋を替るとて半丁許引下りけるを、京より付したひたる石川が同類伴藏、彌八の兩人伺ひ寄て、あばらも碎けよと的たりけるに、何かは以てたまるべき、そこに倒れて息たえたり。伴藏彌八仕すましたりと手ばやくも衣類大小を剝取り、相印の羽織引かづき、宙を飛で千本通の前野が屋敷へ馳歸り、慌しく門を叩き、大音にて、「大變なるぞ大變なるぞ」と呼れば、屋敷の內大きに驚き、先門內より「何事にや」と尋ぬるに、「殿樣藤の森の

の財寶を平等に押均さば、是も亦一つの仁術にあらずや」筑紫權六小踊して悅んで云く、「石川氏の妙算、いにしへの熊坂長範といふもいかでか及ばん。扨も當時洛中外に於て、强富の町人誰誰ならん、今宵手初めに押入て、思ふまゝに得取らん」と、はや打立べき有樣なり。五右衛門制して「汝等が所存甚だちひさし、町人百姓の貯へし金銀何程の事有らんや。あはれ盜せんとならば大名のやしきに押入り、奪取し金銀を町人百姓にまき散さんことこそ本望なれ。今關白殿下の御附人前野但馬守は俸祿に應ぜぬ福人のよし、人よく知る所なり。今宵謀計を以て但馬守をおびき出し、其跡へ込入りて心のまゝに働くべし」とて、筑紫權六、木曾川彌八、泉伴藏三人に聲をひそめて計をしへ、其外の者どもにもそれ〴〵の指圖をなし、まだ夜の戌の刻に用意こと〴〵く調ひ、思ひ〳〵に前野が館へ打立けるは、寔に不敵のふるまひなり。

○前野但馬守逢二盜難一

前野但馬守長安といふ者は、其始め勝右衛門と號して、秀吉公未だ木下藤吉郎と申せし時より付隨ひまゐらせ、志津嶽の合戰に功ありてより、過分の立身をなし、但馬國出石三萬石を賜り、當時秀次公御附人の一人にて、諸國の大小名に尊敬せられ、頗る福有の身となれり。京都の屋

權六、泉伴藏、木曾川彌八、松山大太郎、松波友九郎、陸奥小三郎、坪坂佐五七、信野與四郎、萩山團八なんど、友得たりと悦び、夜晝のわかちもなく、或は酒呑あるひは圍碁、或は淸水あたりの遊所に伴ひ、妓女をあつめて宴を催し、亂行放蕩かぎりなしといへども、いつも五右衛門嚢中の金を出して其價をつぐのへば、是も又一時の財主なりとて、酒店靑樓も皆興の增ん事を求めて、敢て否む者なし。されば五右衛門が貯へし金子もはやく空く成り、誠や窮すれば盜む人情にて、始めて爰に盜心を發し、或夜彼惡黨をあつめて議しけるは「我はからずも汝等と朋友の交を結び、日毎の酒代に貯へし金銀も今は殘り少く、此儘にては永く都の住居も成りがたし。切取强盜も浪人の所作と聞けり、我今より盜人とならんと欲す。汝等皆順ふべきや。したがふまじくば去て再び來る事勿れ」皆歡んで申けるは、「我々兼て此心有といへども、未だ敢て事を發せず、大丈夫何ぞ區々として老を待んや、足下此計略あらば我々が魁首と仰ぎ、永く樂を同じうすべし」五右衛門大きによろこび、「いさぎよき汝等が志かな、仁義をとなへて久しく貧を守るは恥なりと故人も言り。抑金銀は普く天下の財にして、一人の寶にあらず。然るを富る者は日々に榮え貧しき者は月々に窮す。此故に金銀の融通する事なく、貧者は多く福者はすくなし。然るに我今大盜と成りて强富の者の金銀を摑み取り、貧賤の中へ撒散し、天下

跡にて、貯へ有りし金子八十五兩を盜み出し、夜に紛れて文吾もろとも伊勢の方へ落行ける。此道すがら文吾心に思ふやうは、我は是大丈夫なり、豈一臭婦の爲に罪を天下に得べけんや色情は只我一時のたはぶれのみ、女が盜み出せし金子を以て都に出て志を立べしと心を極め、彼習ひ得し忍術隱身の法を行ひければ、怪しや文吾がかたちはたゞ熱湯を以て雪にそゝぐがごとく、めら〳〵と消て行方を知らず。かの女大きに肝を失ひ魂を散し、身に冷汗を流し叫んとするに聲出ず、走らんとすれば足なえたり、うつぶしになりて氣を失ひぬ。文吾傍にありて此ありさまを見、聲を發して呵々と笑ひ、都をさして出行ける。

○石川五右衞門爲二盜賊一

此頃豐臣秀吉公、洛東の地に大佛殿を造立し給ふ時なりければ、其傍の繁華夥しく、晝夜諸國の大小名引も切らず往來し、牛馬の足音車の響きは雷霆にひとしく、寔に殿下の御威勢いはん方こそなかりける。石川文吾も此賑しきをおもしろくうらやましき事に思ひ、大佛殿の前にちひさき家をもとめ、石川五右衞門と改名し、爰に住居して何をいとなむ心もなく、明暮酒打呑み、大言を吐て我儘ぐらしの浪人なれば、同氣相需るならひにて、此近邊のあぶれもの筑紫

を、今は中々心よしと歓びて、田畑なども賣盡し、十七歳の秋、石川村の住居も成りがたく、少しのしるべを心あてに、伊賀國へ赴きけるが、名張の山中にて來船の僧に臨寛といへる異人に出合ひ、忍術の物語を聞き、正しからぬ性質なればにや、執心せる事大方ならず。終に臨寛が弟子と成りて、法術を學ぶ事凡て十八ヶ月、元來伶俐の五郎吉、一を聞て十を知り、こと〴〵く習ひ得て、十九歳の夏、師にいとまを告げ、同國交野郡百地三大夫と云る鄕士の家へ、石川文吾と名を改め、奉公に有付ける。此三大夫年六十に餘りて妻をうしなひ、老の身の起臥せん助けにとて後妻を求めけるに、花山院殿の御内に仕へまゐらせし女の童お式といふ者、仔細ありて暇を乞ひ、さそふ緣にまかせんとのかこち言を媒なる者聞きつくろひ、終に三大夫が後妻に定めぬ。此お式まだ二十五の春秋を、やんごとなき殿上にやしなはれ、顏もと手足の愛愛しさは、霞の間よりほころび出にし紅梅の艷なるが如く、物うちいひたる氣配のやさ〳〵しきは、花に戲るゝ鶯に似たり。深山の老猿かと見ゆる三大夫には似合はしからぬ夫婦なれば、此家へ立入る男女村中の老若打寄ては、とや有ん、かくこそ有らめなんど、かたり草となして興じ侍りぬ。石川文吾爰に來りしはじめより此妻に心を寄せ、兎かくに言寄るほどに、原來女は水性、文吾があやしき言葉に欺かれ、終に不義の行ひに與し、剰へ三大夫が京へまかりし

繪本太閤記　七篇卷之一

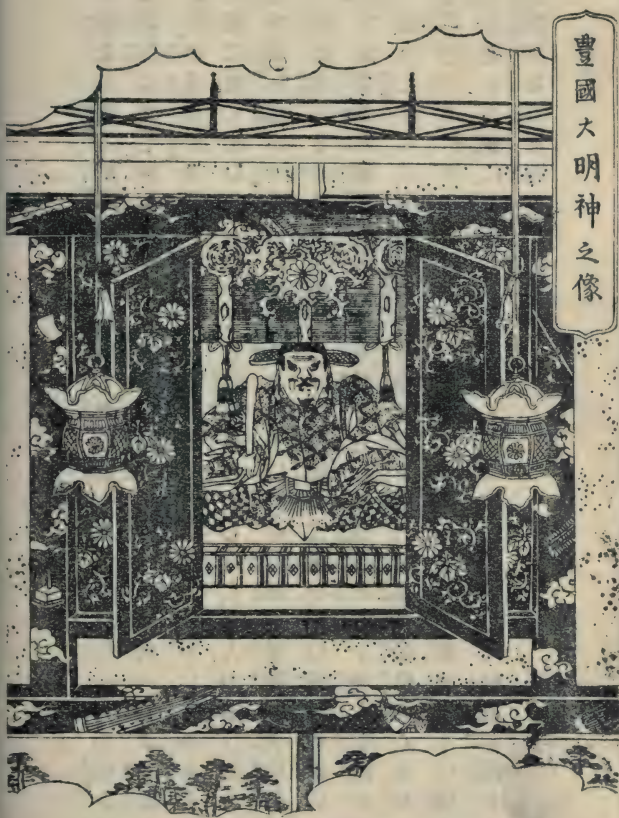
○五郎吉生ニ石川村

天は聽ども寂として音なし、蒼々いづれの處にか尋ねん。高きに非ず亦遠きにあらず、都て只人心にあり。人心一念を生ずれば、天地悉く皆知る、善惡若むくいなくんば、乾坤かならず私あらんといへり。謀計を以て富を得、姦曲にして貴を得るとも、唯一片の浮雲、朝露の草の葉に置るがごとし、豈永く保ち得んや。文祿の頃、京師大佛殿の門前に住居せし石川五右衞門が始末を尋るに、河内國石川村の鄕民文大夫といふ者の子にて、童名を五郎吉と呼り。其性質よのつねならず、七八歲より發明利口にして、假初の事にも虛言を以て大人をたぶらかし、大膽不敵の曲者なれば、成人の後はいかなる者にかなりぬらんと、兩親はもとより一村の男女、私言合ひて恐れける。五郎吉十四歲の時母を失ひ、翌年又父も病死し、孤と成りしかども、苦しともおもはで、いよ〳〵心の儘にふるまひ、大酒に亂れ、近隣の女子を欺き犯し、不頼の者を友とし、家業をも勤めざれば、一人の叔母の兩親に代りて愛しみけるも、疎み果て捨ける

繪本太閤記 七篇第一之卷 目錄

五郞吉生石川村
石川五右衛門爲盜賊
前野但馬守逢盜難

豐國大明神之像

附言

豐太閤卑賤より起て戰國の中を横行し、西を征し東を靡け、北を伐ち南を略し、神速成功僅に九年にして海内に主たり。前代も後代も豈斯の如き英傑を生じ得んや。小人の心を以て是を見れば、其行頗る怪しきに似たる事多し。晩年兵を異國に出し給ひしも、いかなる謀略のおはしけん、外人の窺ひ知るべき所に非ず。然を況や今の世の俗小人、みだりに公の行状を誹謗し、大明御陣を指ても、或は貪兵と云ひ或は驕兵といふ。是筆下に章を積む腐儒燕雀の心を以て、爭でか傑出英雄鵠鴻の大志を計知らんや。其餘信孝を殺し信雄を逐ひ、秀次一家を亡すなど、不仁の甚しき也と謗言すれど、是又豪傑の心を知らざる者也。古語にも、仁を以て人を見れば天下人なしと云り、周公孔子の聖人を以て公を見れば、誠に公なし、其聖人ならざるより公を見る時は、和漢いまだ如是俊傑ある事を聞ず。

太閤記序

豐國公秀吉。起微賤于民間。受兵機于松下翁。潛謀掌握宇內。及得其勢。而旗鼓之所嚮。如龍虎駕風雲。諸侯爲之首鼠。賊酋爲之讋伏。既上崇王室。下安黎庶。撥亂之業定矣。乃餘勇之震以征朝鮮。遂至使明主狼々失措也。嗚呼可謂偉矣。此冊也。記公之事跡。間以畫圖。號曰繪本太閤記。其意蓋在欲使人觀而識之也。及上梓。請序不佞。因擧其一二。以冠其首云。

享和二壬戌季春三月

廣福王府近官

藪大學宗陽撰

爲ぞや」五右衛門強て聞給ふに及ばじ。若し給ふに非ずんば叶ふべからず」常陸介甚だ怪しみ「足下の望は抑是何の莞爾として「某が望は譯もなき戯れ事にて、口外するも面目なし。も殿下吹擧を以て、一たび三位の納言に昇進せば、殿下の御用も候はん時、不肖には候へども、命を捨て此恩を報い奉らん」常陸介是を聞て膝をすりよせ「足下の望甚だ重し。我日本のいにしへより、平人の三位に昇り納言以上の官職を受し例なし。太閤をはじめ參らせ、當時の關白秀次公、其以前は匹夫にましませども、功業を積重ね、次第に官位昇進して、終に關白の高官に昇らせ給ふ、是尋常の事に非ず。然るに足下何の功もなくして高位高官を望むとも、決して叶ふべき事にあらず。然れども爰に一つの物語あり、當時關白の御威勢を以て、強て官職を申下し給ふ物ならば、萬に一つも成就すまじき事にもあらず。大丈夫の一言は金鐵よりも猶かたし。一命をすてゝ殿下の御用を承るべき今の詞に相違なくば、我執持て事を計るべし」五右衛門聞て大に歡び「夫男子たらん者は一面の義にも命ををしまず。況や我今度の望み成就なさせ給ふ大恩、何ぞ一命を惜むに足ん。一定御用承るべし」常陸介甚だよろこび、兩人堅き盟約をなし、其夜は別れて歸りける。

の門前に住居せる石川五右衛門と云ふ男有り。其生國を知る者なく、百姓にあらず商賈に似ず、武士の浪人とも見えざるが、武術に達し忍術をよくす。同氣相親しきとや、木村常陸介此五右衛門に交り深く、常に武事を談じ、忍術の事に及ぶに、五右衛門が論妙々にして凡人の及ぶ所に非ず。是によつて常陸介甚だ惜み思ひ、秀次公へ仕へなば、吹擧して高祿をも申賜らんとすゝむる事度々なれども、五右衛門更に仕官の望みなしとて、敢て此儀をとりあへず。一夜五右衛門木村が館に訪ひ來り、圍爐裏に酒を溫め、例の兵談忍びの物語に時剋をうつしぬ。時に五右衛門申けるは、「貴殿我に仕官を勸め給ふ事度々なり。然れども元より望みなければ、吹擧をも希はず今日迄過し侍る。然るに此ごろ俄に仕官の望頻りに發り、我ながら止めがたし。今も猶執持なして給ふらんや」といふ。常陸介大きに歡び、「某かねて足下の事を秀次公へ申上げ、殿下にも殊に慕思す間、直に高祿を賜ひ召抱へ給ふべし。何ぞ某が執達を賴むに及ばん」五右衛門笑うて、「否吾仕官を願ふは秀次公に仕へ奉らんとにはあらず。禁裏に參りて官人たらん事を欲す」常陸介大きに打笑ひ、「是又何よりも心易し然れども足下の勇壯を以て、公家侍を望むとは何事ぞや。武家に勤めて高名を求め給はざるや」五右衛門重て申やうは、「我望むは侍にあらず。位は三位、官は納言已上、恐らくは貴殿の力に及ぶまじ。關白殿下自ら吹擧な

○木村常陸介謀レ奉レ討ニ太閤一

木村常陸介定光は、關白殿の御内にて隨一の勇士なり、父は隼人佐とて太閤昵近の大名にて、志津嶽の合戰に功有てより、其名を天下に知られ、太閤の思召も他に異なれば、常陸介も御側近く勤仕しけるに、石田三成に君恩の及ばざるを恨み、太閤の御前を去て秀次公に仕へける。常陸介元來大膽不敵の者にして、其力飽まで強く、武術に鍛練し、忍びに妙を得たり。つら〱當時の形勢を見るに、太閤若君出來させ給ひて後は、頗る秀次公と疎くならせ給ひ、貴きも賤きも實の子のなき時こそ養子には家督も讓れ、若君五歳にも成り給はゞ、秀次公の關白職を剝ぎ、遠き國にて所領を賜り、後は流人のやうにて過し給はんは鏡にかけて見るがごとしとて、寄々謀叛をすゝめ奉れど、關白は唯太閤に勝がたきを恐れて、猥りに事を起し給はず。是に依て常陸介、何とぞして太閤を人知れず討奉らば、おもふ儘に天下の執權と成り、政道を掌に握らん物と、恐ろしき大志を起し、彼習ひ得し忍術にて大阪伏見の城中へ忍び入り、太閤を討奉らんとせし事度々なれ共、太閤は天下の棟梁、一夫の忍術を以て何ぞ伺ひ寄る事を得んや。手を空しくして京にかへり、種々謀計をめぐらせども、太閤を討奉るべき計なし。爰に大佛殿

笑ひ、殿中おのづから惡逆を常とし、人たるの道をいふ者なし。是皆おまんの方の惡事に荷擔し、君を誘うて滅亡に及ばしむ。眞に殷の妲己、周の褒姒に異ならずと、心有る者は爪彈きして惡みける。理なるかな、此おまんの方といふは、淀君の侍女唱といふ女なるを、植木屋の娘となし、秀次公へ獻ぜしは、淀君三成が計にて、行ふ惡事も皆淀君の差圖によれり。されば關白の惡行いよ〳〵盛んにして、其翌日はおまんの方をはじめ數百人の女房を召連れられ、比叡山に登り、晝夜堂塔を汚し、或は山中の鹿猿狐兎、もろ〳〵の鳥を狩殺す事數を知らず。一山の大衆是を患ひ、木村常陸介を以て申やうは、「此山桓武天皇草創なし給ひてより以來數百年が內、女人の跡たえて影も入ず、肉食殺生又更に例なし。希くは淸淨の參詣を遂げ給ひて、靈場を穢し給ふ事勿れ」と訴ふ。秀次公是を聞て大に怒り、「我今天下の主として爰に遊ぶ事、平人には似るべからず。左申すものならば坊主原に肉を食せ、今を以て例とせん」と、南光坊にて鹿猿鳥類を刺殺し、貧僧の僅に蓄へたる鹽噌の中へ骨腸を打入れ、老僧をとらへて口中へ肉を押入れ、さま〴〵の狼藉詞を以て語るべからず。秀次公おまんの方と諸共にこれを見て笑ひたのしむ。一山の僧徒彈指きして、實に殺生關白なりけるとて、惡み譏ること限りなし。

閤の御聽に達し、一度御怒りを蒙り給ひなば、其時悔るとも及まじ。希くはあら〳〵しき行ひをとゞめ、仁義を以て御身の守りとなし給へかし」と、かきくどき諫め奉れば、秀次公も理にや服し給ひけん、さし俯きておはしける。既に三人の者退出しければ、おまんの方關白の側に居寄り、「君必ず渠等が諫言を以て御心を鬱し給ふべからず。山口、中村、田中が輩其身下郎なるが故に、やんごとなき際の事をしらず。君は四海の武將にして、かねては關白の職を司り給ふ。かゝる尊き御身にて、草と等しき百姓を斬殺し給ふとて、何事の候べき。況やしろしめさるゝ國の內を狩ありきし給ふを、仰々敷諫立こそ片腹いたし。元來太閤は寬濶大度の名將、是ほどの御事に、なでふ咎の有るべきや。淀君よりの御消息にも、太閤ます〳〵御滿足の旨かゝせ給へば、何か苦う候べき。此後彼等ごときの心ぎたなき下郎等は御側を禁じ給ひ、只々御意に叶ひし慰みに興をやり氣をはらして、煩ひを防ぎ給へ」と申す程に、關白大きに歡び給ひ、「何事も汝が決斷にあらざれば我心に叶ふ事なし。いざや酒宴を催せ」とて、數多の女中小姓達を召寄せられ、謳ひつ舞うつ終夜、痛飮してあかし給ふ。是より後は中村、田中も御前を遠ざけ給ひ、山口は秀次公の滅亡をはかりてや、去て太閤に隨身す。晝夜關白の左右には、年若き小姓又は筋なきあぶれもの共出頭して、正しき道を行ふ者は、孔子風の男なりとてあざみ

賢者ハ退き
不賢者ハ進む
図

先帝正親町院崩御ましく、當今の帝をはじめ參らせ、月卿雲客悉く悲みの涙せき敢させ給はず、眞に一天の主、萬乘の君の御齋なればにや、日月の光も薄く、神慮も苦しみ給ふらん。王城守護の神社ことぐく門を閉て、人の參詣をだにいとへば、まして人間における貴きも賤きも、ともに愁ひを示しける。されば獵漁も禁ぜられ、物さびしき世の中にも、關白秀次公は更に悼み給ふけしきなく、明暮酒宴亂舞に日を過し、剩へ東西の山々を鷹狩鹿狩をなし、民の煩ひ諸人苦しみをも厭ひ給はず、我意にまかせて行跡給へば、京わらんべどもさゝやきよつて、「不道至極の事どもかな、行するこそ恐し」とて、つまはじきして謗りける。何者かしたりけん、一條の辻に札を立てて、

先帝の手向のための狩なればこれやせつしやう關白といふ

かゝる惡逆の御行狀のみ日毎に長じ給へば、山口玄蕃頭、中村式部少輔、田中兵部少輔等、等く諫め申けるは、「抑關白殿下の職と申すは、人臣の司にして、上は天子を守護し奉り、下は百官諸侯を率る、萬民謁仰して其德に順ふ。故に一人善を好む時は天下悉く善に順ひ、一人惡を行へば天下悉く不善に順ふ。公の御身の重き事泰山のごとく、高き事北斗のごとし。かばかり重き御身にて、罪なきを殺し、田獵に日を消し、政道に荒み給ふは何事ぞや。今にも太

ないはせそとて、首を切て捨られたり。秀次公元來人を殺す事を好み給ふが上に、おまんの方これを扶けて、いよ〳〵惡事を勸め給へば、乾る薪に油をそゝぐ如く、かりそめの田獵海漁の道すがらも、肥太りたる男、孕みたる女を見れば引とらへて斬すて給ふ。されば京洛中は云にも及ばず、近き村里の町人百姓、關白の御通行と聞ては身の毛を立て、遠く遁れ隱れ、敢て逸の往來の人なし。嵯峨野の方に狩し給ふ時、孕女の苦しげなるが、若菜を摘て彼所の堤に走りけるを、此日もおまんの方を馬上にて召具し給ひけるが、はやく見咎め、「あの女の極めて腹のふくれたるぞ雙子など云ものならん。斬てためし見給ふべし」關白左右に命じてとらへさせ給ふに、益庵法印走り行きて彼女を引捕へ、手に持たる若菜を懷へ押入れさせ、扨御前に參り、「此女懷姙にては候はず。さま〴〵の若菜を摘て懷中に入れ、都の方へ賣に出る者にて候」と打笑ひて申ければ、「夫ならんには殺しても興なし、急ぎかへすべし」と仰ければ、此女鰐の口を遁れたる心地して、こけつ轉びつ逃去ける。益庵が頓智にて命一つ救ひけるは、有り難き陰德かなと、諸人密に稱しける。

○秀次公惡行

関白殿下
花見の図

寵愛並ぶ者なし。一日關白御膳を召れけるに、飯の中に砂ありて齒にさはりければ、おまんの方傍に有りて「高位の聞し召るゝ御膳部に砂の交るべきいはれなし。御賄鍋方を召して糺明し給ふべし」と申す。關白急ぎ厨人を白洲に召し寄せ、「扨いかに糺明せん」と問給ふを、おまんの方顏を袖にておほひながら、「彼者砂を食ふ事を好むなるべし。多く砂を噛せて慰み給へ」關白大に興に入せ給ひ、「汝が申す事悉く我意にかなへり」とて、武士に命じて庭前の白砂を料理人が口中に押入させ、「一粒も殘さずかみ碎けよ」と責給ふ。流石捨難きは命なれば、若や助る事もやと、氷を碎く如くばり〳〵とかみけるに、口中破れ齒の根くづれ、眼くらみてうつぶしに倒れけるを見て、おまんの方大に打笑ひ、「かゝるおもしろき慰や候」と、秀眉を動かし喜びぬれば、關白も亦欽び給ふ事限りなく、自ら立ちて倒れ伏たる厨人を引起させ、刀をぬいて右の腕を切落し、「是はいかにおもしろきや」と問給ふ。おまんの方、「左の腕をも落し給へかし」と申す。關白又刀を振うて左の腕を打落せば、其時彼料理人目を見出し、血の涙をながし、「さるにても過去の戒行拙く、汝を主と賴みし事の無念さよ。あんかうといへる魚の口に砂の有るごとく、汝が口人に勝れて大きなる故、砂をかみしも理なり。今汝が爲に斬さいなまるゝとも、魂魄此世にとゞまつて、終には思ひしらすべき」と、恐ろしく惡言するを、關白怒つて、物

○秀次公被召植木屋女

文祿三年春、關白秀次公東山の花見いかめしく、數百人の婦女をいざなひ、所々に桐の臺の幕をうたせ、自ら雙林寺を本陣とし、終日花の下の酒宴いと興ありて、或は早歌を謳ひ狂言をなし、眞に太平の御代の有樣かなと、人民目をそばだてゝ是を見る。此時雙林寺の門前に、植木屋三郎右衞門といふ者の娘、年は二八の春秋を經て、芙蓉顏ばせ色深く、楊柳の容風をもいたむありさま、類まれなる艷色なりしが、何のかいまみにや關白の御目にとまり、其家に仰せて召れけるに、植木屋夫婦大に喜び、かねて其用意やなし置けん、色よき衣打かさね、いとゞさへ艷に美しきたをやめを花のごとく粧り立て、頓て御酌取に出しける。關白大に欽び給ひ、酒宴たけなはに醉を催し、彼娘に「琴や彈く」と尋ね給ふに、「かたのごとく仕る」由答へければ、さらばとて彈せ給ふに、手もたゆきまでにかきならし、聲よくて謳ひすましけるに、一座皆感稱に堪ぬ。關白は殊に愕き思召し、卑き者の娘なるに、容色といひ藝能といひ、かばかりに勝れけるやと御側に引寄せ給ひ、御寵愛かぎりなし。頓て還御を催し給へば、御輿を供にして聚樂城に歸り給ふ。扨も此娘を召されてより後は、晝夜御側を放ち給はず、おまんの方と呼びて其

白の御行跡を見候に、酒色に溺れ政事を荒み、罪なきに人を殺し、其悪行言語に盡しがたし、當時關白の御威勢を憚り、太閤へ申す者なきに依て、更に御咎の沙汰に及ばずといへども、頓て惡行つのり行ば、爭か太閤の赦し置給ふべき。遠からずして自滅せられん事其疑ひ有る可らず。されども關白の左右には木村常陸介、白江備後守をはじめ、太閤よりの御附人中村田中が輩、其外數人補佐し奉れば、斯る悪行を諫め申さぬ事は有る可らず。自然關白其諫を納れ、前非を悔いて仁義の道を行ひ給はゞ、御世繼は秀次公、若君は臣下たるべし。されば內々關白へ美女を送り、中村、田中が輩を遠ざけ、心の儘に惡行を募らせなば、其時事に附て計略をめぐらし、只一擧に關白を亡さん事、何の難き事か候べき」と、事もなく申ければ、淀君大に欽び給ひ、「此謀計極めてよし」とて、猶も三成と事を談じ、より〳〵秀次公へ淀君より藝能ある美女を送り、且書をよせて關白の德を稱じ、太閤にもます〳〵御滿足の由申送り給ひければ、秀次公計とは夢にも知らせ給はず、今は少しも憚り給ふ氣色もなく、日々に惡事增長し、百姓町家の妻女を奪ひ、日每に城の天守に上り、道行く人を打殺し、以て是を戲とし、假初の田獵にも兵具を持せ、從者には皆肌に著込をまとひ、小袖の下に腹卷して、何さま心有りげなる有樣、天魔の所爲ともいひつべし。

盡し諫め奉れど、兎角の御いらへもなく、又從ひ給ふべき氣色にも見えざれば、如水いとまを告て退き出で、「此人頓て自滅し給ふべし」と長嘆して、己が亭宅に歸りける。

○石田三成智陷＝關白＿

太閤の御愛妾淀の御方は、拾君を生み給ひし後は、其威勢以前に百倍し、諸侯太夫內外の諸臣に至る迄、敬ひ尊み奉る事、北の政所よりも猶重し。淀君其有樣を見給ふに附けて、つらく思惟し給ふは、若君誕生ましますといへども、既に秀次公御遺跡に定り給ひ、關白職をさへ讓り給ふ上は、太閤百年の後此若君纔に一國の主と成り、臣の禮を以て秀次に仕へ給はんこそ恨めしけれ、其上秀次公何なる惡心を起し、若君を失はんと計れんも知るべからず、先ずる時は人を制す、太閤御在世の內に秀次公を亡し捨なば、御跡目の事につき誰かこれをいろふべきと、心を定め給ひ、石田治部少輔三成を密に召され、此事を談じ給ふに、三成元來心に思ふ仔細あれば、かねて秀次公を失ひ奉らんと思ひ居けるに、淀君の仰を承り、聲をひそめて申けるは、「誠に尊命のごとく、若君はまさしく太閤の御種なりといへども、秀次公の弟君に渡らせ給へば、其命を背き給ふ事難かるべし。然りといへども又强に心を苦しめ給ふに及ぶまじ。此ごろ關

に側に參り仕る者もなし。これによつて死罪究りし刑人を、毎日一人づつ引出して御慰に斬せ參らすれば、夫にて御心やはらぎ、酒宴をもはじめ給ふ。されば京伏見大阪堺奈良等の獄中に繋れし罪人は悉く斬盡し給ひ、假初の訴訟うつたへを申す者も直に捕へて斬捨給ふ程に、罪なくして命を失ふ者幾百人といふ數を知らず。然れども當時關白の御威光を恐れ、且は天下の大事を憚り、太閤の御聽に達する者なく、銘々眉をひそめける。黑田如水此事を深く歎き、一日聚樂の亭に參り、關白の御傍に居寄り、泪をはら〳〵と流し諫めけるは、「太閤秀吉公年來天下の動靜に心をつくし給ひ、風に櫛けづり雨に沐びて、今猶心を安んじ給はず。朝鮮征伐に思ひを焦し、齡旣に五十に餘り、身疲れ心を勞し、終には壽を損じ給ふべし。公は元是匹夫の人なり。たま〳〵太閤の龍鱗に附て父子の義を結び、數國を領し、關白の高き職をけがし、其富貴實に天下に並ぶ者なし。太閤百歲の後其遺跡に著ん者は、公ならずして誰ならんや。然るに今太閤の心力を勞らし、遠く名護屋に赴き給ふ心勞を餘所に見給ひ、飽まで食ひ煖に著、剰へ罪なき人を斬害し、政事に荒み酒色に亂れ、恩と孝とを忘れ給ふは、淺猿敷御行跡にては候はずや。希くは心を正し給ひ、名護屋の陣に赴き、太閤に代りて諸大將を指揮し給はゞ、天下額を傾け公が德を悅ぶべし。相かまへて天道に逆ひ、自ら身を滅し給ふ事なかれ」と、詞を

繪本太閤記　六篇卷之十二

○關白秀次公行狀

朝にさかえ夕におとろふるも世のありさまとは言ながら、君臣の禮義、父子の慈孝なき時は、其身をほろぼし家を失ふは、自ら招く災ひにて、天のまに〳〵なる理にはあらじかし。此頃關白秀次公聚樂城にまし〳〵て、天下の政事を司り給ひしに、太閤の御實子拾君生れさせ給ふの後は、此若君にこそ世を繼せばやと思しける太閤の御心を察し、秀次公も何となく其間疎々しく成り給ひ、世をはかなきものにおもひ棄給ふの餘り、政事を荒み酒色に耽り、いつしか御心あら〳〵しく成らせ給ひ、御前に近き人々をも故なくて勘氣を蒙り、或は手討になして殺し給ふ程に、後は罪なき小姓侍女の類を猥に斬て慰みと成し給ひぬれば、御内の人々、けふは人の身の上なるも、あすは我身もいかならんと、安き心もなかりける。中村式部少輔、田中兵部少輔兩人は、太閤よりの御附人なりければ、秀次公のかゝる御有樣を見てふかく歎き、種々制し諫言なし奉れども、關白更に聞せ給はず、一日も人を斬る事なければ御氣色彌あらく、更

繪本太閤記　六篇第十二之卷　目錄

關白秀次公行狀
石田三成智陷關白
秀次公被召植木屋女
秀次公惡行
木村常陸介謀奉討太閤

きの事にては休まじきぞ。信長の比叡山を燒たるごとく、此山皆赤土と成し捨ん。さらば我より大師はおとりにけり」と宣へば、近習の侍愕く事大方ならず。是より歸路に赴かせ給ひ、三月八日大阪に著し給ふ。

らかなる其中に、金堂、大塔をはじめ數も知らぬ寺々の、甍をならべて建たるは、尊くも有りがたけれ。太閤靑巖寺に宿りを定め、留り給ふ事三日なり。中の日は此山八千人の僧をことごとく集め、大廳の御吊とて佛事ねんごろに執行ひ給ひ、其次の日は今春、金剛のさるがく等を召し登し、能を催し給ひける。抑大師此山を開き始め給ひしより已來、幾百年の歲を積ども、かゝる事の有るべきやうもなし。これや珍しき見物なんめりとて、山に住る僧俗は云も更なり、近き村里山家なんどより、はる〴〵と山にのぼり、こぞり見る者雲のごとし。御能も二番終りたるほどに、空のけしき俄に變り、乾の方より墨を流したるやうに黑雲おほひ出で、あなやと見るうち風木の根を吹起し、雨は篠を亂せるごとく、電輝々とひらめき、雷神おびたゞしく鳴りはためく程に、上下の人々若老の僧俗、こはいかにと肝たましひも消はてゝ、こけつまろびつ逃るもあり、又は堂のうち寺々の庫裏、方丈に隱るゝもあり、太閤も急ぎ山を下らせ給ひ、兵庫の寺に入らせ給ふ。扨御供の近習に宣ふやうは、「高野山はいにしへより大師の掟にて、六時の鐘無常を告るの外、物の音をたつる事を禁ずと聞しに、けふの雷電は我催せし猿樂を大師の憤りてなしつると覺えたり。我威勢を恐ろしとも思はで、なるかみして怒りけるは、膽ふとき大師かな」と笑はせ給ひけるが、又宣ふ「我もし怒る事あらば、雷ごと

に出てむかへ請じ入給ひ、數々の御饗應意をこめてものし給へば、太閤御氣色うるはしく、ゆるやかに其所をも立せ給ひ、聞ゆる芳野山に到著ては、麓より輿を下り、山路をあゆみて輿をやり給ふ。けふは花のあたりを吹く春風も緩くまひて、雨など降べくもあらで、花田色なる空に種々の小鳥囀り飛かふさへ有るに、千本の櫻、花園、櫻田、ぬだの山、かくれ家の松など見めぐり給ふぞ、いとつきぐ〵しく詠め有りける。御歌あり、

吉野山梢の花のいろ〳〵におどろかれぬる雪のあけほの　豊臣太閤

御供につかうまつれる人々も歌よみて奉る、

櫻ちる木々の梢の錦著て芳野の山をわけかへるなり　右大臣晴季卿

ちりそふもよしや惜まじ吉野山花を木陰の雪とながめて　中納言秀俊

みよし野や花は深雪と降しげみ老もなづまぬ木々の下草　三位法印玄旨

其外數あれども言はず。扨かねの鳥居仁王門を過ぎて藏王堂へまうで給へば、爰も中納言秀俊卿のかねて御舍を營み置き、それに入らせ給ひ、彼所に一夜を明し給ふ。翌る日は櫻が嶽、後醍醐天皇のおはしましける皇居の跡など御覽じ、爰かしこに日を過し、三月三日と云に高野山に詣で給ふ。是なん大師の靈場にして、峯のかたち山のありさまいと殊勝に、嶺は廣くたひ

の城に住給ふにより淀殿と唱へける。扨此松の丸の川端に小山を築き、うるはしき花、めづらかなる樹木を植ゑ、其中に書齋を立て、麓に沈香木を以て數寄屋を造り、物好風流一方ならず。其外要害の矢倉々々、隍石垣はいふも更なり、さしも巍々堂々たる城郭、數月の内に成就しける、太閤の御威勢、おそれぬ者はなかりけり。

○太閤芳野花見

文祿三年二月中旬、太閤秀吉公花見の御遊思し召し立せられけるが、花の名所も數々あれど、いにしへより花の名高き芳野の峯の雲間をわけて枝折せし道蹈み見ざらんは口惜しとて、二月廿五日阪城を出させ給ふ。御供に參りつかふまつるもろ／＼の大將より下司に至るまで、けふを晴とうるはしく粧ひ出たるは、花よりさきに人の目をおどろかしぬ。難波より大和渡の鄙人等老たるも若きも打むれつゝ、街に出て拜み奉る。太閤は例のごとく附鬘に作り、眉鐵漿ぐろに若やかなる御形勢なるを、賤しき者の見奉りて、御齡のまだ末ながくおはしますとて悅びぬるぞ、誠に民は君の子なりけりといとかはゆし。廿七日は紀伊の國六田の橋も過給ひ、市の坂に到り給へば、大和中納言秀俊卿の御儲とて、淸き屋形をしつらひ給ひ、中納言殿みづから途

を握り臂をはりて、吃と虎をにらまれけるに、虎も立とまり、暫く清正をにらみて過行きぬ。加藤左馬介嘉明は、壁に寄懸り居眠して有りけるが、漸虎も行過て後日を開き、「人々何事に騒がれしや、虎を牽て通りし故か」と、いとしづかに云はれたるぞ、たのもしき勇士なり。

○太閤築城伏見

文祿二年も端なう暮はてゝ、新玉の春のことぶきに事添て、太閤秀吉公は若君御誕生の御欽びたとへんに物なし。されば此若君御生長あらば、大阪を御本城に定め給はん御心なれば、新たに太閤御隱居の城を造營有るべしとて、其土地をえらみ給ふに、始め和州多門に城を築るべき筈なりしに、此地僻けて京大阪の往來たよりあしゝとて、山城の國小幡の里伏見に城を作らしめ給ふ。すなはち普請奉行には佐久間河内守、瀧川豐前守、佐渡駿河守、水野龜助、石尾與兵衞、竹中定右衞門等に仰附られ、諸國に下知を傳へて人夫を聚る事凡五萬人、石を醍醐、山科、雲母坂より運ばせ、材木は岐岨山、土佐山より伐出して、夜を日に繼でいとなみけり。本丸に添うて出丸あり、號て松の丸といふ。此所へ太閤の御妾、京極高吉が女松風どのと申す御方入らせられ住せ給ふにより、其御方を世の人松の丸どのと稱し奉る。淺井の娘淀君も、はじめ淀

外の侍両三人寄來りてわらんづの紐をとき、脚當をはづす。此時淸正腰に附たる緋緞子の袋を自ら拔取り、座敷の中央へ投やりけるに、どうと響きていと重げなり。民部が近習袋を傍へ持行くに、袋の中に米三升ばかり、味噌一包、銀錢三百文入られたり。民部少輔出迎へて、淸正の嚴重なる陣押を見て驚き「當時目にさへぎる敵兵もなきに、何なる事にや」と尋ねけるに、淸正答へて「武士は物を大事と心得たるこそよく候へ。我ものゝぐせず身をやすくせば、士卒等は皆怠るべし。萬一にも急の事有らん時怠りて誤あらば、今までの武功空しく成らん、爰を慮りてかくのごとし。常々武士の法とすべきは嚴なるより他はなし。上一人の心は下萬人に通ずと申せば、大將たらん者愼み怠る事有る可らず」と申されけるを、民部少輔淚をながし、「實に左にて候へ」とて、いよ〳〵敬ひかしづかれける。翌る朝淸正其所を立て釜山浦地名に著し、人々船に取乘り、順風に帆をあげて、肥前の名護屋に歸陣せり。爰にしばらく滯留して軍勢を休息せしめけるが、朝鮮に殘り在る軍將より、虎と象とを生捕て太閤に獻上す。此獸名護屋に著し、諸將の聚りし陣屋の前を引通りけるに、象は柔馴のものなれば、細き綱にて繫ぎたり。虎は猛獸なればとて、鐵の鎖をつけ、力強き士卒十餘人、左右より引立て通りけるを、有合ふ人すは虎を引來るよ」とて驚き立騷ぎ、囂しかりけるに、淸正は坐したる儘に片膝をたて、拳

虎と象とを名護屋に牽来る圖

此時加藤清正は全州地名に在陣せしに、太閤より歸朝すべき台命到りぬれば、頓て軍勢をまとめ、釜山浦地名へ歸りける、其行程十餘日の路なり。かねて日本の軍兵所々に伴城を多く構へ、軍勢を籠て守らしむ。或は七八里六丁一里又は十里六丁一里ばかりにして一城を設けたり。戸田民部少輔は密陽地名といふ所を守りけるが、清正と交深かりしかば、饗應べき用意して待居ける。依て其臣眞鍋五郎右衛門、神谷平右衛門兩人を迎として途中まで出しけるに、此頃は合戰も止み、四方に敵兵もあらざれば、眞鍋神谷の兩人革羽織に袴を著し、四里六丁一里許出たるに、はや清正の先手の勢出來る。兩人の迎ひ是を見るに、軍兵殘らず武の具固め、腰兵粮を付け、旗馬印風になびかせ、磨筒の鐵炮火繩をはさみ、五百挺まつ先にすゝませ、清正は溜塗の具足に銀の長烏帽子の冑の緒を締め、頰當脚當草鞋等に身を固め、九本馬藺の馬印を自ら脊にさし、月毛の馬に白泡はませ歩ませたり。兩人の迎、馬よりおりて民部が口上を申す。清正見て大きによろこび、「早それへ著陣すべし。扨我軍兵殊の外垢づきたり、風呂を多くたてて、下々まで湯を引せ賜はらば、大慶たらん。此よし歸りて申され候へ」と詞をかけられければ、兩人「承り候」とて馬に打乘り、急ぎ陣所にかへりかくと告る、程なく清正著陣し、塀重門より入て緣側に腰打かけて有けるを、民部が近習の士二人立ち寄りて清正のさゝれし馬藺を取て旗籠に立る其間に、

もやみ、大明よりの音信のみを相待ち給ふ。然るに朝鮮に在ける加藤主計頭清正、先に沈惟敬名人が小西飛騨守を大明へともなひ行き、其後曾て便なく、いたづらに數月を送りけるを怒り、十一月三日、手勢を率し全州名地に押寄せ、城を攻落し、首を得る事三百餘級に及ぶよし、名護屋表へ注進す。太閤聞し召し、清正が所行いさぎよしとて感狀を賜ふ。今年文祿二年冬十二月、大坂の城におはします淀君、御産の氣色つかせ給ひ、若君たひらかに出來させ給へば、京都より關白秀次公急ぎ大坂に下り給ひ、書牒を馳て名護屋表へ此と告げ給ふに、太閤御賀かぎりなし。此節朝鮮のたゝかひも閑あればとて、前田利家卿、蒲生氏鄕、淺野彈正等に諸事をまかせ給ひ、太閤は大坂へのぼらせられ、若君御誕生の御慶賀さま〴〵に執行はせ給ふ。先に捨君早世まし〳〵けるにより、此度の若君を拾君と名付け、寵愛只掌の珠の如し。後秀頼公と申奉るは此若君の御事なり。此時朝鮮の釜山浦名地へ小西飛騨守が音信聞え、司馬石星名人等事を取計ひ、沈惟敬名人等明の官使と共に日本渡海の爲三浪江名地まで出でたる由きこえければ、和睦の事相違有まじとて、十二月の末、太閤の御下知として、朝鮮在陣の諸大將其半を召歸さる。其人々には、加藤主計頭清正、鍋島加賀守直茂、小早川左衞門督隆景、久留米侍從秀兼、加藤左馬介嘉明、石田治部少輔三成、増田右衞門尉長盛、大谷刑部吉隆等、軍兵八萬餘人歸朝せり。

方を見れば、在合ふ者皆刀を拔て堺を目がけ切てかゝるを、目を瞋らし聲をはげまし「汝等みな亂心せしや、此國中に侍たらん者、淸正に忠を盡さずして誰に忠を盡さんや。梅北は賊なり、我に心をあはし梅北が餘黨を亡さば、淸正脇從の咎を赦して、賊を討の功を感ぜられん。然らずんば太閤近く名護屋に在す、大軍いたつて汝等が三族を梟首せられん。何ぞ是を辨へざる」と嘖りければ、實にもと思ひ、皆堺に同心して、梅北が手の者をさん〴〵に切まくれば、大將を討れ誰か勇氣をたもつべき、或は討れ或は降參し、終に一揆は鎭りけり。頓て此旨名護屋表へ注進しけるに、途にて淺野幸長が軍勢に出あひ、しか〴〵のよし申達せしかば、幸長は軍をかへし、名護屋の陣へ歸りけり。此堺善左衞門は祿二百石の士なりしが、淸正此働を大に感じ、十倍して二千石を與へ稱譽しける。

○拾君誕生

淺野左京大夫幸長中途より軍勢を返し、太閤の御前に出で、堺善左衞門が働にて一揆の大將梅北を殺し、熊本既に平均のよし言上しければ、太閤大に歡び給ひ、幸長が勞を稱し、堺善左衞門が働き拔群なりとて、御太刀を下し給ふ。されば此騷動によつて太閤自ら御渡海の御沙汰

へ注進せしかば、太閤大に驚き給ひ、淺野彈正が諷諫もおもひ合させられ、急ぎ彈正を召され、「肥後の熊本に一揆發起せり、汝が嫡子左京太夫幸長を以て大將たらしむべし。急ぎ馳むかつて斬しづむべし」と仰渡されけるに、彈正泪をながして是をよろこび、己が陣所へ歸り。子息幸長に遑兵六千餘人をあたへ肥後國へ赴かしむ。此肥後の一揆といふは、薩摩の浪人梅北といふもの黨を集め、肥前肥後の兩國に勢を振ひ、既に熊本の城に押寄せ、攻討つ事甚急なり。熊本には淸正が家臣堺善左衞門といふもの留主居して守りけるに、肥後の國士多く梅北に隨ひ、兵勢いよ〳〵盛んなりしかば、力を以て敵しがたく、一旦僞つて渠に降參し、近づきよつて刺殺さんと計略を心に定め、城を開きて梅北に降服す。梅北降を受て城に入といへども、堺が心底を疑ひ、敢てこゝろを赦さず。堺善左衞門梅北にまみえて申けるは、「某降參して城を渡し參らすれば、今日より君と仰ぎ奉らんに、臣とあはれみを垂れて召し具し給へ、先君臣の御盃を頂戴致したし」とて、山海の佳味を連ね酒宴を始む。堺猶も梅北が心をやはらげんと、酌取りに美女を選み、さま〴〵に饗應す。梅北まづ飮で堺に與へ、座を立て肴を與ふ。堺かねては此時斬んとたくみけるが、梅北が威にやおされけん、手後れして本座へかへしぬ。此期を過ぎては叶ふまじと思ひ、忽ち短刀を拔持ち、とびかゝつて只一突に刺殺し、屍を膝下に踏て四

「御邊強て事を論じ給ふに及ばず、太閤此ごろの御ふるまひを見るに、昔にかはり、古狐の附てくるはし參らするなり」と申しもはてぬに、太閤大きに怒り、「秀吉が心に狐の附たるいはれ屹と申せ、申損じなば首打落さんもの」と、御帶刀に手をかけ彈正をにらませ給ふ。彈正ちつとも騷がず、「某ごとき者何十人が首刎られんも、何條事の候べき。抑よしなき軍を起し給ひ、朝鮮八道は申すに及ばず、日本六十餘州に父を討せ兄弟を失ひ、夫にはなれ子をさきだて、歎き悲しむもの幾萬人ならんや。其外兵粮運送に百姓を苦しめ、五畿七道盡く荒野と成りて候ぞや。然るに君今朝鮮に渡海し給ひなば、日本國中の東西南北蜂のごとく盜賊起らん。前田宰相いかにふせぎ制すとも、いかでか是をしづめ得んや。これを思うてこそ先陣に進み、渡海せんとは申さるゝならん。太閤昔の御心ならんには、是程の事に爭か御心付のなかるべき。是只事にあらず、一定狐の入替りたるにて候。賤き人の詞にも、人とらんとする鼈は、かならず人に取るゝと申すは此事にて候」と、憚る所なく申放てば、太閤いよ〳〵怒り給ひ、「道理はいかにもあれ、おのれが主にかゝる雜言を吐こそ奇怪なれ」とて、飛かゝらんとし給ふを、其座の諸將押へだてとゞめ奉る。彈正はさらぬ體にて人々に色代し、靜に座を立ち、おのが陣所に歸りける。此折しも肥後の熊本にて、梅北といへる者一揆を起し、既に大亂に及ぶよし、名護屋表

繪本太閤記　六篇卷之十一

○名護屋陣中軍評定

今年も秋の季に成りぬれど、大明いまだ和睦の盟約を日本へ報ぜず。是によつて太閤名護屋在陣の諸大將を召され宣ふは、「大明今において和議の返報をなさず、我首よりあらかじめ其偽りならん事を知れり。今は秀吉自ら彼國へ押渡り、蒲生氏郷を先陣に進ませ、三十萬人の軍勢を驅て、朝鮮より眞直に大明に攻入るべし。日本の政務はことごとく前田利家に託し置ば、是又心にかゝる事なし。いかに思ふや」と仰有れば、利家卿これを聞て蒲生氏郷に向ひ、「人多き中よりえらみ出され、貴殿のごとく先陣の大將たらんは武士の面目にてこそ候へ。抑我等弓箭を取て軍中に死せんとする事既に三十餘年、いまだ見苦しき後れ取らず。かゝる時人の跡にかゞみ殘り居候はんは、何ぼう口惜くこそ候へ。あはれ一方の大將をうけ給り、朝鮮大明の髯首を竝べ、老後の思ひ出に仕りたし」と申されけるを、淺野彈正、此とき朝鮮より歸國し、此席に召れ、最前よりの評定を聞き居たりしが、「しばらく候、前田殿」と、利家卿にむかひ申しけるは、

繪本太閤記 六篇第十一之卷 目錄

名護屋陣中軍評定
拾君誕生
太閤伏見築城
太閤芳野花見

眞傷、傳ニ之萬世ニ、爲ニ子孫常ニ。

朝鮮在陣の時、黑田長政虎狩をせられし事人口に膾炙すれども、其說慥ならず。或一本に曰く、朝鮮機張にて長政虎狩せられし時、虎一疋人の群たる方に駈來り、六之介が足輕の肩を咥て後に投げ、又一人をも腕を咥て倒しけるが、六之介其日朱塗の具足を著たりけるを目にかけけん、忽ち飛かゝりしを、六之介二尺三寸有りける吉次が刀を拙て切伏せたり。紫野大德寺春菴和尙、其刀に斃秦と名を付たり。戰國の秦は虎狼の國なりと人のいひしを取てかくは名付けり。林羅山も是に銘あり。則ち南山の銘本文と同じ。羅山文集には、言ㇾ虎の下に失ㇾ色の二字あり、序の詞も右に同じ。又の書に曰く、釜山浦其外近き邊の死人、骸骨野に盈ち林に溢れければ、是を喰はんとて虎多く出來れり、日本の諸將僉議して虎狩をせられけるに、吉川廣家元春の長子なりの手へ其尺壹丈許の巨虎を生捕り、太閤へ獻じけるに、太閤甚だ愛で欽び給ひ、かゝる猛獸を檻中に繫ぐこと、我武德の漢土まで蓋ふ所なりと、廣家に時服饗膳を賜ふ、其翌年再び虎狩有りし時は、廣家の手へ豹を捕へて日本に獻送しけるに、太閤殊にめでよろこび給ひ、直の御內書を下されける云々。

どりの戯れ、何れさうぐ〳〵しからぬありさまに、長陣のつかれをはらしける。

○後藤又兵衛菅六之助斬レ虎

朝鮮在陣の諸大將は、釜山浦に砦を構へ、其護り嚴重なり。明朝和睦の變あらば、忽ち王城を斬崩すべき覺期にて、殊に怠慢せる者なし。或曉、黒田長政の陣中俄に騷ぎかまびすしかりければ、敵の夜討にや寄ぬらんと、長政薙刀提げ、井樓に上り是を見るに、巨虎一疋陣中の馬屋に入て馬を喰ふ也、兵卒恐れて出合ふ者なし。菅六之介政利と云ふ者、刀提げ走り向ふ。彼大虎怒り猛つて駈來るを、政利飛ちがへて虎の腰骨を八寸計切込だり。此虎手おひて大きにをめき、愈怒つて前足を揚立上り、既に危く見えしかば、後藤又兵衛政次駈來つて、肩先より脊骨をかけて斬たりけり。政利得たりと太刀拔直し、虎の眉間を切割り、終に二人の手に虎を殺しぬ。黒田長政是を見て、「儞等は先陣に進み、高名を心にかくる侍大將の身として、獸と勇を爭ふ事長氣なし」と、不興げに見えければ、兩人詞なくて退きけり。此政利が刀は備前吉次が作なり。歸朝の後林羅山銘を作りて南山と號く、周處が白額虎の故事なり。銘に曰く、

節彼南山、山惟劍鈋、苛政除去、酷吏逃藏、截レ邪斬レ佞、惟刀在レ籍、惟其言レ虎、有レ若ニ

其二
耳醴
まんぢう

太閤陣中に瓜畠をひらき給ふ図

しからぬもをかしく興あり。織田常信は頭のまろきに思ひより、徧衫僧の體にて淺ましげなる文筴持せ、修行の體にものし給へど、狼の衣著たるやうにて、いとあら〳〵し。前田利家の卿は、高野聖に似せて笈を肩に懸け、「宿乞ふ〳〵」と聲ながら假侘たる有樣、さも有りげなり。蒲生氏鄕は茶賣と成り、太閤に茶を參らせ、其價を強く乞ひけるがつぎ〳〵しくをかし。前田玄以法印は熊野比丘のさまに出立たる、其かたち丈高く肥ふとりて、惡さげなる顏もとに作り聲して、「念佛申せば佛になるぞ。夫もむつかしと思はん者は、晝寢して心をすまし、正直に現世を本とし、主に忠あり、親に孝有らば、生佛なり」と勸め步行けるを、見聞く人地に倒れて笑ひ崩れにけり。其外禰宜、虛無僧、鉢敲き、猿舞しなんどとり〴〵に興をます其中にも、旅籠屋の亭主は蒔田權介貌よく似せ、太閤の中居に藤壺といふ女房、白き衣きて黑色の緞子を前垂にし、眞紅の襷かけて、彼旅籠屋の女と成り、今一人は太閤の御こしもとに仕る常夏といふ女房、黃なる廣袖の衫に南蠻頭巾をかぶり、茶店に坐して、「よき茶きこし召候へ。饅頭も候ふ」と呼べば、藤壺も走出て、「强飯召れ、甘醴、截麥もおはします。此方へ立寄休みて通らせ給へや」と、太閤の御手を取り、强ちに引入れ奉れば、太閤は目もなく興じ給ふ事限りなし。諸將おの〳〵賣賣の店に尻かけて、酒飮み肴喰ふもあり、旅飯亭に休て切飯たべる者もあり、とり

深く悲めども詮方なし。朝鮮の金侍郎人名一絶の詩を作りて李如松人名に送る。其詩の辭に曰く、

聞說將軍捲レ甲還　定知和伐是非間
朝廷若有二班師命一　不二獨脣亡一齒亦寒

脣亡びて齒寒しとは古諺なり、日本勢いまだ退かざるに大明軍を還し去らば、獨朝鮮のみ亡びぬると見ゆれども、終には大明の患と成るべきとの詩の意なり。

○太閤名護屋陣中開二瓜畠一

今年六七月の頃、朝鮮の軍も暫く止み、太閤名護屋の御在陣も徒然におはしませば、何かな長陣の憂を慰むる事もやと、御本陣の傍にいとも廣き瓜畠を作らせ、假に旅飯屋、煮賣酒沽、茶店などの家をわざと麁々しく立竝べ、陣中の諸將等商賈又亭長なんどに容をかへ、さまざまの戲れを云て、在陣の勞をはらしぬ。先太閤の御姿は澁色の帷子、藁の腰簔を附け、菅の笠を被きて、瓜の籠を荷ひ給ひ、「味よしの瓜めせ〳〵」と賣り給ふは、更に商人にたがふ事なく、をかしさ云ん方なし。丹波中納言秀勝卿も、此節朝鮮より御見舞の爲渡海し給ひ、是もあやしの形に出立ち、積物瓜の荷をかづき、「かりもりの瓜召せ〳〵」とふつゝかに賣ける其樣、似つか

實なき事なり。誠に和睦調ひなば、大明軍勢を引て本國へ歸るべきに、日々朝鮮へ兵を入るゝは何ぞや。吾近日大軍を發し、再び王城を踏碎んと欲す。早く歸つて此旨を告よ」といふ。沈惟敬人名甚だ恐れ、又王城へ立歸り、李如松人名に逢て小西が憤を物語り、「兵を納め明國へ歸り給へ」と勸むれども、「我輩天子の命を蒙りしは、倭賊を退けよとこそ仰附られたり。歸るべきとの命も下らざるに、何ぞ軍をまとめて引退んや」爰に於て沈惟敬人名殆ど災身上に及び、いかゞすべきと案じ煩ひしが、急度思ひ出して、司馬石星人名が許へ使を以て事の次第を詳に申遣りけるに、石星人名元來惟敬人名と睦じければ、さま〴〵に事を拵へ、天子へ奏聞して、李如松人名が軍を還すべき旨勅命あれば、兼て李如松人名は歸國の望深かりけるが、心の内に大に喜び、王城の軍兵を引拂ひ、大明へ退きける。是によつて沈惟敬人名、いよ〳〵和睦の事を執行ひ、小西行長が甥飛彈守行安を誘ひ、日本關白秀吉大明の朝廷へ降參するが爲に、小西飛彈守拜謁を乞ふと披露し、大明國へ伴ひけり。是則ち沈惟敬人名と小西、石田等の姦人が巧み拵へたる僞にて、日本へは太閤を明王と稱せんと欺き、大明へは秀吉降參すとたばかり、唯和睦の成就せん事のみを計りける。李如松人名が大軍明國へ引入ければ、其餘の明將次第々々に軍をまとめ、皆歸國の支度を爲せども、日本勢は更に動かず、釜山浦地名に充滿たれば、朝鮮の軍民大きに懼れ、

凡晋州地名城中城外に所有者、牛馬鶏犬に至る迄、悉く殺し盡し、猶飽たらずや有りけん、城を焼き壕を埋み、狼藉たる有様は、目もあてられぬ次第なり。日本勢大に討勝ち、凱歌を唱へて釜山浦地名に歸り、晋州地名落城の始終、諸將の高名を名護屋表へ注進し、且大將徐元禮人名が首を鹽に淹し、太閤の上覽にこそ入たりけり。

○明兵卒歸國

朝鮮王李昖は、開城府地名に歸りて、未だ一月をも過ざるに、日本勢晋州地名の城を陷れ、軍民を斬盡しける由を聞き大きに驚き、明の諸大將へ急を告る事櫛の齒を引くが如し。此時明の大將軍李如松人名は、王城に陣を取り、吳惟忠人名は善山府地名に在陣し、劉綎人名は先より大丘府地名に勢を出し、皆日本勢の鋒先を恐れ、今や攻來るかと安き心もなし。李如松人名は沈惟敬を召て大にののしり、「儞日本の陣中に行て和睦を調へしと僞り、明帝より賞祿を賜り、其身の富貴を得たれども、日本勢いまだ本國へ渡海せず、剰へ晋州地名を攻落したり。汝が罪萬死に當れり」沈惟敬人名是を聞て大に迷惑し、急ぎ釜山浦地名に來り、小西が陣に入て先の約束に違ひ、晋州地名城を陷たる事を恨む。行長又沈惟敬人名を罵つて、「汝吾前にて和議の事を談ずるといへども、悉く

て後ざまに落たりけり。栗山是を見て、「備後守一番乘」と高聲に呼れば、加藤が家臣飯田角兵衛走り來つて、栗山が上帶摑んで引もどし、南無妙法蓮華經の旗さつと靡かせ、「清正の臣飯田角兵衛晉州の一番乘」と呼はれば、黑田が勢、加藤が勢一時に黑みかゝり、えい〳〵聲して乘りこむほどに、城中の朝鮮人さん〴〵に亂れ、本丸さして引入けるを、北門の大將金千鎰人名此有樣を見て、城ははや落たりと思ひ、敵も來らざる其前に、潰れ立て迯出せば、日本勢得たり賢しと込入々々、當るを幸に切倒し、敵を討つ事數を知らず。此時惣軍一同に進み、西の方より毛利秀元、小早川隆景、淺野彈正、伊達政宗等鬨を作つて乘破れば、東よりも浮田秀家、島津義弘、鍋島直茂、長曾我部元親、蜂須賀家政等、我後れじと突て入り、加藤、小西、黑田が勢と諸共に、一人も洩すなと罵つて、老若男女の嫌ひなく、朝鮮人とし目に見れば、片端より切倒し、血の浪を擧て戰ふにぞ、金千鎰人名崔慶會人名兩人、手を取組で矗石樓矢倉の名の上より大川の中へ逆に身を投て、底の水屑と成りければ、當城の惣大將徐元禮人名も數ケ所の手をおひ、城外の竹藪の中に隱れたりしを、浮田秀家の臣岡本權之丞といふ者、搜し出して首を取たり。其外名有る大將十八人、上下の軍民斬殺さるゝもの一萬五千三百餘人、是が餘り或は岩頭に觸れ、嶺上より投じて碎け死し、或は河水に溺れ、溪谷に倒れ、命を失ふ者幾千人といふ數を知らず

堅固にして、大石大木を投おろし、矢を放つ事透間なく、寄手攻偲んで見えけれども、此城を攻抜ずんば太閤の御怒り有ん事を恐れて、命を捨てひし〳〵と群り寄り、切岸に手をかけ乘入んとす。此時城中より銅を湯にわかし、寄手の中へ蒔ちらし、松明を以て攻具を燒立て、手をかへ品を改め防ぎ戰へば、さしも勇みし日本勢、ほどこすべき手術に盡き、少し攻口を引退き、息を繼て見合せける。此時黑田長政の家臣後藤又兵衞政次或は云ふ基次、轒轀車といふ物を作出して攻んとす。是は厚き板を以て龜甲形の箱を製へ、内に強き梁を數多設け、其上へ牛の生皮を數十枚張付たれば、いかに大木大石を投かくるといへども、をどり上つて車を損ぜざる工夫をなし、其中より鐵の棒を以て進退を自由せる事船のごとし。又兵衞政次自ら數十人を引きつれ此車の内に入り、晉州城の櫓の下へ押附け、石垣の角石へ鐵木挺を入れ、こじ放さんとしけるを見て、城中より木石を投下し、火箭を射る事雨のごとしといへども、更に車を損ずる事能はず。兎角見る程に隅石一つ引拔きける。さしも堅固の石垣、七八間が程瓦落々々と崩れにけるは、目ざましかりける働なり。淸正が陣中より一人の兵をどり出で、晉州城の一番乘、淸正が身内森本儀太夫と名乘り、塀に手をかけ乘入んとす。黑田が舊臣栗山備後守、南無三寶後れたりと森本に引添て乘入しに、城中より射出す矢篠を亂すがごとく、先に進みし森本儀太夫、内兜に矢一つ的

命を領し遠く朝鮮に入りて、圍碁の戯に心を奪れ、君令を怠慢せる愚人ならんや。見る者深く察して味ふべし。

○晉州城合戰

太閤の御下知によつて、日本の諸大將晉州(地名)の城に押寄せ、攻討つ事甚だ急也。加藤主計頭清正、小西攝津守行長、先陣として一番に攻かゝる。此時毛利秀元、日本より加勢として二萬餘人を引率し著到しけるが、一方に向うて攻寄せたり。小早川隆景、黑田長政、淺野彈正、伊達政宗等是に屬す。又一方は浮田秀家をはじめとし、島津義弘、鍋島直茂、長曾我部元親、蜂須賀家政、立花宗茂等是にしたがふ。凡軍兵六萬餘人、旌旗雲を貫き、鎗刀日光に耀き、鬨を作つて攻たりけるは、夥しともいはん方こそなかりけり。抑晉州(地名)の城と謂ふは、大江前に有て庭深く、三方は岩石嶮ち壁を立たるごとく、上に塀を構へ挾間を開き、大將徐元禮(人名)二萬餘人を以て是を守れり。又劉綎(人名)といふ明の大將、三千餘人の兵を以て大丘府(地名)に陣を取り、犄角の勢をなす。日本の諸大將も此城を等閑に攻拔き難しと思ひければ、梯を組上げ、或は楯竹束を衝並べ、或は熊手繩階子なんどの攻具を用意し、押寄せ〳〵攻登らんと計れ共、城中防ぎ

心は北の政所に荷擔し、内事を聞ては私に政所の御方へ内通す。是軍中の後矢射る者のごとし。今度石田が家臣島左近淀君へ申上し密事の端々、又小西行長へ御文を遣し給ふ始終のこらず政所の御方へ通じければ、元來聰明怜悧の政所、心に籠て色にも出さずおはしけるに、大明日本和睦調ひ、清正が擒にせし兩太子も朝鮮へ歸せしと聞し召れ、此和睦は淀君と三成が腹中より出て誠の和平に非る事を知らせ給へば、淺野彈正が奥方おこひどのより密に人を名護屋に遣し、淀殿三成が計略のおらましを淺野氏に告させ給ふ。彈正是を聞て驚くといへども、實に和睦調ふ時は日本の吉事なりと、心に納めて口外せず。然るに秋七月に及べども、大明よりの返報なく、太閤も其和睦の僞りならん事を怒り給ひ、晉州名地を攻崩んと下知し給ふ。爰に到て彈正も甚だ小西、石田が所行を惡み、黑田如水と心を合せ、石田三成に怒り起させ、口論に及びなば指違へて死せんこそ、太閤への忠義なるべしと心を定め、此圍碁の時に限らず、朝鮮在陣の間、何事に就ても小西石田等に不敬失言の事度々なれども、三成又世を暗すの才智あれば、早く淺野、黑田が心中を察し、小西に告て曾て不禮を怒らず、よらずさはらず日を過しぬ。されば、淺野、黑田が心謀徒に成にけり。此事諸書に碁を圍んで禮を失ふとのみ記せり。是事を詳かにせざる者なり。淺野は世にきこえたる勇武の將、如水又英才を以て人に讓らず。太閤の

島左近淀君に掴入りして三成が意を述る図

浮田の陣中に來り、淺野、黒田等無事の著岸を悦び賀す。其中に石田治部少輔、增田右衞門尉、大谷刑部三人等しく來て對面せんと乞ふ。此時淺野、黒田の兩人碁を圍んで餘念なし。石田、增田、大谷が輩側に坐して漸久しけれども、彈正、如水圍碁の勝負に心を寄せ、石田が方を見向もせず。三成心中に大に怒り、增田、大谷に目くばせして、座を立て退きけり。是より互に隔心をさしはさみ、其間快からず。太閤も此事を聞せ給ひ、淺野、黒田が怠慢を責め給ふ。夫より後は彌不快の思ひをなし、終には豐臣家の害とは成りぬ。此一事においても其謂なきにあらず。石田三成去年朝鮮渡海の砌、其家臣島左近を密に大阪に登し、淀君に謁し申させけるは、「日本軍勢不足にして、明の大軍に當り難きを以て、太閤殊に心を勞し給ふ。かくのごとくして數月を經なば、君聖壽を縮め給ふ事速なるべし。依て三成大明朝鮮と和を結び、此征伐を休んと欲す。希くは女君行長に書を賜ひ、三成と志を合させ、和睦成就なさしめ給へ」とて、謀略の次第こまぐ\申上げければ、淀君元來三成が秀才を愛し給へば、尤に聞召し、頓て御文に和睦の事、三成と共に執計ふべき旨を委く認め給ひ、別の使を以て行長に送り給ひぬ。是に依て行長も石田が計略に與し、沈惟敬の姦計を誘うて、日本大明和睦大半調ひたり。爰に淀君の御傍近く仕ふる春日の局といふ者有り。深き仔細ありて淀君の腰元に仕へぬれども、本

へり、小野攝津守が娘なり。家に殘りて淋しき閨の中に孤り起臥て、朝夕に采女正を戀悲しみ、露忘るゝ隙もなく、其思ふ片端計を文に認め、文筺に納め便船に賴遣しける。其船逆風に打覆され、文筺は日本の地博多の浦に浪に寄られ流れ著たり。浦人とりてさまぐ〵手を越え太閤の上覽に入れ奉るに、筆の跡美しく、心深く書なしたる文の有樣、世の常ならず、聞く人皆淚を落す。奧に歌あり、

かくあらん行衞も知らで賴みつる我心をば誰かかこたん

太閤あはれに思しめされ、采女正を歸朝せしめ給ふ。菊子世にうれしさかぎりなく、又歌一首よみて尼孝藏主に寄す。則ち太閤の御前に呈し奉れば、上覽有り。其歌に、

物每のあはれをめぐむあまつ神の心に代る君ぞたゞしき

時に其年もはや七月の始めに成りけれど、太明より和議の返報無之により、太閤の御下知として淺野彈正、黑田如水兩人朝鮮國に渡海し、先浮田中納言秀家の陣に入りて、太閤の命を傳ふ。其趣は、「先に諸大將晉州名地の城を攻るといへども拔く事能はず。其儘に過しぬる事云甲斐なし。今度諸將等しく進んで晉州名地を攻拔べし。淺野、黑田の兩人軍談に加はり、大將牧司官名が首を見すべし」との御諚なり。秀家謹んで是を承り、普く諸大將に此旨を觸廻らしければ、人々

四鄰皆畏之、且善於分別、待隣國王子諸官、稍存舊意、愍其渡海使復于京、其恩厚與此海俱深、一行之人其敢有忘、後日若對日本及主計頭、復發雜談、少有背負之意、非人情也、天地鬼神共知之矣、修好之日、通書寄情事。

清正此書を得て、永く家の珠とせり。扨も朝鮮には日本勢釜山浦地名に退き、兩太子歸朝の上は、大王李昖も義州地名を出て開城地名に來り、人民少しは安堵の思ひに住しける。されば大明の朝廷にも、今度日本勢朝鮮の王城を退きたるは、司馬石星人名、及び沈惟敬人名が功なりとて、厚く恩賞を行はれければ、沈惟敬名が威勢富貴明鮮の間に輝き、世人こぞつてうらやみけり。

○太閤朝鮮之戰將賞罰

同年六月、太閤秀吉公、福原右馬介、熊谷内藏允兩人を朝鮮に渡海せしめ、今度の合戰において功を立し將士加藤清正、小西行長及び小早川、黑田、鍋島、立花、其外船手の將卒功ある者に賞祿を賜ひ、感狀等を下行し給ふ。且又大友義統が臆病、前代未聞の曲事なりとて、其國を召上られ、加藤主計頭に預らる。其外怯弱比興の輩數人、みな領國を召放さる。爰に龍造寺隆信の家臣瀬川采女正といふ者あり、此度の軍役に召れ朝鮮に渡海せり。妻あり、名を菊子とい

國其勿レ訝焉。

かくの如く認めさせ、明の使に與へ給へば、謝用辭人名、徐一貫人名沈惟敬人名謹んで書翰を受取り、拜して歸國なしたりける。太閤よりも內藤飛彈守を御使とし釜山浦地名に赴しめ、加藤、小西、石田、增田等の諸大將に申含められけるは、和睦の事大明盟にそむく事なくんば、臨海律太子の名、順和琿太子の名の二王子を朝鮮に歸らしむべしと御下知ある。此時明の大軍未だ退かず、王城に屯し留り居れ共、小西行長、石田、增田が輩、清正が兩太子を生捕し高名を妬み、明國の音信も聞ずして、兩太子及生捕の從臣等、不レ殘朝鮮へ歸し遣しける。此兩太子三年が程清正が手に擒れうき月日を送りけるに、清正情深き大將にて、平生に心を用ひ、衣食の事は云にも及ばず、四季折ふしの事に附ても其心を慰め、ねんごろに饗應しければ、二人の太子淚を落して御志を感じける。されば今朝鮮の王城へ放ち歸さるゝも、偏に清正の情なりと欽び、清正の家臣加藤右馬允に附て書翰を寄せ、厚き惠みを謝す。其書に曰く、

朝鮮兩王子臨海律、順和琿、兩府夫人、陪官長溪上洛、行護軍大將南兵使等、自二壬辰年四月一被レ擒二日本大將軍主計頭清正一入レ城相見、卽加二禮過一、一行下人竝給二衣食一撫恤頗至、又稟二于關白殿下一到二釜山浦一還許レ放二還京城一其慈悲如レ佛眞箇日本中好人也、況素聞關白殿下雄傑無レ比、

三老棹を蕩し、款乃響きを揚ぐ。太閤も又御座船に召れ漕出す、其粧ひ人の目を驚かしむ。虎尾の納鎗二百本、金造の長刀五十柄、船の首に森然と莊り立て、千生瓢簞の大馬印輝々數潮風に飄り、逞卒三百餘人一樣に茜染の羽織を著し、棹を取りて御船を供奉す。此御船に明の三使を請じ入れ、更に酒宴を設け給ひ、觀世金春の猿樂を召て海上にて能を催さる、誠に希有の饗應なり。明人太閤の威勢に恐れ、氣を飛し心を駭かし、更に言ふ事能はず。其翌日は御陣において茶を賜ふ。既にして明使等暇を告て國に歸らんとす、秀吉公則ち書を投じて明帝に送らる。其文に曰く、

日本國王豐臣秀吉奉書

大明皇帝足下

明帝與吾國和親若不僞、則吾亦何渝盟乎、山礪河帯可相比者乎、然則邀大明皇帝之淑女可備於本朝后妃之位焉、兩國年來相爲毒螫、故遍年不贈勘合船、今若和平事就、則必可遣之、和親終之後、兩國之權臣共通誓辭耳、吾自去年遣驍將數輩征伐朝鮮蕩平其都邑處刑其人民、而今貴國悉取吾言、則不顧朝鮮之罪逆割其八道以四道授李昖、其餘四道者吾領之耳。若授四道則使朝鮮王子及大臣一二人爲人質于本朝而已、貴

繪本太閤記　六篇卷之十

○明使渡海日本兩太子還朝鮮

去程に日本數十員の大將、十餘萬の軍勢を善山府地名釜山浦地名に屯して、明朝より官使日本に渡海し、和睦の盟約堅く調うて後、兩太子及び生捕の將卒朝鮮へ歸し遣すべしと、度々沈惟敬人名が許へ申通じければ、大明の軍將李如松人名が下知として、沈惟敬人名、徐一貫人名、謝用辭人名三人を以て日本に渡海せしむ。太閤秀吉公此事を聞て甚だ喜び給ひ、羽柴下總守勝雅に仰て三人の明使を迎へさせ、名護屋の旅館に伴ひ入れ、前田宰相利家卿、淺野彈正少弼長政、太田和泉守、建部壽德、小西如淸、近江觀音寺に命じ、代々兩使を饗應なさしめ給ふ。此時明朝より金帛玉寶の夥しく獻呈し奉れば、秀吉公よりも又多くの金銀衣服太刀薙刀を下し給ふ。抑此名護屋の地と申すは、西の方は洋々たる大海漲り、湊の方は屈曲として海水周繞する事百餘町、風景絕色云ん方なし。明の三使大に此勝地を愛で、詩を作つて其心を抒る。太閤御氣色うるはしく、猶明人の興を催さんとて、數百艘の大船を海上に浮べ、諸家の旗幕凱風に飄轉し、

繪本太閤記 六篇第十之卷 目録

明使渡海日本兩太子還朝鮮
太閤朝鮮之戰將賞罰
晉州城合戰
明兵卒歸國
太閤名護屋陣中開瓜畠
後藤又兵衛菅六之助斬虎

とて、更に軍を進しめず、王城の燒跡に陣を取て控たり。日本の諸大將は敵の跡より追討つ事もやと備堅固に引行程に、其道筋に小城を構へ柴を設けて籠居たる朝鮮人、恐をなして城を捨て迯行ば、途中少も障なく、東海迄心安く引取りけり。扨軍勢を分ち、其地の要害蔚山（地名）西生浦（地名）登萊（地名）、金海（同上）、熊川（同上）、巨濟（同上）なんどに陣營を結び、山に寄り海に順ひ、石垣を築き塹を掘り、兵糧玉藥澤山に用意をなし、久しく留る備を成す。すべて其首尾十六ケ所連綿と連ねしは、あたりがたくぞ見えにけり。

かくの如く決せざるに、何ぞ眠りて評議には與らざるや。老功の異見承りたし」と申ければ、
隆景漸口をすりながら起上り、「諸將の議論何れも尤に聞え候へば、我等又何をか論ぜん。
然ども所存御尋の上は愚なる了簡をも申出見候はん。明日味方此城を引拂はんには、未明はな
れぬ頃一同に打立ち、面々の役所々々に火を放ちて燒立て、其烟に紛れ早々と引取るべし。明
兵後を慕ひ喰止んと欲すとも、王城一面の火とならば追討つ事叶ふべからず、此謀いかゞぞ」と
いふ。一座の將士手を拍て、「是に過たる手術は有まじ、天晴妙計に候」と衆議既に一定し、夜の
内に諸大將、手勢をまとめ雜具を集め、寅の時兵糧を仕ひ、東の空正に白まんとする時、さし
も建連ねたる王城に、一同に火をかけ燒立れば、折節朝嵐烈しく一片の烟と燃上りぬ。日本勢
其紛に次第を不レ亂備をくり出し、釜山浦地名さして引取けり。此時朝鮮の柳成龍人名は日本勢の引
退くを見て、李如松人名に對面して、今大軍を起し日本勢を追討つものならば、味方の勝利疑な
し。我漢江川名に數百艘の兵船を用意せり、將軍軍を領し、水陸より追討給へ」と勸めけれど、
李如松人名は只日本勢を討の心なく、却て柳成龍人名を諭して曰く、「孫子も歸る師を追ふ事勿れと
いへり。日本人其隊なくして引取るべきや。食返して討來らば、味方甚しき敗を取るべし。且又朝
鮮の兩王子日本人の手に生捕れて彼所に在り。信に逆て追討せば、兩王子を取返し難かるべし」

に王城に來りて行長に對面す。此沈惟敬素性無賴の姦人なるに、行長又正直の武士にあらず、石田三成は恐るべき佞の甚しき者なり。是等の三人密談をなし、いかなる謀計をか施しけん、七ヶ條の標目悉く明の朝廷許容有て、日本人朝鮮の二王子及び生捕の輩ことごとくかへし、王城の軍兵釜山浦へ退かば、李如松も又大軍を引て明國に歸るべしと、盟約既に定りけれども、朝鮮の兩太子を送り歸さん事は、明使日本に渡海し、太閤へ願はずんば叶ふまじと、行長此一事において、容易く諾はず、軍兵を釜山浦へ引退けんは奉行等の計ひなるべしとて諸將に談ずれば、永々の在陣、誰か一人も歸國の儀を嫌ふべき、皆是に同意して、沈惟敬は平壤へ歸りけり。四月廿一日には、日本の諸大將王城を退くべきに定りける。然るに去年より日本人此王城に在陣すれば、朝鮮の商賈農民なども立歸つて家業を勸め、日本の兵卒にも馴親しむ。是等の者ども夥しく日本人よりは多かりければ、増田長盛是を恐れ、「渠等若明兵と内應し、吾輩の引行くべき道を塞ぎなば、頗る味方の障なるべし。悉く追拂んとすれども多勢の農民、幾度も群り來らん。片端から斬捨ん事は安かるべけれども、罪なき者を殺さんも是又不便の至りなり。いかゞ計ひ給はん」と、諸將を聚め評議を成す。銘々異見區々にして更に一決せざりしに、小早川隆景は肘枕し高鼾して一言も出さず。石田三成高聲に是を呼で、「諸將の詮議

召て尺牘を認めさせ、沈惟敬名人が方へ送らせける。此中に三成が深き謀略の有りけるなり、後の數條を讀でこれを知るべし。

○日本勢燒二王城一

平壤地名の城中此時さまぐの浮説をいひふらし、日本の大將加藤清正いまだ咸鏡道八道の内咸興地名より陽德地名孟山地名を越て平壤地名を襲ひ攻るよしいひ言り、軍卒上を下へとひしめきける。大將李如松人名甚だ心に快からず、何ともして軍勢を退けんと願ふ志の見えければ、朝鮮の大將柳成龍人名心を苦しめ、種々諫め進めて日本勢を討しめんと計れども、李如松人名は唯詞のみにて領承すれ共、更に兵を進んともせず、心神忙々として樂まず。時に倭將行長書を沈惟敬人名に送り越たり。李如松人名自ら是を披き見るに、これ則ち和を求むるの書なりければ大に歡び、沈惟敬名人を急に招き、和睦の事を執行はしむ。朝鮮の軍將金明元名人是を止めて申けるは、「是必ず日本の僞の計略なるべし。其故は、先に沈惟敬人名和睦を約して其盟に背たりければ、日本人欺きて招き寄せ、汝を殺さんと巧むなるべし」沈惟敬名人大膽不敵の溢者なれば、是を聞て大に笑ひ、「我日本の陣中へ行く事小兒の中に遊ぶが如し。更に諸君の心を用ひ給ふに及ばず」とて、終

何ぞ我朝の恥辱ならんや。大明の李如松人名も日本の武勇に懼れ、遠く平壤地名に去て二度兵を出す事なし。小西行長書翰を沈惟敬人名に送り、先に約を背の條を責め、且七ヶ條の盟約を齊へなば、罪を赦して重く恩賞すべしと申遣しなば、元來日本の武威に恐るゝ大明朝鮮、悅んで再び和議に及ぶべし。此事調はざる時は命を限りに大明迄も切入ん事、是需めずして理の當然たる所なり」と云ふ。加藤主計頭清正嘲笑うて、「七ヶ條の誓約大概大明に領承すべきが、太閤を明の大王に封ぜん事、いかなる愚人なりとも何ぞ是を承知すべき、國陷り身死たらばいかゞせん。自ら明國の帝王にして、異國の人を明國の帝王たらしめんとは、狂人ならばいざ知らず、人の心有ん者の諾ふべきいはれなし」三成笑うて「誠に貴殿の仰の如し、然りといへども人の心の同じからざるは、其面の異なるがごとしとかや。明帝いかなる所存の有て、太閤を明王に封ずまじきものにもあらず。事ならずんば再び合戰に及んに仔細有まじ。先沈惟敬人名へ書を送りて、渠が答ん事も聞せ給へ」といふ。一座にありあふ諸大將、其餘の士卒に至る迄、異國の長陣に倦勞れ、頃日は兵粮も漸乏しく、馬ども皆疫を病て死ければ、只々和睦せんにしく事有る可らずと、一同に三成が言に順ひぬれば、清正一人いかに思ふとも詮方なく、「我は唯毛唐人めらに欺され、再びもろき敗北に及ん事を歎くのみなり」とて、座を立て退れければ、頓て小西行長僧玄蘇を

日本勢、徒然に王城に在て日を送りぬ。かゝりける程に諸方の群盗蜂の如く起り、王城より釜山浦の往來も自由ならず。又々兵糧乏しければ、細川與八郎忠興衆將を進め、晋州の城を攻けれども、城の防ぎ堅固にして攻拔く事能はず。かくの如くして日數を送らば、太閤怒つて我輩を責給はん、所詮再び名護屋表へ軍難儀の趣言上し、援兵を乞て戰を決すべしと、衆議是に定り、告書を作らしむ。此時石田治部少輔三成、雙眼より涙をはら〳〵と流し、「此奉書日本に著し太閤の御前へ披露するとも、再び援兵に出すべき軍勢なく、徒に太閤の御心を苦しめ奉るのみなり。某が愚見を以て是を計るに、大明と和をとゝのへて軍を收め、日本へ凱陣するより外に上計は有る可らず」浮田秀家是を聞て、「先に沈惟敬來つて和睦を計るが爲に、味方欺かれて平壤の敗軍に及べり。然るに今日本より和を需んは吾國の恥辱、且は太閤の御心に違ふべし」三成席を進んで申けるは、「何ぞや見ぐるしく日本より和を需むべき、先に小西行長沈惟敬に七ヶ條の標目を示し、大明是を受引ば和睦すべし。若聞ずんば兵を擧て討べしと約せり。其一は兩國の和議代々變ずまじきの事、第二は日本の攻取し地を永々領すべき事、第三には朝鮮より日本へ貢を入るべき事、第四には太閤を封じて大明王となすべき事、其外三ヶ條は國家の祕する事、顯して云ひ難し。かくの如くなる時は太閤の御望み既に足れり。

めて護りけるが、日本勢叶ふまじとや思ひけん、再び攻寄る事もなく、鐘を鳴らして軍を收め、王城さして引取行く。朝鮮の城中には、敵再び寄せなば防ぎ支ふべき力なしと、皆落支度して有けるに、日本勢の引行くを見て大に機を得、元より所の案内は能知たり、爰の尾崎彼所の切岸に集り、矢先を揃へてさん〴〵に射立ければ、日本勢爰にても數多討れ敗走す。加藤遠江守光泰殿して、歸し合せ〳〵、且戰ひ且退き、十四五里六丁一里計引きたる所に、王城より援兵として、加藤淸正、小西行長、小早川隆景等二萬五千人の逞兵、隊正しく押來れば、朝鮮人甚だ驚き、「敵の計略に落たるやらん、引けよ〳〵」と呼つて、誰追ふ者もなけれども、我先にと迯行ほどに、城中へも入得ずして、思ひ〳〵に落行たり。かゝりければ、加藤、小西等其外の將士、悉く城中に入りて其夜を宿し、翌れば城に蓄へたる兵糧を王城へ運び入させ、城に火をかけ燒盡し、勝鬨を揚て退きける。

○小西行長書贈二沈惟敬一

此時大明の大將軍李如松人名は、日本の剛勇を憚り、敢て戰を好まず。坡州地名を引取り、平壤地名に軍勢を屯す。日本勢も亦敵の大軍を侮りがたしとて、押寄せ合戰にも及ばず。十餘萬人の

しけるは、かく安閑と食の盡るを待居らんよりは、安南の城を攻落し、敵の貯へたる兵粮を奪ひ取らばやといふ程に、石田、增田、大谷等、先に開城府地名の功なきを恥たりけん、加藤遠江守、長谷川藤五郎、木村常陸介を催し伴ひ、二萬餘人の兵士を引率し、安南地名の地へ押寄せける。城の北の方峯づたひに間近く仕より、城中を望み見るに、兵粮炊ぐ煙も上らず、人音さらに聞えざれば、先斥候を出し見しめよと、銘々手勢の内より母衣の使番物頭等をさし添へ遣しけるに、城中には日本勢夥しく寄來ると見て、洶れ懼れ逃出しけるに、錦江川名の流水增り、渡るべきやうあらざれば、今は志を極め討死と覺悟して城中へ歸りしに、彼物見の兵卒數十人、城外へ近々と來るを見て、朝鮮人はや石を飛せ矢を放ち、日本の斥候の兵をさんぐ\に切ひしげば、悉く手負ひ傷られ迯歸るを、增田加藤が兩勢一番に討てかゝり、面もふらず衝入て、柵を引のけ逆茂木を倒し、終に外曲輪を乘取つたり。然るに朝鮮人二の丸に楯籠り、石擊柵より大木大石雨のごとく投落し、毒箭を討る事透間なし。日本勢大半討れ郭外へ引退く。石田、木村、大谷が勢共入替つて攻戰ふといへども、城中防ぎ嚴しくして、更に乘入るべき手術なく、攻あぐんで見えたる所へ、城將權標人名一萬餘人の逞卒を引具し、城戸を開き一同に噇と衝出でければ、日本勢さんぐ\に討なされ、五六里六丁一里計迯たりける。城兵かろく引上げ、城戸を固

今日より中納言めと申すべし。食なくば砂を喰へよ、砂の嚙やうよも知るまじ。清正、直茂を捨ころし、異國に辱をさらす人々には、物云んも無念なり」と、飽まで惡言吐ちらし、座を立て出られければ、義に勇む大將等黑田長政、伊達政宗、久留米立花が輩、いざ清正を救ふべしとて、銘々軍勢を整へければ、加藤光泰大に欽び、頓て王城を出て西の方咸鏡道八道の內へ赴んとす。時に士卒一人馳來り、加藤主計頭、鍋島加賀守諸方の群賊を切破り、王城を去る事三十里に陣を取りたり、明日著到して諸將等に對面すべき旨告ければ、遠江守を始め諸大將皆安堵して、援の勢も止りけり。遠江守が清正等と生死を伴にせんと決定し、食盡たるを心とせざるは、實に勇あり義有りけりと、人々語り感じけり。

○安南合戰

王城を去る事數里にして安南府地名といふ所あり、此地高山嶮敷聳え、山間悉く溪水流れ廻りて深き沼をなし、南の方は錦江川名の大河を帶び、西の方には細き一道の山路ありて開城府地名に續たり。要害無雙の切所なれば、此山間に城を築き、朝鮮の大將權標人名といふ者二萬計の勢を領し、柵逆茂木を引て籠城し、間を伺ひ王城に在る日本勢を襲ひ討んと計りけり。日本の諸將議

軍の評議に及びけれども、流石に敵は大軍、小勢の味方を以ておしよせて戰はんは危きはかりごとならんとて、兎角の評定に日を過しぬ。爰に王城の西南に當つて大河あり、川端に數十間の倉を建て、兵粮十餘萬石入置て、日本人の支給とす。又浮田秀家龍山（地名）といふ所に陣營をつらね、米倉數多建させ、內々兵粮數萬石貯へたり。然るに明の大將香大受（人名）夜中に是等の兵粮倉にしのび寄り、火をかけて燒盡しけるに、日本勢大に力を失ひ、日々粮米乏しくなり、今は王城に久しく籠るべきやうもなく、若や明の大軍押寄せたりとも、墓々敷戰も成まじければ、速に釜山浦（地名）へ退き、日本より運送の粮米を得て、重ねて合戰に及びなんと、心弱き詮議する將士も多かりける。加藤遠江守光泰（初めの名作內）其席にあり、默然として人々の評議せるを聞居しが、諸將に向ひて申されけるは、「今清正、直茂の兩將、深く進んで敵地にあり、此王城を隔つ事千里（一里六丁）に餘れり。然るに王城食乏しきとて、加藤、鍋島を捨殺し、釜山浦（地名）に退かんとは、更に男子の行狀にあらず。且は太閤への不忠、日本の恥ならずや。人々軍勢を催し、加藤、鍋島の軍を助け、日本の諸將悉く集りて後、進むとも退くとも、衆議に任せて決すべし」といふ。浮田秀家答て、「足下の議論理に當れりといへども、今既に食盡たり。是をいかにせん」といふ時、遠江守眼を怒らせ居長高に成り、「今までは浮田中納言殿と唱へて敬したりしが、

面より取巻て、鐘を鳴し鼓を打て狩立ける。山中に有ける鹿猿の類、追立られて山を下れど、虎の外には目もかけず、猶も隈々探しけるに、彌深く生繁りたる萱原より、件の虎を追出したり。清正かくと聞より、自ら鐵炮に二つ玉を込め、大なる岩の上に登り遥に見れば、七尺餘りの大虎憤り猛て飛來り、其間十四五間になり、清正を白眼み立止りて進まず。加藤が近臣百人計、鐵炮を揃へて打んとするを、清正止めて打しめず。自ら打殺さん志なれば、鐵炮のねらひを究め、既に打んず有様を見て、彼猛虎忽ち金毛を逆立て、口を開き飛來るを、清正が放つ鐵炮過たず、咽の内に打込ぬれば、さしもの猛獸暫しもたまらず倒れ伏し、起上らんと身を揉めども、急所の痛手に苦しみて、終に其儘死したりける。猶も山々を狩廻れども、他の獸のみにて虎は見えず、清正大に歡び、彼虎を陣前に荷ひ持せ、鍋島が咸興名の城へ歸られけり。

○加藤光泰義勇愕衆將

大明の大軍正月二十六日の合戰に、小早川隆景が武勇に碎かれ、坡州名の地へ退きしが、大將軍李如松名人日本の武勇にや恐れけん、漸軍勢を引拂ひ、明朝に歸るべき支度を爲す。王城には日本の諸大將商議して、大明の軍兵誠に以て恐るゝに足ず、坡州名地へ押寄せ、一攻に追崩さんと、

き、喚いて懸れば、朝鮮の軍兵今は叶まじと西をさして迯行くに、むかうの方より森本義太夫、
荘林隼人、齋藤立本、龍造寺又八郎、金山地名橘中地名の勢を合て七千五百餘人、此所迄引取りける
が、此合戰を見て何ぞや見遁すべき、鬨を作り砂烟を上げ、鎗を並べて突立れば、朝鮮人前
後の敵に途を失ひ、斬倒され薙ふられ、悉く討死す。大將元豪人名も今は是迄なりと思ひけ
ん、只一人本陣へ切入り、清正目がけ討てかゝるを、清正しり目に是を見て、鎗を上て暫しが程
あしらひしが、猿臂を延べて元豪人名を宙に引さげ、大地にがばと投たりければ、加藤清兵衛走
り寄て首を取りたり。其外權應珠人名は井上大九郎に生捕れ、討取る首一千五百、勝鬨をあげ軍
をまとめ、日も西に傾きぬれば、山の麓に陣を布き、其夜は野陣に宿しける。

○加藤清正打二殺虎一

其夜清正が陣の後の大山より一疋の大虎來り、馬を宙に提げ、柵の上を飛出たり。陣中是を見
て大きに騷ぎ、弓よ鐵炮よとひしめきたり。清正之を聞て口惜き事哉と怒れけるが、又夜ふけ
て上月左膳と云ふ小姓も虎來つて喰殺せり。清正彌怒り、馬を取られしさへ安からず思ひしに、
獸の爲に人を失ふ事、我武名の恥辱なりとて、夜のほの〴〵と明る頃より、數千の軍兵山の四

ば、日本の軍勢粉のごとく成て退くべし。此所に勢を伏て、敵軍川を半渡さん時、卒に打出て清正を打破るべし」とて、權應珠人名と勢を二つに分ち、川の傍の林木の間に埋伏し、息をつめて相待けり。清正の先手木村又藏、黒き馬の太く逞ましきに跨り、刃の渡り六尺餘りの野太刀に四尺有餘の柄をはめ、右手に提げ、眞先に馬を躍せ、彼春川地名の川端に到り、四方を詑と見廻しけるに、向ふの岩上に樹木いや深く生繁り、何様伏兵も有るやらん氣色なれども、大膽不敵の木村なれば、朝鮮の伏兵何程の事や仕出すべきと、兵を進め川中へうち入れば、惣軍續て渡る所に、林の内より矢を射る事雨のごとく、攻鼓を打て元豪人名が軍兵左右より曈と喚いて討て懸る。木村又藏是を見て、「健にも戰を催しける哉」と一人言して、彼一丈餘の野太刀眞向にかざし、寄來る敵を太刀の平刃にてひらり〳〵と打すうれば、馬も人も嫌ひなく、右と左へ打すゑられ、忽ち一道の血路を開き進み行く。其中にも毛色よき武者と見れば打落して首を取り、傍若無人に戰ふにぞ、朝鮮人案に相違し、はや引色になりにけり。元豪人名是を見て、二百餘人の射手を高き岳に引上げ、矢を放つ事雨よりも繁し。さしも勇みし日本勢、射しらまされて猶豫にぞ、朝鮮の軍兵得たりかしこしと、切先を並べ討てかゝれば、清正の勇臣井上大九郎、飯田角兵衛等何かしばしも猶豫すべき、先に進む朝鮮人十六騎またゝく内に突倒し、味方を招

て出て、揉合して戰ふ程に、朝鮮人さん〴〵に斬立られ、死る者數を知らず。此時森本儀太夫流矢に左の臂を深く射られ、莊林隼人が來るを見て、「いかに隼人我手負たり。此矢拔て給はれ」といふ。隼人馬より飛下り、手をかけて拔捨れば、森本「さても快き事哉」といひも敢ず、馬にひらりと打乘り、一鞭くれて敵中へ駈入り、朝鮮の大將鄭大任人名と渡り合ひ、馬より下に切て落し、首を取て進ける。此森本莊林は音に聞えし剛の者なるが、森本の鎗は白き鳥毛を鞘とし、莊林は黑鳥毛を鎗の鞘とす。されば朝鮮國にても白鳥毛黑鳥毛と異名して恐れけるとぞ。扨も日本勢勇を逞しうして斬立る程こそあれ、朝鮮人八方に敗軍し、難なく金山地名の圍は解たり。爰に哀れむべきは城將加藤與三左衞門、敵の毒箭に脇腹を射られ、此戰場に命を落しぬ。森本、莊林等其尸を地中に埋み、軍勢を引て橘中地名の城へ後詰しけるに、金山地名の合戰を聞おぢして、朝鮮の兵等早く圍を解きて退きければ、城將九鬼、天野、山内等を伴ひ、清正の本陣さして引返しぬ。去程に金山の城を攻たりし朝鮮の大將元豪人名權應珠人名兩人は、森本、莊林に軍陣を切破られ、春川地名といふ所迄退きしが、遙に東の方を望み見れば、南無妙法蓮華經の大旗風にひるがへし、勢のほど一萬餘り、しづ〴〵と押來る。元豪人名元來智勇兼備の大將なれば、士卒に向ひ申す樣、「あの大將こそ日本第一の勇將加藤清正鬼將軍よ。渠一人を討取ほどなら

繪本太閤記　六篇卷之九

○加藤清正救二金山橘中城一

此時加藤主計頭清正は、金山（地名）橘中（地名）の兩城を救はんとて、旗下の勇士森本儀太夫、莊林隼人、齋藤立本、龍造寺又八郎等に五千餘の逞兵を與へ先に進ませ、清正自ら一萬餘騎の軍兵を引卒し、跡に續て進發せり。抑金山（地名）橘中（地名）の城を取圍む大將權應珠（人名）鄭大任（人名）元豪（人名）の輩、數萬の軍兵を以て攻撃つ事甚だ急なり。中にも權應珠（人名）は聞ゆる猛將なれば、自ら馬を軍門に駈出し、城兵と嚴しく戰ひ、日本の兵士數十人斬て落し、彌勇んで攻立ければ、金山（地名）を護し倭將加藤與三左衛門、橘中（地名）の守將九鬼四郎兵衛、天野助左衛門、山内甚三郎等隨分手繁く防ぎ戰ひ、或は城戸を開き切て出で、又は夜討朝駈なんどに寄手を惱し、多く敵兵を討取るといへども、朝鮮人多勢なれば、更に弱れる氣色なく、晝夜間なく攻立れば、兩城とも今はこらへがたくぞ見えにける。去程に森本、莊林、齋藤、龍造寺が五千餘人の援兵、揉に揉んで押來り、朝鮮人の後より先一文字に突立れば、城中よりも援の軍勢到りぬと見えければ、木戸を開き討

繪本太閤記 六篇第九之卷 目錄

加藤清正救金山橘中城
加藤清正打殺虎
加藤光泰義勇愕衆將
安南合戰
小西行長書贈沈惟敬
日本勢燒王城

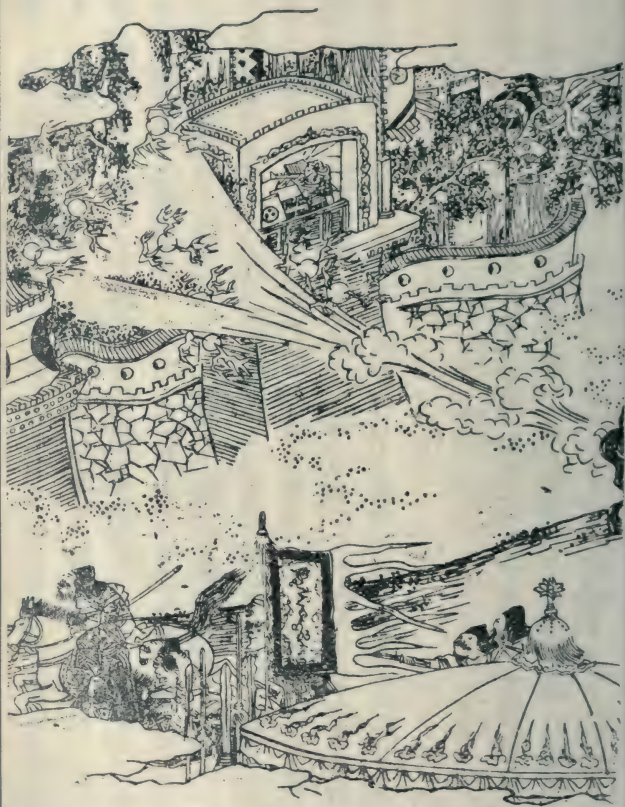
二口三口水を飲せ、又引上ては面を見て笑ひ、嘲弄せる事數次なり。此時田路勘四郎といふ強弓の精兵、敵多く射殺し、此堤を歩行み來りしが、衣笠が此有樣を見て大きに驚き、後より驅寄り、拔討に朝鮮人が肩先をけさにかけて斬倒し、衣笠を助けたり。衣笠大に喜び、先よりの物語をなし、活命の恩を謝し、彼朝鮮人が首を取りて本陣さして歸りける。鍋島直茂之を聞て奇異の事に思ひ、「朝鮮柔弱の國といへども、又かくのごとき大勇の者有り。衣笠は運強き男なり」とて、兩人ともに太刀一振を與へ、勝軍をさめ、感興地名の陣にかへりける。

成るを、大將直茂大に怒り、「きたなき味方の形勢かな。軍はかくこそする物なれ。我に續け」と呼はつて、自ら鎗を引きしごき、雲霞の如く群りたる朝鮮の軍中へ、をつと喚いて突て入り、人なき所を行く如く、右へ靡け左へ追ひ、縱橫無盡に薙立れば、誰か是にいさまざらん、鍋島平左衞門、小川市左衞門を始めとし、水町、大木、千手、藤井、南里なんどの勇武の臣、我劣じと敵中へ驅入て、「首を取るな、切捨にせよ」と聲々に罵り、死を恐れず生を顧みず、勇を震うて惡戰すれば、朝鮮人大軍なりといへども、此勢ひにあたり難く、大將李希德名馬を打て迯行くにぞ、惣崩に崩れ立ち、右往左往に散亂せり。爰に衣笠宗兵衞といふ侍あり、敵の首二つ取て小河の堤に傍て馬を乘行く所に、一人の朝鮮人、身の長七尺餘り、眼の光星のごとく、虎髯飽まで生ひて其相貌鬼の如き武者、手に短劍を持て堤の上を進み來る。衣笠見るより能き敵迯すまじと、大太刀を打振り聲をかけて斬てかゝれば、被朝鮮人長き袖を擧て衣笠が刀を纏ひ、猿臂を延べて馬より下に引落す。衣笠心得たりと太刀を打捨て、ひたと組で組伏んとするに、此朝鮮人元來萬夫不當の勇力あり、衣笠を小兒のごとく橫に抱き、更に動かせず。衣笠こは無念なりと金剛力を出し、奮ひ脫んとすれども、其力何十人力を兼たりしや、大磐石に推れしごとく手足をも働き得ず。朝鮮人頓て川端の水際に下りて、衣笠が頸の邊りを摑んで水中に頭を押浸し、

落行ける。然りし程に朴晉を始め朝鮮の一揆等勢を得て、清正が勇臣加藤與三左衛門が籠りし金山の城、九鬼四郎兵衛、天野助左衛門、山内甚三郎等が固め守たる橘中の城を一時に取圍み、息をも繼せず攻たりける。又鍋島直茂が本陣感興の北八十里（六丁一里）兀平山といふ所にも、朝鮮の大將李希德金義元といふ兩人、數萬騎の大軍を集め、大に陣營を張り、鍋島と雌雄を決せんとす。其外所々の群盜蜂のごとく起り、諸方の道路を遮り留め、騷がしかりし世の樣なり。此時朝鮮の王城より、浮田秀家使を以て、「加藤、鍋島兩將も軍を引きて王城に歸らるべし」と度々申招るれど、加藤は「金山橘中の兩城敵に圍れぬれば、救ひ出して退くべし」と返答し、直茂は「兀平山の敵を討ずんば、味方引退くを追討にせらるべし」とて、合戰の用意區々にて、急に退陣すべき模樣に有らざれば、王城にても諸將打寄り、評定のみに日を過しぬ。

○鍋島直茂兀平山破鮮軍

鍋島加賀守直茂は、兀平山の鮮賊を打破り、心安く引取るべしと、其勢僅に四千餘人、兀平山に押かけて、鬨を作り斬入つたり。朝鮮の軍兵も矢石を飛し大木を投掛け、日本勢のひるむ所を、噇と喚いて切て下り、命知らずに戰へば、元來小勢の日本勢、衝立られて足並も四途路に

震天雷の火炮和軍を劫す図

北しける。されば今に至る迄朝鮮人其勇猛を恐れ、小兒の啼く時鬼將軍來れりといへば啼止む由、かばかりの猛將も、類稀なる事なりけり。されば加藤、鍋島の兩將、斬取たる地の要害詰り詰りに柴を構へ、旗下の勇士を籠らせて是を守らしむ。此時大明より李如松人名を大將軍として二十餘萬の援兵、朝鮮を助勢せるよし國々へ聞えければ、四方へ迯隱れたる朝鮮の將卒等、爰に始めて英氣を得て、國の爲に忠義を盡さんと、二千三千の軍民を驅集め、所々に旗を揚る者數を知らず。其中に朴晉人名と云る大將は、先に日本勢と密陽地名に戰ひ、討負て山林に隱れ居しが、是も數千の軍兵を驅催し、慶州地名の城に押寄せ、命を惜まず攻掛たり。此城には加藤清正の家臣齋藤立本、坂川采女五百餘人籠城し、嚴敷防ぎ戰ひ、却て寄手の朝鮮人死傷の者甚だ多し。爰に朴晉人名が幕下の將に李長孫人名といふ者あり、火術に妙を得て人に知らる。此者震天雷といふ火炮を巧み出し、或夜城中へ打入たるに、日本人はまだ此火炮の制を知らずして、怪き物を敵方より投たるぞと爭うて集り見るに、忽ち其物雷の如く鳴ふためき、火焰八方に散じ、人馬を打殺し陣屋を燒く、其聲天地に震動す。日本人大に驚き、防ぐべき手術を失ひ、あわて騷ぐ事大方ならず。朴晉人名城外より是を見て、李長孫人名に命じて猶も震天雷を打入させ、惣軍鬨を作て無二無三に乘入ければ、齋藤、坂川防ぎ戰ふ事叶はず、城を捨て清正の本陣さして

退きける。此時橘右近將監宗茂は、朝鮮人の首二つ鞍の四方手に附け、本陣へ來られしを、隆景見て取敢ず、「見事に候」と申されけるに、宗茂打笑ひて、「いつも仕る事にて候」と答られしぞ勇々しくぞ見えたり。さても日本勢勇み進み、追討せんと罵れども、小早川隆景堅く是を制し、「大軍を深く追ふは味方の爲に吉少し」とて、鐘を鳴らして軍を收め、王城へ引取りけり。

○加藤清正鍋島直茂之形勢

偖も日本勢は、さしも大軍にて向うたる明の援兵を一戰に切崩し、王城へ引取りけるが、加藤主計頭清正、鍋島加賀守直茂の兩將は、深く咸鏡道八道の内に切入て、此時未だ王城に來らず。浮田秀家追々使を以て兩將を招きけれど、道に合戰ありて引取りがたきよし聞えける。抑加藤清正は、去年秋七月、朝鮮の兩太子を生捕り、猶も進んで兀良哈地名を斬靡け、勝鬨を上げて鍋島が籠りたる咸興地名の城に來り、兩手の勢を併せ、所々の城々を攻拔く事數を知らず。兩將の勇名雷のごとく鳴轟き、咸鏡道八道の内二十二郡の地は清正、直茂兩人の手に斬取り、地を分ちて領しける。就中清正の勇威天神の如く、向ふ所敢て敵なく、旗下の兵卒悉く猛勇にして、清正の南無妙法蓮華經の大旗を見ては朝鮮人恐れをのゝき、すはや例の鬼將軍よとて、戰はずして敗

の兵卒は或は三尺又は四尺に餘りたる大太刀に長き柄をはめ、眞向より斬割る程に、大明朝鮮の薄鐵にて製りたる甲冑を斬る事只熟菜を切るが如く、或は兜の天邊よりずはと二つに別れるもあり、肩より胸をかけて斜に切て倒すもあり。鮮血流れて緋の湖を成し、屍は積で岸に等し。明の軍兵震ひ恐れ、右往左往に敗北す。李如松（人名）是を見て、後陣より大軍を駈つて大に進めば、兼て備へし日本の奇兵、久留米毛利が勢八千餘人、横ざまに突立れば、大將隆景一萬餘人、正面より一文字に切てかゝり、命は塵芥の如く、只々名こそ惜けれと、明兵の打つ劒を鎧の袖にて支へ、彼大刀を振つて薙立れば、大明の兵士大軍なりといへども、面を向べきやうもなく、七裂八裁に切崩され、西をさして敗走すれば、日本の後陣に備へたる浮田中納言秀家、岐阜中納言秀信、丹波中納言秀勝、木村常陸介、糟谷内膳正、長谷川藤五郎、中川右衛門大夫、淺野右京大夫等、惣軍八萬餘人、一同に鬨を作り、備を亂して切立つれば、大明朝鮮の軍勢討るゝ者其數を知らず。大將李如松（人名）もさんぐ＼に切立られ、餘りに馬を馳ける程に、後樣にどうと落たり。隆景が家臣井上五郎兵衛、李如松（人名）とは見知らねども、敵の大將ござんなれと、鎗を揚て飛來るを、從卒二百餘人駈隔てて是を救ひ、他の馬に乘せて迯のきたり。大將かくの如くなれば、從卒なじかは堪ふべき、薙倒され切殺され、討るゝ者三千餘人、辛うじて坡州（地名）迄

將野田主膳といふ者、燒飯十計木の葉に盛り、隆景の前に來り、「早敵合近く相成り候。聞し召れ候はんや」と差出せば、隆景取て五つ食し、彼侍大將野田主膳、「我も相伴仕らん」とて二つ取て食ひ、其餘を近習の武士に與へけれども、一つも得食で止にけり。誠に大軍前に有りて手詰の合戰に及ぶ時は、拔群の英雄ならでは食事などは叶ふまじと、是を見る人感心しける。時に黑田甲州長政は、歩卒六七人引具し、隆景の旗本に來り、「天晴御陣押見事に候もの哉。あまりの羨ましさ、唯一人參りて候。何方にても手傳ひ申すべし」と申けるに、隆景欽び、「よくこそ參られて候へ。さらば先手にすゝみし栗屋に力を添へ給へ」と聞えければ、長政滿面に喜色を顯し、「承り候」とて先陣へ向はれける。時に李如松人名が先手の大將香大受人名朝鮮の大將高彦伯人名等、數萬の軍兵ちか〴〵と進み寄れば、隆景後向たる味方を下知し、正面に向うて鯨波を作り、數百の鐵炮一同に放ち、炮煙につれて切てかゝる。黑田長政は寒風を防ぐ爲とて、大綿帽子を深く被り、鎗を構へ見合せしが、既に合戰始りしかば、彼綿帽子脱ぎて、世に聞えたる水牛の冑の緒をしめ、鎗を上て眞先に踊り出でらる。隆景が軍兵是を見て、「長政爰を援けらるゝぞ、今日の軍は勝たり」と罵りて、無二無三に突立れば、香大受人名高彦伯人名等、爰を先途と死力を盡し、士卒を下知し勇を勵まし、追つかへしつ戰ひけるは、夥しとも言んかたこそなかりけり。日本

日本勢の跡をしたひ、開城府名地に著し、爰にて暫くは人馬の足を休め、正月廿五日、坡州名地といふ所迄軍兵を押し出しぬ。日本の諸大將是を聞て、軍の評定區々なりしが、浮田秀家、石田三成をはじめ其餘の諸將も、大軍を引受け野合の合戰危かるべし、惣軍王城に楯籠り、矢石を備へて戰ふべしと議せられけるを、立花左近將監宗茂、目をいからし刀の柄に手をかけ、「敵剛ければとて迯籠るやうや候。唯馳せあはせ蹴散らして捨ん物を」と、氣色ばうて立上れば、人々是に勵まされ「さらば誰をか先陣に進むべし」といふ時、小早川隆景聲を勵まし、「此度の合戰においては、某先陣に進むべしと、兼てより申しつる事よ。誰人にもあれ先陣は思ひもよらず」とて、頓て我陣中に走り入り、軍勢の手配り陣備等に及びける。先手は小早川隆景が勇臣粟屋四郎兵衛、村上彈正、野島掃部三千餘人、立花宗茂、久留米秀兼、毛利元康八千餘人の勢にて、右の方三丁計に陣を取り、奇兵を爲す。本陣は隆景一萬三千餘人、旌旗の色粲然と、人馬猛に勇み立ちけるは、實に關西の一人、勇武の大將かなと、見る人擧て感じける。翌れば廿六日、まだ東雲の朝霞を拂ひ、明の大軍黑みかゝつて其間一里計に押寄たり。此時隆景味方の軍兵を後向きに立せ、敵の勢を見る可らずと下知しければ、惣軍皆敵の方を後にす。是は明兵目に餘る大軍なれば、味方の兵士戰はざる先に心臆し、見崩れをやすべきかとの將略なり。時に士大

黑田長政、久留米秀兼、小早川隆景なんどが砦へ人を走らせ、「明兵大軍にて押來るよし、早々王城に勢を引集め、計議をなして戰ひ候へ」と申遣りけれど、小早川隆景曾て是に同心せず、「我此地に渡海せし始めより、命生きて日本へ歸るべしとも覺えず。今明の大軍に逢て、鋒より火を出し、太刀の目釘の續ん程戰うて、戰場に屍を肆さんこそ、我老後の思ひ出なり。何ぞ大軍に聞懼して、敵の旗をも見ずして退くべきや」と、引かん氣色更になし。石田、增田等心に恥る所あり。かくては小早川を始め味方の諸將危き合戰に及ぶべし、枉て此所へ招くべしとて、大谷刑部を以て隆景に說しむ。刑部元來辯舌の士なれば、隆景に對面して種々と利害を說き、「まことに類なき志、古の名將剛士も誰か是に勝り候べき。然れども足下僅に二萬に足ざる小勢を以てさばかりの大軍にあたり、空く討死有らん事、いと口惜き次第なり。且太閤への不忠にも候へば、疾く〳〵王城に退き、重ての合戰に今の勇氣を以て先陣に進み、大功を立て候はんはいか計の忠節ならん」と、詞を盡して諫けるに、隆景やう〳〵理に服し、「さらば此所を引取り、此後の合戰には八幡人に先陣はさせ申すまじきぞ。足下此事の證人と成り給へ」とて、終に黑田、久留米の諸大將にも申合せ、皆々王城へ退きけり。されども隆景は人に先をせられじと、南大門の外碧蹄館名砦に屯をするゐて、敵の來るを待れける。然るに明の將軍李如松人名は、大軍を引率し、

落行ける。元より斯る危急の手當にとて、王城より繫ぎ城を構へ、首尾相救ふべき備へを成せしに、大友義統生得怯弱の者なれば、明兵二十餘萬騎平壤地名を取圍みたるよし、行長が知らせに色を失ひ、加勢を出し救ふべき心更になく、然計の大軍に圍れなば、行長も早討死してぞ有らん、詮なき援兵を出し、命を失うては叶ふまじと、周章ふためき王城さして引退く。是に因て日本の繫ぎ城みな〳〵勇氣たゆみ、黑田、久留米の兩將も、兎角の詮議に日を送り、且は路次に大河ありて渡るに苦しみ、一人も平壤地名を救ふ勢なし。惜むべし、小西行長敗北して堅城を明兵に取れしは、其罪大友義統一人に歸せり。去程に明の大將軍李如松人名は、小西等が退きたるを夢にも知らず、翌日曉天より鼓を打ち鬨を作り、塀際近く押寄けるに、城中一人も兵士なし。李如松人名足をそば立て大きに悔み、「昨日行長を攻殺すべかりしを、手延にして討洩しけるこそ口惜けれ。いざ追かけて討取や」と、軍勢を引て十里六丁一里餘り追けれど、早遠く退きて人蔭も見えず。深く追討んは敵の計略も有らんと、其所より軍を返し、平壤地名の城に入て軍士の勞を休めける。されば小西行長は宗、石田、增田、大谷なんどを引具し、難なく王城へつぼみける。此時小早川隆景は、開城府地名の要害に楯籠り、明の大軍到らば烈敷戰ひ、敵味方の目を覺させんと、手配して待ける所に、王城には浮田中納言秀家、小西が敗軍を見て大きに驚き、

ねらひ打に放ち出す程こそあれ、明兵討るゝ者甚だ多く、日も暮なんとすれば、李如松名下知を傳へ、「窮鼠返て猫兒を斃す。明日重ねて計略を定め、一息に攻落すべし」とて、鐘を鳴らして軍を收め、城外に野陣を構へ、夥敷篝を焚き、其夜は攻口を甘げて、夜の明るを待居たり。

○小早川隆景破二明兵一

偖も小西攝津守行長は、晝夜明兵に攻立られ、隨分嚴敷防ぎ戰ふといへども、雲霞のごとき大軍、終に惣郭を乘破られ、本城を堅めて必死の戰を營み、討死の武士千六百餘人、手負傷者は數を知らず。日々大友、黑田等が後詰の勢を待けれども、此時までいまだ來らず。小西城中の諸將郎等を集め議しけるは、「味方の援兵終に來らず、今は落城を待の外なし。某思ふに、合戰は此度に限るべからず。今宵敵の攻口を退きたるを幸に、先王城へ引取り、計略を定めて勝負を決せばやと思ふはいかに」といふ。石田大谷等しく詞を揃へ、「此計能く理に當れり。敵の油斷して有ん間に早々退城すべし」とて、落殘りたる軍兵纔に六千餘人を引具し、城の西の方より密に出て、江の邊に來り見れば、天行長を助くるにや、此頃の寒天に流水悉く氷り、恰も平地のごとし。是によつて船を用ひず、氷を踏でさしもの大江を恙なく打渡り、王城さして

二十餘萬の大軍なれば、手負を入替へ、新手を以て乘掛れば、いつ果べき戰とも見えざりけり。既に其日も戰ひ暮し、寄手猶攻口を退かず、火箭を射かくる事透間なし。城中夜終休息するいとまなく、心力を盡し防ぎ支ふ。行長是を見て曰く、「小勢を以て大軍を破るには、夜討するに如はなし。誰か敵陣に切入べき」時に宗義智進み出て、「某軍勢を引て敵を破ん」行長大に歡び、義智に三千餘人の逞卒を領せしめ、夜子刻に城戶を開き、明の陣中へ衝入り、さん〴〵に戰ひ、三百騎計敵を討ども、元來雲霞のごとき大軍、少しもひるまず、四方より引包み、火炮を放し矢を射出し、面をむくべきやうもなく、義智が軍勢手負死人數多なれば、かくては始終勝利あらじと、軍を引上げ城中へ入たりける。次の日明兵三方より一同に聲を合せ鯨波を作り、かづきつれて攻上る。就中漢南國勢三萬餘人、搦手より嚴しく攻詰め、七星門城戶の名を打破り、さんざんに切立つれば、日本勢勇なりと雖も、目に餘る敵の大軍防ぐべき力なく、引色に成りけるを、明の大將李如松名人園を以て味方を招き、「早此城は落たるぞや。進めやすゝめ」と下知をなし、大軍大濤の漲るごとく、どつと喚いて乘入にぞ、日本勢防ぎ難く、本城さして引退く。明兵彌きほひに乘じ、本丸を蟻のごとく集りて取圍み、息をも繼ず攻たりけり。小西行長味方に下知して、「今は我々が討死すべき時なるぞ。心を靜め力の繼ん程は鐵砲にて打倒せよ」と、

き、大軍にて向ひたり。味方の小勢にて討て出なば利有まじ。堅く守て禦ぐべし」と、其用意をなしたりける。且又兼ての約束なれば、大友義統が城へ急使を遣し、「大明の援兵二十餘萬、平壤地名を攻る事急なり。黒田、小早川及び王城の諸大將へも此旨を告知らせ、力を合せて救ふべし」と申遣り、平壤地名の城中は鎭り歸つて、敵の寄するを待居たり。翌れば正月五日、明の大軍潮のごとくおしよせ、鬨を揚て攻上る。抑平壤地名城の地たるや、東に大同江川名の大流あり。西北に嶮山高く聳え、要害堅固の城地也。城外二里六丁一里計に牡丹臺といふ臺あり。四方に柵をふり逆茂木を引き、爰を行長が出丸とす。城中の惣勢凡二萬八千人、小西、宗、石田、大谷、増田の諸將、敵を矢頃に引受けて、雨のごとく鐵炮を放ちかくるに、空丸は更になしといへども、明兵大軍なれば事ともせず、大炮を放ち火箭を射かけ、喚き叫んで攻たりける。其矢の中る所忽ち火燃え出て烈々と燒上れば、日本勢兵を下知して是を防ぎ消しむる。李如松名人遙に是を見て、「城中は色めきたるぞ。力を合せ乘破れ」とて、揚元名人張世爵名人の兩人は、軍兵を進めて牡丹臺の出丸を攻めさせ、吳惟忠名人は漢南國人三萬人を引率せしめ、城の後より卷寄せ、惣軍は平壤地名の本城を取圍み、息をも繼せず攻けるに、城中の日本勢も爰を詮と防ぎ戰ひ、石打棚より大石大木を投落し、矢玉を飛す事秋の野の風に亂るゝごとく、明の軍兵數を知らず討るれども、

扶桑息レ載服ニ中華一　四海九州同ニ一家一
喜氣忽消寰外雪　乾坤春早太平花

かくて其年も徒に暮て、明れば日本の文祿二年、大明の萬曆二十一年、新年の壽とて平壤地名の城中にも取々酒宴など催しぬれど、此頃は軍も止て閑暇なるに、士卒等皆古鄕のことのみ戀しくて、親を思ひ妻子を案じ、只侘しげにて英氣を失ふ。石田三成此有樣を見て行長に申しけるは、「沈惟敬人名來り和睦の儀を調ふといへども、人心の反覆敵情叉計がたし。味方の兵卒かくの如く怠り、戰ふ氣色なきに乘じ、大明卒爾に攻寄なば、味方頗る難儀なるべし」行長實にもと心附き、城中に下知して、「大明の和睦固く整ふ迄、軍令に怠る者は斬べし」と申渡し、持口持口に勢を分ち、斥候を出して敵の形勢を伺はせ、日本のごとく城の塀に矢間を開き、數十挺の鳥銃大筒をひし〳〵とかけ並べ、旌旗鎗刀雲霞のごとく、敵寄なば打崩んと、籠城の體改りて嚴重なり。是に依て軍卒叉英氣を增し、以前より猶勇ましょ。去程に明の大將軍李如松人名は、二十餘萬の大軍を引率し、正月四日、既に平壤地名の安定館城名に先陣は著ぬ。此時小西が斥候二十騎計、彼明兵の形勢を伺ひけるを、明の先將李寧人名といふ者、士卒に下知し、四方より取卷き、生捕にこそしたりけり。僅に三人迯歸り、行長にかくと告ければ、「さればこそ明兵我輩を欺

繪本太閤記　六篇卷之八

○小西行長平壤戰明兵

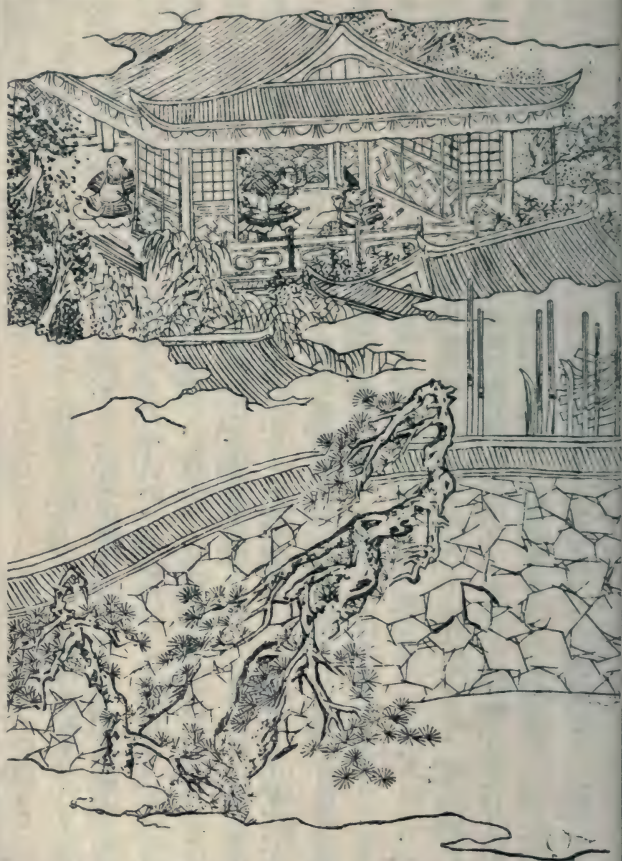
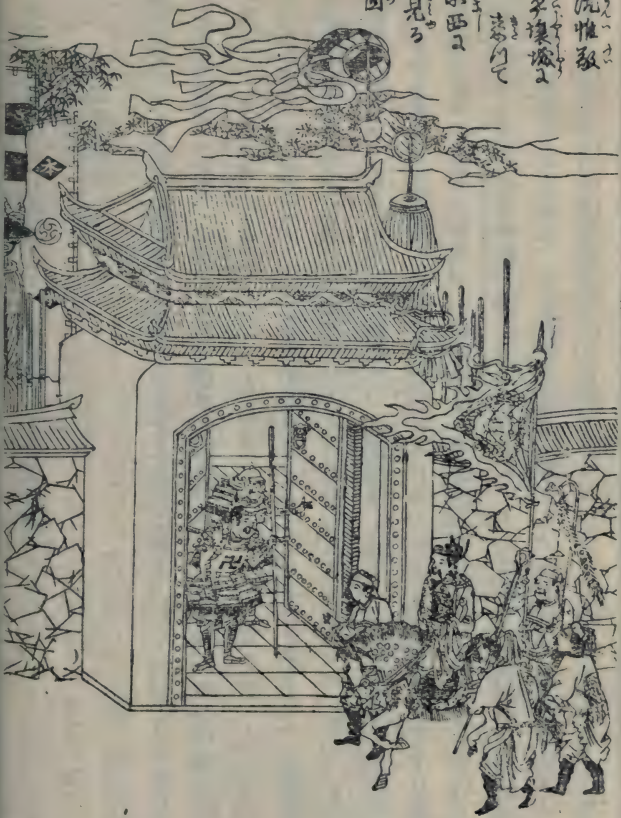
明の萬曆二十年冬十月、司馬石星人名沈惟敬人名を以て僞つて日本と和睦をなし、和將行長三成等を透し欺き、頻りに諸國の軍勢を催促すといへども、近年打續き北狄冦を爲し、防禦の戰間なきにより、墓々しく催に應じ集り來る軍兵もなし。大將軍李如松人名副將軍宋應昌人名等、力を盡し募り需るほどに、漸く十二月上旬、十五萬人の軍兵を整へ、猶是にても不足なりとて、漢南異國の名より三萬人の勢を借り、朝鮮の軍勢を合せて凡二十餘萬人、李如松人名是を引率し、山海關地名を出て、同月廿五日、鴨綠江川名を渡り朝鮮に入る。此時日本勢平壤地名城中に在て沈惟敬人名が音信を待ども、露計りの便もなく、なま中なる和平を議して朝鮮の城々をも攻かゝらず、只闇然として日を過しぬ。早約束の五十日も滿て、十二月の末、沈惟敬人名より使を以て「大明皇帝和睦の事許容し給ひ、頃日惟敬自ら日本へ渡海すべし」と申送りけるに、小西石田等大に歡び、僧玄蘇に命じ報書を書かしむ。玄蘇書の後に詩一絕を詠ず。

繪本太閤記 六篇第八之卷 目錄

小西行長平壤戰明兵
小早川隆景大破明兵
加藤淸正鍋島直茂形勢
鍋島直茂冗平山破朝鮮軍

み、「淀君の實心天に通じ、大明より和を乞ふ事、豐臣の家運めでたき祥瑞、行長とく〳〵領掌ありて、和談の儀を執行ひ給へ」と、增田、大谷もろともに、さま〴〵と說さとしぬれば、行長元來味方英氣の拔ざる間に大明へ押寄せ、烈敷合戰をはじむべしと軍略のみに心をこらし居けるに、石田、增田に說伏せられ、殊には淀君の仰も默しがたく、且は其身も久しき在陣、軍慮の勞れなきにしも非ず。何さま敗軍の惡名なき內に和睦せんも可なるべし、と漸くに同心しければ、石田等大によろこび、再び沈惟敬人名を招き寄せ、行長七箇條の標目を擧て、「此條々大明違背なく諾はば、和睦の議に隨ふべし。且日本久しく勘合船の通路なし。依レ之秀吉公數年朝鮮と親みをなさんと計れども、日本の言に從はず。此故に軍兵忽ちに到り、朝鮮を攻て粉のごとくなさんとす。足下今此所に來りて和を需む、是國家泰平の基なるべし。速に明帝に奏聞し、盟使を日本に遣し、交親の誓約をなさば、幸是に過べからず。官使若來らば、今より五十日の間を以て限りとすべし。且朝鮮王李昭人名義州地名にありと聞り。足下彼所に行きてこれを告げ、而して後大明に去るべし」と嚴重に答へければ、沈惟敬人名彼七箇條の標目を領承し、「不日に盟約の官使爰に到るべし。案內して日本へ渡海せしめ給へ」と、互に約束を固め、別れて大明へ歸りける。

らざる計略をめぐらし、和睦を調へ然るべしとの內命なり。淀君は是婦人中の龍なり。其意見悉く中れり。足下能く思ひ給へ」と云ふ。行長是を聞て敢て答る所を知らず、目を閉ぢ手を拱きて思惟せる事半時計り、忽ち軍監の武士一人行長が前に來つて、「大明の遊擊將軍沈惟敬といふ者、自ら來つて攝州公に見えんと乞ふ。いかゞ計ひ申すべき」といふ。石田三成傍より進み出て、「何事の仔細なるぞ。召寄て尋問し、其上にて計議有べし」といふ。行長是に隨ひ、沈惟敬を城中へ招じむ。此時沈惟敬は數多の玉帛金銀を捧げ來り、行長が前に呈し、禮を行うて座を定む。雙方の通辭兩三人側に控へたり。行長先問て曰く、「將軍何の議論有て爰に來るや」惟敬が曰く、「吾大明皇帝日本勢の屢朝鮮を犯し掠るを聞召し、援兵百萬騎を調へ不日に朝鮮を救んとす。然れども劍戟を振て相戰ふ時は、兩軍死亡の者舉て算ふべからず。軍民の苦み國の費、是又幾何を知るべからず。我皇帝は仁君なり。深く是をかなしみ給ひ、元來大明日本互に恨みなし。和睦して兵を收めなば、萬民の悅び此上の有るべきや、故に臣をして來つて此事を告しむるのみ。倭將軍吾皇帝の贈り物を受納め、よろしく廻報有るべし」と申す。小西行長答て、「是は國家の大事、諸將を集め商議して報を爲すべし。暫時客屋に有て休息有べし」と一間なる所へ沈惟敬を伴ひ行き、種々饗應なしたりける。石田三成は天に歡び地に嬉し

沈惟敬
多𡘙城ニ
来りて
小西ニ
見ゆる
図

出立ち、一時の富貴人の目を驚かし、朝鮮國へと急ぎけり。

○沈惟敬欺ニ日本勢一

小西攝津守行長は、大明の援兵を鏖にし、其威名遠近に響き、敢て手を出す者もなし。此時日本後詰の勢増田、石田、大谷、前野、淺野、南條、中川、糟谷、片桐、伊達の諸大將、悉く朝鮮に著船し、王城に屯して軍議をなす。是によつて小西をはじめ、黑田、小早川の人々も軍威を增し、勇氣彌壯にして、大明の勢何十萬來るとも、恐るゝに足ずとて、勇む事大方ならず。石田治部少輔は兼て心に思ふ仔細有ば、大谷、增田も諸共に軍勢を引率し、平壤地名の城に來り、行長に參會し、數度の軍功を稱讚し、且三成聲をひそめて申けるは、「今度朝鮮の役において、味方いまだ敗を取らずといへども、終には日本の勝利とも覺えず。其上日本の國用幾ばくの弊を知らず。太閤も是を以て心を苦め給ふ。將亦某等朝鮮に渡海せるを以て、密に淀君の御内意あり、日本の諸軍勢頗る勝に乘といへども、大明は限りなき大國なれば、何計の軍兵を催し向ひ來んも計り難し。今の勝色を異國に耀かし、和睦をなして凱陣せば、一つには日本の武名も高く、二つには太閤の御齡をも延し給ふべし。行長によく申談じ、日本の恥辱な

奉る。頃日司馬將軍、朝鮮の援兵として日本勢を防ぎ戰ひ給ふ由聞及べり。先に遼東地名の二將軍、數多の軍兵を失ひたりしは、全く日本の人情に通ぜず、戰のさまを知らざるによつてなり。某若年の時より度々日本へ渡海し、彼國の行勢、人の剛臆、軍の駈引など審に覺て候へば、あはれ某を以て一將と成し給はゞ、只一討に日本勢を討破り、本國へ追歸さん事何の仔細も候はず」と、事もなげに申ければ、文表茂女名大に欽び、沈惟敬人名を家に留め、司馬石星人名に是を告ければ、石星もよき序とや思ひけん、沈惟敬人名を招きて對面す。惟敬謹んで石星人名を拜し、座定つて申けるは、「將軍日本を討給んに何なる計を行ひ給ふや」石星笑うて、「吾和賊を討んに何ぞ軍略なからんや、然れども汝遠く爰に來て吾に見ゆ、極めて好き計有べし。願くは妙論を聞ん」沈惟敬が曰く、「某日本に度々往來して彼國の情を知れり。抑和人は剛勇にして敢て死を恐れず。明國の人力を以て戰はゞ悉く敗すべし。某倭の大將小西行長に逢て、僞つて和睦を乞べし。其隙に軍勢二十餘萬人を催し、渠が怠りを討んに勝ずといふ事有る可らず」石星人名手を打て大に喜び、「此はかりごと究めて妙なり。汝倭將行長に逢て和睦の議調へなば、奏聞して重く恩賞行べし」といふ。惟敬人名欽々然として是を領承し、日本の諸將に賄すべき料なりとて、金銀及び玉帛珍器を需め取り、其身は蟒衣玉帶を著け、人品容貌大臣の如く

十人のみ、大明の軍民是を聞き、震ひ慄く事かぎりなし。

○沈惟敬説石星

大明國王神宗皇帝は、遼東の軍將祖承訓和兵の爲に數多の軍兵を失ひ、剰へ大將史儒討死せし由を聞き甚だ驚き、群臣を集め議せられけるに、皆李如松を以て大將軍たらしめ給はば、日本勢を鏖にすべしと奏す。是によつて帝李如松に大將軍の號を賜はり、宋應昌と司馬石星兩人を以て副將たらしめ、諸國の軍勢を催促す。爰に沈惟敬といふ無賴の者あり。定れる產業もなく、酒に亂れ奕を好み、日夜青樓に徘徊して、陳澹如といふ妓に深く馴染み、常に此妓の許へ通ひけるが、彼妓の家に鄭四といへる下男あり。此者先年日本に渡り、數年の後大明へ歸りし者なりければ、日本人の情に通じ、面白く日本噺をなしけるに、此沈惟敬嗚呼の男なれば、能々是を聞すまし、忽ち北京の都に行きて、今度副將軍に選み揚られたる司馬石星が妾文表茂といへる者は、初め陳澹如と同じ亡八の妓にて有りしかば、沈惟敬と元來知者なり。惟敬彼文表茂が住居に行きて、言を巧にして申けるは「御身今はいにしへの傾城と同じからず。司馬將軍の思ひ人にて渡せ給へば、我々膝下に參りて身の幸を希ひ

城戸を開きて大太刀を眞向に翳し、一文字に切つて出で、足元四途路なる明兵を、前後左右に切倒せば、何かはもつてたまるべき、我さきに道をもとめ、迯走らんと焦れども、元來平壤地名の嶺高く聳え、路狹くして進退自由ならざるに、連月降り續きたる霖雨、泥深くして或はすべり又は轉び、討るゝ者數を知らず。惣大將祖承訓人名はじめの大言にも似ず、人より先に命からがら、安定館城名まで北行けり。其翌日小西行長味方の士卒に下知しけるは、「明人の手並のほども知られたり。急ぎ安定館城名に押寄せ、一戰に切崩せよ」とて、自ら一萬餘人の勇兵を令し、揉にもんで押し寄せたり。明將祖承訓人名は案外なる敗軍を成し、いかにせんと思ひ煩ふ所に、日本勢大軍にて此所へ押寄する由ひしめきければ、今は議すべき謀略にも及ばず、まづ軍を整へ館を出て、日本勢を遙に望めば、いまだ目なれぬ日本の軍粧、思ひ〳〵の旗馬印、或は四半大吹貫山おろしにひらめき渡り、太刀薙刀の光は霜のごとく、甲冑馬具の爽かなる、あたりも耀く計なり。大明の馬ども此軍粧を見て甚だ驚き、いかに鞭打ども尻込して進む事能はず。既に敵合近くなれば、小西が軍兵鬨を作り、鐵炮をきびしく打かけ、竪横に切入れば、明兵一支も支へずさん〴〵に敗北し、討るゝ者麻のごとし。大將祖承訓人名は只一騎、遼東地名さして迯たりける。はじめ三萬人と聞えし軍兵、悉く討殺され、命を全うし遼東地名へ歸りし者僅に數

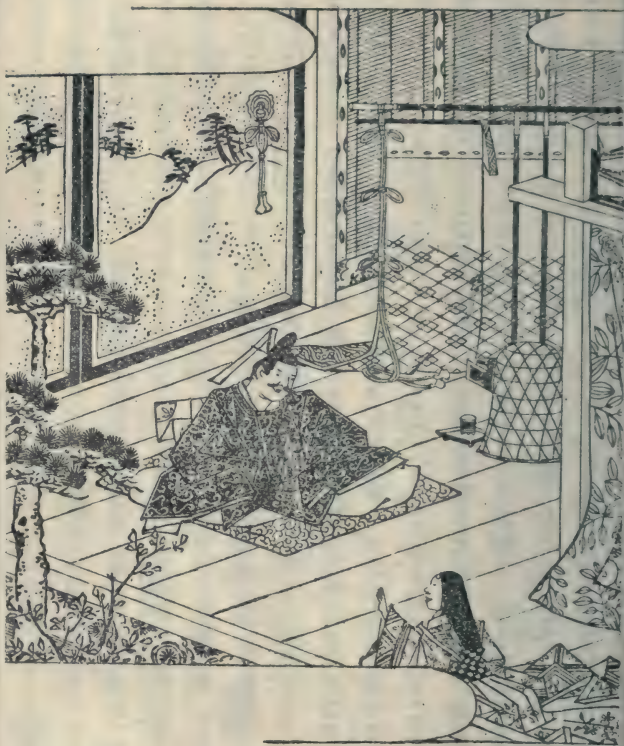
ず。谷々の水漲り溢れ、平地泥深くして馬の蹄を爛し、兵卒の足を腫す。依之平壤地名を去事五十餘里六丁一里安定館城名に止り、軍の評定をなしたりける。朝鮮大王大明の援兵來りぬれば甚だ悦び、柳成龍人名を以て是を饗應なさしめける。明將祖承訓人名大に勇に誇り、柳成龍人名に向ひ、「倭賊等は早逃去つらんとこそ思ひしに、いまだ平壤地名に止りありや」と云ふ。柳成龍人名是を聞きて眉をしわめ、「將軍の仰大に違へり、日本勢の勇壯尋常の及ぶ所に非ず。利劍骨を切る事草のごとし。軍器には鳥銃あり、人壯んに馬強し、將軍是を輕んじ給ふ事勿れ」祖承訓人名是を聞て、天を仰ぎて大きに笑ひ、「和賊未だ去らずして此に有り、天我をして大高名をなさしめ給ふぞ。いざや軍を進め賊どもを打殺せ」とて、七月十九日、惣軍平壤地名の城を取圍み、無二無三に攻たりけり。小西行長、宗義智、明の軍兵と見てければ手痛く戰ひ、明人の肝を挫けよとて、持口々々を嚴く固め、鳴を靜めてためらひしを、大明の軍兵ひし〳〵と押寄せ、我先に乘入らんと、塀際近く進むを見て、待設けたる日本勢、數千の鐵炮を一同にどつと打放せば、徒矢の更にあらばこそ、黑みかゝりし明の軍兵ばら〳〵と打倒され、あはれむべし、大將史儒名人流丸に中つて、馬より下に落たりけり。城中より是を見て、木戶作右衞門、丸茂新五郎、臼田淸兵衞、荒木圖書なんどいへる小西が旗下にて一人當千の勇士、數百人の逞兵を引具し、

斬せ給へや」とて、首さしのべて坐したりければ、太閤をはじめ參らせ御供にありあふ人ども、さては謂れこそ有りけめと、舌をふるはせ恐れけり。頓て首を水中へ切落し、屍をも海に沈め、底の藻屑となしてけり。今此所を與治兵衛が瀬戸と申傳ふるは、此船頭が古跡なりけり。同月晦日太閤の御船恙なく名護屋の津に著岸し、本陣に入らせ給へば、諸大將出迎へ、皆一同に萬歳を呼び、無事の御著を祝し奉る。

○小西行長破遼東軍

去程に朝鮮の平壤（地名）城には小西攝津守行長、宗對馬守義智一萬餘人にて楯籠り、朝鮮の王城を去る事頗る遠きを以て、其間に城を構へ、大友義統、黒田長政、久留米秀兼、小早川隆景の諸將等、手勢々々を以て是を守り、事の急あらば首尾相救ふべきの計なり。然るに朝鮮の國王李昖（人名）日本勢の深く切入り、犯し掠るに驚き騒ぎ、大明へ使を馳て援兵を乞ふ事、恰も雪の飛より繁し。大明帝も始めて是を駭き恐れ、李時孳（人名）荊州俊（人名）といふ兩人の役人に令して、遼東（地名）の軍將祖承訓（人名）史儒（人名）兩大將に令し、三万人の軍兵を發し、朝鮮を救はしむ。兩將命を承り、精兵を引きて鴨緑江（大明と朝鮮の境に有る大河なり）を渡り、朝鮮國に到りけるに、此時霖雨月を重ねて降止ま

はや御側へ漕寄せ、太閤を其船に移し參らせ、頓首して萬歳を唱へ、舊の船路へ漕戻せば、御供の人々皆よろこびの聲をあげ、我も〱と船を戻しぬ。さても太閤は危き難を遁れ給ひ、秀元が働き拔群なりと殊に稱美し給ひ、手づから御太刀を下し賜り、猶奏聞を遂げて宰相と成し、我聟に成すべきよし懇に仰せければ、秀元難有旨拜謝し奉り、程なく御船も渚へ寄せ錠を卸し、風の手を待ちぬ。時に太閤船頭與治兵衛がふるまひを大きに憤り給ひ、「引出して首を斬れ」とぞ下知し給ふ。武士等承り、彼船頭與治兵衛を小船に乘せ、御座船の前の方沖中にて誅せんと、四五段計漕ぎ出し、白刃既に頭に臨む時、與治兵衛大音に申やうは、「世にも御運めでたき大將にてまし〱ける哉。某は代々九州の船頭なれども、兄黑崎團右衛門といふ者毛利殿の御内に仕へ、去ぬる天正十年夏四月、太閤中國誅伐の砌、冠山の城に籠りたりしが、太閤の武德にや服しけん、返忠して毛利家をそむく。然るを秀吉公其功を稱し給はず、剰へ兄團右衛門が首を切て、返忠する者のいましめとなし給ふ。某兄の仇を報いんと、年月心を苦しむといへども、云甲斐なき船頭の身、近寄り奉る事叶はず、空しく年月を過せしに、時なる哉今日の御船、沖中にて打碎き、兄が恨みをはらさんものと、態と岩上へ乘上しに、御運めで度何の恙もましまさず。我大望いたづらに成り、爰にて命を失ふとも、泉下の兄に申譯あり。いざ

帝叡感ましく〳〵て、御製の御歌など下し給ふ。太閤難レ有拜謝し、直に艤ありて名護屋表へ進發ある。御供には毛利左京太夫秀元在國たるにより、先にも御供に有りて上洛せしが、再び供奉に參りける。關白秀次公在京の大小名、皆大坂まで送り給ひ、是より船に召れ、順風に帆を高く捲て西の方へ赴き給ふ。九月廿八日には長門の沖名にし負ふ赤間關、音渡の瀨戸に御船を漕出しぬ。折節北風荒く吹き、白浪漲り涌て冷じければ、御供の人々爰に暫く船をとゞめ、風和て後渡るべしと下知せられけるに、御座船の船頭與治兵衞嘲笑ひ、「あな臆病なる方々哉。此沖は風なき時といへども大浪ありて、尋常の海路に異なり、此北嵐に帆を開き、一飛に瀨戸を越たらんは、いかに快く候はん。世の諺にも船の事は船頭に任せよと申さずや。恐多くも太閤の召させ給ふ御座船、危き計ひ仕るべきや。出させ給へ方々」とて、帆を卷揚げて船を飛せば、御供船も後れじと漸瀨戸に漕出たり。扨も大浪いや高く發り來て、人々こはいかにと見る程に、太閤の御座船大岩石の上に乘り掛け、めり〳〵と鳴るぞと見えしが、舳艫の方二三段に碎け飛んで、御船既に覆らんとす。御供の人々是を見て、あれよ〳〵と焦れども、逆浪の爲に隔てられ、救ひ奉るべき手術なし。太閤こは珍事よと驚き給ひ、舷に走り出で、彼大岩の上に踊り上り、四方を屹と見給ふに、毛利秀元小船にとり乘り、數十挺の艪を以て大濤を横切々々、

大政所医師乃圖

取物も取りあへず都をさして急がせ給ふ。七月の末京に著せ給ひ、聚樂城に入らせ給へば、大廳は早世を辭し給ひぬ。太閤是を聞し召し呆れ惑ひて、「あな淺猿や」と叫び給ひしが、そこに倒れて絶入り給ふ。近臣小姓あわてふためき、典藥の頭を召て御藥を調ぜしめ、進め參らすれば、漸人心地に成らせ給ひ、太閤涙流るゝ事雨の如し。「吾朝鮮を伐し故により、大廳の死期に逢はず。悔恨更に止べからず」とて、痛悼み憂ひさせ給ふ事限りなし。左右の近習側の人人、誠に母子の御別さこそあらせ給ふらんと、更に袖をぞしぼりけり。斯ても有るべき事ならねば、前田玄以法印を以て紫野大德寺玉仲和尚を請じ給ひ、藏葬の營みをいと細やかに行ひ給ひ、終に大德寺に葬り奉る。其禮式最善美を盡し、諸人の目を驚かし給ふ。かくて同九月中旬迄聚に籠り御座しゝに、御忌も終りぬれば、再名護屋表へ御發向の御催し取々なり。禁廷此由聞し召され、「太閤朝鮮國へ渡海の儀においては、努々留り候へ」と、勅使を以て告せ給ふ。秀吉公謹んで勅答し給ふは、「勅命固に忝しと雖も、多くの軍兵朝鮮に到り、數度勝軍を告るといへども、大明の大兵援勢をなし、今猶勝敗ともに計り難し。吾本朝に有りて、何ぞ居ながら萬里の外を指揮する事を得んや。敢て勅命に背くに非ず、唯速に彼國を平らげ、我朝の兵威を外國に輝かさんのみにて候」と申させ給ふ。勅使禁中に歸り給ひ、かくと奏聞有りければ、

〇大廳薨去

秀吉公の御母君大廳と申奉るは、此時御年既に七旬に超させ給ひ、御心もまめならざるに、太閤遠く朝鮮國を征伐し給ひぬれば、聚樂の亭に老を育ひ御座しける。齢高き御身は常さへ心細く思しつるに、今度太閤名護屋の御在陣を朝鮮へ渡海し給ひしと思召し違へて、侍女等に向はせ給ひ、「そも朝鮮と聞ゆる國は、日本を去る事幾千里なるぞや。太閤遙々彼國へ渡海有りて、いつか歸洛し給ふやらん。さらでだに頼みなき老の身の、再會の期も計り難し」と打臥して歎き給ふにぞ、御側の侍女さま〴〵に慰めまゐらせ、「太閤には肥前の名護屋に御在陣まし〳〵、諸國の大名多く朝鮮に赴き合戰をいとなみ候とや。太閤の重き御身を、いかに輕々敷千里の波濤を渡り異國に至り給ふべきや。ゆめ〳〵御心を煩はし給ふべからず」と口々に申上げぬれど、大廳さらに信じ給はず、一向太閤の御事のみこひしくなつかしく思ひ給ふの餘り、終に重き病と成り、恃み少くなり給ふ。關白秀次公日夜御側に有りて看病し給ひ、且急使を以て名護屋表へかくと告げさせ給ひければ、太閤大きに驚き給ひ、「死別は再相逢ふ事を得ず、大廳不慮の御事あらば悔るとも及ぶ可らず」とて、名護屋の政刑、朝鮮の指揮は前田宰相利家卿に委ね給ひ、

に數年御傍を去らずして、軍略及び平生の御形勢など悉く見習ひ參らせ、言語立行跡手跡等に至る迄、能く太閤に似たりければ、疎き人々三成を見て、太閤の御公達か又は御連枝にても有らんと疑ひぬ。されば三成太閤の卑賤より成立ち給ひし御行跡を見て、我も少しく志を得るものならば、碌々として人の下位には立まじきものをと、竊に大望を心に企てゝ、諸士に諂ひ帳中に執入り、立身をこそ祈りける。されば加藤清正、淺野彈正、黑田如水、福島正則なんど剛勇正直の人々は、爪彈きして三成を忌嫌ひ、又淀君をはじめ小西、增田、長束、大谷等が輩は、才を悅び智を尊び、皆三成が手裏に入れり。此時三成佐和山十八萬石の大名に立身しけれども、いまだ人を制すべき勢ひなし。太閤三成を以て九州探題たらしむべき御内意もこれあれば、十餘年の其内には、あはれ一方の惣大將と成り、太閤御他界の後は諸侯を指揮すべき恐しき大志を抱きぬれば、今度の朝鮮征伐により、太閤いたく心を勞し世を早う去り給はば、諸侯の上に立つ事難く、年來の大望畫餅とならん事を恐れ、扨こそ和睦の計を行ひけるは、皆三成が方寸より出でたる事なり。

繪本太閤記　六篇巻之七

○日本之加勢渡海朝鮮國

文祿元年秋七月、太閤秀吉公御手當の軍勢に、伊達陸奥守政宗を加へられ、都合其勢七萬餘人、朝鮮國へ渡海せしめ、小西、加藤等を援けしめ給ふ。諸將各命に應じ、肥前名護屋より纜を解き、朝鮮國へ赴きける。石田治部少輔三成も同じく軍勢を整へ、諸軍同時に渡海しけるが、增田長盛、大谷刑部の兩人を船中に會し、己が所存を物語り、「朝鮮の役止ずんば、太閤の御齡忽ちに縮るべし。所詮戰うて功なき軍、一日も早く兵を返し、太閤長命にあらせ給はんこそ臣等が希ふ所なり」と、涙と倶に語りければ、增田、大谷大に感じ、「足下の眞忠誰か是を稱せざらん。我々も心を合せ、誓て朝鮮と和議を取結ぶべし」と、諸共に同心しければ、三成大に欽び、「公等我と心を同くして和平の議調ひなば、豐臣家の御代萬々歳たるべし」とて、更に打寄り、和睦の計略他事無りける。爰に一つの議論あり。三成太閤の軍慮に勞し御齡を損じ給はん事を歎くは、忠臣に似て忠臣にあらず、深き所存の有けるなり。三成が才智太閤に能似たり、然る上

繪本太閤記 六篇第七之卷 目錄

日本之加勢渡海朝鮮國
大廳毳御
小西行長破遼東之軍
沈惟敬說石星
沈惟敬欺日本勢

さ

與(あたへ)んと申けれども、「更(さら)に不足(ふそく)にも候はず、餘(よ)の家臣(かしん)に賜り候へ」と、固(かた)く辭(じ)して受(うけ)ざりけり。さる心ざまの逞(たくま)しきものなりければ、三成も今度(このたび)の計議(けいぎ)は成(な)したりける。

べき瑞なり。君朝鮮に渡海し給ひ、行長に逢ひて淀君の仰なりと稱し、細々と和議の事を執行はせ給はんに、行長元より淀君の吹擧を以て立身なしたる者なれば、爭か其仰を背き申すべき。渠と君と心を合せ、機に臨み變に應じ、妙計を行ひ給ひなば、忽ち成就すべし」と申す。三成大きに欽び、「此事構へて祕すべし」とて、猶も頭を寄せて密事を談じ、夜もいたく更けぬれば、左近は退き出でたりける。此島左近は始め筒井順慶が謀臣にて、高名天下に隱れなき智勇の者なりしが、順慶沒後筒井の家斷絶せしかば、江州高宮に知る人ありて隱れ住して居たりしを、三成大祿を與へて召出しぬ。此時は三成水口を領し、四萬石の知行なりしが、或時太閤三成を召して、「汝俄に知行を領し、家人など數多召抱へたらん」と仰せければ、三成謹んで、「島左近只一人を招き出候」と申す。太閤笑はせ給ひ、「左近は世に聞ゆる智勇の者なり、汝等が許に小祿にて奉公すべき謂なし。僞りにて有るべし」と仰せければ、三成、「さん候、臣が祿の半を分ち、二萬石與へ召抱へ候」と申す。太閤甚だ感じ給ひ、「何樣其志ならでは汝には仕へまじ。勇々しくも謀ひたる者哉。昔より君と臣と祿の同じき例を聞ず。汝に佐和山十八萬石を與ふべし。左近にも祿を增て召仕へよ」とて、頓て左近をも召出され、手づから羽織を賜りて、「三成に心を合せ忠信を勵むべし」と仰けるに、兩人拜謝して涙を流し退きける。さて三成左近に祿を增

り、諸將集り評議有りしに、太閤の命に、吾功成らずして中道に世を去らば、火雷神と成りて大明朝鮮の軍民を蹴殺すべしと宣ひぬ。某倩太閤の御言葉に依て思ひ謀るに、戲言なれども思ふより出で、戲動なれども計るより發るとは故人の金言、今日太閤の御仰、一座の諸大將皆其威氣の盛んなるを驚けども、某は唯太閤の勢力盡たる御詞なりとこそ思ひ侍る。我幼稚の時より太閤の軍算を見るに、今年にして來年の勝敗を計知り、事を決して動ずる事なき名將なり。三木の城攻、山崎の接戰、柴田、北條が滅亡、皆戰はざる前に味方の勝利を知らせ給ふ。然るに今度大明朝鮮の役における、攻めて全き功なく、退く時は英名を失ふ。進むに進み難く、退くに退き難く、實に鷄肋の情終に凶なる事をしろしめす故を以て、御心を苦しめ給ふ事尋常の將と同じからず。かくの如くして明の大軍と戰ふ時は、太閤の御齡忽ち縮まり、身死して止むより外に別の術計有るべからず。我是を思うて心緒斬るが如し。いかにもして朝鮮の和議を調へ、軍を引きて歸國せば、太閤の御壽今より十年を保ち給ふべし。然りといへども加藤小西が輩、勇に誇り自分の高名を輝さんと欲すれば、某いかに心を用ふるとも、此事調ふべしとも思ひよらず。汝老功といひ計略あり、我に謀を教へよ」といふ。島左近承り、「君の賢察甚だ中れり。今大明の軍勢に對し、平壤地に戰ふ者は小西行長なり。是則ち遠計成就す

る小國に生れ、軍勢に事をかくこそ口惜けれ。されども諸大將よく聞れよ。秀吉功を遂ずして中道に死するとも、秀次を大將と爲し、朝鮮大明へ攻入らん時、吾魂魄雲に乘り鐵の楯を衝き、唐土の奴原一々蹴殺して捨なんに、何の難き事有んや。昔も柘榴を嚙で火となせし者のありしと聞く、其男の名を忘れたり」と仰けるに、施藥院秀成側に有りて、「夫は忝くも北野天滿宮の御事に候」と申す。太閤膝を打て、「それよく〳〵、其菅丞相さへ雷と成りて天に上りしと云傳ふれど、吾陰囊の垢ほどもあらじ物を」と大音に宣へば、一座に有合ふ諸大將、色を違へ肝を飛し、あな大膽なる仰事かなとて、聞く人毎に驚きけり。

○石田三成示レ謀二島左近一

秀吉公の寵臣五奉行の一人石田治部少輔三成は、近江國石田村の百姓左五右衛門といふ者の子なりしが、幼稚きより明敏にして、一を聞て十を知る才智を以て秀吉公に仕へ、當時江州佐和山十八萬石を賜り、五奉行の內へ加へられ、天下の政事に攝り、今日朝鮮加勢の評定の座に在りて、太閤の嚴命諸將の議論を聞居たりしに、默々と心樂まず、退いて我陣所へ歸り、其家臣島左近を近く招き、聲をひそめて申けるは、「今日本陣において、朝鮮渡海の軍兵足ざるによ

野彈正頓て此旨太閤へ言上に及びければ、兼て大明より援兵の儀は御覺期の事なれば、御手當の軍兵を加勢すべしとて、其大將を算へ給ふに、增田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉隆、前野但馬守長康、淺野右京大夫幸長、南條左衛門尉元景、中川衛門大夫秀政、岐阜中納言秀信卿、丹波中納言秀勝卿、長谷川藤五郎秀一、木村常陸助定光、糟谷内膳正賴俊、片桐市正且元等、其時都合五萬六千餘人とぞ聞えけり。太閤つら〳〵思ひ給ふは、大明二十餘萬人の軍兵、日本の加勢五萬餘人は不足なりと、普く日本國の軍勢を算へ給ふに、京大坂の警固、名護屋表の守衛の兵、其外津々浦々の固め、要害の土地、悉く無用の兵一人もなし。かくては、勝利覺束なしとて、諸將を集めて評議し給ふ時、蒲生氏鄕進み出て、「大明の軍兵二十餘萬人何ほどの事か候べき。氏鄕に朝鮮を賜り候へかし、切取にして打破り候べし」と申されければ、太閤默然として不レ言、密に氏鄕が大志有る事を惡み給ふ。時に又朝鮮より小早川隆景使者を以て申すやうは、「當時日本より十萬の援兵を渡海せしめ給ふに於ては、所々の城々を堅固に守らせ、後の患なき備をなし、隆景先陣して大明に切入り、北京名をば一番に攻落し候べし」と言上す。太閤打頷せ給ひ、「隆景が智謀さこそ有らん。あはれ十四五萬の軍兵を渡海せしめ、かゝ朝鮮大明を只一時に粉のごとくなしたらんにはいかに快からんや。我戒行拙くして、

盡し、飲食する者さばかりの大假家に充滿せり。太閤も其中に交り、酒をのみ肉を喫ひ、餘念なく笑談し給ふにぞ、限りなき興を催し、諸大將をはじめ幕下の兵士軍卒に至るまで、悉く醉を盡し長陣の憂を忘れにけり。是や越王の簞醪、任公が若魚を兼給ひし御計略なりと、陣中こぞつて稱しける。さても太閤秀吉公、當地に御在陣の始めより、日々朝鮮國より勝軍の訟、合戰のありさまを注進せる事引きもきらず。加藤主計頭は兩太子を追て是を擒にし、いよ〳〵進んで女直まで切なびけ、小西攝津守は王城を陷れ、是も朝鮮の大王を生捕にせんと西の方に切入るよし、其外黑田鍋島を始め、所々の合戰あへて敵對せる者なく、今は朝鮮の八道大半日本へ切取たる由聞えければ、太閤御氣色麗しく、銘々に高名に隨ひ感狀及び馬太刀を下し賜はり、猶も軍忠を抽で朝鮮を平定すべしと、追々御下知有りける所に、小西行長、宗義智兩人より、淺野彈正迄書付を以て言上しけるは、「行長、義智死力を盡し、朝鮮大王李昖人名が逃籠りたる平壤地名の城を攻落し、大王は北方定州地名の地へ落行き、不日に追討ち擒にすべき軍略に候所、大明國の軍兵二十餘萬人、朝鮮援ひの爲當時臣等が籠り居候平壤地名の城へ押寄せ候由、取々風聞是あり候。敵大軍に候へば援兵を賜り、某等に力を合せ給ふものならば、大明の軍勢を鏖にし、引添うて明國へ攻入り、全き勝利を訴へん事、掌の中に有レ之候」とぞ書たりける。淺

四十餘萬人の兵粮を運送し、朝鮮合戰の便を聞き、或は賞し或は罰し、凡ての下知を傳へ給ふ。誠に尋常ならぬ大將軍、實に天授の英才かなと、諸人こぞつて稱讃せり。いとも永き在陣なれば、諸大將をはじめ末々の兵卒迄、退屈の心も出來やせんと、太閤の仰によりて、或は猿樂又は茶の湯、其餘種々の戯事に軍陣の勞を慰め給ふ。夏の中頃なぎ渡りたる青海原、漁する海士の燒火の見えかくれするけしきぞ、云はん方なく面白きとて、太閤俄に令し給ひ、名護屋の濱邊に廣さ三間、長さ百五十間の假家を造らせ給ひ、十間毎に料理棚を構へ、竈爐酒食の器、炭薪鹽噌精米など取揃へ、さて漁夫白水郎千餘人を召れ、彼沖中に大網を引き、魚を取らせ給ひけるに、在陣の諸大將は申も及ばず、下部雜卒近國近在の農民迄も群集りて見物す。數百艘の漁船網の廻りに漕竝べ、遠濱より卷寄せ、磯端に轆轤を立て、網子ども多く重りて引上げしに、數も知られぬ生魚どもの、大なるは三四尺、小きは五六寸、鰭を震ひ尾を叩き、躍り上る鱗屑山のごとく、さしも廣き海濱も、忽金の岳を成せり。かくする事數多度なれば、魚を得る事數をしらず、先鯛一千尾を鹽に浸し、京に登し禁中へ獻じ給ふ。其外大政所北政所、および大阪などへ進ぜられ、且其席にては太閤を始め參らせ、在陣の諸侯上下の軍士、思ひ〳〵に選取り、彼構へたる假家にて種々の料理云ん方なし。或は膾膾炙、又は煑煎肉醬なんど、調味の種數を

池崎、桑原などの勇士劣じと飛乗て、龜甲の板二三枚こぢ放し、無二無三に躍入れば、朝鮮人大きに恐れ、矢を放つべき間もなく、或は切れ生捕れ、此船一艘は脇坂が手に乗取たり。水軍の大將李舜臣人名は、日本勢を近々とおびきよせ、時分はよしと相圖の太鼓を打立れば、龜甲船の内より數百の火炮を同時に鬭と打出し、先に進みし日本の軍船黒烟の中へ卷込れ、咫尺の間も見えわかず。船を焚れ士卒を損じ、更に戰ふ氣力もなく漂ふ所を、李舜臣人名團扇を揚げて味方を招けば、龜甲船左右に開き、元均人名等が軍勢數百の大船を矢の如く押出し、どつと喚いて突立れば、日本勢大きに亂れ、討るゝ者數を知らず。李舜臣人名大にいさみ、船櫓に立上り味方の勢を指揮する所に、敵より放つ鐵炮に、左の肩を打ぬかれ、血流れて踵に傳ふ。李舜臣人名是を事ともせず、刀を以て肉を裂き、鐵丸を穿出すに、肉に入る事三寸計、李舜臣人名更に痛苦の色なく、談笑せる事平日の如し。かくて終日戰ひ暮し、日本勢遂に打負け、釜山地名の巨濟に船をまとめ、朝鮮人も侮り難しと、其後は互に水陣を護りつゝ、合戰もなかりけり。

○豐太閤名護屋御陣之形勢

豐臣太閤秀吉公は、去ぬる四月諸大將朝鮮渡海の砌より、肥の前州名護屋の地に在陣ましく〳〵、

如し。此板に多く挾間を穿ち、火炮弩を備へ、兵士及び水主楫取其内に隱れ居て、前後左右に押廻し、敵船を射しらまさんと備へたり。去程に日本船手の諸將集りて、合戰の評議成しけるに、所詮進んで番船を打破り、深く敵地に入らずんば、陸地の將士に其功を奪はるべし、急ぎ押寄せ勝負を決すべしとて、九鬼、脇坂、藤堂、加勝、兵船を進め合戰を催しける。朝鮮船手の軍兵も軍船數百艘を押出し、かの龜甲船を眞先に進め、元均名李舜臣名が輩其後に續て待かけたり。日本の船どもには、思ひ〳〵の船印、旗指物、鎗長刀朝日にかゞやき、矢ごろ近くなりければ、船端に掛並べたる數百挺の鐵炮を、一同に噇と打かけ、烟の下より突入らんと、先を爭ひ押寄するに、彼龜甲船を並べたれば、忽海上に一箇の城を構へし如く、一人の士卒も損ぜず、かの船の挾間より矢を射出す事雨よりも猶繁し。日本勢案に違ひたる敵の動靜やと、暫しためらひ居たりける。脇坂中務太輔安治船端に立上り、「敵に用ふる船こそ吾日本の盲船に同じ制なるぞ。何程の事や有らん、乘取て手柄にせよ」飛來る矢を切拂ひ、鎧の袖をかざし、兜の錣を傾け、敵近く漕入れば、加藤、藤堂、九鬼の面々、脇坂に先をさせじと、銘々勇を逞しうして一同に乘寄せける。されど龜甲船より射懸る矢の繁ければ、海中に射落され命を失ふ者少からず。脇坂保治難なく龜甲の船に熊手を打かけ、一番に飛入れば、脇坂が家の子山岡、

せば、梯しても及ぶまじ」と、いと靜に申さるゝを、高虎大に怒り、「惡き雜言かな、舌の根を切さけん」と、太刀引拔きて立上るを、其座に有合ふ人々立集り、樣々に申宥め、漸く事なく靜りける。左馬介は其間片膝を立て柱に倚て、色も變ぜず貌も動さず、「大薙刀の刃のはづれたる如く、人そばえして取亂せるは、男子の仕業かや」とて、いとも躁がぬ體なりけるを、人々見て、其器量を感稱せり。

〇李舜臣用龜甲船破日本勢

慶尚地名右水軍官名元均人名は、唐島地名の船軍に日本勢の武勇を恐れ、再び鋒先を交へ戰ふべき氣精もなく、殘の船どもを燒捨て、軍器を海底に沈め、落行くべき支度をなす。手下の隊將李英男人名と言ふ者元均人名を諫め、全羅道八道の内の海濱を固めたる李舜臣人名に援兵を乞ひ、日本勢と再び戰ひ、先敗の恥を雪んとす。李舜臣人名朝鮮王の下知なきを以て是を辭するといへども、元均人名歎きて援を乞うて止ず、依之兵船四十餘艘、軍勢一萬二千餘人を引率し、唐島地名へ到著す。元均人名大に歡び、計略を定て戰ふべしと、其軍議區々なり。李舜臣人名兼て日本勢を防んため、龜甲の船を造れり。其制は、厚くはぎ合せたる板を以て船の四面上下を圍み張り、其形龜の甲の

太刀拔かざし切立れば、朝鮮人卒の事にて大きに驚き、船底に逃入て、劍をぬき、鏃を揃へさん〴〵に射たりけるを、左馬介少も猶豫ふ氣色なく、船底に躍込だり。從者なじかは猶豫すべき、我も〳〵と續て飛入り、なで切に斬殺し、遂に此船を奪取たり。其外塙團右衞門を始とし、組下の勇士佃治郎兵衞、加藤權七郎銘々分取高名を顯はし、目覺しき戰ひを成す。其中に惜むべきは河合壯治郎、生年十六歲、誤つて海中に落入て溺れ死す。去ほどに日本の諸將加藤が此動靜を見て、「左馬介討せて惡かりなん、續け〳〵」と呼はつて、八方より船を漕寄せ、さん〴〵に戰ひ、朝鮮船手の大將元均恐れ戰き、船をすてゝ逃出せば、此手の兵卒惣崩に成りて我先に陸へ船を著け、八方へ逃散たり。加藤一人の武勇により、朝鮮の番船百二十艘乘取り、海中へ切捨てたる兵士六千餘人、類なき高名なり。九鬼大隅守嘉隆諸船をまとめ、勝軍の賀をなし、扨軍の次第を名護屋表へ注進せんとす。此時藤堂高虎進み出て、「船軍の先登は高虎なるぞ。誰か共に爭ふべき、只高虎一人群をはなれ、一番に敵船を乘取たりと書記し、太閤の上覽に入れ給へ」と申されければ、加藤左馬介是を押しづめ、「某が今日の戰は衆人の見る所にして、おぼろげなる事にあらず。深夜敵の熟睡したる隙を伺ひ、少しの利を得られたれども、畢竟寢首取りたると同じ事なり。夜と晝と異なり、小と大と豈同じからんや。足下の働を我に比

大勢にて、味方の小勢を以て猥に戰ひなば、士卒の損亡多かるべし。宜く軍略を定め、一戰に勝利を得るこそ肝要に候」と議せられければ、諸將も尤なりと是に同し、急に押寄せ戰んといふものなし。時に加藤左馬介密に旗下の隊將塙團右衛門と謀計を示し合せ、一日物見船と號し、團右衛門數十人の逞兵と小船に打乘り、大濤を押切て敵の方へ漕出たり。是に續て同じく小船五六艘、加藤が組下の兵士と見えて蛇目下り藤の船印押立て、銘々後れじと漕出せば、惣大將九鬼嘉隆左馬介に向ひ、「御手の勢と見えて候が、軍令を破り敵船近く船を寄しぞ。早く止めて過ちなし給ひそ」と下知しければ、左馬介聞て、「こは怪しからずの若者どもが行跡かな。主將の軍令も出さざるに、敵に向うて船を出すは何事ぞや。止れ〳〵」と船端に出て呼れども、かねて示し合せし事なれば、塙團右衛門を首とし、其餘の兵士聞ず顏にて頻に船を漕出す。左馬介大に怒れる形勢にて、「軍法を背く者ども、我自ら行て引ずり來らん」とて、早船に打乘り、扇を開き、「止れ〳〵」と呼りつゝ、是も同く船を急げば、加藤が手勢我も〳〵と艨艦のともづな解き、終に朝鮮の水陣へ押よせたり。左馬介急に下知して、「正中の本船へ漕寄せよ」とて、頓て其間四五間計に成りたる時、左馬介忽ち身を躍せて敵の船へ飛入たり。是を見て家臣河合壯太夫、同壯治郎、荻野作左衛門、鍵掛武助等を始めとし、聞ゆる勇士數十人ばら〳〵と飛乘て、

は日本勢思ひもよらず、兎角の軍議に取紛れ、斥候さへも出さゞれば、敵の落行くとも知らざりける。されば追討べき敵もなく、上下の士卒百姓に至るまで、心安く落延びたり。翌日日本の陣中に此事委しく聞えければ、小西を始め諸の大將皆城中に込入りて、人やあると隈々を探し求れど、一人の蔭も見えず、只貯へたる兵粮十餘萬石其儘に打捨て、日本勢の有と成せしは、取亂したる行跡なり。是によつて小西等の大將、先此城を根城とすべしとて、四方の門々虎口虎口に手分を定め、大筒小筒弓鎗を備へ、籠城の支度取々なり。然るに大明國より二十萬の大軍を發し、朝鮮を援ふ由風聞しければ、小西行長諸將に會し、「明兵大軍にて援ひ來らば、今の小勢にて全き勝利覺束なし。太閤に告て加勢の軍兵を乞ふべし」とて、急使を以て肥前の名護屋へ訴ふる事度々なり。爰に日本船手の大將九鬼嘉隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明等は、去ぬる四月唐島といふ所に船をよせしに、朝鮮船手の大將李舜臣名人元均名人等水軍を調へ爰に陣を開き、日本勢を支へんとす。藤堂佐渡守高虎、夜中に敵船近く忍び寄り、無二無三に斬て出で、小船三艘奪ひ取たり。ければ朝鮮の水陣軍列を正し備を密にして、夜討朝駈の用心尤固し。是によつて今は中々不意を打べき手術もなく、日本の諸將九鬼嘉隆が本陣に集り、軍の評議なしたりけるに、加藤左馬介嘉明進み出て申されけるは、「朝鮮船手の軍兵を見るに、思ひの外の

平壌落城の圖

に、「川上は水淺きぞ、渡せよ〳〵」と呼つて、眞黒に成りて渡すほどに、防ぎ支へし朝鮮の陣々、只瓦の解るごとくぐわら〳〵と亂れ、矢の一筋も射出すべき者もなく、ひた崩れにくづれて平壤名城に引入りて、城戸を固め持口を防ぎ、呆れ果てぞ居たりける。日本勢は終に大江を打渡り、城外に押寄せ、攻かゝるべき形勢はなせども、城中の虚實知れざれば、暫く人馬の息を休めける。

○平壤落城併ニ唐島船軍ニ

此時平壤名の城中には、味方の要害大同江の淺瀬を敵に悟られ、日本勢殘らず城外に押寄せければ、更に城中の騷動靜むべからず。かくては籠城も覺束なしとて、相丞柳成龍名自ら城を出て定州名に赴き、國王李昖名と事を商議し、大明へ援兵を乞ふ事櫛の齒を挽くが如し。されば平壤名の城中には、尹斗壽名金命元名等のこり留り、心ならずも護りけれども、前に日本の大軍戟を磨き刀を砥ぎ、今にも攻掛るべき勢をなせば、とても勞たる此軍兵にて防ぎ支へん事叶ふまじとて、慌しく軍器兵具を池水の中に隱し、夜に紛れ搦手の城門を開き、一城の軍民悉く順安名の方を心ざし、跡をも見ずして落行ける。朝鮮人斯迄もろく落行くべしと

朝鮮人の肝を寒からしむ。されども爰ぞ大事の切所なりとて、朝鮮人力を盡し江を渉させじと射手を備へ嚴しく防ぎ守る程に、「日本勢勇なりといへども此大江に支へられ、施すべき手術もなく、十餘日を過しける。時に朝鮮の軍將高彦伯名といふ者、諸將に向うて申けるは、「我日本の陣中を遙に伺ひみるに、數日の對陣に心勞れ退屈せし動靜なり。今宵精兵を引率し、敵陣を夜討せば、日本勢の英氣を碎き、味方の兵の競を增すべし。我と思はん人々は力を合せ給へや」と申すほどに、尤なりと同心せる大將五六人、其勢一千四百餘騎、夜の三更過る頃我劣らじと船に打乘り、東の岸に附て日本の陣中を伺ひみるに、能眠りて人音なし。時分はよしといふ程こそあれ、小西が陣へどつと喚いて切入たり。日本勢思ひよらざる事なれば、陣中上を下へと騷きみだれ、討るゝ者數百人、されども軍になれたる日本勢、黑田、小早川の陣々早く隊を固め、前後より取圍み、鳥銃を放ちかくる事雨のごとく、炮煙の中より鬨を作つて突立れば、朝鮮人は、「今は是迄なり、引よ〳〵」と呼つて、大將高彦伯名一ばんに馬をかへせば、忽ち惣軍崩れ立ち、死傷の者數を知らず。小西行長此間に軍備を正し、自ら眞先に鎗をあげて、朝鮮の大將任旭景名を馬より下に衝落す。是によつて朝鮮の軍大に潰へ、大半討れ江上へ迯出し、船に乘るべきいとまもなく、案內はよく知つたり、川上の淺瀬より步渡して引取行く。日本勢聲々

渡すべき體に見えければ、平壤城中大に怖れ、上下の官人寄集り、大王早く駕を出され、日本勢の難を避け、重ねて廻復の計略を運らされ然るべしと、終に王の駕を供奉し參らせ、北方へと落行て、平壤名城には柳成龍人等數人城を守て止りける。同十二日の朝城中の軍將等、練光亭矢倉の名の上より日本の陣を望み見る。小西が陣より是を見て、鐵炮の兵士六七人江上へ顯れ、十匁玉の大筒を城に向うてばら〳〵と打放す。其音江に響き城に山彦し、雲雷よりも猶烈し。此鐵丸さしもの大江を越て城中に入り、櫓の柱に中つて深く入る事六七寸、見る者皆舌を震はす。日本の兵士の中より赤具足著たる武者、大筒を提げ練光亭矢倉の名の上を見れば、然るべき大將と思しき者並び居て、此方を見やりたり。彼武者鳥銃を小脇にかい込み、暫しねらうて打放つに、亭上に坐したる官人二人まで打倒す。朝鮮人甚恐れ、强弓の精兵をえらび出し、さん〴〵に射させけれども、日本の兵士無用の矢軍して詮なしとて、皆陣中に引入れける。

○朝鮮人夜討日本勢

去程に日本の軍勢おひ〳〵大同江川名へ押寄せ、小西が軍を助くる諸將は、黑田長政、大友義統、久留米秀兼、小早川隆景、江岸に陣營をつらね布き、家々の旗馬印色を爭ひ水上に映じ、

繪本太閤記　六篇卷之六

○朝鮮王開₂平壤城₁

明の萬曆二十年六月九日、朝鮮平壤地名の城中より、德馨命人名といふ者、日本と和親の事を計らんとて、扁舟に竿をさゝせ、江の中へ漕出せば、日本の陣中よりも一艘の小舟を需め、柳川豐前守調信、禪僧玄蘇兩人打乘りて、是も東岸より漕出し、江の中にて參會す。玄蘇先申けるは、「日本兵を朝鮮に入るゝ事、其實は大明漢土を討ん爲なり。今朝鮮國既に陷んとす。幸に和を睦び、大明へ兵を入るゝの路を開き候においては、朝鮮の保き事泰山のごとし」德馨命人名是を聞て曰く、「吾朝鮮は大明の屬國なり。何ぞ日本の兵を引て彼國を討しめん。君等我國と和せんと思はゞ、先軍兵を遠く退け、其後に和親を執結ん」調信是を聞て大に怒り「我輩和睦の事を議するは、汝が國を憐むの故なり。何ぞ兵を退て後和を希ん。今我々が詞を聞ず、後に悔む事勿れ」とて、雙方憤りの色を顯はし、船を左右へ別れける。小西行長此事を聞き大きに怒り、「さらば速に江を渡り、朝鮮王を擒にせよや」と、宗義智と兵を合せ、江東の岸上に押寄せ、今も

繪本太閤記　六篇第六之卷　目錄

朝鮮王開平壤城

朝鮮人夜討日本勢

平壤落城併唐島船軍

李舜臣用龜甲船破日本勢

豐太閤名護屋御陣之形勢

石田三成示謀島左近

加藤に勝る高名を顯はさんと、黒多、大友、小早川の諸將に相計るといへども、計議更に一決せず。慶尙（八道の内）全羅（同上）の兩道に殘城未だ不落、是等の敵を前に置き、遠く大明（漢土）に到らん事、尤危き事なりと、承引の色見えざりければ、行長大に怒をなし、「所詮朝鮮王と和睦を談じ、我一手を以て道を開き、明國へ切入るべし」とて、僧の玄蘇に文を作らせ、城中へ送らんと計りけり。平壤（地名）の城中には、日本勢の動靜を伺はんとて、練光亭（城の櫓なり）の上より柳成龍（人名）が輩六七人、日本の陣を望み見るに、小西が陣より小具足著たる武者一人、竿の先に書翰を挾み、川端の砂上に立置き、扇を開き亭上の人を招きける。柳成龍（人名）是をみて、「何樣これは日本人の此方の人に所用ありとおぼゆるなり。誰か彼所に行き、竿上の書簡を取れ」と申けるに、金生麗（人名）と云ふ者「某參り取來るべし」とて、小船に棹さし向ふの岸に漕付け、彼書翰を取おろし、又船に乘りて城中に歸り、柳成龍（人名）に獻じける。柳成龍等立寄て披き見れば、小西行長朝鮮王と和議なさんとの書牒なり。是に依て朝鮮の城中評議區々にして更に決せず、先人を日本の陣中へ遣し行長に對面し、渠が實情を探り知り、而して後に事を定むべしとて、其日の評議は止みにけり。

大明にも種々評議有りて、「朝鮮左ばかり早く王城をも失ふべきや。是は却つて日本人を我國へ引入るゝの計に非ずや」など、區々の詮議に日を過し、更に援けの兵も到らず。かくては此城永く堪へ難しとて、大王李昖城を出て北の方へ落行んとす。柳成龍人名と云ふ臣下、智慮深き者なれば、大王の城を出給はんは甚よろしからずと、數度諫め參らすれど、城中の將軍皆日本勢に恐れをのゝき、王を進めて落支度の外更に他事はなかりけり。爰に一說有り、日本先鋒の大將小西行長と加藤淸正と、其間常に睦じからず、此依て起る謂を尋れば、前にも記せし北の政所は加藤淸正が後に立給へば、淀君は小西行長に荷擔し給ひ、朝鮮渡海の後も內々別の使を遣はされ、淀君よりは、「此度の戰功加藤が下に出なば、自ら迄も太閤の御前面目を失ふ所なれば、衆に越たる高名こそあらまほしけれ」と行長方へ告げ給へば、淸正も政所より、「小西に功を奪れなば、今までの武功勇名徒らに成りて、御身の立つべき時なかるべし。就ては彼國の人民をもめぐみ憐み、仁義正しく全き高名を顯したまへ」など申し給ふにより、兩將互に其功を妬み、軍中和を得ずして、全き勝利を失ひしは、其根闇の中より出て、災を海外他邦に及ほしけるは、是非なかりける次第なり。此時行長思ひけるは、我數度の軍功を顯すといへども、兩太子を加藤に生捕せしこそ口惜けれ、早く平壤ヘグシヤク名を打破り、鴨綠江アブリヨクカウ明と朝鮮の境の川なりを押渡り、大明に切入つて、

小西行長檄書を朝鮮の城中に送る図

更に仇矢のあらばこそ、算を亂して倒れ死す。行長も軍勢をもりかへし、眞一文字に突立れば、朝鮮の軍兵立足もなく崩れ立ち、大將申砬名も鐵丸に打れて命を落せば、殘兵何かはたまるべき、粉のごとく討ちなされ、江のほとりへ迯出でたれど、船に乘べき暇なく、跡よりは小西が軍兵鎗襖を作て追討にぞ、高き岩頭より江の中へ飛落るもの、さながら冬枯の木の葉の風に亂れて散るが如し。金命元名人應寅名人の兩大將は、北の岸にて遥に此動靜を望見、肝を落し氣を亡ひ、面の色土のごとく、人心地もなき折から、傍に有りし朴忠侃名人といふ者、こは叶はじといふまゝに、馬に鞭打ち迯出せば、忽ち惣軍散亂し、迯よ〳〵と呼つて、平壤名地さして走りければ、金命元名人應寅名人も敗軍に引立てられ、心ならずも落て行く。小西行長、宗義智は敵の船を奪ひ、軍勢を北岸に渡し、平壤名地さして進みしは、まことに破竹の勢ひなり。

○小西行長爲レ入二大明一

さるほどに小西行長は、軍勢を率ゐて大同江名川の東の岸に著ければ、日本の諸將大友、黑田、小早川追々に續きたり。此時朝鮮の大王李昖平壤名地城に有けるが、味方所々の軍に利を失ひ、日本勢早國境迄押寄たりと聞き大に恐れ、大明土漢へ援兵を乞ふ事櫛の歯を引くが如し。されども又

を犯し掠め、平安道（八道の内）黄海道（同上）全羅道（同上）三道の外は悉く破れ、小西攝津守行長は大軍を引率し、朝鮮王李昖を生捕らんと、大に進んで臨津（地名）の南の岸に至り、江を渡んとすれども、大小の船ども皆北の岸に取集め、數千騎の朝鮮人ひし〳〵と陣を連ね、鎗刀の光霜のごとく、旌旗の風に打靡くは霞に似たり。日本の諸將いかんとも詮方なく、只岸上より遠矢を射させ戰ひをもよほすのみにて、徒らに十日斗も過しける。行長詑と謀を案じ、士卒に命じて帷幕旌旗を取納め、陣々を毀ち小屋具を燒捨て、退き遁るゝ形をなせば、朝鮮の軍中より是を見て、「日本人江を渡るべき便なく、退屈し引取るぞや。追かけて討取れや」と、申砧（人名）と云ふ大將、手勢を引て眞先に船を出さんとす。金命元（人名）大に制し、「味方只嶮難の地を堅く守り、敵の勞を待に利あり。猥りに追てあやまちな仕出しそ」と、さま〴〵に留むれども、申砧（人名）更に聞入れず。權徹（人名）といふ大將も、倶に兵を出して追討んと、數艘の大船にひた〳〵と飛乗り、一時に纜を解き、向の岸へ漕寄せたり。小西が軍兵これを見て、取物も取りあへず、兜を落し鎗を捨て、さん〴〵に迯けるにぞ、朝鮮人勝に乗り、備を亂し鬨を作つて進みたり。小西が勢兼て巧みし事なれば、山間の難所へ敵を引入れ、相圖の鐵炮を鳴す程こそあれ、左右の山に伏置たる宗義智、小西主殿介、木戸作右衛門等一同に發り立ち、敵の備の正中へ、數百挺の鐵炮を筒先下りに打落せば、

の沖中遙に見え候小き山は、日本第一の高山芙蓉峯と申す山のよし、いにしへより申傳へて候」と申す。清正を始め諸軍勢、「こはなつかしき山の名を聞侍るものかな」と、磯邊に立ちより能々見れば、雲か浪かをわき難きいと遠き沖中に、八葉の峯と思しき一點の山遙に見えたり。清正磁石を取て方角をみれば、彼富士山は坤に當れり。清正手を拍て、「よにも遠く來しものかな。西の方朝鮮へ渡海せしに、却て我國を坤に見る事よ」と、諸軍もともに驚きけり。

○小西行長渡二臨津一

朝鮮の大王李昖は、平壤城地名に駕をとゞめ、日本勢の來るべき道を防んとて、金命元人名と云ふ大將に、數千の軍勢を督せしめ、臨津川名の切所を守らせける。然るに是が副將申恪人名といふ者、鍋島直茂が先手の勢と開城府地名と云ふ所に戰ひ、日本勢を切崩し首を取る事十餘級、日本爰に渡海せしより此かた、首を得たるは此申恪人名が始めなり。然るを彼大將軍金命元人名其功を妬で讒言を構へ、申恪人名を殺したり。されども申恪人名が高名は隱るべきにあらず、大王李昖人名も金命元人名が讒言なる事を悟り、深く後悔すれど甲斐なし。是に依て金命元人名が將軍の職を召上げ、應寅人名と云ふ者を大將として臨津地名を守らしめたり。此時日本の諸大將所々に散じて、國郡

かゞやき、虎髭針を植たるごとく左右に別れ、釣鐘を撞ごとき聲を出しおう〳〵と叫び、刃を以て戰ひしは、鬼神のごとく冷じく、貴田孫兵衛雙なき鎗術の達人なれば、大身の鎗をしごき、右へ飛越え左へめぐり、虚と見えて實に、實の中に虚をすかし、半時許り戰ひしが、孫兵衛一足踏込と見えしが、彼大男の綿嚙を鎗先白く突拔きたり。何かはしばしもたまるべき、仰向に倒れざま、持たる劍を孫兵衛に投付て死たりける。去にても運の極めの哀しさ、投たる劍孫兵衛が左の肩にぐさと立て、痛手なれば同じく倒れ臥たりける。此間に森本義太夫敵を組ふせ、首を取て立上る。清正の軍兵、「すは乘入れ」と呼つて、終に城は乘落しけれども、惜むべし不雙の勇士貴田孫兵衛は、爰にて命を落しけり。此時兀良哈地名の軍民清正の勇に恐れ、敢て頭をさし出す者なし。清正も今は無用の邊地に軍兵をとゞむべき謂なしとて、朝鮮の安邊府地名をさして引取りける。途に濟州地名と云ふ所の海邊に到りけるが、漁夫の家居と見えて、昆布荒布など屋上に布ならべ、雨露を防ぐの設けと成し、いとも荒すさびたる住居數十軒あり。清正其所の漁人を招き、安邊府地名迄の近道有るやと後藤治郎を以て尋けるに、彼漁人恐る〳〵這出て、道の案内細かに物語り、扨申けるは、「此御勢は朝鮮國へ渡海し給ひし日本人にもやと推し奉る。此土地は朝鮮の都を去る事凡三千里、六丁一里廻り〳〵て日本の地へは近く候由。あれ〳〵御覽候へ。あ

皆袖印に南無妙法蓮華經と書て付させ、惣軍跡にひつ添うて、兀良哈（地名）へと發向す。行程纔に五里（六丁一里）許にして兀良哈（地名）の軍兵に行きあひ、鐵炮を放ち矢を射かけ、さん〴〵に戰ひしが、日本の武勇にいかでか夷どもの及ぶべき、終に打負け三里（六丁一里）許退きて、一つの城へ籠りける。清正城外へ押寄せ、自ら馬を進めて城の動靜を伺ふに、壘高く隍深く、後は深山峨々と聳え、朝鮮の城郭よりは遙勝つて堅固なり。清正下知して城の三方を取圍み、遆卒をすぐり立て、後の山へ攀ぢ上らせ、五六十人にても動かし難き大石を、人夫を以て掘穿ち、嶺の上より城中へ轉して墮しけるに、何かは以てたまるべき、かけ竝べたる櫓大門微塵に碎け、人馬死する者數を知らず。城中鼎の涌く如く上を下へと周章し、城戸を開きて迯出るを、待設けたる日本人、鳥銃をつるべかけてうち倒し、ひるむ所へ鎗を入れ、七裂八裁に切まくれば、討るゝ者麻を亂せる如く、城を捨て四方に分れ迯散たり。是より清正破竹の勢ひにて、所々の城を陷るゝ事凡十三ケ所、其中に手強く支へし城有りて、落し難く見えけるが、清正の勇臣森本義太夫、貴田孫兵衛城戸際に進み乗入んとす。時に城中より大の男二人、きびしく鎧うて衝出たり。義太夫飛かゝつて一人に組合たり。孫兵衛今一人の敵に向ひ、刃の徑三尺餘りの大身の鎗を引絞り、只一突と討てける。兀良哈（地名）の大男、竝なき勇士と見えて、其長八尺ゆたかにして、眼丸く照り

日本へ奏して重ねて恩賞の沙汰有べしとて、家臣に命じ、兩太子を請うて輿に乘しめ、安邊（地名）の方へ歸らんとす。太子に附添ひ參らせし官女侍婢、常に見なれぬ日本人の恐ろしく、輿にすがり聲をあげ、こはいかにならせ給ふ御事にやと、伏轉び泣さけぶを、雜兵どもあら〳〵しく嗔り罵り、手を取て引立つるに、頸に何やらん黑き物をかけ覆面して顏を包めり。兵ども打笑ひ、彼覆面を取らんとす。淸正遙に是を見て大に制し、「其面を見る事勿れ。侵し耻かしむる事有るべからず」とて、心の儘に落行しむ。是を見て淸正は驍勇のみにあらず、仁義厚く情有る大將かなと、感ぜぬ者はなかりける。

○加藤淸正討㆓兀良哈㆒

朝鮮の國境より、北に隣れる國を兀良哈（國名）といふ。其國の夷ども、會寧府（地名）迄日本勢攻入り、朝鮮の太子を擒へ勢を震ふと聞て、朝鮮は隣國なり、脣破れて齒冷し、捨置きなば我國へも押來るべし、いざや進んで日本勢を討べしとて、數萬騎の軍兵を催し、境近く押寄せたり。淸正聞て、惡き夷どもの行跡かな、其儀ならば逆押して打崩せとて、兩太子を嚴敷守護させ、咸興府（地名）の鍋島直茂が陣へ送らしめ、其身は會寧府（地名）の降將鞠京仁（人名）が手勢五百餘騎を案內とし、

士を集めて申けるば、「今日本の大勇將鬼軍將清正と云ふ者、臨海君子太順和君子太の兩太子を追て、早此所へ攻入るよし、我々いかに防ぎ戰ふとも、彼鬼將軍にいかでか敵對致すべき。速に兩太子を生捕り、清正に降參せんはいかに」と云ふ。手下の軍卒皆尤と是に同じ、兩太子を始め、從へる近臣殘らず縛り上げ、使を以て清正の陣中へ降參の由申ければ、清正大に欽び、通事後藤治郎を城中へ遣し、猶事の仔細を尋ねらるゝに、「兩太子其餘の官人悉く搦め出すべき間、重く恩賞賜はり候へ。尤他人には渡し申間敷、清正自ら數十人の勢にて、城に入て請取り給ふべし。且此頃城中粮盡き、王子を始め上下の官人食絕たり。早く餉の支度有りて進め給ふべし」との事なれば、清正悉く領承し、山海の肉味を集め、饗膳の用意をなし、又使を立て、「清正小勢にて只今料理持參致すべき間、兩太子を渡さるべし」と案內し、木村又藏、飯田角兵衞なんど、其外聞ゆる勇士等に膳部を持せ、或は銚子又は盃、種々の肴漁を人每に一品づつ取持せ、城中へ入し程に、鬼とも組べき勇兵五十餘人ぞ入りたりける。清正鎧の上に羽織を著し、朝鮮の兩太子を見るに、索を以て縛り、兩眼淚にうるみたり。清正自ら其索を解き、官女及び侍臣の輩悉くいましめを解しめ、さて食を進め酒を飮しむ。爰において太子を始め近臣等少し心を保んじて快く飮食す。清正鞠京仁名人及び一城の兵卒に、當座の褒美とて銀錢を與へ、

士等に申含め、山の麓より次第々々に攀上り、四方八面樹木の蔭、草の間に埋伏し、夜の明くるをまち居たり。朝鮮の大將韓克鍼名人は、日本勢かゝる計略有りとは夢にもしらず、今に海邊米倉の傍に陣せりと油斷して有りける程に、夜の明方朝霧深く立蔽ひ、咫尺の間も見えざりければ、例の勇士加藤清兵衛、井上、飯田、庄林、竝河、斑鳩、木村、森本、貴田、齋藤等軍卒を引率し、敵陣間近忍寄り、相圖の鐵炮嚾と鳴すや否や、左右前後の伏兵一時に發り立ち、用意なき朝鮮勢を切まくり〳〵、爰に追つめ彼所に追寄せ、草芥を切るが如く、ひた薙になぎ廻れば、或は岩壁の上より深き谷底へ追落され、辛うじて山下に下りたる者も深田の中に轉び伏し、死傷の者擧て算ふべからず。大將韓克鍼名人も命からがら迯のびて、鏡城近所に有る城名さして潰行くを、竝河金右衛門追かけ、生捕にぞしたりける。

○加藤清正擒二兩太子一

爰に朝鮮の兩太子臨海太子の名順和同上兩人は、始め江原道八道の内へ落行きしが、日本勢間近來る由聞えければ、北道に廻り會寧府地名まで落延び、爰にしばらく逗留有りけるが、此會寧府地名は朝鮮艮の邊境にて、都より流人などの來る土地なり。國の大名を鞠京仁人名と申けるが、旗下の兵

に至て、海汀倉名地といふ海邊に出たり。此所は朝鮮海上運送の米穀を納置く港にて、米倉多く建連ね、北道の繁華なり。清正此所にて暫し人馬の息を休めける所に、朝鮮北道の大將韓克鍼名人といふ者、數千の軍兵を引率し、加藤が勢を八方より取廻し、矢を射る事雨よりも猶繁く、面を向ふべきやうぞなし。清正急に下知して彼倉米より多くの俵を引出し、四方に積で楯と成し、敵の矢先を防ぎける。朝鮮人此體を見て、八面より近々と進みより、矢を放ち鬨を作り、頓て積上げし俵どもを取除んとす。加藤が勢は兼て巧みし事なれば、彼俵の透間には三百餘挺の鐵炮を仕かけ、敵の矢頃に近付しを見すまして、一同にどつと打放せば、其音山岳に響き、海底に徹し、千百の雷の一度に落るごとくにて、犇と竝びし朝鮮人、矢玉一つに五七人づつ打倒され、忽死人二千餘人、疵を蒙る者數を知らず。清正下知して、「すはや懸れ」といふ程こそあれ、加藤清兵衛、井上大九郎、木村又藏、飯田角兵衛、森本儀太夫、貴田孫兵衛、其外手垂の勇士どもまつしぐらに衝立つれば、鐵炮の響に膽は冷しぬ、敢て戰はんとする者なく、さんぐ\に成つて山手をさして逃げたりけり。此時日くれ道闇かりければ、案内知らぬ道なればとて、追捨にして舊の陣所に歸りけり。然るに朝鮮人は山の嶺に軍勢を引上げ、夜明けなば再び戰を催し、今日の無念をはらすべしと屯を固め、終夜用心堅固に守りける。清正此體を見て味方の勇

れ、計り討んと巧むならん。猥りに進み過ちを取り給ひそ」と諫めぬれど、清正曾て耳にもかけず、「朝鮮の弱兵どもいかなる計略を構へたりとも何程の事候はん。某是を見る事小兒のごとし。足下然思ひたまはゞ、此所に陣を固め、某が音信を待候へ。頓て吉左右申すべし」と云すて、諸軍を引具し驅たりける。直茂今は詮方なく、「あな怪からずの清正がふるまひや」と獨言して、先其地に營をつらね、近きわたりの郡縣咸興府地名端川地名などいふ所を攻落し、清正が便宜のみを待居たり。

○加藤清正海汀倉擒二韓克鍼一

加藤主計頭清正は、鍋島直茂と永興府地名にて相別れ、軍馬を北に向けて進みける。然るに王城より召連し後藤治郎なる通事も、都近き國々こそ案内もなしつらめ、かゝる邊境に至りては、いまだ見も知らぬ土地の由申すにより、然るべき案内者や有ると探り求むるに、漸々百姓二人を引連來れり。清正近く招きて、「北道の案内せよ」と申されけるを、彼百姓ども堅く辭して遁れんとす。清正大に怒り、「汝等鼠輩何ぞ我詞を背や」と、一人の百姓を一突に殺したり。今一人の土民大に肝を冷し、震ひわなゝき、命を乞うて案内に進みける。是より又日を累て鐵嶺地名の北

引きて、飛が如くに追たりけり。爰に日本の言に通じ、常に人と物語るに、日本人は兎して角してなんど、見たる許に噺する者あり。朝鮮人渠を號て倭學通事咸廷虎（咸は姓なり廷虎は名なり）と唱習せり。此咸廷虎清正に捕へられ、終に軍中の通事をなせり。清正名を改めて後藤治郎と呼り。此後藤治郎申すやうは、「大王は西の方平安道（八道の内）へ赴き、兩太子は途より別れて咸鏡道（八道の内）へ迯られたりと聞え候。君よろしく道を選んで進み給へ」と云ふ。清正是を聞て、「西の方には臨津（川名）の大河有る由、我先に龍津（川名）の渡りにて日を費し、王城を取るに後れたり。北の方咸鏡道（八道の内）を進みて兩太子を生捕べし」とて、日夜道を急ぎ、十三日の行程を經て、安邊府（地名）といふ所に著ぬ。此時五月十五日なり。然るに鍋島直茂は、清正一手の勢を以て深く邊境に入り、過有らん事を恐れ、是も夜を日に繼で道を早め、漸く此安邊府（地名）にて清正に追付き、是より兩將兵を合せて進ける。同月十九日、永興府（地名）と云ふ所に著ぬ。此所に朝鮮人高札を立て、臨海（太子の名）順和（同上）兩太子、此道を開き給ふ、忠義の志ある輩、はやく〵人數を集め來り、守護し奉るべき旨を書記し、國臣金貴榮（人名）とぞ書たりける。清正是を見て大に喜び、我日本の弓矢神八幡太神の御示しなるぞ、たとへ鬼が島虎狼の穴に迯籠るとも遁しはせじと、先手に下知して進まるゝを、鍋島直茂鎧の袖をひかへ、「異國の者は極めて謀計有りと聞けり。此高札を以て味方の兵を深く切所に引入

繪本太閤記六篇　卷之五

○加藤清正深入北道

加藤主計頭清正は、飛馬に鞭打ち砂烟を立て、終に王城の南門に至り、門を開きて入らんとす。此時門内より日本の兵士立出て申す樣は、「小西攝津守行長昨日王城に攻入りて、我輩に命じ四方の門を護しむ。加藤殿の御勢と見受候程に、先三四人門に入られ候て、主人行長に對面あり、門を開くべき旨我々に下知あらば、早速通し奉るべし。左なく候内は、何れの御勢にても堅く通し申すまじ」とて、礑と門を閉たりける。清正是を聞て、「此所も又小西めに先をせられたるこそ安からね。今は王城に入ても詮なし」とて、城外に陣を取り、其傍の百姓を招き、事のやうを尋るに、「大王及び太子二人、もろ〳〵の妃たちも、四日已前に西方へ落給ひ、昨日日本勢亂入の時は、都城の內に一人も殘る者これなし」と申す。清正聞て、扨は小西めが空城へ一番乘し、手柄顏するこそ仕合せよき男なり、よし〳〵我は急に大王兩太子の跡を追ひ、擒となして功を行長が上に抽でんと、諸軍に下知して兵粮をつかひ、鍋島にも申あはせず、一手の勢を

繪本太閤記 六篇第五之卷 目錄

加藤清正深入北道
加藤清正海汀倉擒韓克鹹
加藤清正擒兩太子
加藤清正討兀良哈
小西行長渡臨津
小西行長爲入大明

し。續き給へ水練の人々」といひも敢ず上帶解て具足脱すて、此川中に飛入たり。是を見て水情を得たる若者三十餘人、我も〳〵と飛込み〳〵、逆まく水を押切つて、北の岸へ泳ぎしは、實に一時の觀物やと、川岸に居竝びて、目をはなたず詠め居ける。彼水練の者共難なく北の岸に泳ぎ附き、敵の陣中を伺ふに、清正の詞のごとく、空しき旗のみ立連ね、人影とては更にみえず。元來此所を朝鮮の大將元豪と云ふ者數千騎にて固たりしに、國王李昖都を開き、王城の内すべて空虚なりと告る者有ければ、今は爰を守りても詮なしとて、先の夜密に軍兵を引きて李昖が後を慕ひ落行きける。されば清正の軍慮賢かりけりと、感ぜぬ者はなかりける。扨孫六を始め銘々船どもを奪ひ取り、此方の岸へ漕寄れば、清正、直茂大に歡び、曾根孫六に短刀を手自與へ、其餘水練の者悉く褒賞し、諸軍船に乘て心の儘に川を渉し、鞭に鐙を合せ、都をさして急ぎける。

り、數百艘の兵船を繫ぎ、楯を並べ逆茂木を引き、誠に王城の固とて、爰にて防ん用意の程嚴重にこそ見えにけり。清正先手に下知して其傍の竹木を切取らせ、筏を組で數十人を乘らしめ、先試みに川を渡す。北の岸の朝鮮の陣營より此形勢を見て、數百騎の射手を川端に出し、差詰引詰さん〴〵に射ける程に、日本勢敢て進み寄る事能はず。兎角する程に水の勢甚だ強く、白浪高く上つて彼筏を水中に打入れたり。あはれむべし、究竟の兵士十餘人、底の水屑と成りにける。清正心は猛しといへども施すべき計なく、其日は空しく暮果て、川の南に陣を取り、篝を焚て明しける。斯しつゝ徒然に爰に止ること既に三日、清正日々に水邊に出て敵陣の動靜を伺ひ、渡すべき工夫を凝しけるが、四日といふ曉鍋島直茂を伴ひ、遙に朝鮮の營を望み見るに、水上に遊ぶ鳰鷗の類、彼南の岸にさしも嚴く營ねたる朝鮮の守兵を少しも恐れず、或は旗上を飛巡り、或は纜る船の傍に浮び、驚き騷ぐ氣色なし。清正是を見て甚怪み、直茂に向ひて申けるは、「某計るに、朝鮮の陣中變ありて、軍勢悉く夜の中に引取り、今は空しき虛陣と覺ゆるなり。試に水練の者を選み、繫ぎたる船を奪ふべし」とありけるに、直茂も尤と同じ、扨水練の達者を選ばれける。時に清正の近士に曾根孫六といへる者進み出て申けるは、「某越中國の產にて、水の心は覺て候。我生國砥並川の早瀨には此川よりも勝らじ。某瀨踏仕るべ

一　軍隊列を混して王宮に入るべからず。
一　民家に推入り濫に金銀を掠め取るべからず。
一　酒家に入りて酒を呑み亂醉すべからず。
一　貴賤を云はず婦女を犯し猥るべからず。

斯くのごとく認めて、行先へ悉く立てさせける。是は忠州(地名)にて清正に恥しめられ、再び人の誹謗を受まじき爲なりけり。扨軍令を正し王城に入りて後、兵を四方の門々に分ち遣り、嚴敷是を守衛せしめ、後陣の勢を待けるぞ、實に此度の武功第一とこそ見えにけり。

○加藤清正渉二龍津一

加藤主計頭清正は、小西行長と同時に左右へ別れ、南大門の街道を息をもつかせず馳たりける。此道筋も金山(地名)などいふ究竟の要害數ヶ所有て、守の兵士を置きたれども、爰も日本勢來ると聞て悉く落失たれば、清正所々に百騎二百騎の勢を留めて守しめ、揉にもんで終に驪州(國名)龍津(川名)の南の岸に著たりける。清正水面に出て遙に此河の動靜を見るに、川幅は十四五丁も有らんと覺えて、碧流矢を射るが如く、底深くして大石を漂はす。向の岸に大小の旗ども風に飜へ

門に著たりけり。誠に王城の固とて、石垣高く聳へ、鐵門堅く鎖せり。行長馬を控へ仰いで是を見るに、門の高さ十餘丈、容易に攀登るべきやうもなし。諸軍皆氣を屈し、あな夥しの固めやと、忙然としてながめ居ける。時に小西が生捕し朝鮮人の中に、心きゝたる者を選み、案内者として召連れたるが、其者共申すやう、「此門よりは扉開ずしては入候事叶ふまじ。此所より東の方一里六丁計にして水門の候。其廣さ纔に五尺計に候へども、是より軍勢を御入候べし」と申すにぞ、小西下知して彼水門に至りみれば、鐵を以て透の戸を鎖したり。木戸作右衛門是を見て、鐵炮の臺を脫し、其筒を數十本繩にてからみ、彼水門の透しめに推入れ、金剛力を出してえい〳〵と押倒せば、さしも鐵を以て固めたりし水門も、ぐわら〳〵と崩れにけり。小西行長大に喜び、自身眞先に彼水門より乘り込ば、諸軍我おとらじと押合々々、分捕せんと込入しに、矢の一筋も射出す者のあらばこそ、守の軍勢はとくに迯失たりと見えて、さしもに廣き朝鮮の王城に、人の影もみえず、寂寥たるありさまなり。小西其傍の落殘りたる百姓を召寄せ、事のやうを尋るに、三日以前大王及び皇妃太子、上下の群臣、百姓商賈に至る迄、西の方へ落行たりと申すにぞ、行長是を聞て、左も有らんと大に笑ひ、先高札を立てて諸軍に示す。其言に曰く、

し近しといへども中に大河あり。東大門に行くは、道遠しといへども平地なり。清正いづれの道に向ひ候や」清正の曰く、「我はたとへ大河有るとも、道の近き南大門へ向ふべし」是に依て衆議一決し、加藤、小西の兩先陣、二道にわかれ打立ければ、惣軍次第を相守り、跡に著て進みける。

○小西行長入㆓王城㆒

小西攝津守行長は、東大門の道筋を、揉にもんで急ぎしが、手下の軍卒を顧みて申けるは、「我忠州地名にて清正と先陣を爭ひ、すでに大事に及びなんとす。然れば今王城に打入ん事、清正に後れなば、死に勝る恥なるべし。此道帝都の東大門の固なれば、守護の將卒所々の要害にさゝへ、手いたき合戰あるべき間、身命を投打ち、一刻も早く都の内へ攻入べし」と下知しけるに、軍卒等命に應じ奮然と勇氣を顯し、揉立て〳〵急ぎける。然るに此道々の要害は、兼て朝鮮の武士等多勢を聚め守衞居けるに、小西行長大軍を引率し、むかふ所を鏖に成し進み來ると聞おぢし、皆要害を打捨て、行方なく落失ければ、所々の城ども一人も守りの兵なく、案に違ひし朝鮮人の臆病やとて、彼空城に守の兵を殘し、勇みいさんで急ぎけるが、難なく朝鮮の都東大

廣野に出て、都を攻落すべき評定しけるに、加藤清正進み出て申されけるは、「都に攻入らんには吾必ず先陣すべし」小西行長是を聞てあざみ笑ひ、「朝鮮に入て後の先陣は、太閤の御諚を以て某先陣をうけ給はりぬ。然るを太閤の御掟を違へ、御邊先陣なし候はん事、我決して是に隨ふまじ」清正重て、「先陣は武勇の者必ず是を勤む。軍門に君命なし。まけて我是を勤めん」小西聞て大に怒り、「吾武勇に於て何ぞ汝に劣べき。左思はゞ爰にて我と武術を試み、討勝て後先陣に進めよや」と、面色替つて怒りければ、清正も亦甚だ憤り、太刀追取て立上る。すは珍事よと、雙方旗下の勇士ども、主人の下知あらば飛懸つて切捨んと、柄を握り手ぐすね引き、眼を見張て詰寄せしは、何さま大事出來にけりと、黑田、鍋島、福島、毛利左右に別れてこれを制し、一座の諸將もろともに、種々に言宥め、おさへて和議をぞ調へける。時に島津毛利の兩將申されけるは、「朝鮮の先陣においては誠に小西行長なるべし。然れども行長は要害の地三所を陷し、旣に大功を立てられたりければ、王城に入の功は他に譲るとも又可ならん。夫王城に入る道二筋有りと聞り。小西加藤左右に相別れ、兩道より進まれ候はんは、成功も速にして、互に意趣も殘るまじ」と判斷せられければ、兩將とも此儀尤に候とて、違背なく領承せり。

小西行長申すやう、「王城に到るに南大門と東大門との二道あり。南大門に向ふには、道の程少

清正行長先陣を爭ふ圖

より先黒田長政は、一手を以て金海（地名）を陷し、密陽（地名）を降し、是も忠州（地名）に來り會す。其外の諸大將島津、鍋島、福島、長曾我部を始めとし、思ひ〳〵に城々をせめ落し、皆忠州（地名）へ集りける。此時朝鮮國の平安道（八道畿内）黄海道（同上）忠淸道（同上）の三道は悉く攻破られ、敢て道に遮る者一人もなく、百姓商賈の老若山林に逃れ隱れ、數多の國郡今は空しき廣野と成りけるぞ、いたましかりし有様なり。此時忠州（地名）には小西行長が旗下の兵士ども、民間に推入て婦女を犯し、財寶を奪取り、亂妨狼藉心の儘にふるまひけるを、加藤主計頭是を見て、頓て小西行長に對面し、「御手の士卒民屋に入りて亂妨せる事甚し。猶是より都の方へ攻入んには何事も華美ならんに、かくのごとく士卒の心慾にひかれ、狼藉を專らとなさば、軍事にも怠り、且は我日本の恥辱なるべし。諸大將申合せ、士卒の亂妨を禁制すべきにこそ」と申されければ、行長も恥る色ありて、尤と是に同じ、彼士卒等が奪ひ取し金銀衣服を大道に積上げ、火を放て燒すてさせ、制札を出して亂妨を禁じけるにぞ、朝鮮の軍民是を聞き、皆淸正が德に懷き、南無妙法蓮華經の旗を見ては、百姓商賈心を安んじ、此大將の軍勝利有かしと祈ける。斯る異國の境迄此仁愛を感ずる事、實に淸正の德義大なりと謂つべし。是併ながら北の政所の教誨爲し給ふに依れるにやと、最貴かりし事共なり。時に小西行長、加藤淸正をはじめ日本の諸將、忠州（地名）の城外

○小西加藤論㆓先陣㆒

扨も朝鮮の王城には、忠州（地名）既に陥り、不日に日本勢帝都に亂入せるよし、追々注進しける程に、上下の官人色を失ひ、何と取定めたる事もなく、周章敗亡かぎりなし。后妃女官は聲を上げ啼叫び、臥轉ぶ。「かくては始終あしかるべし。一先駕を西方へ向られ、平壤（地名）の城に入せ給ひて、大明（漢土）の援ひを乞ひ、日本勢を追退け給ふべし」と、一同に申すにぞ、大王李昖（人名）是に隨ひ、左丞相（官名）柳成龍（人名）、其餘の群臣數十人を具し、手輿に乘り、終に都を出行きける。此時都守護の官軍等、思ひ〳〵に落うせて、手輿をかゝげ參らする者もこれなし。道にて急雨頻に降り來り、上下の官人衣を沾し袂を絞り、進むべき樣有らざれば、碧蹄（地名）の驛舍にて一夜を明しぬれど、猶雨の止べき氣色もなく、かくて日を過す内に、日本勢追來らば、悔むとも益なしとて、亦雨にぬれて車を供奉じ、辛じて平壤（地名）城へと急ぎけり。然程に加藤主計頭清正は、慶州（地名）を攻落し、鳥嶺（地名）の方へ押行けるに、其道筋の要害城々を悉く攻拔ほどに、日數九日を經て鳥嶺（地名）に到りぬれば、早此所も小西行長先にいたり、忠州（地名）も攻陷しける由聞えければ、彌々口惜き事に思ひ、都へ攻入り、先陣は人にはさせじとつぶやきつゝ、忠州（地名）の城へ入りにけり。是

西が勢鮮軍のあわてふためく其中へ、眞一文字に馳入て、當るを幸ひ斬倒し、追詰ては水中に投込み蹴込み、人を切る事草芥の如し。時に朝鮮の軍中より、其長七尺餘りにして、頬髭左右に分れ生ひ、眼丸く照り、眦の肉裂て血をそゝぎ、手に大なる斧を提げ、黒く逞しき荒馬に白泡はませ、「金汝砺（人名）は我なり」と罵り、黒みかゝりし小西が勢の正中へ一參に駈入り、前に近寄る鎧武者八九人斬て落し、彌進んで戰ひしは、目ざましかりける動靜なり。日本勢は朝鮮人を童の如く侮りしに、此一人に切立られ、四途路に成りて迯たりけるを、小西が勇臣眞壁新三郎と云ふ者、刃のわたり四尺餘りの大身の鎗を引絞つて、聲をかけて突來る。彼金汝砺（人名）大に怒り、斧を振うて打て懸り、一往一來二十餘合戰ひしが、眞壁が鎗法少し亂れて見えけるに、荒御田勘左衛門といふ者横鎗を入て、終に金汝砺（人名）を馬より下へ突落せば、雜兵等集り來り、首を取て差上たり。是に依て朝鮮の軍大に亂れ、忠州（地名）の城も沒落し、大將軍李溢（人名）は爰にても命惜く、東の山谷を遁れ出て、行方知らず成りにけり。小西行長は忠州（地名）の城に入り、討取る首三千餘級、浮田秀家卿の方へ送り、勝軍の次第を名護屋表へ注進しける。

隱れ、漸く其夜を明しける。然るに其夜日本勢の來れる體もなく、扨は我臆病を嘲弄せんとて、僞りを構へ告けるこそ口惜けれとて、まだ東雲の頃城內へ歸り、かの訴へし者を引捕へ、首を斬て捨たりけり。然るに小西攝津守行長は、尙州（地名）を陷し、勇みいさんで鳥嶺（地名）に來りけるが、其地形を伺ひけるに、兩峽狹くふさがりて、嶮崖高く女蘿生繁り、其下に一筋の大川流れ廻り、實に堅固の要害なり。行長大に疑ひ、馬をとゞめて申けるは、「斯計嶮要の地に朝鮮守護の兵士一人もなきこそ不思議なれ。猥りに進み行きて敵の計に陷る事なかれ」とて、斥候の者數多走らせ、樹木の間岩窟の內迄も鐵炮を打ち矢を放ち、幾度も覘ひ見れども敵兵一人も有らざれば、歸り來て行長にかくと申す。行長是を聞て宗義智をかへりみて大に笑ひ、「朝鮮人の手痛き働きせざりしを、只今迄怪く思ひゐたりしが、是程の要害の地に防ぎの兵一人もなき拙さにて、此先の戰とても何の恐れか有るべきぞや。進めや者ども、高名せよ方々」と下知するほどに、いとどさへはやり切たる日本勢、誰か暫しも猶豫ふべき、えい〳〵聲を合せ、終に難所を打越し、兵を二手に分ちて、馬烟を揚げ土砂を蹴立て、喚き叫んで進みけり。此時鮮將申砬（人名）は河の邊に陣を取て居たりしが、此動靜を見て身心震ひ、あとをも見ずして迯たりけるが、流石後の譏をや恥たりけん、河中に身を投て死したりけるぞ、せめてもの事なりと、人々哀れを催しける。小

是を見て、すはやかゝれと云ふ程こそあれ、小西主殿介、木戸作右衛門を始とし、纔なる李鎰が勢を八方より引つゝみ、一人も餘さじとさんぐに切立れば、大將李鎰も既に討れつべう見えけるに、馬より飛下り鎧甲もぬぎ捨て、裸に成りて辛き命を迯のび、聞慶縣といふ所迄のがれ來りしが、爰にて奉書を認め、尙州落城味方敗北の次第を都へ告げ、其身は鳥嶺の申砬と一所に成らんと彼所へ到りしに、申砬尙州陷りし便を聞き、忠州へ迯行たりと聞えければ、遂に忠州さして落行けり。

○小西行長陷二忠州一

朝鮮の大王より、忠州防禦の大將軍として向ひたる申砬、鳥嶺の嶮岨に陣し、日本勢を支へ防んと、軍勢を引率し隊を張しが、尙州にて李鎰が敗軍を聞き大に愕れ、鳥嶺の固を打捨て、忠州の城に迯入けり。此時明の萬曆二十年四月廿七日暮方に、一人の軍卒馳り來て申砬に告けるは、「倭軍既に鳥嶺を過て此所へ只今押寄候。御心得有べし」と申ければ、申砬殊の外恐れ驚き、忽ち跳上つて城を出て、行方知れず成りにけり。是に因て城中大に亂れ、上を下へと騷ぎける。申砬甲冑を脱すて、したゝれの上に古き單物を著し、城下の旅亭に潛り

め、山に添て陣を取り、いかめしげに大將軍の旗を立て、彼百姓ばらに軍の駈引を調練せしは、賊を捕て索をなふと云ふ俗の諺に等しかるべし。時に百姓一人走來り、「日本勢早長川名まで押寄せ、爰を距る事纔に二十里、六丁一里御油斷有まじく候」と申すにぞ、陣中大に騒ぎ立ち、早落行ん有様なり。大將李鎰人名大に怒り、「日本勢何ぞかくのごとく速に爰に來るべき。汝妄言を吐て諸軍の心を惑す事、其罪赦し難し」とて、命じて首を刎させける。其翌朝遙彼方の林の後に馬烟おびたゞしく、大軍の推來る模樣なれば、こはいかにと見る程に、尙州地名の城中にも烟高く立上る。李鎰人名爰において始て日本勢のちかく來りぬるやと驚き、一人の官軍を召で斥候せよと遣しけるに、彼官軍馬に打乘り、百姓に轡とらせ、小河の橋を渡る所に、思ひもよらず鳥銃の音どうと響きて、彼馬上の官軍を馬より下に撃落す。百姓原あわてふためき、跡をも見ずして迯行ば、堤の陰より日本の兵二人顯はれ出で、官軍が首を取てしづ／＼と彼方の林へ歩み行く。李鎰人名是をみて肝を潰し、「あれ追かけて討とれよ」と呼れども、我行くべしといふ者なく、ふるひをのゝく計なり。時に件の林の内より、紙袋に朱の丸をかきし大馬印ゆるぎ出で、小西攝津守行長眞先に馬を躍せ、采配打ふり下知を成せば、鐵炮の組備ひし／＼と近附き寄り、二百挺の鳥銃を朝鮮の陣中へ一同にどつと打込たれば、響きに應じ百餘人枕を竝べ死たりけり。小西行長

失ふべしとて、木戸作右衛門に五千餘人の逞兵をあたへ、麓をめぐりて鵲山地名の後の方へまはらしむ。木戸命を受け軍勢を引き、道もなき難所を藤かづらを取て高きに攀登り、絶壁の下に縋り落し、千辛萬苦して終に後の方へまはり、相圖の狼烟を高く擧げ、行長へ首尾を通じ、一同に鯨波を作り、大筒三百計どつと一時に打かけ、無二無三に驅のぼれば、朝鮮の軍勢動顚し、「日本勢は後より攻寄せたるぞ。今は四方皆敵なるべし。逃よ〱」と呼はつて、我先にと爭ふを、小西行長大軍を驅て前より進み、揉合て攻けるほどに、大將朴晉人名李玨人名はじめの氣勢もあらばこそ、峯をつたひ谷を越し、行方なく逃失たり。依レ之討るゝ者二千餘人、庇を蒙る者數をしらず。小西行長大に歡び、逃るを追て頻に進み、忠州さして押て行く。去程に朝鮮の都には、諸方の早打急を告る事引も切らず、日本勢深く國中に亂れ入り、防ぎ難き由聞えければ、國王李昖王の名大に驚き、李鎰人名といふ者を大將軍になし、日本勢を防がしむ。李鎰人名命を受て軍勢を催促すといへども、都の内にはかゞ〱しき勢もなかりければ、先手勢を具して尙州地名迄來りけるに、國々の軍民日本勢の犯し來るに聞おぢして、皆山林へ逃隱れ、更に人影もなかりければ、李鎰人名案に相違して、あきれ果て居たりけるが、かくては防禦かなふまじと、倉を開いて軍用の米錢を出し、是を與てやう〱に百姓をなつけ、物の用にも立つまじき土民數百人驅集

繪本太閤記　六篇卷之四

○小西行長陷尙州

加藤主計頭清正、慶州（地名）の府内を陷し、鳥嶺（地名）へ向うて勢を進れば、梁山（地名）は鍋島、島津が手にうちやぶり、其外福島、黑田、長曾我部が輩、方々の城ども攻落し、人を斬こと麻を刈が如く、國々郡々瓦の解るに異ならず。軍民恐れをのゝき、山林深く迯隱れ、日本勢の過行道路、敢て妨る者一人もなく、心の儘に進みけるは、いさぎよかりし次第なり。爰に小西攝津守行長は、加藤清正を始とし、其餘の諸將だん〳〵に渡海し、所々の城々を攻るよし聞えければ、早く忠州（國名）を攻落し、彌武名を擧べしとて、軍勢を引率し進みけるが、道に鵲山（地名）といふ嶮岨の山あり。此所慶尙道（朝鮮を八道に分てり、日本の五畿七道を分つが如し。八道とは、曰く京畿道、曰く黃海道、曰く全羅道、曰く忠淸道、曰く江原道、曰く平安道、曰く慶尙道、曰く咸鏡道なり。）第一の切所にして、一夫是を守れば萬卒越る事能はざる要害なるに、先に登萊（地名）を迯れ走りし敗將李玨（人名）を始め、朴晉（人名）なんどいふ大將一萬餘人にて此所を固め、柵を結び逆茂木を引き、敵の寄るを待居たり。行長其地の嶮岨なるを見て、容易に攻登らば、大木大石を投おろし、味方の兵士多く

繪本太閤記　六篇第四之卷　目錄

小西行長陷二尙州一
小西行長陷二忠州一
小西加藤論二先陣一
小西行長入二王城一
加藤淸正涉二龍津一

せ、既に四面より火を放たんとする所に、城中に懸並べたる大筒小筒の鐵炮を一同に嚁と打放せば、思ひがけなき朝鮮勢、何かは以てたまるべき、びし〳〵と打倒され、周章ふためき漂ふ處を、清正下知して城戸押開き、嚁と喚いて斬てかゝれば、元來軍に馴ざる朝鮮人、一支もさゝへず右往左往に亂れ行くを、埋伏したる加藤清兵衛、庄林隼人一千餘人の逞卒を引て、餘すまじと突來る。前面には大將清正南無妙法蓮華經の大旗を押立て、「一人も逃さず討取やつ」と大音に下知なせば、旗下の勇士等我先に鎗を上げて、敵を討つ事數をしらず。大將晋伯名人も清正の薙刀にかけられ、此野の露と消しかば、殘兵道を求めてさん〴〵に迯散たり。討取る首一千二百級、凱歌を唱へ、府内の城に火をかけて燒立て、鳥嶺地名さして軍をすゝむ。

に城際へ押寄せ、仕よりを附て城の中を伺ふに、寂として人音なし。諸軍怪み猶豫けるを、逸雄の若者三十餘人ばら／＼と走寄り、城戸を打破り城中に入るに、敵一人も有ざりける。是に依て諸勢皆城中に亂れ入り、爰や彼所を見廻るに、大きなる甕に酒をたゝへ、種々の肉取散し、狼狽たる有様なり。清正是を見て下知しけるは、「是餌を與へて大魚を釣るといふ計なり。吾輩甲冑を解き心ゆりて休足せん時、四方より火をかけ鏖にせん毛唐人めらが計略なるぞ。酒も猥りに飲む事なかれ。毒有んも知るべからず」と令せられける程に、諸軍皆咽を鳴して守居たり。時に一人の士卒進み出て申すやうは、「君の命の如く敵方に捨置たる酒、必定毒酒にてこそ候べし。然れども又毒なき美酒ならんには、飲ずして止なんも口惜き次第なり。某日本を出でし日より、命は捨ものに致し候へば、今此酒を飲で毒の有りやなしやを試み申さん。是則大川の瀬踏するも同事にて候」と云ひものへず、大なる器に彼酒をすくひ、三四盃飲たりけるに何の恙もなく、其味甚よしと云ふ。清正喜び彼者を厚く褒美し、諸軍勢に飲しめて軍の勞をはらしける。時に清正、加藤清兵衛、庄林隼人兩人に一千餘人の逞卒を授け、城を出て二里計の間に埋伏せしめ、城中には鐵炮に玉を込み矢束解て、今や敵の寄せ來ると、鳴を靜めて待居たり。去程に韓將晉伯（人名）は、數千騎の軍兵を引率し、夜の丑の刻に府内（地名）の城に押寄せ、燒草數多取持

僅四里（六丁一里）にして慶州（地名）の府内城に到る」と申す。清正又問ふ、「城を守る大將はいかなる者ぞ」答て云ふ、「大將は晋伯（名）と申す者、智勇有て謀を好む。守る兵士二三千に過ず」清正是を聞て先手に下知して、「此坂の左右樹木の中に伏兵有りと覺るぞ。鐵炮を打込み試みよ」と有ければ、先手の大將加藤清兵衛、士卒に下知して數百の鳥銃を林の中へばら／＼と打かけたるに、清正の軍算に違はず、晋伯（名）が計略にて、二千人の逞兵を林の中に伏置き、加藤が軍勢の半通るを打破ん術なりしが、却て敵方より鐵炮を打込れ、死傷の者五十餘人、兼ての用意相違しければ、勇氣たゆみ心臆し、我戰んと云ふ者なく、林の中よりむら／＼と迯出るを、清正見て鞭を揚げ、「あれ討取れ」と云程こそあれ、加藤清兵衛、木村又藏、井上大九郎、飯田角兵衛、木田孫兵衛、森本義太夫、庄林隼人等一人當千の勇士、得物／＼を追取て、無二無三に薙立れば、朝鮮人討るゝ者數をしらず。坂を越て粉の如くに迯散るを、追立／＼首を取る事六百餘級、川中へ追落され、溺れ死する者數をしらず。此時はや日も西に沈みたれど、清正下知して、「此勢を拔べからず、筏を組で川を渡り、今宵の内に府内の城を攻取れや」と、其邊の竹木を伐て數多の筏を造り、數萬の松明燈しつれ、えい／＼と叫びつゝ、難なく川を渡しける。陸に揚ると否や、勝に乘たる日本勢、「朝鮮人の手並は知りたり、吾日本の小兒よりは猶弱し、進め／＼」と呼はりて、只一飛

れおのゝき迯たりけり。清正彼女ども髻に札を附て、大日本先鋒將軍加藤清正免レ之と書記し、銀錢を與へて放ち遣れば、女ども初めの程は爰にて命を取るゝやと歎き悲しみ、更に正體なかりしが、此時はじめて其赦さるゝ事を悟り大に喜び、三拜九拜禮を盡し打連て歸る所へ、彼女共が親族と見えて老若の男女三十人計り、嬉しげに立寄て何事か云のゝしり、悦び合る有樣なり。其中に六十有餘の老人、清正の御前に畏り、「君の仁愛を以て我々共が妻女娘を免し給はる難レ有さよ」と、頭を地に附け禮を成すは、正しく日本の言葉なり。清正怪しみ、「汝はいづくの者なれば、かく日本の言語に通じたるや」彼老人謹んで申すは、「舊僕が生國は日本平戸の產にて、漁を以て家業とする德五郎と申せし者なるが、三十五年以前惡風の爲に此國へ吹流され、終に朝鮮を住所と成し、只今の名は相圓里と申候」清正之を聞て、「汝久しく此地に住ぬれば、地理の案内よく知りつらん、我に隨ひ道しるべせよ。厚く恩賞すべし」とあれば、相圓里辭する事なく、「御仰に隨ふべし」とて、軍中の通辭を成す。清正も殊に滿足せられ、召具して道を急ぐに、又二十里（六丁一里）計進む程に、前面に一つの坂あり。坂の上左右樹木彌深く生しげり、其邊に殺氣雲を突て立のぼり、さながら伏兵を構へし容體なりければ、清正馬をとゞめ、相圓里を召て所の名を問ふに、「坂の名を立坂と申す。坂を下りて向ふに川あり、毫川と號す。其川の渡り

清正仁智
朝鮮乃
庶民と
伏さる圖

罵りて、揉に揉で急ぎけるに、馬船の著するを待ずして行きける程に、漸く騎馬の武者五六十騎計、其餘は皆歩立にて進みける。清正下知して民家に入りて馬を尋ね求るに、一疋もあらずとて牛五六十引來れり。武士ども爭ひ取て乘けるを、若き者ども是を見て、「騎馬の衆にはあらで、これは騎牛の武者なり」とて、手を打て笑ひけるを聞き、何者かしたりけん、道の傍に札を立たり。

　桃林に放せる牛を引きとゞめ乘つて軍に加藤清正

かくて主計頭は軍勢を驅て、慶州（地名）の街道を十五里（六丁一里）進む所に、向ふより日本の雜兵五六十、朝鮮の民家の女十人計馬にかきのせ出來る。清正是を見て、「誰手の兵士ぞ」と尋ねけるに、先に進む者畏り、「某等は小西が手の者に候が、登萊の邊百里（六丁一里）計に人蔭もこれなく候故、軍中の兵士肌著の洗濯に事を缺き、深く此所へ探し入て、漸く十人計民家の女を引連來り候」と申す。清正是を聞て、「汝等がふるまひ甚だ不道なり。軍中に女なきは常の事なり。今遠く朝鮮國へ軍を入れ、日本人は禮儀なき者かなと、此國の奴原にさげしまれんこそ口惜けれ。汝等歸つて攝津守に申すべきは、捕へし女原は清正が放し遣りたるぞ、此後かゝる不道を行はゞ、某が糺すべき條明かに告ぐべし」とて、彼生捕の女を馬より引下し、小西が兵士を追拂へば、恐

らず、太閤の損亡なるべし。我又日頃行長と交深し、是を憐まずんば人倫に背くべし。早く船を彼地へ漕寄せ、小西が戰を救ふべきはいかに」と云ふ。家臣皆此議に同じ、其夜風本を出帆して、恙なく釜山浦に著岸す。此時行長が家人釜山浦の城を守て居たりしが、秀家渡海のよし聞附け、喜んで城に請じ、今度行長が戰功有りし事審に物語す。秀家其勳功を感賞し、則行長が登萊の陣へ書翰を以て我軍勢の渡海せし趣と、且行長が軍忠比類なき條委細に記し、使者を立て申し遣しければ、行長此書を見て深くよろこび、秀家の厚情を懇に謝したりける。

○清正立坂破伏兵

此時加藤清正、鍋島直茂、黑田長政、大友義統、島津義弘、福島正則、小早川隆景をはじめとし、渡海の軍將、今はいつまで順風を見合すべきと、數百艘の兵船一時に纜を解き、鬨の聲を合せ、我後れじと先を爭ひ、終に朝鮮の地へ悉く船を寄たりしに、加藤主計頭は先陣を行長に透し奪れ、恚る事一方ならず、行長が過たる道を踏ん事も口惜く、熊川の湊より慶州の府中を志し進み行きけるに、小西が軍功を傳へ聞きいよく怒りて、「あの藥店の小兒を見侮つて、不覺を取りしこそ安からね。よしく此後先陣を他人にはさせまじきぞ。我獨先登せん」と

來武に拙き朝鮮國、殊更治世年久く、軍のさまに馴ざれば、日本數年調練の兵に、爭か面も向ふべき、散々に切り立てられ、門を開き塀を越え、立足もなく迯行を、小西、宗が軍兵追かけ追かけ、討取る首八千五百、生捕三百餘人を得たり。小西行長釜山浦の城に入て、彼生捕の内より狄鞮の者を選み出し、近き渡の有樣を問に、是より三十里（朝鮮の里數六丁一里なり）去て登萊（地名）の城あり、守大將を李玨（名）と申す。小西行長諸軍勢にむかひて「なんぢ等今朝よりの奮戰、誠に以て比類なし。今此城に入て諸軍の勞を休むべき時なれども、登萊の城釜山浦の落城を聞ば、要害を固め手配り調ひ、一時に攻抜ん事難かるべし。今此破竹の勢に乘じ、登萊城へ取かけ、一日の内に兩城を攻落し、名を異國に轟し、太閤の御感に預れや」といさましく下知をなし、馬引よせて飛乘ば、諸卒一同に勇進み、彼生捕の通辭を先に立て、揉に揉で登萊城へ攻寄ける。然るに此城釜山浦陷り、數千の軍勢鏖に成しと聞き、日本の旗指物を見ると否や、我先にと城を捨さん〴〵に迯出るを、行長が家臣小西主殿介、木戸作左衛門、軍勢を驅て北る敵を追詰々々、九百餘人討取り、こと始めよしと勝鬨を曈と上げ、登萊に陣を張て人馬の息を休めける。爰に備前宰相浮田秀家卿は、軍列においては第八番の備へなりしが、家臣を集め議せられしは、「小西攝津守拔驅して、不知案内の敵國に深入し、若や敵の虜と成か討死せば、吾國の恥辱のみな

ず押切て浪を凌ぎ、釜山浦朝鮮の地名船著の湊なりへ船を寄よ」と、自身碇を引上げ、櫓を立て推ほどに、誰か暫しもためらふべき、我劣じと曳々聲を出し、風に逆ひ波を潛り、無二無三に漕たりける。扨も壹岐の風本には、曉の頃少し風のなぎたるに、船や出さんと罵りけるが、小西行長、宗義智が二手の船は何地へ行きしや蔭も見えず。加藤清正大きに怒り、「扨は小西めに出しぬかれたることそ口惜けれ。帆をまけよ楫を立てよ」と心を苛ち下知すれば、黑田、福島、島津を始め、こは安からずの行長が行跡や、後れを取ては言甲斐なしと、我先に船を飛し、三里計漕出したるに、大浪天にみなぎり、逆風帆柱を吹倒しければ、心ならずも元の風本へ吹戻さる。加藤をはじめ數多の將卒、空を白眼で怒れども、更にせんかた無かりけり。

○小西行長陷釜山浦登萊

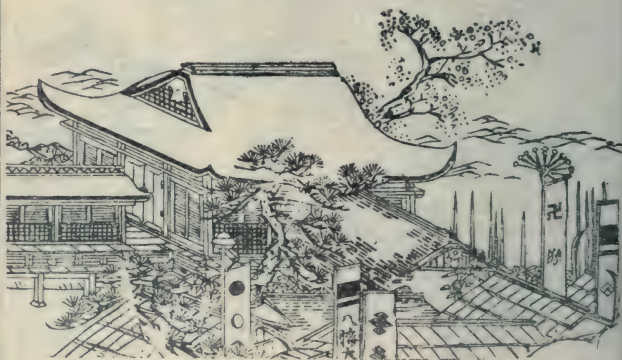
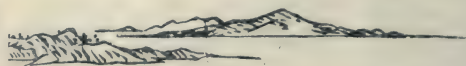
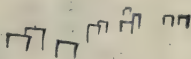
去程に小西攝津守行長は、逆浪を凌ぎ、四月十二日、難なく釜山浦地名の湊に著し、軍勢陸に上るや否や、民家に放火し、鬨を作つて釜山浦の城へ取りかけ、無二無三に攻たりける。城主鄭撥名大に驚き、士卒に下知して矢を射る事雨のごとし。小西行長眞先に進み、甲の錏を傾けすすむ程に、惣軍少しも猶豫ず、一文字に押寄せ、終に城戸を推破り、當るを幸に斬倒せば、元

四萬人、名護屋の湊を發船す。加藤主計頭清正、小西攝津守行長等眞先に船を出し、其餘の諸大將數千艘の大船一同に纜を解き、順風に帆を上げ、石火矢を打鬨の聲を發し、我劣じと漕出せしは、勇敷も又夥し。船幕簱には、藤、巴、洲濱、片ばみ、唐花、三文字、石持、桐の臺、萬字轡、其外取々に家々の紋を附け、磯嵐に飜り、波に浸して漕つらね、青海原に千種の錦を洗ふがごとし。海上五十里計出でし所に、逆風頻に吹來り、巨濤船を漂す。是によつて壹岐の風本に船を寄て、順風を待つこと十日計、小西行長は兼て心中に謀計を構へたれば、宗義智と心を合せ、風の手のみを伺ける。小西が船頭甚五郎と云ひし者は、數度朝鮮へ渡海して、此海上の潮味能覺たる者なりとて、義智より附置たるが、行長が側近く參りて申す樣は、「先刻より風の手少し弱く成りて候程に、此間に五里許り推渡り候ものならば、沖中は浪靜に船の往來自由にして、對馬迄は少安く到りぬべし」小西行長大きに喜び、夜の子の刻俄に碇を引上げ、帆三分計卷揚て、宗對馬守諸共に、數百挺の櫓を船毎に立させ、逆風を推切て四里餘も出でけるに、甚五郎が申す如く、風穩に浪靜なりければ、是より帆を十分に卷て、終に對馬の豊崎に著船し、爰にて又順風を見合せけるが、小西行長下知しけるは、「風の順なるを待ものならば、加藤をはじめ其餘の諸將悉く朝鮮に押渡り、人に勝りたる大功は立がたかるべし。順風を待

給ふ朝鮮の征伐なり。かろ〴〵敷一時の憂忍び得ず、國の弊民の勞苦を顧みず、本朝にためし希なる異國へ軍を出し給ふごときのあさはかなる太閤にてましまさば、卑賤より出て扶桑六十餘州を掌に納め給ふ大業の成就すべきや。若も由緣なき事にかく計の大軍を起しなんと仰出さるゝ共、御側大老、中老、五奉行あり、恩顧の大名、外樣の諸侯、豈に悉く智慮なからんや。身を捨て家を失ふとも諫言申す輩これなくて叶ふべきや。太閤の深き思召と大英雄の御心を計り知り、天下の諸侯、上下の軍民、心を一致に忠戰を勵みしは、一朝一夕の事にあらざる事を知るべし。此故にこそ前に佐々成政が勇を惜み、朝鮮征伐の御ために大國をあたへ、恩に飽しめ給ふ。（事は前篇に見えたり）皆謂有る事なりけり。扨も渡海の諸大將は、九鬼嘉隆が陣所に集り、軍の評定有りけるに、先軍令正しからざれば全き勝利得がたしとて、互に私有るまじき誓詞七ヶ條を書しるし、諸將各連判を成す。先陣の軍將なればとて、加藤主計頭一番に姓名を記す。其花押の筆畫多く、いとも隙取けるを、福島正則あざ笑うて「加藤殿の花押こそむづかしけれ。若病重くなりて遺言の狀に押ん時、便あしかりなん」と戲れけるを、清正聞きて「我は戰場にて屍を肆すとも、きたなく迯て褥の上に死んとは思ひ設けず。されば遺言の狀何か志候べき」と答しかば、福島正則赤面して詞なし。時に文祿元年四月朔日、太閤の御下知によつて渡海の軍勢十

其二

八幡大

太閤肥前名護屋御本陣の図

○朝鮮渡海小西行長透二諸將一

文祿元年三月十日、太閤秀吉公聚樂を立せ給ひ、名護屋に出陣し給ひける。前後の御勢六萬餘人、千生瓢簞の御馬印朝日にかゞやき、行裝殊に勇々敷て、此度も京中の貴賤山のごとく集り拜み奉る。日を經て安藝嚴島に著せ給ひ、長門の國に至りて、仲哀天皇、神功皇后の社に奉幣し給ひ、赤間關阿彌陀寺に詣で給ふ。當寺に安德天皇の御影、平家一族の畫像あり。古人詩を賦し歌を詠じ、皆像の側に附す。寺僧謹んで其故事を演べ奉るに、太閤甚だ御機嫌よく、金銀數多下し賜り、遂に進んで肥前の名護屋に到り給ふ。諸將謹で迎へ奉り、御設の本陣へ請じ、遙々の旅中恙なき御著を賀し參せられ、太閤にも御氣色麗敷く、數刻酒宴に及ばせ給ふ。抑太閤朝鮮を征伐し給ふ事、唯棄君の世を去給ふ御悼の餘り、其愁を忘させ給はんとて、斯る大事を起し給ふとのみ、書にも記し言も傳るこそ、無下に口惜き下ざまの心なりき。太閤は天授の英才、學ばずして知り聞ずして悟る。其度量凡智を以て容易計知るべけんや。信長公の御在世、太閤いまだ羽柴筑前守秀吉と申せし時より、若吾大志を遂て四海を併せ、日本悉く歸服せば、道を朝鮮に借て大明を呑んものと、頃年頃日思慮を懲し、心の如く日本平定し、而して後思し立

設けて紐をつけ、肩に結びて馬に乗たり。見物の群集此軍押に目を驚し、喚きどよみて更に靜まらず。（徵毖錄に、明の援兵朝鮮に來り、平壤に有て練光亭より日本の兵を望み見しに、江上に往來する者大劍を荷ふ、日光下り射て電のごとし。これは眞の劍にあらず、白膩を塗りたる者也と見えたるは、此二士の木劍の事にや。）正月中旬、先陣都を進發し、同廿八九日の頃まで引きもきらず出立せる軍勢、凡四十三萬餘人、夥しとも云ん方こそ無りける。秀吉公兼て名護屋の地に陣屋を造らせらる。築山遣水樹木等は態とならずして自然の儘を庭前に籠め、四方の要害よりして內々の廊下假殿局數寄屋に至る迄、風流をつくし綺麗を磨き、まばゆき迄に作り建られたり。扨も著到の諸軍勢、軍鑑の指圖に隨ひ所所に陣屋を連ね、太閤の御著を相待けり。同三月朔日、太閤御出陣の御催を急がせ給ふ。其時近臣皆申けるは、「君名護屋に御座て、遙に朝鮮を討せ給はんに、大明朝鮮の書翰日々に往來すべし。文才有る者を召連られ、彼國の尺牘を讀しめ、且答書の文章を作らせられ然るべし」と申ければ、太閤色を起して宣ふ、「大明朝鮮の毛唐人原が文字を習はん事秀吉が心に快からず。吾國の伊呂波を以て渠等が國に遣し、凡ての要用を辨ぜんに、難き事有るべからず。無用の學生を携るに及ばず」と。近臣皆再言を發する事能はず。其夜太閤つら〳〵是を思惟し給ふに、吾國の伊呂波にて彼國の言語を通ずべき道理にあらずとて、則ち相國寺の僧承兌、南禪寺の靈山、東福寺の永哲、三人の長老を召具せらるべきに定め給ふ。

秀俊卿、前田宰相利家卿、織田内大臣信雄卿、上杉彈正少弼景勝、蒲生飛驒守氏郷、佐竹右京大夫義宣、伊達陸奥守政宗、最上義光、森右近大夫忠政、惟住五郎左衛門長重、木下若狹守勝俊（號長嘯子）等を始とし、其勢十一萬餘人、太閤又別に軍兵六萬人を集め給ひ、遊軍として是も名護屋へ遣し給ふ。是は朝鮮渡海の軍兵十四萬人、誠に少きに非ずといへども、大明より多勢にして朝鮮を援はゞ、味方難儀なるべしとて、其防ぎに備へ給ふ。是等の大軍悉く都を立ち、次第を守り、聚樂より戻橋を大宮へ押通り、名護屋をさして行く程に、家々の旗風に飜り、大筒小筒の鳥銃弓鎗長柄空にきらめき、大將は云ふにも及ばす、物頭旗頭騎馬の武者歩卒の銘々思ひ〳〵に綺羅を盡し、武具の色粲然に照輝き、けふを晴と出立けるは、春秋の花紅葉を一時に咲せしごとくにて、見物の老若街に滿ち、あな夥しの觀やと、稱讃せぬ者もなし。中に一際花やかなりしは、伊達政宗の武者押なり。旗三十流、弓五百張、鐵炮五百挺、みな一樣に紺地に金の紋附たる具足を著し、銀の熨斗附の太刀刀、に金色の尖笠を被りたり。其跡より騎馬の武者百二十騎、是も同出立にて、黑母衣に金の半月の指物、豹の尾又は孔雀の尾などを結り添へ、馬には虎の皮熊の皮の馬甲をかけ、金の熨斗附の太刀指添へ、あたりも赫く計なり。遠藤文七郎、原田左馬介は帶添に一丈計の木太刀を作り、銀箔を以て是に押し、鞘尻の下りければ、正中に金物を

繪本太閤記　六篇卷之三

○諸大將率レ軍赴ニ筑紫一

天正二十年年號改りて文祿元年と成る。兼て太閤御下知のごとく、正月中旬、諸國の軍勢京都に集り、秀吉公の命を受け、筑紫潟迄出勢せり。先陣の一隊は小西攝津守行長、宗對馬守義智、松浦法印鎭信、其勢都て一萬八千七百餘人、則ち是を一列とす。又一隊の先陣は加藤主計頭清正、鍋島加賀守直茂、其勢合て二萬二千八百餘人、是又一列とす。小西行長、加藤清正鬮を取て、日を隔て先陣にすゝむべしとなり。黑田甲斐守長政、大友豐後守義統、島津兵庫頭義弘二萬五千人、福島左衞門大夫正則、其外四國の軍兵を合て一萬三千五百人、蜂須賀阿波守家正七千二百人、長曾我部土佐守元親、生駒雅樂頭九千二百人、小早川左衞門督隆景、立花左近將監宗茂一萬五千七百人、毛利右馬頭輝元三萬人、右陸地を行くの軍勢都合十三萬餘人也。海路の兵は九鬼大隅守嘉隆、藤堂佐渡守高虎、脇坂中務少輔安治、加藤左馬介善明等、其勢都合九千餘人、惣軍十四萬餘人、皆朝鮮へ渡海すべきの命令なり。名護屋在陣の人々には、大和中納言

繪本太閤記　六篇第三之卷　目錄

諸大將率軍赴筑紫
朝鮮渡海小西行長透諸將
小西行長陷釜山浦登萊
加藤淸正立坂破伏兵

金銀財寳を出して罪を贖ひけり。太閤則贖銅の法に任せ、一門親類合力して漸くに辛き命を買戻しぬ。是より罪科有る者、皆其一族一門親類両隣よりも金銀を出させ、召上げ給ふ事数を知らず。依レ之堺の地、日毎に衰微し、富裕の者一人もなく、詮方なくぞ見えにける。

者を見ては、彼借たる金銀を貸與ふ。はじめは一割の利にて借たるを、二割にして人に貸し、其借たる者は三割四割の高利にて貸附る程に、後には六七割の高利と成り、近國他國の諸士人民、是が爲に困窮し、奈良の町人數十人、巨萬の金錢を積み、其同類の者悉く富榮えずといふ者なし。世に是を奈良貸といふ。秀吉公是を聞せ給ひ、己を富し他を窮せしむる不道のふるまひ、盜賊と同じとて、彼首たる町人數十人が首を刎られ、貯へ置し金銀家財悉く召上られ、是を官庫に納め給ふ。是より先、太閤の定め給ふ法令に、凡士庶人ともに、喧嘩口論は理非を云はず、左右方ともに罪科に行ふべき由を、天下の間にふれ置き給ふ。然るに泉州堺の津福有なる町人、茶の湯の座にて爭論に及び、終に刀を拭てひた斬に切て數人に手を負す。太閤是等の町人を悉く引捕へ、吾法令に背く條奇怪なりとて、主客共に理非を糺されず、三族を罪科たるべき由仰渡さるゝ。喧嘩致させし者こそさもあらめ、其親妻子親族共悉く罪に行れ、刃の下に殺されん事、思ひ設けぬ災難なれば、樣々に詫ぬれども、太閤更に赦し給はず。堺の地は古へより福裕の町人多く、子孫所に滿ち、强富の者相互に因寄り、娘を嫁し子を養ひ、親族堺中に廣がりぬれば、今度の喧嘩に其三族を絶されんに於ては、堺の豪家一軒も安穩なる者なしと歎き驚き、夥しき

貸與ふ。借者又是を人に貸附け、その先の借たる者も又々百姓などの貧しき者、金錢に手支たる

更に言葉も出ざりけるが、「御慈愛深き御教誨、小臣が骨に記し、頓て彼國より勝戰を報じ奉らん」北の政所御喜びなゝめならず、御土器下し賜り、何くれと御物語など有りて、主計頭は御暇申賜はり、御前を退出したりける。

○大閤遣二書琉球國一

日本九州の坤にあたつて琉球國あり。此國足利將軍義政公の御時迄我朝へ入貢せしに、夫より後は絕て遣使をも來朝せず。太閤秀吉公今度朝鮮征伐思し立せ給ふにより、則琉球國へ御書を遣はさる御趣は秀吉賤しきより起り六十餘州を掌にをさめ、他邦より來り從ふ者少からず、將に今大明を征伐して天の授るを取んと欲す、然るに琉球の小國未だ聘帛を通ぜず、吾大明を征せん時必ず來り從へ、若然らずんば大軍忽到り、汝が球琉國悉く鏖にすべしと書れたり。球琉此書を得て大に驚き、官臣鄭禮人名といふ者を大明に遣し、福建地名の巡撫使官名趙參魯人名といふ者に付て、日本の軍兵來り討べきよし告たりけれども、大明皇帝更に驚く事なく、是小事なり、何ほどの事あらんとて、只海邊に住ける武士に命じて兵船兵具を用意し、敵到らば討散せよと下知せられける。此年奈良の町人金銀を借て高利を償ふ者あり、富裕の者これを

め置き、宗義智と申合せ、夜中密に纜を解き、力を合せ、一飛に釜山浦へぬけ駈して、一番の高名を御本陣へ報じ奉らん事、某が掌中に是あり候。其外朝鮮國中險難あり大河あり、地理に隨ひ人情を察し、加藤が武勇を挫ぎ候べし」といさぎよく申すにぞ、淀君大きに喜び給ひ「あなかしこ、今の計人に知らるゝ事なかれ」とて、猶夫々の御心添ありて、小西は退出したりけり。去程に北の政所の御方にも、加藤主計頭を召寄られ、「此度太閤の思召を窺ふに、其方と小西行長兩人を先陣となし給ふ由聞え侍る。はる〲遠き海路を經て、知らぬ國へ軍を出す先陣なれば、嘸な心盡しの旅路成らんと思ひやりて侍るぞや。其上小西行長は堺の津にて藥を商ひ物とし、彼朝鮮國へ渡海せし事も有りとや。されば人の情國の動靜も知りてこそ有らめ。御身は見も知らぬ境に深く入りぬる事なれば、何事に於てもよく愼みて忠節を忘るゝ事有る可らず。たとへ高名は行長に劣るとも、全き勝利を君に報じ、日本の武威を彼國に示さんこそ、則ち太閤の御心なるぞ。相構へて暴厲なる行跡なく、仁愛を以て彼國の人民を惠みなば、獨御身の德あらはれ、當座の高名手柄よりは、幾庶か勝たる忠義なるぞや」と、細々教訓なし給へば、淸正元來武藝力量ならびなき剛將なれば、小西などは小兒の如く見えける故、何條行長づれに高名劣るべきと、事もなく思ひ居られけれども、政所の君の切なる御教訓の有難く、一向涙にむせび、

しほどに、加藤小西兩人等しく先陣たるべき旨、內々仰含められける。依之淀君小西行長を近く召れ「今度の先陣こそ汝が身の一大事にこそ。政所の吹擧によりて加藤主計頭を先鋒に加へられぬ。彼加藤清正は聞ゆる勇武の者にて、殊更郎等に武功の者少からず。等閑に事をはかりて名を千歲に下す事有る可らず。汝は舊堺の津に有りし時、業の事にて朝鮮國へも渡海せしとや。さあらば案內に付て加藤が上に出づべき計略は有べきなり。心を貫て不覺を取る事有る可らず」と仰せければ、小西行長謹んで平伏し、暫く思惟して有りけるが、良有りて申けるは、「仰の如く小臣若年の頃堺に在り、藥種賣買致せし時、兩度朝鮮に渡り彼國の有樣も土地の言語も大方に覺え知りて候。其外朝鮮の風土豫めかくご致せし者は、宗對馬守義智にて候。是は某が妹を嫁せしめ、腹心の大名にて候へば、彼と心を合せ、粉骨碎身し、軍忠を勵みたらんに、主計頭いかに烈しく勇むとも、不知案內の海路を經、何ぞ大功を立つべきや。此義に於ては恐れながら尊慮を安め給はるべし」と云ふ。淀君重て仰けるは、「謀を帷幕の內にめぐらし、勝つ事を千里の外に究るは、將たる者の心なるぞや。汝加藤が上に出ん豫の計有りや」行長頭を上げ、「肥前名護屋より對馬を經て朝鮮の釜山浦に至る海路、常に風ありて、船を蔽ふ荒波所々に多し。某先陣に進み、彼大浪の切所に至て順風を待と稱し、諸軍と共に此海上に碇をおろし、惣軍を止

府へ石高を書付け、割符を取て歸り候はずば、徒に彼國に德付のみにて、日本より渡海せる軍兵の扶には相成り申まじ。恐ながら御賢慮も候や」と申ければ、太閤笑はせ給ひ、「汝心のせまき事を申す事なかれ。かばかり多き粮米を釜山浦に棄來るとも、彼國の者ども心に疑を生じ、猥に取掠る事有るべからず。先毒有ん事を恐れ、罪極りし刑人などに與へ試み、いよ〳〵毒なきを知つて後、牛馬船等にて運ぶとも、容易取得る事難かるべし。其中には我日本の軍兵彼國へ亂入せん。若夫迄に殘りなく奪取とも、元來朝鮮は貧國なれば、日本の軍勢卒に至らば、物乏しく食足ずして困窮すべし。此故に三百萬石の米を與へ、彼國を潤し置き、さて片端より竹を破の勢に切取らば、米穀及び其外の品々足ずと云ふ事有る可らず。汝心を用ふる事なかれ」と仰ければ、長束仰天して退き、仰にまかせ釜山浦へ彼米を積渡しぬ。爰に肥後國熊本の城主加藤主計頭淸正、同國宇土の城主小西攝津守行長の兩將は、兼て心に含む所存あれば、今度太閤朝鮮征伐の先陣こそ人には中々させまじと、淸正は政所へ内々訴へければ、行長は淀君へ日々に參じ、日來の欝懷を散ずべきは此時なりと打歎きて、先鋒たらん事を希ひ參すれば、政所の君よりは加藤を以て先陣たらしめ給へと仰上らるゝに、淀君松の丸の君よりは小西に先鋒をせさせて給べと侘給へる。元來秀吉公、加藤小西の内一人は今度渡海の先陣と成さんと兼ての思召なり

伊勢浦において數百艘の艨艦を造らしめ給ふ。其船の最大なる物を號て日本丸と稱す。其外中國四國九州の大小名、銘々戰舸を調へ、兵糧を蓄へ、軍勢を催促し、渡海の用意取々なり。時に太閤秀吉公、再び諸國へ觸廻し給ふやうは、「來年正月、先陣の軍兵早く渡海の場所に出合ひ、二月三月に至りなば、諸軍次第を守りて渡海すべし。太閤は肥前の名護屋に陣を居られ、軍旅の指揮手つがひ有べし。東國の軍兵は船軍に利有まじければ、名護屋に止り、其國の遠近に隨ひ、多少を分て軍兵を出すべし。南海四國九州の兵は、船の調練に馴たれば、皆朝鮮へ渡海すべし」と仰渡され、京都は關白秀次公二萬餘人を以て警衞し給ひ、大阪の守護堺浦の番手等悉く命じ給ひ、日々其催し事繁く、更に暇はなかりける。時に又秀吉公、長束大藏少輔を召されて命じ給ふは、「東國北國其外の國々へ申傳へて、兵粮米三百萬石を、筑前博多、肥前名護屋等の便よき所に集め置き、當年の中に朝鮮へ遣し、我軍兵の糧と爲べし」長束大藏畏り奉り、頓て國々へ令して米粟を集る程に、天下米の價尊き事以前に倍す。同年十月其用意調ひぬれば、長束大藏かくと言上す。太閤令して宣ふは、「三百萬石の米相集る上は、大小の船に積乘せ、早々朝鮮の釜山浦に到り、水火の害なき所へ山積にして、苫を蓋うて歸るべし」と命じ給ふ。長束心に驚き、再び言上しけるは、「こは荒唐御仰にて候。假令米粟を彼國へ渡し給ふとも、臣等より朝鮮の官

て此事を告るといへども、彼國敢て奉書を捧來らず。是又罪せずんば有る可らず。よつて先朝鮮を征せんとす。朝鮮吾に隨ひなば先陣となし、直に大明へ押入べし。是難き事有るべからず。今諸將を集め此一事を議す、異見あらば申すべし」と仰けるに、並居る諸大將大に驚き、互に目と目を見合せて、卒に答べき詞を知らず。銘々私に思ふやうは、殿下愛兒を失ひ心も亂れ給ふならん、年來の軍旅漸くに息み、上下の士民始めて安穩の思をなせしに、今若軍兵を異國に出し給はゞ、國の弊人民の困み、實に狂氣し給ひけるにやと、皆心に思ひつれども、諫言申すとも聞入給ふべき樣に有らざれば、其仰は違ふこと能はず。皆謹んで申けるは「固に古神功皇后より以來例有ざる大事、武將の威を外國に輝し給ふ事、是我國の功、君にあらずんば何人かよくする者之有らん」と。秀吉公甚だ喜び給ひ、彌朝鮮へ渡海して、彼國より征伐を始むべしと、評議是に一決し、諸將一同に其日は退出したりけり。

○朝鮮渡海定二先鋒一

豐臣秀吉公奏聞して關白職を秀次公に授け給ひ、是より世の人秀吉公を太閤と稱し奉る。扨も朝鮮征伐の事、彌評議定る上は、渡海の用意すべきなりとて、九鬼大隅守吉隆に命じ、

ばず、遠き田舍の末迄もひそみかへつて、物寂きぞ世中のさまなりけり。秀吉公餘りの詮方なさに、愁を忘るゝよすがもやと、往時平氏の華美にならひ、淸水寺に詣で、爰に留り給ふ事三日、英雄の鐵魂何ぞや。斯る風流を以て心の慰むべき、猶彌增に思ひぞ增りぬ。さらでだに秋は物悲しきに、松吹く風音羽の瀧の響迄も、淚を添ふる種にぞ有けり。秀吉公つらく思召すやうは、大丈夫の世にある、何ぞや此計の愁に心を悼しめ、婦女と等しく世を終るべきや、吾元來朝鮮大明を討て大功を異邦に輝さんとする志あり、今日本悉く吾武威に服し、四海靜謐なる時に乘じ、一度軍を朝鮮に入るゝ程ならば、成功一時に就べし、是我心の愁を慰するに足れりと、更に御心爰に決し、直に聚樂に歸城し給ひ、大老中老五奉行の面々、其外在京の大小名悉く召れ、殿下仰出されけるは、「古へより漢土震旦の我國を犯さんと計りしこと數多度なりと雖も、日本より他邦を討つ事は、神功皇后の昔、新羅百濟高麗の三韓を征伐有てより以來、數千歲が間曾て其例なし。今我卑賤より出て高位を踏み、富貴榮花何の足ざる事か有らん。然れども適偶け得たる掌中の珠碎けて返らず、泉下に埋れて更に見る時なし。此憂吾齡を縮んとす。大丈夫あたら百年の命を婦女子の如く徒らなる哀苦に隕すべきや。秀次に關白職を讓り、帝都の守とし、日本國の事を掌しめ、吾は大明に入りて皇帝と成ん。先に書を朝鮮に遣し

國より、若君御誕生の慶賀とて、取々の獻上物おもひ〳〵にかざり立て、自身參勤せるもあり、或は遠國の使者飛脚、毎日々々引もきらず、京、大津、奈良、伏見、大阪、堺、尼崎、兵庫、西宮のわたり迄、皆此度の御悅びとて、貴賤の往來ざゝめきわたり、誠に殿下の御威勢おびただしかりし次第なり。御名を棄君と號け給ひ、珊瑚優曇華の花よりも猶珍しく思召され、御寵愛かぎりなし。然るに同五月中旬、殿下の御令弟從三位大納言大和紀伊和泉三州の牧豐臣秀長卿卒去し給ひけるにぞ、殿下聲を揚て歎き給ひ、御嫡子秀俊卿實は三位法印の子秀次卿の御弟なりに家督相續なさしめ給ひける。是を大和中納言と申奉る。秀吉公歎きに御心も欝々しく座しける中に、又其年の秋九月、誕生の若君不レ例見えさせ給ふ程に、秀吉公いとゞ心を苦め給ひ、御母淀君は申すも更なり、内外の人々手に汗を握り、いかゞ有んと騷ぎ罵る。次第に御氣色重らせ給ひ、典藥頭當時の名醫、日夜御側をはなれず配劑に心を碎き、諸山諸社には御祈の師丹誠を凝すといへども、露計の御驗も見えさせ給はず。九月二十日といふ曉、終に儚なくなり給ふ。さしも勇敢の秀吉公も、大和大納言の逝去を悼み給ふさへ有るに、若君かくならせ給へば、憂悲の思ひの火胸を焦し心を爛かす。若君に附し參らせし御側の女中近士小姓等、髮を斷て歎の情をしめし、夏の初には此君御誕生ありて上下ざゝめき花麗なりしも、夢の間に引かへて、京大坂は云ふにも及

朝鮮人来朝聚楽城へ参る図

入ると夢見て孕る所なり。誕生の後相士原して曰く、日は是普く萬物を照す德あり、天地の間其惠みを受ざるものなし、此兒世をおほふの厚福有らんと。我一度運に乘じて飛龍の雲に登るがごとく、四海忽ち平ぎ治り、眞に日の出て萬物皆照さずといふ事なきがごとし。我思ふに人間一生百歲を保つ者なし。其間に只日本のみを治めて徒に月日を費さん事、大丈夫の志に非ず。今大軍を起し大明國に入りて、一劍の霜を四百餘州の天に滿しめ、扶桑の武威を異國迄も輝さんとす。時に臨ば朝鮮を以て先鋒たらしめん」と識め、一人の使に白銀四百兩宛を下し賜り御暇下されければ、三使拜して退出し、本國へこそ歸りける。

○朝鮮征伐之評議

同年夏四月、秀吉公の帳中第一の美人淀君の御腹に、若君出生ましましける。殿下御齡既に五十を逾え給へども、御子更に御座さゞりければ、去ぬる年近江中納言秀次卿を御猶子と定め置せられ、今は御公達も姬君も、實の御子はなき物に思ひ捨させおはしけるに、御男子誕生の御事なれば、殿下の御悅は申すも中々愚なり。先禁廷より勅使を以て御悅を申し給へば、后宮、國母、左右の大臣、攝家、淸花を始め參らせ、在京在坂の諸大名は云に及ばず、東北西南の國

○朝鮮官使來朝

同三月、朝鮮國の官使貫允吉名金誠一名許箴之名來朝し、秀吉公聚樂の城中に召して接對し給ふ。元來朝鮮國より吾國へ聘使來朝せる事、いにしへより絕る事なかりしに、足利義政公の御代、應仁の頃より其沙汰なく、打續きたる兵亂に何事も廢れけるを、秀吉公天下を靜め給ひ、去ぬる天正十四年、橘康廣を使とし朝鮮に遣し給ひ、彼國よりも通信使を求めて隣國の好を深くせんと申送り給ひしに、海路の波濤凌ぎ難き由答へて、敢て使を送らず。依之秀吉公重て宗對馬守義智、柳川豐前守調信、禪僧玄蘇を使とし、天正十八年春、再朝鮮に遣し給ふ。朝鮮國王李昖名辭する事能はず、三使をして同年七月、日本に來朝せしむ。此時殿下小田原征伐の御時なれば、京堀川本國寺を朝鮮人の旅館とし、暫く逗留なさしめける。同年九月秀吉公京都に凱陣し給ひぬれども、年の内は何くれと御事繁く、今年天正十九年三月の始、漸く御沙汰有りて朝鮮の三使聚樂城に拜謁し奉り、國王李昖が朝書を呈し、種々の送り物山の如く、日本天下平安の祝賀を演奉る。秀吉公淺野彈正忠、石田治部少輔兩人を以て是を饗應なさしめ給ひ、返翰を作り朝鮮に送らるゝ其文中に、「秀吉卑賤に生るゝといへども、爾も母日輪懐に

かれ、「吾汝に負れ行くべし」と宣ふに、畏つて秀吉公を背にかき負うて、書院にておろし奉る。斯る戯れたるふるまひ多かりければ、大名小名古風の禮義をさし置き、興有る事のみに心を盡しぬるぞ此時代の風儀なりし。斯りければ殿下いつも夜ふかく聚樂に歸らせ給ひけるが、或夜三更の頃御城に入らせ給ひ、御數寄屋に釜の仕かけたりしを引揚げ、瓢簞に炭の積みたるを爐の中へ入れ給ふに、怪しや一陣の風さつと窓を打て、燈火將に消んとす。御側に有ける女中立寄て燈火を直すに、千利休が幽靈忽然と顯れ、白衣の上に黑き法衣を著し、同じ色なる頭巾を戴き、爐の傍に坐して炭を見る、眼中より輝々と光さし出で、苦しげなる息に焰を吐く。左右に在ける女中達、あなやと叫び其所に倒る。殿下いと靜に炭を入終り、不禮なりと白眼給へば、利休が幽靈座を立て下座に著く。殿下常の居間に出させられ、寵愛の小姓堀三十郎を召れ、「數寄屋のうちに妖怪あり、汝往て嘖り來れ」と仰せければ、三十郎畏り、數寄屋の方へ行けるが、廊下の間に窓の多く有りければ、此所よりばけ物の迯出づる事もやと、悉く戸を閉て靜かに數寄屋に入て見れども、怪しきものの蔭も見えず。せん方なく御前に參り爾々と申上るに、秀吉公御機嫌よく、羽織を脱ぎて三十郎に賜ふ。此時三十郎年いまだ十五歲なり。

繪本太閤記　六篇卷之二

○秀吉公枉二駕群臣第宅一

蘆原やみだれし國の風をかへて民の草木も今靡くなり。實にや此時京伏見大坂の間には、往來ふ馬車絶る隙なく、國々の諸侯太夫時折々の産物を獻じ、聚樂大坂への參勤引も切らず。殿下秀吉公此ありさまを御覽じて御氣色麗しく、諸國の大名又近從の屋敷々々へ駕を枉られ、或は茶の會或は歌の會、種々の御遊に閑日もなし。就中此頃は亂舞を殊にめでさせ給へば、亭主方の大名小名、觀世吳松などの殿下御加恩の能太夫を集め、其外南都四座の猿樂どもを召寄せて、其家々の祕曲を盡させ、酒宴の興を添られければ、殿下御悅大方ならず、例の寬闊、其席にてさまぐ\の引出物夥敷下し賜り、下郎下部にも御隔なく戲事など聞えさせ給ひ、虎の皮の道卵より、金錢數多取出して是を賜ふなど、凡て御身を恭敷はし給はず、其古へを忘れ給はざるにやと、感じ奉る者も少からず。浮田宰相秀家卿の亭に成せ給ふ時、長廊下を行給ふに、白砂の上に浮田の家士戸川花房などを首とし、數多竝居て拜謁す。殿下戸川某を近く招

繪本太閤記 六篇第二之卷 目錄

秀吉公枉駕群臣第宅
朝鮮官使來朝
朝鮮征伐評議
朝鮮渡海定先鋒
太閤遺書琉球國

をなし、無位無官の者にも院號を授く。是釋氏の掟にして更に怪む者なし。然らば今度利休が像を山門上に置くと雖も、吾徒において更に誤有る事なし。不幸にして殿下の御憤を蒙り、一山滅却に及び、拙僧等が命を召るゝ共、元來歎くべきにあらず、悲むに足らず、佛法の興廢は時節到來に候」とて、臆する氣色露計もなし。前田宰相笑うて宣ふは、「汝が申す所罪を謝するに當らず、今爰にたとへを設けて云はん。昔より汝等が宗門の是非により爭論に及ん時、彼も是なりと云ひ此方も是なりと云はんに、其爭を必ず公に訴へ、御下知に隨ひて善惡を定るにあらずや。然らば釋氏僧徒も等しく此國の民なり。民として公命に背き、豈よく身を全くせんや。愚なりといふべし。所詮今度の誤を幾度も詫奉り、殿下の御怒りを解き奉らば、事全く平安なるべし」衆僧等しく詞を揃へ、「偏に公等の御恵を以て、殿下の御憤りを宥られ、當寺恙なく相續せば、莫大の御慈愛何事かこれに如ん」爰において三使聚樂城に歸り給ひ、種々に執繕ひ、辛うじて破却の儀を止られ、其儘に立置れける。

利休居士之像

時天正十九年辛卯二月二十日なり。

秀吉譜に曰く、宗易が首を一條戻橋の下に梟し、彼木像を掲げて其首を蹈しめ、柱を以てこれを夾立る、數日視る者市のごとし云々。

殿下前田宰相利家卿、細川忠興、德善院法印等に台命を命含められ、大德寺を破却し、古溪和尚を誅すべき旨を銘々承り、兵を引つれ紫野に至り、宗陳及び數輩の長老を召れけるに、彼古溪和尚宗陳は、當寺の滅却、我輩の頭を召るゝ者ならんとて、更に恐るゝ色なく、短劍を懐に隱し持ち、陳謝する旨聞れずば自亢を貫きて人の手を待べからずと、辭氣壯然として衆僧と俱に出て台命を承る。德善院曰く、「今度千利休が僭上に荷擔し、渠が像を山門上に置候事、上を憚らざる條言語道斷なり。依而當山を破却し、宗陳が首を見るべきとの嚴命也。然れども陳謝する旨もあらば、某等宜しく言上を遂げ、寺破却の儀はいかにもして申宥むべし」と申されけるに、衆長老皆頓首して其厚意を悅びぬ。時に古溪和尚すゝみ出て申けるは、「抑天地は同根にして萬物は一體なり。吾釋氏にては生佛一如と立て、尊きもなく賤きもなし。千宗易先に居士の號を拙僧に受け、是時既に此世を辭する心を以て自像を作つて當山に寄す。凡人死しては上下貴賤といはず其靈牌を設け、佛殿に置く事僧徒の業なり。貴人高位も爰に詣で等しく拜

○利休居士亡命

千宗易は泉州堺の產なり、其先は室町家に仕へて名を千阿彌と呼り。此故に子孫千を以て稱號とせり。宗易幼名を與四郎と云ひ、若冠にして茶味を嗜めり。抑茶例は東山慈照院殿に盛に行はれ、其後珠光紹鷗に委く、宗易に大成すといへり。去ぬる天正十六年、秀吉公茶禮に長ずる者數人を奏聞して綱位に昇らしめ給ふ。宗易一人是を辭し、居士の稱を請奉る。秀吉公大德寺の長老宗陳古溪和尚に命じ、利休居士の號授けしめ給ふ。秀吉公此の如く宗易を愛し給ふにより、世の人敬うて疎かにも云はず。時に同二月廿日、殿下武士に仰せて利休を捕へしめ、三條河原にて誅し給ふ。利休とくより殿下の御氣色に違ひたるを知り、我命の盡る期なりと、かたみの物などそれ〴〵に贈り遣り、今朝も數寄屋の內に釜をしかけ、宗巖といへる門人に茶を點させける所へ、御手配の武士利休が居所を取圍み、嚴命を演て利休を催す。利休茶を呑終りて、「此茶碗も今よりは無用の物よ」とて、庭に投げ打摧きたり。辭世あり。曰く、

人生七十　力圍希咄　吾這寶劍　祖佛共殺

提ぐるわがえ具足のひとつ太刀今この時ぞ天になげうつ

の町人を釣り、猥りなる寶を得て家を富す事、亡八者の所業にも勝り侍るよし聞侍る。今殿下渠を深く憐み給へば、渠又其厚恩に誇り、敢て憚る色なく、世の人皆其惡を憎めども、殿下の權威に恐れ、曾て上聞に達する者なし。庶幾くは能く察して是を糺明し給へ」と謹んで申給へば、殿下熟々と聞召し、「彼法師が惡事曾て我よく是を知れり。唯其能を惜んで其儘にさし置きたり。今は赦しがたし」とぞ仰せける。同二月十五日、殿下紫野大德寺に詣で給ふに、門前にて車より下りさせ給ひ、歩行して山門の前に至り、樓上を仰ぎ見給ふに、新しき立像を安置せり。僧を召て何の像なりやと尋給ふに、僧答て、「千利休自像を造り、當寺の僧古溪和尚と相謀り、此山門に安置する所なり」と申す。秀吉公是を聞し召し、大眼闊と見開き、「惡き坊主原が振舞かな。山門は天子后宮を始めとし、高位高官の通行せる其頭上に、下郎の身として己が像を置きたる事、僭したりとや云ん、無禮なりとやせん、其罪必ず死を免れじ。古溪坊主めも同罪なれば、寺中の僧ども重ねて刑罪申付る迄、慥に預り奉るべし」と嚴重に仰渡されたれば、大德寺中の長老等謹んで命を承る。殿下は山門の前より直に御車に召れ、聚樂へぞ歸城し給ふ。

娘頗る容色あり。宮仕にさし出すべし」と厳に命けるに、利休御答申すやうは、「愚なる女君の御覧に止り、差上ぐべきの御諚、却て恐れ奉り候。此女元來百雀屋の某へ嫁し候處、夫に後れ、姿其以來は人事の望み曾てこれなく、尼に成り候はんとの志に候を、某さまぐ〵申とゞめ、姿はむかしのごとく候へども、心ははや尼のやうに相成り候。今尊命に隨ひ、卑賤の身を顧ず宮仕參らせ候共、かゝる心にては殿下の御呵りを受るのみならず、毎時興をもさまし申すべし。只々寛仁の御計ひを以て、渠が愚なる操を全からせ給はんこそ、父子ともにいか計の御慈悲と恐れ悦び奉る」由申して、敢て台命に隨ひ奉らず。利休が所存は、娘を商物にして富貴を得たりと云はれんが口惜しとの心なりとぞ。殿下此答を聞召し甚だ怒り給ひ、「頭の端より足の爪先まで我恩に有らざる所なきに、不禮の返答奇怪の次第なり。坊主めが首を斬んに何の難き事や有らん」と宣ふ。三條の君よき折とや思じけん、仰上られけるは、「頃日洛中の人の唱へを聞侍るに、利休居士の僭上、公家堂上に不禮失言し、私慾を構へては茶器の目利に依怙多く、己に親しき者の持來るは新きも舊しと云ひ、似假物をも正眞なりと定め、我に疎き人の物をば好も惡きと貶し、眞なるをも僞と成し、其價を或は尊くなし或は庇くなし、人を誑かして利を得る事、渠が常にて候ふとや。其上己が娘の夫に後れ獨身にて有るを、父子心を合せて富裕

の慶びども一入執行ひ給ひ、四つの海靜けき春の御壽とて、主上を始め奉り、月卿雲客、大裏女房達、今日は歌の會明日は舞樂の御上覽よとて、日每に殿下も參內ましく\〳〵、歲改りぬれども猶閑日はおはさざりけり。漸く正月二十日の頃、少し春の心地にならせ給ひ、大坂の城に下り給ひぬ。淀君、松の丸の君、左右を去らず、媚を成し笑ひを獻じ、其外內寵の美女花の如く粧ひなし、終日舞、終夜謠ひ、彼秦の阿房宮、漢の未英宮もこれにはいかでか勝るべき。此時淀君事の序に仰上げらるゝは、「千利休は勿體なき者に候ふ。殿下の御威勢に己が身を高慢り、我意に募り、恣なる行跡のこれあり候よし承り候。此頃も船岡の墓じるしを取て手水鉢に成してんと申せしを、彼所の里人驚き種々に申詫候へども、利休强に是を取得て、心のごとく手水鉢に作り候とや。里人も其無法なるを怒り侍れども、殿下の御寵愛厚き利休なれば、御威勢を恐れ奉り、訴へ申す事もこれなく、堪忍致し候由、慥に聞えさふらふ。かやうの事日々に募り候へば、殿下の斯る惡人を愛せさせ給ふよと、下の謗もうしろめたく、より〳〵御嗔り置もや」と、和らかにして物を折るは、吹雪の雪の大竹に積るが如し。秀吉公、「憎き茶坊主め、よく聞糺して罪を問べし」と宣ひける。去年の春、殿下利休が娘を東山にて見給ひ、其後軍務の暇なく打忘れおはしけるが、此時不圖思し出させられ、聚樂城に歸り給ひて、利休が許へ使を以て、「汝が

過にし黑百合の茶の會より、利休が娘を疑ひ思召せども、生得愼み深く溫潤におはしければ、兎角にさゝへさせ給ふ御氣色も見え給はねども、三條の君おこいの方など、利休が娘を惡み給ふ事怨敵のごとく、父の利休をも亡はゞやとつねぐ〵妬み思召つるに、今度殿下の御心に留り召出されぬると聞給ひて、三條殿妬心日頃に百倍し、「餘の女ならんには幾百人召るゝとも更に妬むべき心なし、利休が女一人のみ、我身死しても召させまじ」と政所へ申含め、同志の人と申合せ、殿下の歸國を待給ふ。又淀君の御方は、利休が娘に御惡しみはなけれども、御側近く召出され、御寵愛も蒙らば、黑百合の謀計殿下の御耳に入りもやせん、重て召させ給ふものならば、支へて止め奉らんと、是も松の丸の君と密に仰合されける。同年八月、東國悉く平ぎ、秀吉公凱歌を唱へ、九月のはじめ京都に入らせ給ひぬれども、諸國の政事閙しく、國を分て將士に與へ、功を賞し惡を罰し、其月も端なく暮果て、十月二日、東國の急使著到し、奥州の住人修理亮政實謀叛し、木村伊勢守が大崎の城を攻るよし訴へければ、殿下淺野彈正、堀尾帶刀等に命じて軍勢を出さしめ給ふに、南部信直、蒲生氏鄕等、修理亮政實を亡し、奥州平均のよし聞え、淺野、堀尾等兵を引て歸京せり。夫のみならず小田内府信雄卿、再び殿下と牟楯の御事有て、出羽の秋田へ左遷せられ給ひ、何くれと事繁く其年も暮れ、翌れば天正十九年、年の始

恐れ平伏して仰を待つ。近習の士立寄てしか〴〵と申ければ、「千利休が女、百雀屋宗安が妻にて候」と申す。頓て立歸りかくと申上奉れば、殿下手を打せ給ひ、「誠に利休が娘なりけり」とて、夫より黒谷に詣で、所々の花ども御遊覽有て、暮に及んで歸城し給ふ。實に文悪のわざは男女の情なり、さしも姦雄の秀吉公、利休が娘の艶色に心醉るがごとく、過ぎし年政所の御居間にて、蘆屋釜の下責せし事迄おろ〳〵思し出させられ、忘れ兼給ふ餘り、人して彼女が音信を聞せ給ふに、百雀屋宗安は近き頃身まかりて、今は獨住の由聞えければ、女が方へ使を賜はり、宮仕せよかしと強て仰含められけれども、「夫に後れいまだ悲みの涙かわかず、御みやづかへもおほよそならんは結句恐入候」由、かたく辭して從ひ奉らず。此時天正十八年春三月朔日、北條氏政征伐のため小田原へ軍勢を出し、殿下も同八日都を出馬し給ひ、關東へ赴き給へば、何事も其儘に打過ぬ。此頃政所は聚樂の城、淀君は大坂に座しけるが、兼て政所の御方、淀の御方といつとなく黨を結びし奥の女中、三條殿、加賀殿、松の丸殿を始めとし、末々の婢女にいたる迄、京と大坂に引別れ、雙方より間者を入れ、忍の者を入込せ、心裡の戰日々に止ず、其威勢いつも淀君の御方勝に乘れども、政所の御方も又敢て雌伏なし。時に何者か御耳に入れたりけん、政所淀君の兩女將軍とも、殿下の利休が娘を召れたる事どもを詳に聞せ給ひ、政所の君は

ほどに、洛の東には清水寺、地主の櫻、知恩教院、長樂寺、西は御室、嵐山、其外近き渡りの社頭寺院、さらぬ山々も霞ににほふ花の色、さすがに見過し難き風情なるに、豐臣殿下の武威高く響き渡り、六歲七とせが程は都のわたりに干戈の爭ひ止み、此年每の春花の頃は、高き賤しき打群つゝ、あたら櫻に罪課せぬる。今年春二月の末殿下秀吉公南禪寺に詣で給ひ、靈三長老に尋問し、頓て歸城し給ふべきを、山々の花咲亂れたるを、いかでか心なく御覽じすて給ふらんとて、南禪寺より山際の道を黑谷の方へ御車を遣奉る。爰かしこの木の間櫻の蔭に幕引まはし、酒のみ小歌謡ふも興ありげに長閑なりや。爰に年のほど二十七八ばかりと見ゆる女房、遠山をくれなゐの鹿子にくゝりたる被に、白き練貫の上著して、下部に破籠やうのものを持せ、山々の花打詠めつゝ、いと靜に步み來りしに、殿下の先驅に驚き、あわたゞしく花の木陰に立かくれたりしが、いふばかりなく麗しくあてやかなり。殿下も御車の簾押上て詠め給ふに、彼女房袖をもて面を覆ひたりしさま、何とやらん御見知り有る女なりけれど、頓に誰とも思し出給はず、半丁ばかり御車は行過ぎけるに、殿下近習の者を召れ、「前に花の陰に隱れたる女こそ、我見覺有る者なれども、誰やらん忘れたり。何者の妻なるぞ、聞て參り候へ」と仰せければ、畏りて走來り、「殿下の尋問給ふ御事の有るぞ、夫なる女止り候へ」と呼りければ、彼女房大に

そ、家を忘れ妻子を忘るゝの軍陣の出立にあらざれば、一際目覺る心地して、洛中洛外の僧俗男女、近在近國の百姓原、御通行の道に轉び出で、其車馬の音を聞き、羽旄の美を見て、欣々然と相喜び、「庶幾は殿下萬々歳の聖壽を保ち、永く田獵成し給へ」と聲々に祝し奉る。是や民と樂を同じうする聖賢の御則なりけると、目出度かりける有樣なり。其十二月都に歸り給ひけるに、狩獲給へる鳥獸、大となく小となくみな竿にかけ、荷ひつれ〳〵京中を二行にねらせ、秀吉公は御輿に召れ、前後の諸士は歩行して皆手毎に鷹を居ゑ、聚樂の亭に入らせ給ふ。其行粧殊に麗く、主上を始め奉り、皇子、皇女、攝家、淸花、公家、門跡は、棧敷を構へ車をならべ見物し給ふにぞ、京中に集り拜み奉る老若市のごとし。次の日竿にかけ給へる獸をわかち、上は公卿殿上人、下は洛中の町人までに賦與へ給ひければ、目出度御代の例かなと、上下喜びさゞめきぬ。

○殿下被レ召二利休之女一

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふも暮しつ。實にや都の春の長閑き衣更著の中旬過ぎぬる頃より、一重櫻山櫻ほころびて、彌生の末つかた迄、楊貴妃桐が谷なんどの遲櫻爭ひ咲

繪本太閤記　六篇卷之一

○殿下狩二三河吉良一

豐臣關白秀吉公、數年の武德海内に溢れ、國々の人牧和を乞うて臣と稱し、從はざる者は是を討て亡す。其制征のすみやかなる、たとへば水の下に就が如く、沛然として孰かよく是を禁ん。されは毛利、島津、大友、立花、龍造寺、長曾我部、伊達、南部をはじめとして、舊家の諸侯悉く豐臣の旗下に屬し、今年天正十八年、東の方北條氏政滅亡の後は、五畿七道四國九州、名さへも疎き島々浦々に至るまで、草も木も隨ひ靡き、さしも百餘年の戰國、麻を亂せし如き世の中なりしも、忽ち斯く平かなる御代と治りしかば、萬民枕を泰山の安きに置き、豐臣の御世久しかれとぞ祈りける。其年の冬十一月、殿下秀吉公三河の吉良に狩し給ふ。岐阜中納言秀信卿、丹波中納言秀勝卿を召具せられ、御供には福島左衞門太夫正則、片桐市正且元、加藤左馬介嘉明、小早川左衞門督隆景、長曾我部宮内少輔元親、增田右衞門尉長盛等をはじめとし、在京の武士上下六千餘人、思ひ〳〵に綺羅を飾り、白雪を踏で三河國へ赴き給ふ。今日の御出馬こ

繪本太閤記　六篇第一之卷　目錄

殿下狩二三河吉良一
殿下被レ召二利休之女一
利休居士亡命

朝鮮國王李昭呈書豐太閤稱淸正德威其文曰

主計淸正自壬辰年踐境以來不貪利欲不快庸雜爲奉王事實心丈夫之威也眞可謂君子中君子也以壯略武勇觀之則雖良丕信喻何足比肩以克己復禮轉愛寬洪籌之則雖吞蛭割股之仁何能及乎非凡夫庸人員故使山僧釋歳密投其陣祕闞淸正像容移繪絹廟堂營作王城南大門外蓮池岸掛幅位以牲物祭奪生祠王子親祝祭文高官三人司之治事春秋兩等也若疑斯文則馳使點撿亦明垂貴國忠臣名將錄幸甚

朝鮮國臣禮曹司李榮春敬白

肥後國飯田郡中尾發星山本妙寺爲什物每歳秋七月以虫拂之時許拜見

加藤肥後守從四位侍從藤原清正公出陣之像　法諱淨池院殿
永運日乘大居士慶長十六年辛亥六月二十四日卒時年五十歳
上ニ馬藺有如左
加藤主計頭
九本馬藺金鏡板黒文字銀

有四年、天下悉く亂れ、戰國の世と成しを、豐臣の威風海内にあふれ、爰に至つて四海一統に歸し、捨たるを拾はず、行く者は道を讓り、戸ささぬ御代のためしこそ、目出たさかぎりなかりけり。

屬す。秀吉公功有を賞し罪あるを罰し、國を分て諸侯に賜ひ、同年八月、會津を立せ給ひ、道の程所々の古跡風景を御覽ぜられ、漸くにして駿河國清見に著せ給ひ、清見寺の大輝長老へ御詠歌を下し賜ふ。

東夷征伐の爲、天正十八年三月の初つかた都を立ち、行々て駿河國清見寺に至りぬ。彼地の風景言語にも絶え、三保の松、田子の浦の月、富士の根の雪、眼前の眺望誠に其興淺からず、庭山の紅葉がくれの花の色も珍らかに、なにくれとかきもとゞむる事五六日、夫より東の夷を平げ、陸奥迄行巡り、心のごとく國民を從へ、歸るさになりて、八月廿日餘り、又彼寺に著侍りければ、當寺の大輝長老禪刹の正宗を嗣ぎ、凡俗を遁れたる志を感じて、書院の交に召加へて語らんとせる、彌生の見し花の梢など漸々紅葉して、彼能因が霞と倶に出しかとの歌など思ひあはせ、一首を殘し侍る。

清見寺行くてに見つる花のいろの幾程もなく紅葉しにけり

又彼浦の眺望、

名にしおふ田子の浦なみ立かへり又も來て見ん富士の白雪

かくて其所を立せ給ひ、九月の初め都に凱陣ましくける。往昔應仁丁亥の年よりして百二十

氏政五十三歳、氏輝五十一歳なり。三使首を持して秀吉公に呈す。秀吉公御覽じ、是王命に隨はざる者なれば、其罪を糺すべしとて、石田治部少輔三成をして京に送らしめ、一條戻橋にて獄門に梟られたり。爰に韮山を守りし北條美濃守氏規は、先に寄手大軍にて取圍み、外郭一重乘破られけるを、氏規一騎勇を奮ひ、忽ち是を取かへし、嚴く防ぎ戰ひ、今も猶堅固に籠城したりけれど、小田原の城落て、氏政、氏輝自殺のよし聞えければ、今は籠城も詮なしとて、城を開いて出られける。秀吉公氏規が武勇を感じ、七千石を酒茶の料とて賜りける。扨松田左馬介は秀吉公の御惡みを蒙り、父と倶に捕はれて陣中に居たりしが、黑田官兵衛を召れ「あの松田が首を刎よ」と仰ける。官兵衛畏り、聞誤りたる體にもてなし、父の尾張守と兄新六郎兩人が首を刎ね、左馬介を助けにけり。後に此事を申上ぐる者ありて、秀吉公の御憤を蒙るといへども、聞誤りたる由にて、別の仔細もなかりけり。左馬介は前田家に仕へて祿五千石を賜はりぬ。扨北條の一族氏直、氏房を始めとし、妻子從類三十餘人、譜代の臣下五十餘人、倶に高野山へ登らせ給ひ、是等も皆それぞれに祿を賜はり、ねんごろに勞はり給ひぬ。されば關八州悉く靜謐し、大軍を引て奥州に至り給へば、伊達政宗那須野迄出て迎へ奉り、仙臺へ供奉し參らせ、種々饗應なし奉れば、南部、津輕、松前、出羽、秋田の大名小名悉く參上し、謹んで幕下に

悉く赦されければ、氏直大きに喜び、城に歸つて城中の軍勢を放出し、思ひ〳〵に落行しむ。秀吉公頓て脇坂中務太夫保春、片桐市正且元兩人城請取の奉行と成し、萬狼藉の行跡之なきやうにと仰渡されければ、城中上下の男女喜びいさみ、己がさま〴〵出行きける。實に盛者必衰の理、いたましき哉北條左京太輔氏政、きのふは關左八州の大守として、威を鄰國に震ひ、富貴人のうらやみし身の、七月八日、醫師安栖が宅に移り、浮世の日數迫り來て、死を期したるありさまなん、哀れなりし風情なり。時に殿下仰出さるゝは、「吾自ら當國へ出馬せしは、北條一家の非義を正さん爲なれば、氏政以下悉く助けなば、我令天下に行はれまじ。氏政氏輝に切腹させ、氏直兄弟を赦すべし」とて、石川備前守、蒔田權之介、中村式部太夫を檢使として、安栖が家に遣はさる。氏政、氏輝しほ〳〵として出向ひ、謹んで命を待つ。三使既に台命の旨を述んと欲すれども、其形勢のいたはしくて、先言葉を出す者なし。氏政、氏輝その氣色を悟り、沐浴のいとまを乞ひ、兩人辭世の歌を詠じ、心しづかに自害しけるぞ哀なりし事どもなり。

辭世

雨雲のおほへる月も胸の霧もはらひにけりな秋の夕風　左京太輔氏政

天地の淸き中より生れ來て舊の住家にかへるべらなり　陸奥守氏輝

むありさまなれば、攻詰て是を屠ば、城兵必死に成て味方の士卒を損ずべしと思惟し給ひ、羽柴下總守勝雅を使者として城中に至らしめ、氏政、氏直に告て申すやうは、「兩將城を開いて降參あらば、伊豆、相摸兩國を與へて領主と成すべし。叶はぬ合戰を成して、罪なき軍民を殺し候はんは、便なき事に候はずや」と。氏政頓て答て申けるは、「吾久しく關左八州を領せし身の、僅に二國の主たらんよりは、潔く討死すべし」とて、敢て降參の氣色なし。是によつて城中さまざまの雜說發り、誰某こそ敵方に返忠して今宵敵兵を引入るゝよ、渠も逆意をさしはさみ城に火をかけ降參せるなんど口々に罵りて、妻子兄弟の事を思ひ廻らし、此行末はいかゞ有らんと心細く成行て、今ははかばかしく防ぎ戰ふ氣勢もなく、只苦んで見えければ、氏直つらつら此動勢を見て思ふやうは、城中かくのごとく心亂れて外に助の勢もなく、とても運命開きがたし、徒に軍民を殺さんよりは、我先降參して士卒の命を助けばやと、山上鄉右衞門一人召具し、馬に打乘り城を出て、前田利家が陣に來り、しかじかと申入るゝ。利家神妙のよし稱歎有りて、羽柴下總守勝雅を以て殿下へかくと言上す。氏直則ち勝雅に告すは、「某秀吉公の幕下に降參仕る上は、氏政以下城中軍民の命を助け給ふならば、明日城を開いて相渡すべし」と。勝雅急ぎ殿下の御前に出て、氏直が口上を申上ぐる。秀吉公も降參神妙なりとて、則ち願ひの條々

彌由斷なく、互に心を置合て、何となく物騒く、始終怺へつべうも見えざりけり。此時寄手の陣中に太田三樂齋といふ者あり、秀吉公の御前に來り言上せるは、「城中松田尾張守は異心を懐き、味方に返忠すべき體に見え候」と申す。松田が叛心は筒井定次より密に秀吉公へ申上げたるのみにて、寄手の陣中に知る者なし。然るに三樂齋かく申上ぬるを秀吉公怪み給ひ、「汝誰人に聞たるや」と問給ふ。三樂齋答て申やう、「某人の申すを聞たるに非ず、城中をよく〳〵伺ふに、松田が勇謀人の恐るゝ所なるに、此頃敢て軍備を正さず、諸卒をいましめず。渠舊來臆すべき者にあらず、心を味方に通ずる故なり」秀吉公其察知を感じ給ひ、嗟嘆して止ず、前田利家を顧て宣ふは、「今爰に三ッの不思議あり、卿是を知れりや」と。利家答へて、「其一ッは三樂齋が察智なるべし。其餘二ッは解く事能はず」と申さる。秀吉公笑ひ給ひて、「一ッは我匹夫より起りて天下の主たり、不思議にあらずや。今一ッは三樂齋が才智ありて一國だも有つ事を得ざる、是又不思議の事ならずや」と。滿座皆頓首して曰く、「誠に尊命のごとくなり」と。

○小田原落城

天正十八年秋七月、秀吉公はるかに小田原の城中を伺ひ給ふに、上下の兵士退屈し、勞れ苦し

と云ふ。一座の面々謹んで領承す。左馬助涙を浮べて申すやうは、「合戰のならひ、勝負によつては討死せんも知りがたし、御盃を賜はるべし」とて、尾張守が盃を請うて三杯飮乾し、さらば其手配仕るべしとて、座を立て退きけるが、直に氏政の本陣に至り、近く坐して申しけるは、「父にて候尾張守が命を助け某に賜らば、一大事の儀を言上すべし」と云ふ。氏政が曰く、「我舊來汝が忠勇を感ず、況や尾張守は古老の臣下、何ぞ麁略の儀之有らん。汝が乞に任すべし」と云ふ。依之左馬介、父が叛逆の次第を詳に申ければ、氏政手を拍て大きに驚き、「汝は實に忠臣也、穴賢、人に洩す事勿れ」とて左馬介を退しめ、頓て松田と笠原の兩人を本陣へ招きけるに、尾張守父子さらぬ體にて出來れり。氏政則陸奥守氏輝、岡江雪に命じて責て云く、「密に聞く、汝等父子逆意を企て、細川、池田、筒井等が兵を城中に引入れ、氏政氏直を殺んと計る由、敵方より漏聞えたり。信なりや否や」と。尾張守申けるは、「往年武田勝頼兵を構ふる時も敵人流言し、松田父子北條に叛くといひふらせり。然れども某何ぞ逆心を挾まんや。是敵方反間の計なるべき間、審に糺し給へ」といふ。氏輝笑うて、「告る者は敵方のみに非ず、汝が子左馬介既にこれを注進せり。是又反間なりや」松田父子是を聞て、色を變じて言句なし。爰において先力士に命じ、父子を別々に引分け、本丸の側に押込め、數百人の番兵を附て守しめ、城中

今逆意を企て怨を報んと思ふはいかに」といふ。左馬介涙を流し、「悲いかな、父かゝる志の生じたるや。父は北條家累代の元老にして、恩澤を蒙り榮花を極め、關左八州の士に偈仰せられ、威勢の強き事風に嘯く虎のごとく、皆父の背を頂きて顔を解かん事を求む。然るを今恩を忘れ義を失ひ、逆意を起し給はゞ、天下の人指し唾はきして謗り笑はん。假令少しの恨ありとも、義は泰山の如し、一命は鴻毛に等し。忠戰の功を勵まし給はずば、泉下に何の面目有りて忠死したりし朋輩に對面し給はん。冀はくは志を改め、先祖の名を清くし給へ」と、泣涕して諫めければ、流石の父も理に迫り、慙愧して詞もなかりしが、良有りて申けるは、「我固に汝に及ばず、假初ながら不義の詞を出す、後悔かぎりなし。速に自殺せんには如じ」とて、腰刀を拔持ち、切腹と見えたりしを、左馬介驚きて是を止め、且聲をひそめて申けるは、「父必ず心を安んじ給へ。一旦諫め參らせしは理義の的する所、父かく迄志を堅め給ふ上は、子として何ぞ是に背くべき。相倶に計議を爲し、叛逆を企つべし」と云ふ。尾張守大きによろこび、「汝かくの如く同意せる上は、事既に成就せり」と、頓て笠原新六郎及び三男彈三郎、家臣内藤左近太夫、太田肥後守等を集め、相議して申けるは、「此城の傾滅せん事甚だ近きにあり。依て志を秀吉に通じ、明夜細川忠興、池田照政、筒井定次等が兵を城中へ引入れんと欲す。卿等事を誤る事なかれ」

いましめ、其行跡を正しけるに、新六郎己が非をかへりみず、武功に誇り、却て氏政を恨み、往時天正七年の春、武田勝頼に内通し、甲州の軍勢を領内へ引入れんとす。氏政是を知りて大きに怒り、首を刎らるべきに究りしを、父松田尾張守種々歎き、免許の儀を願ひけるに、流石舊功の老臣なれば、無下にもなし難くて、新六郎が領地を減じ、外様のやうにて勤めさせける。其節北條家の功臣笠原某死去し、娘計殘り居ければ、氏政が命として笠原が娘と娶合せ、其家を相續せしむ、故に笠原新六郎と名乘ける。然るに今度の一亂出來し、北條の一族氏房氏直すら降參の評議密々に之有しに、韮山の守將北條美濃守氏規拒んで是を支へたりと聞ければ、つくづく城中の形勢を思ひ廻らすに、外に助の勢もなく、所詮勝利有るべき合戰にあらず、其上氏政には少し恨みもあんなれば、實父尾張守を勸め、敵を城中へ引入れ、秀吉に降參せばやと思ひければ、先此趣を矢文して、寄手の陣中筒井定次が手下松浦左内は少し因有るにより、彼方へ申遣り、頓て父尾張守が陣所に至り、かく〳〵と囁きければ、尾張守も老耄をやしたりけん、又は武運や盡たりけん、遂に笠原が謀計に同じ、父子細々事を約して、笠原は己が陣所に歸りける。跡にて松田尾張守、二男左馬介秀英を呼て申けるは、「近年氏政、氏直父子我を遇するに甚だ以て疎濶なり、殆んど君臣の禮を失ふ。吾是を銜むと雖も、いまだ色にも顯はさず。

りに非ず、各其主人の爲にする故なり」と云ひ送りけるに、氏房殆ど其志を感じ、江川酒五斗を秀家に送つて是を謝す。其後屢使を通じ、秀家氏房に面談せんと乞ふ。氏房も今は心解て、終に城を出て對面す。時に秀家申けるは、「願はくは貴君よく計て和議を調へ、合戰を止めて後、京都にて貴君を饗し、具足を脱ぎ兜を解き、肩衣袴にて好會をなさば、豈に樂しからずや」と、氏房も之に同心し、城に歸つて氏直に對して說ていふ、「今此城の敗亡指を屈めて其期を待つのみ。いかでか敵の大軍を追退る時有らんや。如じ浮田秀家に仍て此城を秀吉に附與し、城兵等が命を全うせんはいかに」と云ふ。氏直只忙然として答ふる所をしらず、密に使を馳て韮山の城に籠たる北條美濃守氏規に問ふ。氏規大きに怒て曰く、「是皆秀吉が謀にて氏房を欺きたるなり。今和を乞うて城を敵に渡すほどならば、始より戰はずして降參せんこそ秀吉の存分なるべし。敵を引請け籠城する上は、此城を以て葬の地と成すべし。面々云甲斐なく擒と成り、見苦しき死を成す事なかれ」と、かたく是を制しければ、暫く降參の評議も止みて、只鬱々と暮しける。爰に小田原の城中に笠原新六郎亮致といふ者あり。渠が實父は北條家累代の忠臣、關八州の軍民悉く敬し隨ふ松田尾張守秀亮と云ふ勇武の士なり。此新六郎は松田が長子にして、剛勇無雙の若者なれども、酒色に溺れ博奕をこのみ、放蕩不賴の者なりければ、氏政屢是を

○小田原城中之諸將叛心

去程に秀吉公數月の對陣、味方の將士退屈の色あるを見て、諸將を集め其心を試みんと、「軍をかへして歸洛すべきや」と尋ね給ふに、小早川隆景進み出て申されけるは、「今師を返し給ふ時は、氏政勢ひを得て、再び圍む時守禦の備へ彌かたく成り、征伐せん事難かるべし。謀計を以て攻め陷さんには如じ」と諫めけるに、殿下元來其心なれば、隆景が計議理にあたれりと稱じ給ひ、扨諸軍に令して二十餘萬騎を三手にわかち、一手を以て城に對し陣營をつらね、家々の旗さし物夥しく風になびかせ、軍備嚴に是を守り、又敢て戰をまじへず。間暇を示し鎧を脱ぎ、兜を枕として晝寢せるもあり、酒をのみ小歌を諷ひ、遊びうかれ居たりしかば、城中大に氣を屈し、忍び難くぞ見えにける。此時浮田宰相秀家の攻口は、岩槻の城主なりし北條十郎氏房が持口なりけるに、秀家城中へ矢留を請ひて、使者を以て奈良酒三荷、生鯛十尾を贈て申けるは、「貴君久しく籠城守衞の勤勞察入て候なり。今送る所の酒肴を以て士卒の勞を慰め給はん事を願ふのみ。實に貴君の守計いにしへの良將にも愧づべからず。今日かく好みを通ずるとも、明日攻擊を交ん時、鄙生を斬んは貴君ならん。貴君を殺さん者は某なるべし。是私の憤

詰の丸を守衛せしめ、其身は小田原へ籠城せり。此岩槻の城を取圍みたる寄手の大將は、淺野彈正長政、木村常陸介、筒井伊賀守定次等一萬餘騎、息をも繼せず攻たりしが、守將妹尾、片岡突出して挑み戰ひ、目に餘る大勢をさんぐ〳〵に突開き、力戰するといへども、多勢に敵し難く、兩人ともに討死し、本丸の大將伊達與兵衛力盡て降參し、岩槻の城も落ちたりける。小田原の城中、八王子、岩槻の陷りしを聞き、士卒恐怖の心なきにあらず。されども寄手俄にも攻よらず、折々足輕を出し、矢軍のみに日を重ねければ、城中心ならずも怺へける。寄手の內に北國の兵士の強弓の精兵あり。城兵其矢に中り死傷する者甚多し。「實に傳へ聞く鎭西八郎爲朝、能登守敎經も此弓勢にはよも勝らじ。とてもの事に其面を見たし、今一矢」とぞ罵りける。秀吉聞しめされ、「さらば射よ」とて其武者を出されけるに、小高き岳の上に立顯れ、大弓大矢束引しぼりたる所に、城中に嗚呼の者ありて、塀の銃眼より二ッ玉込し鐵炮にてねらひすまし、敢なくも打殺せり。秀吉公大に激怒給ひ、「此城中の奴原は軍の法を知らざるや」と、射書を以て責給へば、元來大將氏政は此事を曾てしらず、彼鐵炮を放ちたる者をめして其非義をいましめ、首を切て秀吉公の陣へ送られける。

山中山城守殿

山城守急ぎ此返書を秀吉公に呈し奉れば、殿下大に悦び給ひ、織田信雄をめして仰けるは、「足下此成田が書翰を氏直が方へ遣し、申さるべきは、關左八州の諸城みな志を秀吉に通ぜずといふ事なし、小田原の城終に全き事得べからず、氏直早く秀吉に降參して、家門の無事を計るべし、といひ送らば、城中疑惑して動搖すべし」と。信雄畏り、右の口上を以て彼成田が書狀を氏直に遣はす。果して城中大きに騷ぎ、群疑泉のごとく涌き、浮說雲の如く起る。是に依て惣大將北條氏政人を成田が陣に遣し、「評議すべき軍事有レ之間、本陣へ來るべし」と三度迄呼ぶと雖も、成田病と稱して來らず。氏政醫師安栖を使として申遣しけるは、「足下二心を懷くの由密に聞きたり。然れども其信否をしらず。故に屢使を以て招き、其實を糺んと欲すれども、終に來らざるは何事ぞや」と。成田答て云く、「敵大軍を以て某が居城忍の城を取圍み、落城既に旦夕にあり。城中の妻子及び上下の士卒、悉く命を失はん事の不便に候へば、山中山城守に寄て秀吉へ降を乞たるにて候。此外に申入るべき事無レ之候」と申す。氏政聞て大きに怒り、山上鄕右衛門を以て八千餘人の軍兵を遣し、成田が陣を警固せしむ。爰に武州岩槻の城は北條十郎氏房が居城なりしが、伊達與兵衛尉を以て本丸を守らしめ、妹尾下總守、片岡源太左衛門等に

相親しき由をきけり。試に書を贈て我に降參を進めよ」と仰せければ、山中畏つて我陣へ歸り、書牒をしたゝめ成田に送る。其文に曰く、

捧一封伸寸志候。僕年々溫問に預り候事、甚以恐悅之至り甚深に候。就中關八州氏政家人の城々七八ケ所、或は落城に及び或は降人に成り畢ぬ。然ば貴所領地忍の城も、只今大軍之を擊ち、落敗卽に旦暮に不可過候。誠に先祖之家業絕不絕、昌不昌は貴所之可有寸慮候。秀吉の御前拙者宜敷執成可申之條、麁意無之候。急々被變意趣候條尤に候。恐惶謹言。

六月二十日　山中山城守

成田下總守殿

かくのごとくしたゝめ、忍び使を以て成田に遣しければ、成田忽降參の志を生じ、返書を書て山中に與ふ、其文に曰く、

御內章之趣忝次第、難盡紙上候。御前體宜敷賴入之外無他事候。委細任御使者口上之條止筆候。恐惶謹言。

六月二十日　成田下總守

る者かな。今城陷り主將討死の時に至りて、いかでか遁れ去り申べき。只々一所に討死とこそ相究めて候」と申ければ、中山狩野大きに喜び、さらば三津瀨川を俱に渡るべしと、得物を取つて待つ所に、景勝、利家が軍兵蟻の如く群り、中の丸を乘取んとす。中山狩野敢て懼れず。かけ並べたる弓鐵炮を一同にどつと打放せば、隍際の寄手二百餘人ひし〳〵と討倒され、ひるみて跡へしざりける。然るに本丸の主將横地監物、先刻よりの合戰に震ひ恐れ、一支もせで城を棄て落失せたり。中山狩野今は是迄なりと、三百餘人の殘兵を前後に備へ、叢雲立たる寄手の中へおつと喚て突て入り、竪横に薙立て十文字に切巡り、勇を振うて惡戰し、味方の兵士悉く討死し、殘る者纔に十餘人、城中へ引入りて自害して死たりける。景勝、利家の兩將城中に入りて休足し、中山、狩野、近藤等が首を本陣へ持せ遣し、軍の次第詳に言上しければ、秀吉公大に感じ給ひ、彌軍忠を抽づべしとて、感狀馬太刀を兩將に下し賜ふ。

○山中山城守書送二成田下總守一

秀吉公小田原に御在陣、二月より六月に至れども、城内堅固に守て落城の氣色なし。秀吉公、山中山城守を召れて仰せ出さるゝは、「忍の城主成田下總守、今小田原の城中に籠れり。汝日來

が思召されけん、利家、景勝等が軍忠を賞美し給はず。諸將且恨み且疑ひて御前を退く。秀吉公近士に向ひて宣ふは、「利家、景勝數城を降し功なきに非ず。然れども數多の城々悉く其降を肯け、武勇の沙汰に及ばず。何處にてもあれ一城は屠り盡し、守兵等を撫切になさば、一宥一威の法我深く是を賞すべし」と仰せけるを、利家、景勝密に是を聞き、あはれ此後の城攻には、城中の軍民一人も生置まじと、拳を撫て待居たり。爰に八王子の城といへるあり。城主は北條陸奥守氏輝、これも其身は小田原へ籠城して、本城は横地監物に守らせ、中山勘解由、狩野一庵に二の丸を固めさせ、山下の陣は近藤出羽介に守らしむ。前田、上杉等の勇將此八王子の城を抜べしとて、降將大道寺駿河守、難波田、木呂子、金子等を先手に進ませ、八王子へ押寄たり。守る大將近藤出羽介物の具取りて投かけ、城戸を開いて眞先に驅出で、さんぐ\に戰ひけれど、寄手多勢にて取圍み、餘さじと揉だりけるに、城兵多く討れ、近藤も亂軍の中に切死を成したりけり。是によつて城中亂れ騒ぎ、落行く者數を知らず。寄手の大將前田、上杉は勢に乘じて惣構を乘落し、喚き叫で攻立けり。中山勘解由、狩野一庵落殘りたる兵士三百餘人を集め申けるは、「我々は主人陸奥守が恩に浴する事舊し。今大敵來り侵す、是討死の期來れり。汝等遁れんといふ者は心次第に落行べし。更に恨とは思ふまじ」時に衆軍皆是を聞て、「口惜き事を承

繪本太閤記　五篇卷之十二

○八王子落城

爰に北國の大名前田利家父子、上杉彈正少弼景勝、毛利河内守秀頼、眞田源吾等其勢三萬五千餘騎、越後路を經て上野國松枝の城に攻掛る。城を守る大將は、北條家幕下の勇士大道寺駿河守、同子息新四郎、六千餘騎にて立籠り、敵寄來らば突出て挑み戰はんと覺悟して有りけるに、敵の大軍にや恐れけん、敢て討出る兵士もなく、固く城を守りて防ぎける。景勝利家等四方を取まき、晝夜の分ちもなく新手を入替攻立れば、大道寺父子叶ふまじく思ひければ、城を開き降參す。北國勢降を許して人質を取堅め、夫より直に松山の城に攻寄する。松山の城主上田上野介は小田原の城に籠り、家臣難波田因幡守、木呂子丹波守、金子紀伊守、山田伊賀守等四人に此城を守らせける。利家、景勝短兵急に攻擊てば、城中怺へ難く、是も城を渡して降人に成りぬ。前田、上杉破竹の勢ひにて大に進み、箕輪の城、厩橋の城、河越の城、鉢形の城ども悉くかうさんし、數箇所の降人二萬餘人を引具し小田原に參陣し、秀吉公に拜謁す。秀吉公いか

繪本太閤記 五篇第十二之卷 目錄

八王子落城
山中山城守書送二成田下總守一
小田原城中諸將叛心
小田原落城

めて宴を催し、年若き青女房二十人計に酌を取せ、小歌など謳ひ出て、長陣の勞をも少しは忘れたる有樣なり。殿下是を見給ひ、女ども立ちて踊れよ〳〵とて、自ら手を叩てはやし給ひ、金箔押たる扇を面々に與へ給ふに、頓て打ふりて踊る程こそあれ、一座中きらめき渡り、興に入る事限りなし。前波半入と云ふ者扇をかざし聲をかしく、「どんとろ〳〵とろゝなる釜もとろゝなる釜も湯がたぎり〳〵」とおしかへして謳ひければ、大將を始め參らせ、滿座の將士絕倒し、軍中の愁を失れけり。

はず、秀吉公の大器、天威の然らしむる所、世の人の及ふべきにあらず。時に政宗首尾よく暇を賜り、拜して奥州へ歸りける。是を見て諸將又相議して申けるは、「政宗を早く國に歸し給ふは、虎を山に放つが如し。彼必冦をなさん」と。殿下此事を聞召され、「政宗我に背かば、隨つて誅伐せんに何の恐かこれ有らん」と宣ひければ、諸將皆頓首して退きけり。

○小田原之陣中早歌

小田原對陣、城中堅く守つて出合はざれば、寄手も急に施こすべきの略もなく、五月の中旬に成りにける。此頃上方の軍中誰となく風聞しけるは、内府信雄小田原の城中と内通ありて裏切せらるべき體なりと、陣々ひそめきて沙汰しけるに、秀吉公小姓四五人召連れ給ひ、信雄の陣に來り、酒飲み物語し心よく遊び給ひ、暮に及んで本陣に歸らせ給へば、陣中の風説も止て、諸軍安堵してしづまりぬ。實に名將の行跡哉と、こぞつて是を諷しける。折しも五月雨日をかさねて小止なく降し程に、合戰も暫く止り、寄手の陣中何となう物淋しく、舊里の事も思ひ出らるゝ氣色なりければ、秀吉公陣々へ酒肴を賜ひ、早歌を諷ひ又は踊り、己がさまぐ\興ぜさせ給ひ、本陣には橋立の壺玉堂の茶入を飾り、由已法橋、千利休などに茶を點ぜしめ、諸將を集

來るまじ。氏政此頃諸壘陷り、小田原落城も又旦暮に有りと聞て、始て我幕下たらんと望む事、其意を得ず。然りといへども其過りを悔いて、前々より侵しかすむる地、會津および仙道を悉く還し、米澤三十餘萬石を領し、我旗下たらば是を免ん。然らずんば早く國へ歸つて合戰の用意をなせよ。汝が會津に著ん頃には北條を擊滅し、直に馬を汝が國に進ん。いかにやいかに」と責給ふ。政宗謹んで答へけるは、「某匹夫と成りて爰に詣づ、死生と雖も台命に任せ奉る。然るを況や郡邑において、いかでか違背仕るべき。速に會津仙道の地差上げ奉らん」由申されければ、秀吉公莞爾として、「此上は仔細これなし。明日對面を赦すべし」と宣へば、政宗畏つて恩を謝す。翌朝殿下孔雀織の陣羽織を召れ、牀几に尻をかけて禮を受させ給ふ。政宗謹んで拜謁し、退んとしける時、殿下聲をかけ、「政宗遙々の來著、馳走に我陣營を見せん。後の山へ登るべし」とて、先に立て步み給へば、政宗跡に隨ひて山に上る。秀吉公宣ふは、「汝奥州の田舍に生立ち、小迫合のみ見馴たれども、未だ大合戰の人衆配りは見るべからず。此處の營は此理なり、彼所の陣はかゝる備なり。見置きて後の手本にせよ」と、一々にさし敎へ給ふ。此時殿下政宗に刀を持せ、童只一人を召連れられたり。片岸に立て終に後を省ず。實に奥州の大守强家の政宗を蠢蟲とも思召れぬ形體に、政宗は只恐れ入り、はつ〳〵と申計にて、敢て御面を見奉る事能

けるに、堀左衛門督秀政人を伊豆相模駿河遠江へ遣し、牛を多く買取しめ、兵粮を車に積み牛に牽せて運ぶ程に、士卒勞せず運送甚自由なり。是によつて諸國の大名面々、牛を求めて粮道の煩ひを免れにけり。秀吉公も堀が才智を稱美まし〱、馬太刀等を下し賜ふ。又或夜風雨烈しく、天地ともに暗かりしかば、堀秀政左右の近士に向ひ、「今宵は必ず盗人の來るべきに、我士卒の馬鞍兵粮を盗人に取れんよりは、我自怠りを伺ひて取べし」といへり。士卒此言を聞て寢者なし。其夜三度迄陣中を見廻りける程に、他の陣は多く盗に課ども、秀政が陣には盗人曾て入る事能はず。是も秀吉公の御聞に達し、數々褒賞を賜りける。堀が行跡賢かりし事共なり。

時に奧州の大守伊達左京太夫政宗、秀吉公の威風に服し、遙々奧州を立て越後を經、甲斐を過ぎ箱根に至り、秀吉公の幕下に屬せんと乞ふ。此時上方の諸將皆心に思ひけるは、氏政を亡さん事は難きにあらず、小田原陷つて後は必ず奧州の征伐なるべし、奧羽は國遠く兵多く、容易く征し難かるべしと兼て思ひ煩ひしに、不圖も政宗軍門に來りて幕下たらんと望しかば、こは目出度き御事哉と、悅んで秀吉公にかくと申上ければ、秀吉公思ひの外に政宗が遲參を怒り、人を以て政宗を責め給ふは、「上杉景勝、佐竹義重等、先達て皆聘使を馳て我軍勞を訪ふ。然るに政宗一人遲參せし胸中を商量に、我と氏政との兵勢を覘ひ、我軍敗退の色あらば、今日此所へは

ひ、逞兵五百餘人前後に引具し、中村田中堀尾が勢をまつしぐらに切開き、二三度計追崩し、五十八歳にて終に討死したりける。首は中村が勇臣一色賴母これを獲たり。間宮、朝倉も討死せんと勇みしかども、小田原の城心元なく、一先爰を引取り、主人と生死を倶にせんと、小田原さして落行ける。是によつて山中の城終に落著し、渡邊が一手へ打取る首百四十餘、中村が手に二百餘級、殿下の實檢に備へければ、秀吉公感悅少なからず。當手第一の高名なりとて感狀を賜りける。

○伊達政宗參二小田原一

同四月、秀吉公大軍を進め、湯本の眞覺寺に本陣を居られ、四方の松山に石垣を築き、高壁を構へ、長陣の備をなし、軍勢を分ちて宮城口、湯本口、竹浦口等の枝城を攻させ給ふに、寄手悉く討勝ち、三城ともに屠破る。北條の守兵狼狽騷ぎ、小田原の城へ迯入れば、小田原の城中彌〻防戰の用意をなし、必死と定めて籠城す。秀吉公直に進んで小田原の城を十重廿重に取圍み、晝夜間なく入替へ〳〵攻め給へど、城中堅く防ぎ戰ひ、いつ果べきとも見えざりける。此時秀吉公の軍中糧を運ぶ事日毎に夥しかりけるに、箱根の嶮路運送に勞れ惱み、軍卒迷惑したり

れ、三宅には金錢を多く賜り、秀勝には和州當麻の鎗竝に黄金十兩を下されける。北條氏勝は思ふ程に戰ひ、輕く引上げて城に籠れば、寄手附入にせんと、揉立れど、城中より弓鐵炮を雨の如くに飛しければ、面も向べきやうなくて、其日の軍は止みにけり。其夜雨車軸を流して降來り、大風林を倒し物騷しかりけるに、寄手中村式部少輔一氏が家臣に渡邊勘兵衛尉一雄とて、智謀勇猛の者有りけるが、あはれ此風雨を便に城中へ忍び入り、一番乘の高名をなさばやと思ひ、日頃好める鳥毛に半月の大指物を隱持ち、只一人山を登り塀を越て三の曲輪に忍び入り、夜の曉雨も小止みたる時、かの大指物を押立て思ひがけなく切てかゝれば、城兵ども大きに驚き、「盜賊ならん討取れ」と、十五六騎鎗を取て突來しを、勘兵衛眼に角を立て、「此城の一番乘、中村式部少輔が家人渡邊勘兵衛一雄とは我なり」と大音に呼はつて、寄來る雜兵十人餘り手の下に突伏たり。城中是を見て大きに騷ぎ、渡邊一人とは思ひもよらず、敵の大勢城中に紛れ入りたるぞと狼狽て、二の郭迄引入たり。寄手の陣中渡邊が此有樣を知たりけん、中村堀尾が軍勢二百騎ばかり、噇と喚いて乘入り〳〵、勘兵衛に力を合せさん〴〵に薙立れば、討るゝ者數を知らず、上を下へと騷動す。城將北條左衛門氏勝、間宮朝倉等、士卒を下知し本丸より突て出で、火を散して戰へ共、寄手の惣軍四萬餘人、八方より乘込みさん〴〵に攻立ければ、氏勝今は是迄なりと思

田中兵部太夫吉政、堀尾帶刀先生吉晴、一柳伊豆守等、其勢四萬七千餘人、山中の城を攻さしむ。山中の城將松田右京太夫、北條左衛門太夫、間宮豐前守、朝倉能登守、目に餘る大軍を事ともせず、大手の城門をさつとひらき、北條左衛門太夫氏勝三千餘人一文字に切て出で、寄手の大軍を追つ返しつ、時を作つていどみ戰ふ。爰に氏勝が從士に渡瀨小次郎介と名乘り、只一騎眞先に進み出で、茜染の袖なし羽織を著、金の切割の幣を腰にさし、其上に白母衣をかけ、直鑓横たへ、寄來る敵三騎突落し、彌勇んで馳來る。寄手の方少將秀勝の家士三宅平太夫、黒絲縅の鎧を著し、小田原はちの星鉀に風車の立物して、衆を抽んで小次郎介を目がけ飛かゝつて坂中にて渡り合ひ、互に詞をかけ、祕術を盡して戰ひしが、目ざましかりし行勢なり。三宅が武藝や勝りけん、一鑓に小次郎介を突殺し、短刀を拔て首を搔き、味方の陣へ半丁計は引けるが、母衣を添て取らざるこそ後迄の恥辱なりと、取てかへして母衣をも得て退きける。見る者其勇壯を感歎す。三宅此時二十三歲、秀勝の前に首を持參し、事のやうを申ける。秀勝大に喜び、一番鎗といひ物頭の首といひ、尤比類なき高名哉と讃美せられ、秀吉公の本陣へ申遣はされければ、市橋下總守是を披露す。秀吉公聞召され、頓て首帳に記させ給ふに、秀勝が手には一番首、惣軍にては三番と記す。されども物頭の首に母衣を添て取たるは是始なりと、秀吉公も感じ思召

石巻、富永等の一族及び七州の軍兵四萬八千餘人小田原の城に楯籠り、隍を深くし塀を高くなし、四方一里の大城に弓鐵炮をひしと構へ、兵粮玉藥數多貯へ、寄手遲しと待かけたり。又箱根山には壬生上總守、千葉新助、原式部太夫等七千餘人、嶮岨に飛道具透間なく構へ、嚴重に構へたれば、上方の軍勢翼の生たらんはいざしらず、此切所を何者が越べきと由斷して有りけるに、寄手の大軍二十餘萬騎、鬨の聲山岳を動し大地に轟き、勢ひに乘て攻上る程こそあれ、早雄の若武者、峯をつたひ谷を飛越し、道もなき嶮岨を無二無三にかけ上り、難なく敵の後へ馳出で、鬨を作つて前後より攻立ければ、東國勢案に相違し、一支へもせず小田原さして迯たりしは、此合戰北條の行末思ひ計られて、たのみすくなく見えにけり。

○山中城落敗

去程に上方勢箱根の固めを一息に打崩し、勢猛に押寄せけるが、秀吉公頓て令を下し給ひ、先所々に構へたる枝城を攻落し、小田原を裸城になして押潰すべしとて、織田内府信雄公を大將とし、蜂須賀小六郎、福島左衛門太夫、細河千八郎、蒲生飛彈守、中河主馬太夫、森右近太夫等四萬餘人、韮山の城を圍しめ、又近江中納言秀次卿を大將とし、次丸秀勝、中村式部少輔一氏、

防戰の用意をなし、諸士を分ちて城々を守らしむ。先山中の城は松田右京太夫兼てより之を守れども、上方勢相支るの最初なればとて、北條左衞門太夫氏勝、間宮豐前守好高、朝倉能登守を山中の城へ籠らせ、松田が副將と成す。其時氏政三人を招き、太刀一腰づつ是を引せ、且三臣に向ひ申けるは、「各當家において數年累功の勇士なれば、今度大事の籠城を任すべきなり。各粉骨碎身して、隨分と戰功を勵まるべし」と申ければ、間宮豐前守進み出て、「君必ず心を勞し給ふ事有る可らず。若戰急迫に至らば、我一番に討死し、君恩を報じ奉ん」と云ふ。一座の諸勇士其勇を賞嘆す。朝倉能登守退て人に告ていふ、「北條家の滅亡も早遠きにあらじ。山中の城は要害甚だ疎にして、大兵に當り防ぐべからず。今氏政舊臣四人を以て守らしむるは、則此臣を棄殺すなり。氏勝、好高討死せば、我何ぞ獨り生んや。嗚呼悼い哉」と歎ぜしが、果して北條家亡びにけり。扨氏政の弟北條美濃守氏矩をして韮山の城を守らせ、武州岩槻の城は北條安房守氏房が居城なれども、氏房は小田原に籠城し、伊達與兵衞、妹尾下總守、片桐源太左衞門等に岩槻は守らせけり。其外伊豆、相模、武藏、上野、下野、上總、下總、七ヶ國の城々に勇名の將士を籠置き、小田原の後詰となし、惣大將北條氏政は子息氏直、氏輝等を始として、古河左馬頭、皆川山城守、其外、松田、大道寺、芳賀、笠原、福島、遠山、山角、鈴木、淸水、狩野、

給ふ。里の長謹んで「此宿より五十餘町に鎭座し給ふ」と申す。秀吉公卽駕を廻して詣で給ふ。是は日本武尊を祭る社なれば、東夷征伐の時なれば、尋て詣で給ひけり。沼津驛に宿し給ふ時、小早川隆景の從兵河田八助、猶崎十兵衛とて大力の譽れ高き者あり、八助は大指物、十兵衛は十八反の母衣をかけて通りけるに、秀吉公遙に御覽じ、使番を以てその姓名を問せらる。使番則命を承り、彼武者の傍近く乘附け、馬上より大音にて、「殿下の仰せにて候。各姓名を名乘られ候へ」と申す。河田、猶崎の二士、顧て返答もなく打過る。使番力なく、馳かへりて斯くと言上す。秀吉公「汝下馬せずして名乘れと申たるならん。凡御敎書など帶するか、兩陣合戰の勝負にかゝる折には、神佛の前にても下馬せぬ作法なれども、今日の如きは然にあらず。人に勝れたる大指物をさし、普通に越えたる母衣をかけし士に、下馬なきは汝が無禮なり。返答せぬも理なり」とて、餘人を以て下馬して問せられければ、河田猶崎も等しく馬より下り、謹んで姓名を申す。實に勇武のふるまひなりと、諸人こぞつて感じけり。後朝鮮征伐の節、彼國の者此母衣指物を見て、目を驚かしけるとなん。秀吉公程なく伊豆國三島に著き給へば、先手の諸將我も〳〵と花やかに出立ち、出向ひて御著陣の慶賀を申す。實に美々しかりけるありさまなり。時に北條左京太夫氏政、秀吉公かばかり早く發向し給はんとは思ひよらざりければ、急ぎ

にや、激浪止んで恙なかりしも、ふしぎなりし事どもなり。

○秀吉公大軍攻二小田原一

天正十八年三月朔日、豊臣秀吉公、北條氏政、氏直を誅伐せられんとて、大和大納言秀長公、近江中納言秀次卿を大將とし、五畿内、南海、山陰、山陽、四國、九州、北陸の軍勢凡二十二萬餘騎、外に勢尾二州の勢二萬五千餘騎は、内大臣信雄卿引率して隨ひ給ひ、先陣既に富士の根方由井、神原の邊に充滿せしかば、後陣はいまだ尾張、美濃に控へたり。毛利右馬頭輝元は、四萬餘騎にて聚樂の城の留主とし、禁裡を守護し、洛中外の非常を糺さる。小早川左衞門尉隆景は、二萬餘人を引率し、殿下の御供して小田原へ向はれける。秀吉公は三月八日、京都を立ちて後陣に續き給ふ。此出陣の行粧、華美なる事目を驚しぬ。秀吉公其折からの出立には、緋緘の鎧に龍頭の兜を著し、髭黒く作り給ひて、黃金作りの太刀さしぞへ、若やかに物し給へば、近習小姓馬廻りの勇士悉く異形に出立ち、千生瓢簞の大馬印春風に飜り、しづ〳〵と押出し給へば、洛中洛外はいふに及ず、奈良堺伏見大坂より此出陣を見物せんとて、京中は貴賤立こみ、錐を立べき開地もなし。駿河の府中に著し給ひ、里人を召れ、「草薙の宮は何處に有るや」と尋

なり。

關白秀吉　　龍宮殿

斯遊ばされて船頭に與へ給へば、船頭ども大に驚き「扨は關白樣は龍宮とは御一族にてましますかや。是はけしからぬ御事哉」と私言けれど、台命今は免れ難く、よしや御前崎にて難風にあひ、船もろともに底の藻屑と成るとても、殿下の仰は背き難しと、船よそほひをなしけるが、又楫取の申けるは、「今秀吉公の御威光は空に輝せる日輪のごとし、何ものか是に刃向はん。殿下の御狀これ有る上は、海上の難有まじ」といふもあり。衆口まち〳〵にして既に纜を解き、數多の船ども順風に帆を卷て遠州灘を走る。時に不思議なる哉、俄に風雨雷電して、白日忽ち黑雲に覆はれ、洪波船を傾んとす。水主楫取肝を飛し、「すはこそ龍神の御祟りよ、彼殿下より賜りし御狀を爰にて慥に届けよ」と、逆卷く浪へ彼の一通を投込めば、風雨忽靜まり、波浪穩に成りて、船ども恙なく三島の津へぞ著にける。是偶然成るべしとは雖も、此類の事愚民等の惑ひより言傳へ、其理なき事甚だ多し。秀吉公生質明敏の大將なれば、愚昧なる船頭どもが心を安んぜんが爲に、此文書を與へ給ふ。然るに災殃は氣を以てこれを向へ、自らまねく理

傾きたるにや、驚く色なく、只馬耳風蛙頭水のごとく聞流して居たりける。是によつて彌北條家誅伐の議に決定し、十二月の初め諸國の大名へ檄を飛して軍兵を催促し、長束大藏太輔を兵粮奉行に定め給ひ、御領地において米二十萬石年内に取集め、船に積て駿河の江尻淸水に漕附け、惣軍勢へ配分せしむべし、又黃金一萬數を以て伊勢尾張三河遠江駿河五ヶ國の粮米を買ひ、小田原近邊に備へ置き、且馬船六百艘伊豆の三島へ廻すべき旨御下知有り。奉行長束大藏太輔此旨きびしく申渡し、怠る者は是を制し、勤る者は悉く賞を與へ、日限延引是なきやうにと、更に由斷はなかりけり。時に馬船の船頭、奉行迄願ひけるは、「遠州御前崎はいにしへより船中にて馬の事を物語り候も忌嫌ひ候事にて、馬道具にても船に積不レ申候。若誤つて馬の皮にて製へたる器にても船中にこれ有る時は、忽龍神の怒りを蒙り、其船破損いたす事度々にて候。されば此度の馬船は停止仰附られ、陸にて御下し是有るべきや」と申けるに、頓て殿下へかくと申上る。秀吉公かの船頭を近く召れ、「汝等馬船の破船せん事を恐るゝよし、吾自ら牒を書て龍宮へ賴み遣し、風波の難これなき樣に取計ふべし。少も心を用ひずしてはや〳〵船を彼地へ廻すべし」とて、筆を取て認め給ふ。其狀に曰く、

今度北條追伐に附て、吾馬船を相州三島の津へ赴かしめんとす。海上難なく通さるべき者

勢を催し、誅伐あらせられ候へかし」と、詞を揃へて申上る。秀吉公打笑ひ給ひ、「氏政が心底我よく是を知れり。兎角に事よせ上洛を延引させ、其間に要害を構へ合戰の用意をなし、我に敵對せんが爲なり。我是をしるといへども、渠が申すに任せ、所領安堵のゆるし文をも遣し、其後にも上洛せずば、諸國の大名悉く其不義を怒り、我命を待ずして氏政を伐んと請べし。其勢に乘じ大軍を以て是を討んに、北條一家何を以て全き事を得んや。踏崩し粉のごとく成ん事我掌の内にあり、汝等怪しむ事なかれ」と仰せければ、兩人平伏して其廣量を感じける。扨御教書小田原に著しければ、氏政是を見て大に笑ひ、「秀吉が才智張良孔明にも勝りたりと聞しが、もろくも我には謀られけり。先相州の地たるや、前に箱根の天嶮あり、味方逞卒よく此嶮岨を守らば、秀吉いかに大軍にて向ふとも、豈是を恐るゝ事有らんや。其上路程百里、何ぞ速に此地に入る事を得ん。兎角して年月を超なん内には、思ひ設けぬ幸も有るべし。昔平將軍維盛、數萬の軍兵を起して東國に向ひたりしも、水鳥の羽音に驚き、戰はずして逃歸れり。秀吉も又其如くなるべし。若此國へ攻來らば、軍卒を鏖しにし、秀吉を虜にせんは難きに非ず」と申ける。去程に秀吉公は、北條が上洛せざるを憤り給ひ、十一月廿四日、奉書を氏直に遣されし、五ヶ條の編目をあげて科を戒め罪を糺し給ふといへども、北條家事ともせず、又は武運の

秀吉公甚歡び給ひ、饗應萬端懇情を盡し、且「氏政氏直後より直に上洛し、天子を拜し我に謁見せしむべし」と仰渡されけるに、氏矩謹んで是を領承し、「某歸國致し候て、氏政父子參勤遂ぐべき」旨申上げ、頓て御暇賜はり、本國へこそ歸りける。

○秀吉公馬船渡二小田原一

秋暮て冬も中旬に成りけれども、氏政父子上洛せず。殿下甚だ怒り給ひ、富田左近將監、津田隼人兩人を小田原へ遣し、上洛延引の罪を責糺し給ふ。此時氏政は防戰の用意未全く備らざりければ、僞て申すやうは、「氏政數代武功を以て關東七ヶ國を領し候へ共、又敢て王命を蔑如にせず。天下の爲に害をなす事なし。依て今殿下の命を叛き上洛せざるには有らざれども、只領國を削り召上給はん事を愁ふるのみ。若東國七ヶ國安堵の御教書を下し給ふ物ならば、早速上洛仕り、御幕下に屬し申べし」といふ。是によつて富田津田の兩人、上國して此趣を秀吉公に言上す。秀吉公點頭きて直に御教書を作り、北條に賜らんとす。前田玄以淺野彈正諫めて申じけるは、「北條氏政禮を失ふ事甚し。台命に隨ひ先上洛なし、而後本領安堵の御教書を申受べきに、己は國に安坐して、殿下の御教書を先達て申下さんとは、言語道斷の行跡に候はずや。早く軍

子息氏綱猶威勢盛んにて、父が箕裘を繼ぎ、武名鄰國に鳴る。其子左京太夫氏康、天文七年、上杉民部太輔憲政と武州河越に戰ひ大に切勝ち、憲政國を捨て越後に逃る。是によつて氏康關東七州を領し、勢ひ日々に長大なり。氏康元龜元年小田原の城に卒し、其子左京太夫氏政當時小田原の城主なり。其子氏直と倶に領國に要害を構へ、武威を震うて敢て王命に隨ず、故に信長公在世の時より台命にも戾り、管領瀧川一益と合戰度々に及び、勝敗分らざる前に、信長公不慮の弑逆にあはせ給ひ、天下再び大亂に及びければ、北條一家彌勢ひを以て、我意を震ふ事以前に勝れり。然るに今豐臣家武德海內に潤流し、順はざる者なかりけるに、獨北條のみ舊によつて降順の色なし。爰に於て殿下安からず思召され、天正十七年の秋、使者を相州小田原に下し、其罪を責め給ふ。是によつて氏政一族郞從を集め、相議して申けるは、「今度我々父子、秀吉が令に隨ひうか〳〵と上洛せば、恐らくは不虞の災ひ有らん。然りとて上洛せずんば、秀吉必ず大軍を發して攻來るべし。不如美濃守氏矩を京に上せ、一旦秀吉の心を安んじ、其內に十分戰禦の用意をなし、扨敵對すとも容易に味方敗北せんや。あはれ秀吉を討取り、勢ひに乘て上洛せば、當に天下を定むべし」是によつて衆議一決し、氏矩一人上洛にぞ定りける。此氏矩は氏政が弟にして、智勇兼備の良將なり。不日して氏矩洛に至り、聚樂に參じ秀吉に謁す。

繪本太閤記　五篇卷之十一

○北條氏政家系

爰に坂東七州の大守、相州小田原の城主、北條左京太夫平氏政と云ふ者あり。是が先祖を尋るに、桓武天皇より七代の後胤肥前守平維將五代の孫北條四郎時政が末流、相摸次郎時行と云ふ者、曆應元年の春、後醍醐帝の七宮を供奉し、結城入道道忠と奥州下向の時、伊勢國安濃津の浦にて難風にあひ、終に伊勢國に蟄居す。其妾男子を誕む。伊勢出生の兒なれば伊勢小次郎時長と名乘せ、其五代の孫に伊勢新九郎長氏といふ豪傑あり。其時駿河の國守今川修理太夫氏親に寄て遊客と成り、武功を以て伊豆國韮山の城を守る。是より先寛正二年、公方義政公の令弟政知伊豆國に下向し、堀越殿と申けるが、在國三十三年、明應二年、政知卒去す。伊勢新九郎長氏其虛に乘じ、堀越を襲ひ討て終に豆州を押領し、北條に住す。且剃髮して北條早雲入道と號す。同九年、相州を伐て小田原の城に住す。時に後柏原院永正十三年、子息左京太夫氏綱と倶に三浦入道道寸、同荒次郎義意を殺して新井の城を拔く。同十六年、八十八歲にて卒す。

繪本太閤記 五篇第十一之卷 目錄

北條氏政家系
秀吉公馬船渡二小田原一
秀吉公大軍攻二小田原一
山中城落敗
伊達政宗參二小田原一
小田原陣中早歌

黄金二千兩白銀一萬兩宛　六之宮佐古丸、內大臣信雄卿に賜ふ

黄金三千兩白銀二萬兩　豐臣大納言秀長卿に賜ふ

黄金三千兩白銀一萬兩　豐臣中納言秀次卿に賜ふ

同　浮田宰相秀家卿に賜ふ

黄金一千兩白銀一萬兩宛　毛利照元、上杉景勝に賜ふ

白銀一萬兩　前田利家に賜ふ

其餘は金銀二十萬七千兩を中將二人、少將五人、侍從十三人にたまひ、黄金三千兩銀一萬兩を大廳、又金一萬兩を北政所、金五千兩を秀勝卿の母君へ賜ふ。其外分限に應じ之を賜る。今度恩賜爲し給ふ金銀三十六萬五千餘兩とぞ聞えし。誠に古今例少き武將かなと、海內こぞつて稱じけるも宜なりといひつべし。

蟲よ」とて笑ひ給ふ。此古歌の心は、螢に聲有て鳴つると詠つるには非ず、雨の降る夜は聲々の蟲も鳴やみて、只光の見ゆる螢より外に蟲はなきぞと詠たるなり、然るを幽齋が頓智にて、殿下の御句をとりなし奉りしも賢かりしと、時の人語りあへり。秀吉公御治世の間、雜話小說甚多しと雖も、事繁ければ爰に略す。此大概を讀て、秀吉公の行形大度を准へ知るべし。

○分₂黃金₁賜₂諸侯₁

天正十七年夏五月、關白殿下秀吉公つくぐ思し給ふやうは、我既に扶桑六十餘州を掌に握り、金玉堂に滿たり、是を用ひざる時は卽瓦石に異る事なし、廣く海內に分ち授んとて、諸國の大小名領國の多少に隨ひて是を分ち給ひ、夫々の國民を賑はすべきとの御事なり。先聚樂二町の間において金銀を臺に積み、空地なく竝べ布たるにぞ、見る者目眩き、聞く者魄を空にす。秀吉公は門戶の邊に御座を設けられ、秀長卿の座は其次にあり。六之宮古佐丸、菊亭晴季卿、勸修寺晴豐卿、中山親綱卿、烏丸光宣卿、日野輝資卿、唐橋兼勝卿など來會せらる。五奉行の輩是を奉行し、臺每に各黃金百枚を積み、四人宛して舁出し、玄以法印、淺野長昌等、金銀何兩誰人に賜ふと高聲に呼はれば、其人拜領してこれを納む。およそ其員數は、

秀吉公金銀を分ちて諸侯に賜ふ圖

く植させ給ひしに、其年の秋彼松の根に生たりとて、見事なる松茸數枚を獻上す。秀吉公大に歡び、我威光普くして、松樹心なけれども、今年植たる松に菌を生ずる事めでたしくとて、彼梅松に祿多く賜りける。梅松も甚悅び、其翌年も又次の年も、毎度彼松原に生たる由にて松茸を獻じける。是は元來其所より生たるにてはなく、他所より求めて獻じたるなり。時に秀吉公左右の者をかへり見て宣ふは、「最早此松茸も獻上を止めよかし。餘り生過るは」と宣ひけるに、人々恐れて平伏しぬ。又ある時紹巴を召して、「我發句をせんに、汝わきせよ」とて、

おくやまにもみぢふみわけ鳴くほたる

紹巴がわきに、

しかとも見えぬともし火のかげ

扨紹巴申上げけるは、御句面白く遊ばされ候へども、螢は鳴く蟲にては候はず」と申けるに、秀吉、「螢に聲なくとも、我鳴せんと欲せば鳴ずして有るべきか」と宣ひけるに、細川幽齋傍にありて、

「武藏野やしのをつかねて降る雨に螢より外鳴く蟲はなし

と詠る古歌も候へば、螢を鳴くと申すとも理なきに非ず」と申けるに、殿下「さればこそ螢も鳴く

事にかゝはらず。諸國近國の大名出仕する毎に、必ず强て之を留め、種々の珍味に飽しめ、酒飯皆善美を盡し、或は圍碁或は象戲或は亂舞、其人の好むに隨ひ是を爲して戲れ遊び、且宣ふ、「汝等隨分我城中にて心の儘に樂み、よき夢を見たると思ふべし」と宣ふ、是も又格言なり。又大坂の城を築き、大佛殿を建立し、聚樂の造營にも、奉行に命じて諸職人及び萬端の役人に兎角金銀を多く取せ、其功の早きを專とすべし、金銀は我藏の中に有るも下々の家に納めたるも同じく我物なり、金銀を吝む事勿れと仰附られける。是も又有難し。斯る大氣の大將にて有けれども、又己を愼み給ふ事甚深し。或時殿下高野山へ詣で坊中に宿り給ひしに、「割粥を參らせよ」と仰けるに、厨人周章ふためき漸く調じ差出しければ、秀吉公其御機嫌麗しく、「高野山には臼なき所なれば、割米を持參せしと覺ゆるぞ。膳部の者よく心付たり」と稱美し給ふ。其後事の序に御近習申上るは、先に高野山にて割粥御好みの時、臺所甚混雜いたし、米を魚板に置て人多くかゝりて刻み候」由申上ければ、殿下大に氣色を損じ給ひ、「割米なくばなしとて常の粥を出さんに何の仔細かこれ有らん。今我力を以て申附んに、米一粒づつ削喰ふとも心の儘なるべし。然れども左ある驕は上に有らん者の愼むべき事なり」と仰せけるに、皆平伏して其仁德を感じける。又爰にをかしき事の有けるは、山城國に内山といふ所を梅松といへる桑門に預け給ひ、松を多

つて動き給はず。呉松大に迷惑し、装束をかけながら、秀吉公の御前を膝行し退きけるぞをかしかりし次第也。さて帝より猿樂の面々へ被物賜りけるにも、秀吉公能大夫囃子方の者と同樣に出給ひ、謹んで拜領し、肩にかけてぞ入り給ひしにぞ、上下驚く事限りなし。秀吉公身を輕く持ち給ふ事かくの如し。前田德善院是を諫めて申しけるは、「君は當時天下の政事を掌り、武家の棟梁にてましますに間、餘りかろ〴〵しき御身持こそ大事の端と存候。假令臣下の家に駕を枉らるゝ共、豫め守護の兵士をも備へ、嚴重にあらせ給ふべし。既に信長公も小勢にて本能寺に宿し、光秀が爲に弑せられ給ひたり。是前車のいましめにて候へば、輕々しき御ふるまひ有るべからず」と申ければ、秀吉公笑はせ給ひ、「當時天下の間に我に勝たる主なし。何者か謀叛をなさんや。汝等心を用ふ可らず」と宣ひき。秀吉公の御生得、少し騷しき方にて、何事も速に早く事の調ふを歡び給ふ。或時祐筆御前にて物を書くに、ふと醍醐の醍の字を忘れ、傍の近習に問ふ。秀吉公指を以て席上に大の字を書き、「汝しらざるか。此の如く書くべし」といひ給ふ。其外軍中にて手づから奉書など下し賜ふにも、書損じ給へば是を墨にてぬりけし、其側へ書入れたる儘にて、「是持て參れよ」と遣されける故に、手自成し下されし奉書書翰などは、大方草稿を見るが如し。時の諸侯是を得れば、猶更有難しとて尊みける。秀吉公生質寬闊大度にして小

○殿下行狀

此頃呉松越後といへる能太夫、堪能の聞え高く、秀吉公も此呉松に能を學び給ふ。同年十二月禁裏にて御能あり。此時秀吉公、「我能を成して帝の笑覽に備ふべし」と、兼てより仰出されければ、禁廷はこの噂のみにて、其當日に成りければ、主上を始め奉り、左右の大臣、公卿、殿上人、典侍、命婦、長橋の局、秀吉公の舞給ふ能を見ばやとて、御階近くこぞり給ふ。秀吉公は聚樂より馬上にて烏丸通を參内ある。新在家の下女四五人計、赤き前垂をかけて殿下の御通行を見物す。秀吉公馬上より彼女どもに宣ふは、「只今我内裏に行て能を爲る間、汝等來つて見物せよ」と仰せければ、下女等肝を潰し、恐れ入りて迯たりける。偖禁中においては秀吉公明智討を舞給ふ。是は此頃毛利照元卿、前田利家卿など打寄り、新に作り出せる能にて、呉松太夫舞の手を附け、專ら翫び給ひしなり。其外にも高野詣、吉野詣等數多新作あり。扨其能も首尾能く一曲終りければ、堂上堂下讃譽の聲高く聞ゆ。殿下是を聞て喜び給ふ。次に呉松越後舞臺に上り邯鄲を舞ふ。此時秀吉公長柄の大刀を帶し、虎の皮の大巾著を腰にさげ、孔雀の羽にて織たる道服を著し、橋懸の眞中に立て呉松が能を見物し給ふ。能終りて大夫橋懸へ退けども、殿下猶立

有べしとて、近士十人計召連給ひ、先蜂谷頼隆が圍に入らせ給へば、頼隆何くれと饗應し奉り、快く御茶をきこし召れ、夫より頼隆をも伴ひ出て、そこよ爰よと見廻り給ふ。頼隆しば〳〵狂れ言をいひて、殿下の興を添奉る。此日北野地方一里が内、空地なく建連ねたる數寄屋のさま、輕き作意異風の體、侘を主とし風流を盡し、興有る事限りなし。爰に年の頃五十ぢ計の法師、樹の枝に一つの瓢簞を懸け、其下にて茶を煮るあり。殿下立休ひて「いかに茶や有る」と問給ふ。彼法師謹んで、「かたの如く用意致し候」とて、きよき天目に白湯を汲み彼樹上にかけしふくべを取り下し、其中より焦椒をふり出し、湯に點じて捧げけるに、秀吉公其淡薄を稱じ、是又一箇の茶味なりと譽め給ふ。烏丸亞相の圍に入らせられて、名物の扇衝を御覽じ、其鄰に構たる篠ぶきの數寄屋、此頃聞えし福阿彌が圍のよし近習の者申上れば、殿下打笑はせ給ひ、「かの、

　煤はかず門松立てず餅つかずかゝる家にも春は來にけり

と詠たる侘桑門ならん」とて、爰にも腰をよせ給ひ、其外貴きとなく、賤きとなく、悉く稱譽の御詞を下し給ふに、人皆悦ぶ事いふ計なし。日の足早く西に傾けば、殿下輿を殘して聚樂城へ還御し給ふ。

一鐘の繪　一内赤盆　一にたり　一紹鷗天目
一あらみ茶杓　一そろり花入　一七ツ臺　一瓢簞
一珠德茶杓　一紹鷗茄子　一白天目　一尼ヶ崎臺
一象牙茶杓　一ほうろく釜　一がねの蓋置　一芋頭
一紹鷗水翻　一柄杓立桃尻　一小あられ釜　一緣桶
一五德蓋置　一胡桃口柄杓立　一せんかう香爐　一朝山
一備前花筒　一四十石　一志賀　一新田肩衝
一めんはく　一をとごぜ　一龜蓋水指　一やせかけの天目
一折だめ茶杓　一細●鑵　一井戸茶碗　一金水指

御道具の名目あらまし此の如し。千利休、堺の宗及、なやの宗久、百舌屋宗安を始とし、京大坂堺富有の町人、我劣じと名物の道具を持出で、思ひ〳〵に錺附しは、吉野の花龍田の紅葉を爰に集めて見る心地す。秀吉公も自茶を點じて諸士に賜ふ事三席、其一は近衞信輔卿、日野輝資卿、織田信雄卿、同信包卿、二席は豐臣秀長卿、同秀次卿、前田利家卿、蒲生氏鄕、千宗易、三席織田有樂齋、次丸秀勝、蜂谷賴隆、浮田秀家、細川忠興等なり。扨珍數寄屋を御覽

殿下自ら茶を点し給ふ図

持の道具かざり置き、望の者に見すべきもの也。

八月二日

斯の如く記し立てられければ、茶道に携る人毎に、是は有難き御代に廻りあひて、上もなき珍器を拜見し、位高き人々と交り奉り、且は我々が數寄の名譽も顯れなんと、踊り上て悅び、其當日を待居たり。程なく十月朔日にも成りければ、遠近の貴賤道俗、茶を嗜む程の者聞傳へ聞傳へ上りける程に、凡茶人五百五十餘人、北野右近の馬場の左右、松下梅蔭岩の間に思ひ思ひの圍をしつらひ、或は茅葺柴の墻繩の樞竹戶あり、或は葦垣したる其中に、笘葺篠葺藁葺の圍など、數寄に任せて營みたるぞ、目もあやに風情めきたり。扨年經たる茶具、古代の墨跡、和漢の珍き器ども床にかけ臺子に餝り、けじめ劣じと物する中に、珍器名品は却て經りたりと、竹の子笠を松が枝にくゝり、其下に土かき退け釜かけて居るもあり、小風爐に湯をたぎらせ、藤の蔓もて箱の形したる荷に之を納め、擔ひ歩行く者もあり、思ひ〳〵好み〳〵の茶事風流、焚物の薫は桂林を行くかと疑はれし、釜の熱たる音は千種の虫の野に鳴くが如し。秀吉公も三ヶ所に圍を作り、重器ども數多かざらせ給ふ。其大概左のごとし。

一靑　楓　一長　そ　ろ　り　一虛　堂　墨　跡　一鏑　無

全き茶碗は態と打かきて用ひ、其外假初の柴垣なども、蕨繩もてうるはしく結ひたるは侘ずとて、藁繩を交へて結り、竹の籬は上の揃はぬ長き短きまじりたるぞよしなんど、悉く侘を宗とし、茶道爰に一變しければ、彼富貴に飽滿たる上﨟達、是ぞおもしろき風流哉と、聚樂の上下悉く利休居士が弟子と成り、茶道大に行はれける儘に、上をまねぶ下ざまなれば、京伏見大坂堺の町人ども、銘々傳へ得し古流を捨て、世間一統利休が風儀におし移り、侘人と唱へ、數寄者と稱し、茶道に心を寄ざる者都會の地に一人もなし。殿下もいつとなく時の流行に移らせ給ひ、或は利休が宅に渡御なりて、かの侘たる茶を喫し給ひ、又は自茶を點じ在京の諸侯に賜り、今は專ら利休を愛し、茶事のみに暮し給ふ。是によつて諸國の大小名郡主村長に至る迄、侘を知らでは殿下の御前首尾あしく、且世間の交り成り難しとて、我も〳〵と利休が門に立入りて學ぶ程に、利休が富る事甚し。是又此時代の一奇事と云ふべし。時に天正十六年十月朔日、華洛北野の松原において、貴賤都鄙打交り、大茶の會催さるべしと、去ぬる八月上旬より、京大津伏見奈良大坂堺等へ高札を立置れ、數寄の茶人を召れける。其高札の文に曰く、

來る十月朔日北野松原において茶湯興行せしむべき也。貴賤によらず、貧福にかゝはらず、望みの面々來會せしめ、一興を催すべし。尤美麗を禁じ、質素なる事專一なり。秀吉所

○北野大茶之會

殿下の御威勢四海に普く行渡り、應仁已後さしも久しき兵亂も、爰にはじめて靜まり、戸々に千秋を謳ひ、家々に萬歳を唱へ、孝弟忠信の道明かにして、國津風しづかに治りぬるの時なれや、聚樂の繁榮なるは言葉にも盡しがたし。されば奧の愛姬、上下の近士に至るまで、世に例なき艶美のみ好み、衣服調度の類までも風流に心を盡し、萬思ふ儘なれば、一事といへども缺けたるものなく、又物として飽ざる事なし。夫人の情は程につけ時に隨ひ、心の望止む事なし。茅葺したる怪しの庵に、夏の夕ぐれ、むら〳〵と蚊やりの煙ふすぶり出でたる中に、夕顏の白く咲きたる、又冬の朝、氷に結ぼほれたる枯蘆の寒く見えたる、あばら垣より霜いたく置きたる、寒菊水仙やうの花いさぎよく開き出でにし風情哀れと見る彼方の家に、ほれたる翁の圍爐によりて茶など啜り居たるぞ、無下にわびしきさまのみうらやまれて、彼金瓊帳の裡に空燒のにほひ滿て、羅綾を身に纏ひ、錦繡の上に臥すは常にしあれば嬉しとも覺えず、只わびたるこそよの樂みなれと、上下おしなべて侘しからん事のみを祈りける。千利休元來聰明の者なれば、東山殿より傳り來る古流を變じ、侘たるを面とし、四疊半のせまき圍に、自在にて釣たる古釜に、

納蘇利、第七番採桑老、第八番古鳥蘇、第九番還城樂、第十番拔頭にて終れり。樂奉行は四辻大納言是をつとめ給ふ。舞樂終りて主上御よろこびの餘り御製を賜ふ。

萬代にまた八百よろづよをかさねても猶限りなき時は此時

秀吉公謹で拜領し、頓て其御返しとて、

言の葉や濱の眞砂は盡るともかぎりあらじな君がよはひは

翌十八日還幸の御催し頻りなり。殿下御殘り多げに見え給ひ、御前に參り給ひ、又獻々の儀式終り、伶人還城樂を奏しぬれば、早還行と內外さゞめき、高蒔繪したる長櫃の金銀の金物打たる紫地の精好に菊の御紋縫たるを覆ひて三十枝、唐櫃二十荷、前駈にかゝせらる。是は此程の捧げ物なん入れけらしとぞ覺え侍る。御行列御幸に同じ。殿下も馬上にて供奉し、禁中へ入參らせ給ふ。翌十九日、廿日、廿一日、三日の間しめやかに雨のふりけるにぞ、天津神のめで給ふにやとて、殿下、

空までも君が御幸をかけて思ひ雨ふりすさぶ庭のおもかな

いとめでたかりける事にぞ有りけり。

詠寄松祝和歌

萬代の君が御幸になれなれん緣木だかき軒の玉水　關白秀吉

契りあれや君まち得たる時津風千代をならせる庭の松がえ　六宮小佐丸

をさまれる時とはしるし松風の梢によばふよろづよの聲　邦房親王

浪風も吹しづまりて松高きやまと敷根の四方のうら〳〵　九條兼孝

相生の松の緣もけふさらにいく千代經べき色を見すらん　一條内基

日にそうて木高き庭の松がえのいかに千とせののちは榮えん　二條昭實

君も臣も心あはせてをさむてふ千代の聲そふ庭の松かぜ　近衛左大臣

秋津洲の外までなつく國津風松にうつして聲よばふらし　菊亭右大臣

龜の上の山なりけりな庭廣き池の島根の松の木深き　内大臣信雄

かけてけふ御幸を松の藤浪のゆかりうれしき花のいろ哉　大納言秀長

をさまれる御代ぞと呼ふ松風に民の草葉の猶なびくなり　中納言秀次

此外堂上堂下武家及び仙洞女院命婦の詠歌悉く有りと雖も、繁きが故に是を略す。翌十七日舞樂有り。第一番に萬歳樂、第二番延喜樂、第三番太平樂、第四番駒鉾、第五番陵王、第六番

計思ふ短きと今日の日も程に、天顔特に快げにおはします己が心の儘なるに、白く戯れて、よ出たるぞ、こにさし音羽の山の梢よりこぼれかゝるやう月は十六夜の雲間破れて、にくれて、かの漢の武帝の甘泉殿の春の遊び、唐の明此良夜をいかにやと思し給ふ。なうめでたしとて、皇の驪山宮の月の夜など思ひ出られ、頓て御遊の管絃を催さるべきとて、五常樂、郢曲、太平樂など奏し、夜闌にして秀吉公退出有り。次の日十五日、秀吉公條章を出して菊亭殿、勸修寺殿、中山殿に示さるゝ其趣は、地子錢五千五百三十兩を禁中の料となし、地子米八百石の內三百石を以て仙洞の領とし、五百石を六の宮殿の料とし、江州高島郡八千石を以て諸門跡諸公家の料とせらるべしとなり。扨獻上の次第は張卽之が千字文、錢舜擧の畫三幅、沈香百斤を主上に捧げらる。趙子昂の畫二幅、虎畫一枚、堆紅の盃一箇、小袖三襲、太刀一腰を伏見の宮邦房親王に奉り、其外の堂上方各衣服二重、太刀一振を進ぜらる。天氣彌うるはしく、堂上堂下壽の御酒宴永へに、御土器度々廻り、萬歲を唱る聲々泰にして、鷄も朝を告る頃、殿下も座を立たせられ、君にも夜のおとゞに入らせ給ふ。翌る十六日雲打しめり、空に墨すりて流したるやうに有りしが、暫ありて小雨ふり出しぬるにぞ、けふの御還御も止められ、和歌の御會を催されける。

大炊御門前大納言經賴卿、中山大納言親綱卿、白川三位雅朝王なり。其次は左右の前駈數十人、次に近衛の次將左右六人、次に貫主二人、次に左近衛大將鷹司大納言信房卿、右近衛大將西園寺大納言實益卿、次に伶人四十五人安樂城といふ樂を奏す。次に鳳輦、次に近衛左大臣信資、織田内大臣信雄公、烏丸大納言光宣卿、日野大納言輝資卿、久我大納言敦道卿、大和大納言秀長卿、近江中納言秀次卿、備前宰相秀家卿、其次關白太政大臣從一位豐臣秀吉公の御車、次に前駈の騎馬二行に列ね、左は增田右衛門尉長盛をはじめ三十餘人、右は石田治部少輔三成をはじめ三十餘人、次に雜式三十人、次に隨身六人、次に布衣三人、次に前田宰相利家卿、織田侍從信包卿、金吾侍從秀秋卿、其外諸國の大名數を盡して供奉せらる。おの〳〵皆馬上にて、裝束は唐織浮織蜀江の錦呉郡の綾、都て美を盡し花を錺り、遠近の男女貴賤、棧敷を構へ假屋を打て、集り見る事市の如し。鳳輦既に聚樂に至れば、右大臣晴季公御輿の簾を卷給ふに、帝御輿をおりさせ給へば、萬里小路頭辨光房御裾を取て殿内に入御し給ふ。秀吉公拜し奉り、著座の儀式酒七獻、其第三獻の時天盃を下し給ふ。第七獻の時秀吉公御劒を奉る。山海の珍味種種の肴菓其數を知らず。折しも庭の面にまだ聞そめぬ時鳥、初音一聲おとづれて、夏木立しげりあひたる隈々に、遲櫻ちり殘りて若葉にまじり、池水小細波寄せて岸をひたし、魚どもの面

百工心を碎き、丹精手を盡し、其華麗なる事、詞を以て語る可らず。翌十五年の秋其工全く終り、九月十八日大坂より聚樂城へ移り給ふ。萬の調度金銀を積たる船數百艘淀に著し、夫より車五百輛人足五千人、是を引き聚樂に至る。堂上方、公家、門跡、諸侯大夫、御迎の爲とて淀、鳥羽邊に出て待奉る。實にも秀吉公の威勢夥敷事ども也。同十六年秀吉天子に奏聞して聚樂の亭に行幸を催し給ふ。勅してこれを免し給へば、德善院玄以を以て奉行と成し、新に營む儲の御所は悉く檜皮葺なり。御端の間に御輿よせあり。庭上の舞臺、左右の樂屋、後宮局に至る迄、善美を盡し作り立らる。且行幸の例は、往昔永享九年室町殿へ御幸有りしに習ふべしとて、舊記によつて令せらる。遠近の國々より此行幸を拜み奉らんと、兼日より京都に登り集り、其繁華富贍なる事いふ計なし。四月十四日秀吉公參內有りて、御幸を催し參らせらる。主上後陽成院南殿に出御有りてまみえ給ひ、頓て內野聚樂の亭に行幸ましまき。鳳輦は四足の御門より出て、正親町を過て西の方聚樂に至る。路次凡十五町、警固辻堅の武士六十四人、其行列は國母准后女御の輿を先に進め、典侍御局勾當など、凡輿車五十餘あり。其次に塗輿六の宮の御方古佐丸、中務卿邦康親王、准三宮九條兼孝公、准三宮一條內基公、從一位二條昭實公、菊亭右大臣晴季公、德大寺前內大臣公雅公、飛鳥井前大納言雅春卿、四辻大納言公遠卿、勸修寺大納言晴豐卿、

無妙法蓮華經
春日大明神
天照皇大神宮
八幡大菩薩

加藤清正に曼陀羅の旗法華經の陣幕を賜ふ圖

きを侮り、小兒のごとく思ひ居られし故、後年朝鮮征伐の時、行長に拔懸せられ、彼地においても行長所々の合戰に勝利を得、威勢清正が上に有りしは、餘りに小西を輕く見られし故なりとぞ。然るに彼功もなかりし小西行長に、五萬石の加增有りけるにぞ、諸人皆大に驚く。加藤清正是を聞て、あはれ小西めは果報いみじき者なる哉、淀殿に媚び諂ひ、功なくして我と等しき大名に成りたりとも、武邊の事には手をも出させまじとて怒けるが、清正も又此事を北の政所へ内々申通じてければ、いかゞ取計ひの有しやらん、清正法華宗の信心者なればとて、肥後の八代といふ所にて法華寺再建の料として三萬石下し賜り、又此度の戰功拔群なりとて、御感狀並に曼陀羅の旗、法華經の陣幕を賜ひければ、清正元來堅固の信者にて有りければ、大きに歡び、謹んで恩を謝し、是に心を慰めて、暫く怒は止にけり。

○聚樂行幸

去ぬる天正十四年の春、豐臣殿下秀吉公、洛陽の西聚樂の地に城を築せ給ふ。世の人是を稱して聚樂城といふ。其構四方三千步にして、石の築垣高く築上げ、樓門巍々として空に凌ぎ、鐵の柱銅の扉、きがね白銀の梁は星の光に紛ひ、棟の瓦は玉虎風に嘯き、金龍雲に吟ずるの貌を彫り、

繪本太閤記　五篇卷之十

○賜二加藤淸正曼陀羅旗一

加藤主計頭、佛木坂の合戰に木山彈正を斬て、其威風西海に鳴轟き、近鄕の國人等みな加藤が武威に恐れ、心を兩端に持して、一人も志岐の城を救ふ者なし。されども城兵屈したる色もなく、朝がけ夕暮の間を考へ、打出で〳〵戰ふ程に、いつ果べきとも見えざりしに、世上一統豐臣の威風に靡き順ふ者は榮え、逆ふ者は滅る、目のあたりの形勢なれば、始終勝利有べき籠城にも非じとて、島津義廣を賴み、殿下の御前を取繕ひ、終に命計を助けられ、城を開いて薩摩國へ引退く。爰において熊本宇土の兩城へ、國人皆登城して、始めて國中平定しける。此時肥後國はいふも更なり、九國西國の國々、加藤が勇名始めて鳴り、恐れずといふものなし。夫には替り小西攝津守行長は、今度の合戰に家臣伊知地文太夫を討せ、其敵志岐林專を眼前に置きながら、攻落す事能はず。殿下の御威光島津の扱ひにて漸〳〵に城を請取り、戰功とては少しもなしとて、皆加藤が武勇を鬼神の如く譽そやし、小西が不能を譏りける。是によつて淸正常に小西が勇な

繪本太閤記　五篇第十之卷　目錄

賜加藤清正曼陀羅旗
聚樂行幸
北野大茶會
殿下行狀
分黄金賜諸侯

しや」といふ。「淸正尤にて候へども、飛道具は比輿にて候。鎗にて參られよ、勝負試み申さん」と云ふに、彈正鐵炮からりと捨て、大身の鎗をひらく〵と空鳴して、坂を一段とび下りて突てかゝる。淸正十文字の鎗を以てからりく〵と突合しが、木山は西海普通の大力なれば、淸正が鎗を弓の如くにたゝみ上げ、飛違うて突んとす。淸正又したゝかの剛勇なれば、金剛力を出し喚き叫で突結ぶに、冬枯の樹木動搖し、空山鳴靂き、林葉枝ながらに碎け飛で、見る者肝を寒からしむ。忽ち一擊電光ひらめき飛ぶものあり。是則ち淸正の十文字片鎌かけて折飛るなり。彈正得たり賢しと、疊かけく〵踊上つて打程に、淸正いかゞしたりけん、鐙を踏みはづして馬よりどうと落たりける。透さず彈正鎗取直し、さげ突に突く鎗の柄を、淸正しつかととらへ、矢聲をかけて彈正を馬より下に引落し、拔討に內甲より咽輪をかけて切下げ、踏倒して、終に首を討取たり。是を見て木山が勢さんぐ〵に亂れ、立足もなく敗北す。淸正が鎗は志津の作にて、三日月形の十文字なりしに、此戰に突折て片鎌とぞ成つたりしを、後迄も其まゝにて持れける。其缺落ちたる刃を拾ひ取り、佛木坂の神宮へ納めしに、今も猶靈異ありて、瘧疾を煩ふ者此宮へ詣で、かの鎗の鞘の熊の毛を一筋ぬきて守となせば、忽ち瘧のおちぬる由、其國の人常に申傳ふ。

木山が勢は先陣と後陣の間を取切れ、前後の勢働き得ず。木山彈正大音に味方を勵まし、「汝等命を捨て此敵を突破れ。一歩も後へ退く時は、山上の先手の勢を悉く捨殺すなり。我につゞけ」と呼はつて、大身の鎗を打振て眞先に馬を飛せ、淸正が先駈の兵士を十騎計突殺す。淸正下知して後陣を入れかへ進む所に、彈正馬上を定め、十匁玉の大筒を宙に堪て、込かへ〳〵打出すに、淸正が兵忽ち七八騎打落され、猶も進んで駈來る。此頃は未だ馬上の鐵炮よく打つ者なき時なれど、元來天草島は鐵炮に名譽有る所にして、筒の取かへし、玉の繼替などの妙有る事、他國に類すべきなし。されば寄手是に驚き、雜兵どもは人か神かを辨へず、淸正が先手亂れ騷ぎて見えたりけり。淸正是を見て大きに怒り、齒をかみ鳴す音數十町へ響き、髮髭さかしまに立のぼり、迯る味方を尻目に見て、十文字の鎗を引そばめ、ゑい〳〵と呼はる聲衆軍の耳に徹し、壯氣粲然と面に顯はれ、力足を踏で進るゝに、始終敢て下知なしといへども、其威風に引立られ、惣軍思はず取つて返す。淸正天草伊豆守が陣に向うて一たび鎗を動かすほどに、前に進みし武士七八騎突殺され、伊豆守が陣中震ひ怖れ、きたなくも引退く。淸正續て喚き進み、佛木坂へ馳上るに、木山彈正些とも騷ず、大筒を馬上にかまへ、しづかに立て淸正を見る。淸正先聲かけて、「天晴大將や、名は何と申候ぞ」「木山彈正にて候。加藤殿と見受候に、一手仕るべ

侍に泡ふかせてこそ政道も行はるなれと、木村又藏に百五十騎の逞兵を差添へ、小西が後詰に遣して、淸正も不日に加勢致すべき旨申送り、其身は熊本へ入府して、軍の用意爲したりける。此時小西が急使上著し、秀吉公へ事の次第を言上す。是によつて肥後近國の大名勢を出し、小西が後詰すべきよし、追々御下知有りけるにぞ、加藤淸正は兼て用意はしたりけり、頓て軍勢を引率し、天草へ發向せり。爰に天草本渡の城主木山彈正といふ者あり。志岐林專が爲には伯母聟にして、力量軍練無レ雙剛兵なりければ、小西加藤等を小兒のごとく思ひなし、世を世とも思はざる曲者にて有りけるが、今度志岐が催促に應じ、手下の郎等三百計引率し、寄手の陣へ夜討して、一まくりに追崩んと、申刻より城を出で、後の山を越て押行けるに、其夜は川々大潮込入り渡る事自由ならず、潮の落るを見合す程に、ほの〴〵と夜は明たりける。彈正下知して、「兎角は山中の茂りたる中に引隱れ日を暮し、夜討せんこそ味方に利あり」と、先手の勢八千餘人山上へ押登せ、同勢後より麓を巡り、徐々と兵を遣るに、加藤淸正が兵を進むるに出合ひたり。彈正是を見て卒に下知し、本陣の勢を志岐の後の山へ廻さんとす。淸正目早き將なれば、「これは一揆原が加勢と覺ゆるぞ、要害を取せては戰むづかしかるべし。此方より彼峯を取占め、敵を目の下に見おろし、一息に城を破るべし」とて、旗本の逞兵七百餘人、一參に駈上れば、

卒に取立てられし大名なれば、家老用人及び家中の士、はかぐ〵しき武功の者曾て是なく、敵方志岐林專は老練の勇將、手下の兵皆合戰の場數をふみし者どもなれば、誘引の軍をかけて難所へ引入れ、前後より取圍み、大將文太夫を討取り、軍卒二百餘人斬殺ぬ。小西行長是を聞て大きに驚き、又早馬を以て秀吉公へ其旨を注進し、自一萬餘騎を引率し、志岐の城を取圍み、さんぐ〵に攻立けるに、城中堅固に防戰し、落城の體は見えざりけり。

○加藤清正斬二木山彈正一

去程に加藤主計頭清正も、肥後の熊本を拜領し、任國に赴きける其節も、北政所さまぐ〵御心を添られ、荒き國なれば仕置等大事に仕れとて、下川又左衞門といへる軍功の武士を與力に賜ひ、俄の大名なれば家人も少からんとて、黃金數多下し賜はり、名有る浪人を招き、又は政所の命を受て諸大名より能き侍を所望などしける程に、兼々加藤が勇智諸方に聞え有ければ、金鐵の精兵七百餘騎を旗本とし、頓て熊本へ下りける。其途にて宇土領一揆起り、小西が家老討死し、騷亂に及ぶよし聲えければ、清正是は大事の合戰かな、諺にも狼丘に死すれば、狐是を悲むとかや、小西が軍利を失ふ時は、我熊本とても治るべからず、兎角小西に力を合せ、地

手を借て殺しぬるは、よに快き事なり」とほゝ笑給ふ顔色、陰沈と艶を含み、深山大澤必ず龍蛇を生ずと美女を憎みし辭、實にもと思ひ出られける。去程に小西攝津守行長は、淸正に先達て肥後の宇土に著し、領地の郡村へ殿下の令命を申下し、國人皆出仕すべきよし告けるに、小西が領内天草志岐林專、天草伊豆守、同長門守等勇武に誇り、小西が命を用ひず。使者に對して申けるは、「我々が事は、先の國主佐々成政と爭論し、頗合戰に及びたりしに、秀吉公も此方の申分尤なりとて、成政に切腹仰附られたり。左あれば我々殿下直參の御家人とぞ成るべきに、此頃迄堺の藥種店に甘草嚙居し童子に、膝をかゞめて出仕すべきや。其勇名天下に聞えし佐々にすら隨はざりし我一族、小忰が下知を受べきか。小西に是へ參れと申候へ。直談の上いかにも計ふべし」と、傍若無人の返答し、使者を追立かへしける。されば是に例して、國中の諸士一人も出仕する者なし。剰へ志岐林專一揆原を駈集め、其勢五千六百餘人、天草志岐の城にたて籠り、叛逆の色を顯しける。小西行長は淀殿の仰を守り、事を堪へ詞を賤うして取扱ふと雖も、既に事爰に至り、止む事なく早馬を以て秀吉公へ注進し、家老伊知地文太夫に三千餘騎の兵を與へ、志岐の城を押しめ、且令して曰く、「殿下の御諚これなき内は、堅く守つて合戰を始むべからず。台命下らば吾も出陣して一揆原を切崩すべし」と、申含めて打立しむ。元來小西は

て、此時までさせる高名もなかりしに、かねて淀君の御心に叶ひ、出身をさせばやと思ひ居給ひけるに、政所の御取持にて、加藤主計頭肥後の領主と成る由聞召され、頓て鶯舌を動かし殿下へ訴へ給ひ、小西攝津守行長と名乘り、肥後半國の主十九萬石の大名として、宇土の城を下し給ふ。是によつて兩人互に威を爭ひ、後年朝鮮征伐の節も、樣々爭論有りて軍中和を得ざるは、皆所以有る事なりけり。六月四日、小西行長淀殿の御殿に參上し、任國へ赴く由を申上ぐれば、淀殿小西を近く召寄せ給ひ、敎訓して宣ひけるは、「加藤主計頭は北政所の御荷擔といひ、七本鎗にて世に名高き者なれば、彼と同例には成る可らず。されどもわらはは隨分身に替へよきに申上べき間、終には加藤が上に出るなるべし。是を賴に何事も堪へ忍んで任國に赴くべし。窃に聞く、彼國は一揆ども亂を起し、荒々しき國なるとや。兎に角身を愼み、淺香山のあさく人をば思ひなし、我身を忘るゝ事なかれ。何事にても悉く殿下へ伺ひ參らせ、御下知を受て行ふべし。かねても申聞しごとく、頓て朝鮮征伐の時、加藤に勝る高名こそ、汝が身の面目ぞや。夫迄は萬内端に、加藤に勝らん事をねがふべからず」と、くれ〴〵敎へ諭し給へば、小西行長謹んで是を承り、勇んで肥後へ下りける。淀殿は小西が中門を出る迄見送り給ひ、松の丸殿に向ひて宣ふは、「佐々成政は剛勇の大名にて、動すれば政所の方人すべき者なりしが、黑百合の計人の

に大國を賜り、大名に取立て給ふ事、いかゞしく候」など、種々訴へ申給ふに、淺野彈正も「肥後表見分致候所、國民佐々が政道を恨み、更に歸服の色見えず。此度の一揆は一旦鎭るといへども、再び國中騷動に及ぶべし」と申けるに、秀吉公も實にもとや思しけん、尼ヶ崎にて切腹仰付られけり。惜むべし一方の英俊、女子の舌頭に命を落しけるは、拙かりし運命なり。是も先に成政が手に殺れし早百合といへる女の怨念にて、今度黑百合の事より滅亡しけるやと、そゞろに怪しむ者も多かりけりとや。

○賜二加藤小西肥後國一

豐臣殿下秀吉公、佐々が領國肥後を二つに分ち、加藤主計頭清正と、小西彌九郎行長に賜ふ。後年朝鮮征伐の先鋒たらしめん御手配りなり。此事においても專ら閨中才女のあづかる所なり。加藤清正は北政所の愛士にて、常々憐愍を蒙る事多し。尤賤ヶ嶽七本鎗の大功によつて、其名普く高し。其以前には似るべからざれども、此時祿やうやく五千石にて、御旗本の步卒なりしが、俄に肥後熊本二十五萬石の大名、一城の主と立身せしは、皆政所よりの吹擧によつてなり。又小西彌九郎は、先年備前の浮田家より使者として、殿下の見參に入し堺の町人小西如淸が子に

黒百合佐々を亡ぼす圖

のめでたしと見給ひつる黒百合を押入て生捨られたり。此黒百合、先日政所の床に生させ給ひしより一入色濃く麗しきを、主もなき竹筒に差捨たれば、秀吉公も驚きて是を見給ふ。政所は猶更に怪み驚き、面を赤くなして歸り給ひしが、纔に三日も過ぎざる内に、百里に遠き北國より此花を求め得べしとは、御心も附かざりしかば、扨は佐々成政が世に多く有る花を珍花なりと我を欺きしか、但は外の局々へも悉く送り物せしにや、何にもあれ限りなき恥辱を取てけりと怒り思召けれど、愼み深き御方なれば、更に色にも見え給はず。然れども政所方の人々、三條殿、加賀殿を始めとし、數多の女中更に安き心もなく、綾女を疑ひ、淀殿を恨み、成政を惡み、何卒して此恨を晴さん物と、晝夜打寄り、此評定のみなりけり。取譯おこいの方は淺野彈正が室なりければ、夫に告て成政が身上滅却させ、又綾女が行跡心得ざる上は、彼が事も惡み告げ、兩人ともに此儘にはさし置じと、種々工夫をせられける。綾女も此後は何となく殿中の往來を憚り、淀殿へも參らざりしが、利休居士後に秀吉公の御憤を蒙り、切腹して死したりしも、其根は此一事より起れり。然るに佐々成政は、かゝる惡みを受し事は露も知らず有し所に、肥後國一揆蜂起し、國中騷動大方ならず。上方にては三條殿、加賀殿、おこいの方など幸の事なりと、いろ〳〵言葉を巧み、「佐々成政は久しき怨敵にて候ひしを、外に功臣も候ものを、俄

けるが、「兎角に是は佐々成政が方より漏れ候物ならん。我々は只此御殿のみに侍ふ故、漏すべき間もこれなし」と、其座は夫にて事相濟み、綾女も首尾よく御暇賜りけれど、女中婢女打よりて、只ひそ〳〵と私言ける。

○黒百合滅二佐々一

此頃殿下秀吉公洛東淸水寺に詣で給ふとて、例の寛濶御供の風流善美を盡し、往昔平氏の花見車はものかはとて、洛中洛外の貴賤道俗、あはれ見物に行ばやとて、棧敷を構へ屏障を立並べ、賑はしき事いはんかたなし。依レ之局々の女中達も、今度の御供に外れなば、面目を失ふなりと、銘々觀世音に、誓願あれば御供を許し給はれとて、思はぬ信心を面に顯し、俄に普門品を書寫せるもあり。兼て代參を立て、御供せんと祈るもあり。誠に若き女房達の設欲求男の願のみにて、怖畏軍陣の供ならねば、我人望むも理なり。此願をかけし人々、此間殿中の手慰に、花摘の供養とて、局々の廻廊に夏花筒をかけ並べ、野花を取てさゝれける。殿下此摘花を御覽ぜんとて、政所をも召具せられ、彼廻廊の間に歩をめぐらし、暫く心を慰め給ふ。此日は彼政所の茶會より第三日の事なるに、松の丸殿の花筒に、躑躅樣の賤き花に交て、さしも政所

ふとは、努々仰せ候まじ」と申けるに、淀殿ふし拜みて大によろこび、自指を嚙んで血を押て、他言せまじとの誓をなし、「はや〳〵北の殿へ歸らせ給へ」とて、人を附て又廣庭より密に送り給ひけり。政所には此時猶奥殿に居給ひければ、綾女も事なき體にもてなして、御次の間に控へたり。淀殿は黒百合の事聞給ひて、早速腹心の者に仰附られ、彼白山の黒百合を取り、早く歸るべしとて北國へ走らせ、扨茶の湯の剋限を待居給ふ。はや其朝に至りて、御茶の知せ聞えぬれば、淀殿、正榮尼待合に入り給ふ。頓て政所是を迎へて圍に請じ、挨拶萬事和らかにして角あり、心附ざるに似て皆情を含り。雙方少しも拔目なく、中立も過ぎ、後入の花は彼白山の黒百合を銀の花入に生られたり。淀殿殊に珍花を賞し給ひ、「北國の珍花、都の人の見る事難き種にて、妾が一生の見始にして見納にも候べし」とて、茶事悉く首尾調のひ、淀殿は歸らせ給ふ。爰に於て利休が娘御側の女中等政所の御前に出で、御茶首尾能く御出來しの程を挨拶申上ぐる。政所にも御機嫌麗く、「扨珍花の事淀殿の樣々稱譽し給ひしは滿足なれども、さばかり委く知らるべきやうなし。若汝等がもらしぬるや」と問ひ給ふ。此時綾女は淀殿の恩政所の情、我身ひとつに分ちかね、所詮は事の次第を詳に申上げ、自害して死すべしとは思へども、殿下のみだりなる御行跡の政所へ顯れん事を恐れ、申すにも申難く、つゝむにも包み難く、千々に心を苦め

綾振り放して逃行を、秀吉公は捕へんと、此所彼方追廻り給ふに、有合ふ女中も支ふる事能はず。綾は長縁より素足にて廣庭に飛下り、山吹を潛り楓を巡り、やう〳〵に淀殿の書院先へ逃込だり。秀吉公も淀殿に心を置せ給ひ、續ても追せ給はず、打笑ひて歸り給ひ、「女原此事を沙汰致すな」と仰せられ、御殿へ歸り給ひける。此時淀殿は綾女を近く召して、今の始終は尋ね給はず、「其許は町人の妻ながら、自が茶の師にて候へば、我を子の如く思ひ、よろづ憐をたれたまへ。吾は只母上とこそ頼み參らする」と仰せければ、綾身にしみ〴〵と難有く、唯ひれふして涙を流すの外なし。淀殿重ねて仰けるは、「明日政所の茶湯は、定めて自に手を取らせ給はん御工事有レ之べし。其許ならで誰人か我を憐み助くべき。御手術のあらまし語り給へ」と有りければ、綾女漸々面を上げ、「政所樣に何の御工か候べき。只々御中の睦じからん爲とて、數寄の道にましませば、御招き遊ばさるゝの外、更々他事これなし」と申すを、「いや〳〵それは僞にこそ。定めて政所より自に噂なしそと口どめ有りし事ならん。我事は爰に參りて未年も經ず、殊に年若き身の恥を蒙る事なるを、師弟の中にて見捨候はんとは、兼ては思ひ知らざりしぞや」と、或は恨み或は透し、鶯舌を翻してかこち給へば、綾女も今は心碎け、よしや此事にて命を失ふとても、此御言葉を爭か背き申べしとて、彼黑百合の事をこま〴〵と物語り、「我より聞せ給

其上淀君は小谷及び北國の山深き方に住給ひ、都遠きを常々恥らひおはしませば、松茸など山家の産物にて、何とやら當り心にてあしく候はん歟。又初茄子の珍らかなるをもてはやし候も、下ざまの事にて、上樣方の御料理にはいやしく、茶道に背き候へば、此二種を蓴菜と夕顏の實に御替遊ばすべし。夕顏などは下ざまの者もたべ候て、結句素直なる御料理に相成り候。即ち此心持こそ當流の茶事にて候」と恐れ入りて申上ぐる。政所大に感じさせ給ひ、「實に利休が息女なりけり。よきに指圖いたすべき」とて、諸事綾女に任せたまひ、奥の居間にぞ入らせ給ふ。

○北政所茶會饗ニ應淀殿一

此時殿下秀吉公、はからずも政所の御殿へ入らせ給ひ、何心なく次の御間へ來り給ふに、利休が娘は秀吉公の成らせ給ふも知らず、蘆屋釜の下責し居たりけるに、秀吉公良しばらく後に立居給ひしが、不計御心やうつりけん、綾女が脊ほとゝたゝき、「いかに利休が娘、汝十二三歳の時、緋帛を腰に挾み、我前にて茶を點たりしに、世中に茶程面白きものはなしと申せしが、今百舌屋が妻と成り、夫妻睦じき其中にても、茶に勝る面白きものはなきか」と尋ね給ふ。綾女は思ひがけなき殿下の御成、大きに驚き飛退きて平伏するを、近く來れと帶の端を取て引せ給ふ。

は、今百舌屋菓といへる町人の妻と成り、毎時淀殿へ召れ、眞の臺子唐物立等の口傳も皆綾女御指南申し、別して淀殿へ心置なく立入りける。是によつて政所にも常は此綾に心を置せ給へども、今度の茶會外に尋ね給ふべき茶事巧者の婦人も非ざれば、密に召して御頼み有るは、「明日朝の茶の湯、淀殿を客に請ずべしと思ひぬれば、萬事の見つくろひよきに計ふべし。取わけ後入の花は黑く咲たる百合なれば、花器の取合せ肝心の事なり。古今勝れし秀才の淀殿と聞は、黑百合のいはれも知られたるや、聞たしと思ふ計の趣向なれば、茶の湯終る迄は此所に逗留して、かまへて淀殿方へ噂有るまじ」と宣へば、綾女謹で承り、「扨しも珍らしき花の候もの哉。父宗易も年來茶事に心をよせ、所有數寄者に出會申つれども、黑百合の事いまだ承り申さず。何方より獻じ奉りたるにや」と尋るに、政所打笑み給ひ、「是は北國白山の北千蛇が池に生ふる百合の花にて候ぞや。夫を大竹の中に生け、はるぐ\と送り越したり」と物語し給ひ、扨御道具の取合せもさらく\と相濟み、會席の御料理は皐月の早松茸初茄子、是は此年の旬遲くて、上樣にも漸くきのふ召上られたるとの事にて、早松茸初茄子の羹に定め置れたるを、利休が娘申けるは、「思し附至極には候へども、當時の茄子松茸は兩種ともよろしからず候。當流の茶は只何の事もなく、ありの儘なるを專一と致し、料理にも時ならぬ珍しき品は嫌ひさむらふ。

成政初め肥後を下し賜ひたる氣色に替り、纔の誤に死を賜ひたりしも、また不思議の事にあらずや。是又秀吉公の閨中左右の才女より起りし事なり。佐々成政肥後に入國し、つら〳〵事を按じ見るに、我かくの如き大國を領し、榮耀以前に勝れるは、全く奥よりの執成に依てなり、殊更政所の吹擧有りしは我心にも覺え有ば、何がな御恩を謝すべきと思ひけれど、當時秀吉公の富貴、天下の美を集め善を盡し、少の物といへども足ざる事なく、一向獻上に備ふべきものなし。此時奥女中只茶事のみを取扱ふ時節なれば、成政仡と心附き、舊領越中の地士に申附け、白山大汝山の北千蛇が池といふ嶮難の地に、黒く花咲く百合あり、この黒ゆりを採て、大竹に寒水をたゝへ、其中に此百合を生け、早走の飛脚を以て急に取寄せ、頓て北の政所へ獻じてけり。政所殊なう悅び給ひ、餘りの珍花、此儘に枯なんは口惜かるべし、いかゞはせんと思ひめぐらし給ひけるが、此頃天下の美人且秀才と時めきて、秀吉公の御覺も他に勝りたる淀殿に見せばや、此人いかに賢くとも、此花の出所は知られじとて、黒百合一種の御心あてにて、朝込の茶會催され、御客は淀殿と正榮尼ばかりにて、其用意を遊ばされける。政所にも茶事御巧者にあらせ給へども、是は相阿彌紹鷗等の傳にて、當時流行の利休が風とは少し替り、古代の事も多かりし故、利休が娘綾なる者を召て、御道具の取合せ等御相談これ有りしに、此利休が娘

兵急に攻めたりければ、隈部但馬守父子籠城叶ひがたく、降參して城を成政に渡し、菊池の城へ蟄居しけり。依之國中暫く鎭り、成政軍勢を引て本陣へ歸陣せり。此騷動大阪表へ聞えければ、秀吉公の御下知として、淺野彈正少弼永昌肥後に下向し、國中の政事一揆の形勢巡見しけるに、最早國中平均の體なれば、其儘大阪へ歸城しける。

○佐々成政生害

其年もはや暮果て、翌れば天正十六年の春、佐々陸奥守成政、大阪へ登城し、年始の賀を演んと、獻上の品々を用意しけるに、此所彼所に一揆の殘黨數多ありて、政道に隨はざる者有りければ、彼を制し是を懷け、漸四月廿五日といふに肥後國を出帆し、五月五日攝州尼ヶ崎に著船す。然るに此時秀吉公の御氣色甚惡く、大阪登城の儀を相止られ、石田治部少輔三成を尼ヶ崎に至らしめ、佐々成政を責給ふは、國中の一揆千囘相背くとも、仁慈の政道を以て撫治むべきに、新に入部せし大國に於て、殺罰多く、仁心是なく、且耶蘇宗門を歸依するのよし、上意に背くの條甚だ奇怪なり、申開き無之に於ては、自害すべきよしの嚴命なり。成政生質短量狹心の者なりければ、理に屈して一言の答もなく、五月九日尼ヶ崎にて腹切て死たりける、時に五十一歲なり。

纔に二千餘人にてかたく守り、鹽合を見て突出で〳〵、散々に防ぎ戰ふ。隈部の城を圍み居たる陸奥守成政、此事を聞て、佐々與左衞門に千餘人の逞兵を附て、熊本の後詰をせしむといへども、却て與左衞門一揆の爲に討死し、城中も防戰難儀なりと聞えければ、成政さらば我自ら救はずんば叶まじと、長子庄左衞門信治、二男孫十郎成治、佐々權左衞門等に四千餘騎の兵を殘し、隈部の城を押へ置き、其身は同苗九郎右衞門、從弟飯田角兵衞等、僅に二千餘騎、揉に揉で熊本へ駈寄せ、一揆の本陣茶臼山を打破り、勢に乘じ突立れば、城中よりも神保安藝守一千餘人討て出で、揉合して戰へば、一揆共討るゝ者麻の如し。其夜小代下總守佐々方へ返忠し、一揆悉く敗北す。飯田角兵衞直景は、萬夫不當の勇士にて、手勢百餘人引率し、敵將甲斐相模守宗之が旗本一千五百人を七八段に切崩し、八十餘人討取り、大將を討もらすなと士卒を下知して馳廻れば、相模守散々に敗軍し、所詮叶ふまじとや思ひけん、六ケ村の地藏堂に驅入て、主從二十餘人切腹して死したりける、飯田角兵衞走り入て首を得たり。此飯田角兵衞は大和の住士飯田出羽守が子にして、成政は角兵衞が母方の從弟なり。成政滅亡の後は加藤主計頭淸正に仕へ、二千五百石を領し、朝鮮へ渡海し、高名數多有し勇士なり。かゝりければ熊本の城事なく鎭り、又々隈部を攻落すべしとて、熊本の城を舊の如く守らせ、自身隈部の城へ押寄せ、短

切立て難なく山上の敵を追落し、終に彼山を攻取けり。成政今は後に氣遣なし、只一時に城を乘取とて、四方よりせめたりしに、但馬守が嫡子隈部左京親安といふ者、山鹿の城に籠たりしに、父が軍心元なく、二千餘騎を引具し、隈部の城へ後詰をなし、成政が本陣へ眞一文字に切入たり。城中よりこれを見て、挾み討て成政をもらすなと、城戸を開いて突出たり。佐々が勢前後の敵に途を失ひ、隊伍亂れてみえにける。成政は大剛普通の者なりければ、ちつとも騒がず、長巻の組手とて、故信長公の好み出し給ひたる、刃のわたり三尺餘りの刀に、四尺餘の柄を毛綿糸にて巻立て、鞘なしに脊に負たる兵士百餘人、旗本勢の前に進ませ、下知しけるは、「斯樣の時に生んと思へば必ず死するぞ、死んと思へば却て生る者なるぞ。只討死と思ひ定め、刀の刃のつゞかん程、死狂ひせよや若者共」と、大音に呼つて、群る敵の中へ會釋もなく切入れば、是に氣を得て四方へ散し佐々が軍兵、攻寄せ〳〵戰ふ程に、隈部山鹿の兩勢若干討れ、皆城中へ引入りて、門を堅めて防ける。爰に同國御舟の城主甲斐相模守宗立といふ者、一旦佐々の幕下に屬し、服從して見えけるが、忽ち叛逆を企て、菊池香右衞門、小代下總守、大智豐後守、富田安藝守、其外阿蘇の大宮司をかたらひ、國中の一揆原を驅催し、その勢八千餘騎、佐々が本城熊本へ逆寄し、揉にもんで攻めたりける。城に止り居る大將は、神保安藝守、佐々平左衞門等、

繪本太閤記

五篇　卷之九

○佐々成政破二一揆一

兵は勝を以て功とすとかや、軍將たらん者は、心剛に命を輕く思ひ捨て、是非は論ぜず敵に向うて戰ひ勝つを勇將といふ。されば佐々陸奥守成政は、强勇不雙の者なりければ、只一時に隈部の城を取圍み、城外を巡見するに、城に對し一つの高山あり。成政諸士に向つて、「此山敵に取しめられなば、由々敷味方の難義なり。敵の上らざる先に陣を布けや」と、鈴木彦一郎、久瀬又助に五百餘人の兵を督せしめ、急げ〳〵と下知すれば、鈴木、久瀬畏り、勢を引て馳たりしが、早先立て敵山上に有けるにや、鐵炮を打懸け大石を投出し、上立させじと防ぎければ、佐々が軍勢二十騎計、ばた〳〵と討れにけり。久瀬、鈴木事ともせず、眞先に進で士卒を勵し、切立て

繪本太閤記 五篇第九之卷 目錄

佐々成政破二一揆一
佐々成政生害
北政所茶會饗二應淀殿一
黑百合滅二佐々一
賜二加藤小西肥後國一
加藤淸正斬二木山彈正一

石田三成命を蒙り名護屋へ下向す……五一三
淀君の行狀……五一四
淀君鏡面に對し姿色の憔悴を驚く……五一四
僧日瞬金龍の法を修す……五一五
北政所の行狀……五二二
秀吉夫婦の爭言……五二二
猿樂等の秀句……五二二
於國歌舞妓の事……五二三
風吹柳……五二三
高臺寺……五三〇
傘の亭の圖……五三五
高臺寺の什物政所の御手道具の圖……五三六
洛東耳塚の由來……五四四

繪本太閤記 下 內容細目 終

明軍蔚山の城を遠卷す……四四八
加藤清兵衞幸長と軍奇を謀る……四四九
島山の合戰……四五〇
井上大九郎明の李芳春解生が船を打崩す……四五〇
麻貴茅國器蔚山の搦手を攻む……四五〇
加藤清正蔚山の城に入る……四五四
加藤清正大石を轉して明軍を碎く……四五五
蔚山の城兵飢渇す……四五八
加藤清正の家臣鶴平次古橋平介を使として僞つて大明へ降を乞ふ……四五八
朝野左京太夫の至言清正を說く……四五九
加藤清正の智術漢南人の火炮をのがる……四六一
明兵圍を解いて王城に退く……四六二
吉川廣家漢南の大軍を破る……四六三
漢南勢の敗軍……四六四
蔚山籠城の祥瑞……四六五
加藤清正吉川廣家に馬印を與ふ……四六八
秀吉醍醐の花見……四七二
秀吉行長を怒り嘉明を賞す……四七八
安國寺惠瓊清正の使として順天城に赴く……四七八
明將劉綖吳宗道をして行長を說かしむ……四七九
劉綖豫め兵を伏せて行長を捕へんとす……四八二
宥經山明の營中を走つて行長に密謀を告ぐ……四八二
藤堂脇坂等陳璘と水戰す……四八五
陳璘流丸に中つて明軍敗北す……四八六
李舜臣の智日本兵を退く……四八六
大明陸路の大軍蔚山新寨を攻めんと議す……四九〇
島津忠恒新寨に城を築きて籠る……四九〇
茅國器が從軍營外にて女を捕ふ……四九一
明の郭國安望津城の兵粮庫を燒く……四九二
董一元茅國器島津が勢を破る……四九二
島津義弘明の使を罵つて勇威を示す……四九三
泗川城の合戰……四九三
伊勢兵部少輔盧得功を討つ……四九六
島津義弘明軍を鏖にす……四九六
朝鮮の人民餓死す……四九九
崇禮門外に關帝の廟を營む……五〇一
關帝の靈現……五〇九

秀吉書を明の兩使に賜ふ……三九三
明の群臣日本の餽遺を見て沈惟敬が僞を笑ふ……三九四
蠻船土佐の國に漂著す……三九五
再び朝鮮渡海の人數を定む……三九六
日本の軍兵朝鮮に渡海す……四〇〇
加藤清正札を建てて梁山の民を保んず……四〇〇
朝鮮の士民妻子を携へ山林に遁る……四〇一
大明の援兵朝鮮を救ふ……四〇四
石星獄に下る……四〇五
沈惟敬加藤清正が報書を見て恐怖す……四〇七
揚元沈惟敬を捕ふ……四〇八
沈惟敬獄に下る……四〇九
朝鮮の水軍將軍元均運籌堂に美女と飲す……四一〇
小西行長要時羅に命じて反間を行はしむ……四一〇
小西行長元均が軍船を破る……四一一
元均日本の擒と成る……四一二
日本勢海陸より南原に向ふ……四一三
加藤清正火王山の城を臨み見る……四一六
加藤清正黃石山の城に郭䞭を斬る……四一八
白士霖城門を開き逃げ出づ……四一八
郭䞭父子の戰死……四一八
趙宗道妻子と共に節に死す……四一九
日本勢南原城を攻む……四二二
波爾杜瓦爾人種洲にて鳥銃を試む……四二三
南原落城す……四二六
揚元は走り李榮春は斬られ劉之鶚は擒と成り金孝義は水田に隱れて命を助かる……四二七
全州落城す……四二七
黑田長政全義館に解生と戰ふ……四三〇
山崎嘉兵衛の高名……四三一
黑田長政川を渡して明兵を破る……四三二
李舜臣大に日本勢を破る……四三九
波多野三河守大に李舜臣と戰ふ……四四一
明の大將軍邢玠蔚山に押寄す……四四二
明の大將軍邢玠壇を築きて盟約を成す……四四三
淺野幸長明軍と戰ふ……四四三
龜田大隅守主を救うて明兵と血戰す……四四六
加藤清兵衛の勇智明兵の軍威を碎く……四四八

石川五右衛門岩本の城に到る……三三八
石川五右衛門田丸の家士を欺き黃金を掠む……三三八
田丸家の婢女等拷問せらる……三四一
田丸の家斷絕す……三四一
石川五右衛門が屬手等四方へ退散す……三四一
根來寺の寶塔に盜賊住む……三四四
秀次吉田山に紅葉狩す……三四八
世尊寺中納言石川衣冠を剝がる……三四九
石川五右衛門內裏に忍び入る……三五〇
神威姦邪を懲す……三五〇
秀吉自ら高野詣を舞ふ……三五三
仙石瀞田石川を生捕る……三五三
龍田越の山中にて筑紫權六を捕ふ……三五五
田中兵介石川が恩を報ず……三五八
石川五右衛門三條川原に烹らる……三五九
秀次戲れに道行く男女を打殺す……三五九
秀次の謀叛露顯す……三六〇
石田三成の智田中兵部を瞞す……三六一
德善院幸藏主秀次を說く……三六六
木村常陸介阿波杢之助の議論……三六七
秀次高野に登山す……三六八
増田長盛途中より關白を高野へ具し奉る……三六九
秀次懷舊の歌を詠ず……三六九
野中清六常陸介を諫む……三七〇
伏見の三使高野に到る……三七一
秀次以下生害す……三七二
熊谷大膳が郎等殉死せんと爭ふ……三七六
君達女房達ひきわたさる……三七八
君達女房達斬らる……三七八
女房達の屍を埋む……三七九
畜生塚の由來……三七九
明の李宗誠釜山浦を走る……三八三
加藤清正大地震に登城す……三八四
秀吉大佛の崩れしを罵る……三八五
明使伏見の城に到る……三八五
石田三成心謀を竹谿禪師に謀る……三八七
秀吉大明の璽書を怒る……三九〇
秀吉怒つて行長三成を責む……三九〇
淀君小西石田等が罪を詫ぶ……三九一
明使伏見を追立てらる……三九二

拾君の誕生……二八四
加藤清正軍事に怠らざる事……二八五
戸田氏の使者清正が嚴なる陣押を見て驚く……二八五
諸將朝鮮より虎と象とを名護屋へ引來る……二八八
秀吉伏見に城を築く……二八九
秀吉芳野花見……二九〇
急雨雷電秀吉山を下る……二九二
豊臣秀次の行狀……二九六
黑田如水秀次を諫む……二九七
石田三成の智秀次を陷る……二九八
淀君秀次へ美女を送る……二九九
豊臣秀次植木屋の女を召す……三〇〇
豊臣秀次の花見……三〇〇
豊臣秀次厨人に砂を喰ます……三〇一
釜庵法印孕み女の命を救ふ……三〇四
豊臣秀次の惡行……三〇四
賢者は退き不賢者は進む……三〇八
豊臣秀次比叡山に狼藉す……三〇九
木村常陸介秀吉を討たんと謀る……三一〇
木村常陸介伏見の城へ忍び入る……三一〇
木村石川の兩雄奇を談ず……三一一
石川五郎吉石川村に生る……三一八
石川五郎吉名張の山中にて異人に逢ふ……三一九
百地三太夫後妻を娶る……三一九
石川文吾忍術を以て女難をのがる……三二〇
石川五右衞門盜賊となる……三二一
惡黨等遊里を衰く……三二一
前野但馬守盜難に逢ふ……三二二
泉伴藏木曾川獮八但馬守が供人を殺す……三二三
前野但馬守が家臣等藤の森へ後詰す……三二四
石川五右衞門前野但馬守が用金を掠む……三二五
石川五右衞門木野川を斬つて跡を晦ます……三二八
前野但馬守主從不覺を取る……三三〇
大盜隱れて顯れず……三三二
石川五右衞門の驕奢……三三三
石川五右衞門巡見使と僞る……三三三
石川五右衞門江州水口にて欺きて金を取る……三三四
石川五右衞門美濃の大垣に到る……三三四
藏本甚野右衞門君を弑す……三三六
惡黨等埋伏して上使福原大七郎を殺す……三三六

黒田長政小早川隆景が先陣を助く……………………二三八
小早川久留米立花等の勇將李如松が大軍を破る……………………二三九
小早川隆景が家臣井上五郎兵衛李如松を刺さんとす……………………二三九
加藤清正鍋島直茂の形勢……………………二三〇
鬼將軍の威名朝鮮に震ふ……………………二三〇
震天雷の火炮日本軍を刧す……………………二三一
鍋島直茂兀平山に鮮軍を破る……………………二三四
田路勘四郎衣笠惣兵衞を救ふ……………………二三六
加藤清正金山橋中城を救ふ……………………二三八
森本儀大夫の强勇……………………二三九
木村又藏元豪が伏兵を破る……………………二四〇
加藤清正の勇力元豪を討取る……………………二四一
加藤清正虎を打殺す……………………二四一
明の香大受日本軍の蓄へし粮米を燒く……………………二四五
加藤光泰義勇衆將を驚かす……………………二四五
安南の合戰……………………二四六
小西行長書を沈惟敬に送る……………………二四八
沈惟敬再び日本軍の陣中に來る……………………二五一
朝鮮の商賈日本人に襲れて王城の市に交易す……………………二五二
日本勢王城を燒きて釜山浦に退く……………………二五三
明使日本に渡海す……………………二五六
秀吉龍頭船を浮めて明使を饗應す……………………二五六
朝鮮の兩太子許されて都に歸る……………………二五八
秀吉朝鮮の戰將を賞罸す……………………二五九
瀨川釆女が妻女書を朝鮮へ送る……………………二五九
石田增田大谷が蜚淺野黒田が無禮を怒る……………………二六一
島左近淀君に相見して三成が志を述ぶ……………………二六一
晉州城の合戰……………………二六六
後藤又兵衞轒轀車を作る……………………二六六
晉州城陷落……………………二六七
明兵國に歸る……………………二六八
小西行長沈惟敬を罵る……………………二六八
秀吉名護屋陣中に瓜畠を開く……………………二七〇
後藤又兵衞菅六之助虎を斬る……………………二七五
名護屋陣中の軍評定……………………二八〇
秀吉淺野が諷諫を怒る……………………二八〇
堺善左衞門梅北を刺殺す……………………二八二

小西行長申砧が軍を鏖にす……一七二
小西行長大明に入らんとす……一七六
小西行長書を朝鮮の城中に送る……一七七
柳川調信徳馨命と江上に會す……一八〇
朝鮮王平壤城を開く……一八一
日本軍の鳥銃鮮兵を懼れしむ……一八一
朝鮮人日本勢を夜討す……一八二
日本勢敵を追うて大同江を渡す……一八三
平壤落城……一八三
唐島の船軍と併す……一八六
加藤左馬介の拔駈船軍……一八七
加藤藤堂と戰功を論ず……一八八
李舜臣龜甲船を用ひて日本勢を破る……一八九
秀吉の名護屋御陣の形勢……一九一
名護屋陣中の漁網……一九二
秀吉鮮魚を割きて長陣の勞を慰む……一九二
石田三成島左近に謀を示す……一九五
日本の加勢朝鮮國に渡海す……二〇〇
石田三成増田大谷等と心謀を談ず……二〇〇
大廳の異例……二〇二
大廳の薨御……二〇三
秀吉大廳の薨御を哭く……二〇六
船頭與次兵衛誅せらる……二〇七
小西行長遼東の軍を破る……二〇九
柳成龍安定館に明の將卒を饗應す……二〇九
明の東儒流丸に命を落す……二〇九
明軍日本の軍粧に驚き戰はずして敗軍す……二一〇
沈惟敬鄭四に日本國の話を聞く……二一一
沈惟敬石星に說く……二一二
沈惟敬日本勢を欺く……二一三
沈惟敬平壤城に來つて小西行長に見ゆ……二一六
小西行長平壤に明兵と戰ふ……二二〇
明將李寧小西行長が斥候を虜にす……二二一
小西行長牡丹臺に明軍を防ぎ戰ふ……二二二
宗義智明軍を夜討す……二二三
漢南人平壤城の七星門を破る……二二三
小早川隆景大に明兵を破る……二二四
小西行長平壤城を棄てて王城に走る……二二四
小早川隆景備を後向にして明兵を破る……二二七

諸大將名護屋を發して朝鮮に渡海す……一三一
小西行長朝鮮渡海の砌諸將を透す……一三一
小西行長釜山浦の城を陷る……一三二
小西行長登萊の城を陷る……一三三
牛に騎れる武者を見て落首を立つ……一三五
加藤清正の仁智朝鮮の庶民を伏す……一三五
加藤清正立坂に鮮軍を破る……一三九
加藤清正酒を諸軍に飲ましめ戰の勞を休む……一四〇
加藤清正府内の城を取つて鮮將晉伯を斬る……一四〇
小西行長尙州を陷る……一四四
小西行長が勇臣木戸作右衞門喩岨を凌ぎ鵠山の搦手を襲ふ……一四四
小西行長が旗下の兵朝鮮の斥候を鳥銃にて打殺す……一四六
小西行長尙州に李鎰を破る……一四六
申砬日本兵の到るを恐れ民間の旅亭に隱る……一四七
小西行長鳥嶺を越えて忠州を襲ふ……一四八
眞壁荒御田の二十金汝砺を討つ……一四九
小西行長忠州を陷る……一四九
朝鮮王都城を開きて平壤城に赴く……一五〇
加藤清正小西行長が士卒の狼藉を制す……一五一
加藤清正小西行長先陣を爭ふ……一五四
小西行長王城に入る……一五五
木戸作右衞門水關を破る……一五六
加藤清正龍津を涉る……一五七
曾根孫六水練して北岸の兵船を奪ふ……一五八
加藤清正深く北道に入る……一六二
加藤清正威を示し鄕民に道の案内をなさしむ……一六三
加藤清正韓克鋮と戰ふ……一六五
並河金右衞門韓克鋮を捕ふ……一六六
加藤清正兩太子を擒にす……一六七
加藤清正朝鮮の兩太子を安邊に送る……一六八
加藤清正兀良哈を討つ……一六八
加藤清正大石を轉ばして兀良哈の城を潰す……一六九
貴田孫兵衞兀良哈にて戰死す……一七〇
加藤清正濟州より富士山を見る……一七一
小西行長臨津を渡す……一七一
申砬江を渡つて小西を逐ふ……一七二

八王子の落城……七〇
山中山城守書を成田下總守に送る……七二
小田原の城兵欺いて强弓の精兵を殺す……七五
寄手の軍兵城外にて遊び戲る……七六
浮田秀家北條氏房へ酒肴を贈る……七六
小田原の城中諸將叛心す……七七
松田左馬介父を諫む……七八
松田尾張守笠原新六郎搦捕へらる……八〇
北條氏直利家に降參す……八二
氏政氏輝の自害……八三
小田原の落城……八四
秀吉の凱陣……八五
秀吉三河の吉良に狩す……九〇
雪中の放鷹……九一
秀吉の歸洛……九一
秀吉千利休の女を召す……九一
秀吉東山の花を遊覽す……九二
淀君利休を讒す……九五
千利休茶器の新古を目利して價を定む……九六
秀吉大德寺に詣づ……九七
千利休居士の亡命……九八
秀吉の三使大德寺に到る……九九
秀吉群臣の第宅に駕を枉ぐ……一〇四
秀吉下部に銀錢を賜ふ……一〇四
戸川某秀吉公を背に負ふ……一〇四
利休の幽靈茶室の內に現る……一〇五
朝鮮の官使來朝す……一〇六
淀君の御產……一〇七
秀吉淸水寺に詣づ……一一一
秀吉諸侯を集め朝鮮征伐を議す……一一一
伊勢浦に艨艦を製る……一一二
先づ兵粮を朝鮮に入る……一一三
朝鮮渡海の先鋒を定む……一一四
秀吉書を琉球に遣す……一一七
堺の町人茶會にて鬪爭す……一一八
諸大將軍を率ゐて筑紫に赴く……一二三
伊達家の二士の異風出立……一二三
秀吉の肥前名護屋陣中の結構……一二四
秀吉筑紫へ下向す……一二五
朝鮮渡海の諸將陣中にて誓紙を認む……一三〇

繪本太閤記　下　內容細目

佐々成政一揆を破る……三
飯田角兵衛の高名……五
佐々成政の生害……六
秀吉石田三成をして佐々成政に糺問せしむ……六
黑百合の獻上……七
北政所茶會に淀殿を饗應す……九
秀吉戯れて綾女を追ふ……九
黑百合佐々を滅す……一二
加藤小西肥後國を賜はる……一六
小西行長任國に赴く……一七
志岐林專伊知地文大夫を殺す……一九
加藤清正木山彈正を斬る……一九
加藤清正曼陀羅の旗を賜はる……二五
清正に法華經の陣幕を賜ふ……二五
後陽成院の聚樂行幸……二八
管弦の御遊……三〇
北野大茶會……三四
秀吉自ら茶を點ず……三八
法師瓢簞をかけて樹下に白湯を煮る……三九
秀吉の行狀……四〇
新在家の下女秀吉の通行を拜す……四〇
秀吉猿樂等と共に帝の被物を拜領す……四一
參勤の諸士宴に連り戯れ遊ぶ……四二
秀吉黄金を分ちて諸侯に賜ふ……四六
北條氏の家系……五〇
北條氏規秀吉に謁す……五一
秀吉馬船にて小田原に渡す……五四
秀吉の馬船御前崎にて難風に逢ふ……五五
秀吉の大軍小田原を攻む……五六
三宅平大夫渡瀨小次郎を討つ……六〇
渡邊勘兵衛の高名……六一
山中城の落敗……六二
堀秀政の智略……六三
伊達政宗小田原に參る……六三
秀吉政宗を引きて陣中を見しむ……六四
秀吉の小田原陣中の早歌……六五
秀吉の小田原陣中の踊……六五

卷之七……四一七
卷之八……四三七
卷之九……四五三
卷之十……四七一
卷之十一……四八九
卷之十二……五二一

繪本太閤記 下 目錄

五篇

卷之九……一
卷之十……三三
卷之十一……四九
卷之十二……六九

六篇

卷之一……八九
卷之二……一〇三
卷之三……一二一
卷之四……一四三
卷之五……一六一
卷之六……一七九
卷之七……一九九
卷之八……二一九
卷之九……二三七
卷之十……二五五
卷之十一……二七九
卷之十二……二九五

七篇

卷之一……三一三
卷之二……三二九
卷之三……三四七
卷之四……三六五
卷之五……三八一
卷之六……三九九

繪本太閤記

下卷